あばれ狼

池波正太郎

新潮文庫

カバー　村上豊

カバー 村上豊

池波正太郎
あばれ狼

新潮文庫

あばれ狼
池波正太郎
い 16 51
新潮文庫
480

野州・真岡の小栗一家と竹原一家の大喧嘩にやとわれて人を殺めてしまった渡世人たち——その不幸な生い立ちゆえに敵・味方をこえて結ばれる男と男の友情を描く連作「さいころ蟲」「あばれ狼」「盗賊の宿」。多淫な母親の若き日の嘘によって翻弄され続けた樋口角兵衛の生涯をたどる「角兵衛狂乱図」など、畢生の大作『真田太平記』の脇役たちを描いた4編の、全7編を収録。

ISBN4-10-115651-4 C0193 ¥480E 定価480円

新潮文庫

池波正太郎の作品

- 忍者丹波大介
- 男(おとこぶり)振
- 侠客
- 剣の天地
- 食卓の情景
- 闇の狩人(上・下)
- 上意討ち
- 散歩のとき何か食べたくなって
- 闇は知っている
- 雲霧仁左衛門(前・後)
- さむらい劇場
- 池波正太郎のフィルム人生
- おとこの秘図(上・中・下)
- 忍びの旗
- 日曜日の万年筆
- 真田騒動
- 男の作法
- あほうがらす
- おせん
- 男の系譜
- 味と映画の歳時記
- 剣客商売
- 剣客商売② 辻斬り
- 剣客商売③ 陽炎の男
- 剣客商売④ 天魔
- 旅は青空
- 黒白(上・下)
- 映画を見ると得をする
- 真田太平記(一)—天魔の夏—
- 真田太平記(二)—秘密—
- 真田太平記(三)—上田攻め—
- 真田太平記(四)—甲賀問答—
- 真田太平記(五)—秀頼誕生—
- 真田太平記(六)—家康東下—
- 真田太平記(七)—関ヶ原—
- 真田太平記(八)—紀州九度山—
- 真田太平記(九)—二条城—
- 真田太平記(十)—大坂入城—
- 真田太平記(十一)—大坂夏の陣—
- 真田太平記(十二)—雲の峰—(全十二冊)
- 編笠十兵衛(上・下)
- フランス映画旅行
- むかしの味
- あばれ狼

カバー印刷 錦明印刷

新潮文庫

あばれ狼

池波正太郎著

新潮社

あばれ狼

池波正太郎著

新潮文庫

あばれ狼

池波正太郎著

新潮社版

4211

目次

あばれ狼（おおかみ）

さいころ蟲(むし)

兇状旅

野州の真岡一帯で勢力を争う小栗一家と竹原一家の大喧嘩に巻き込まれ、相手方の親分、小栗の伝吉を暗殺して逃走した手越の平八は、赤城の山麓を上州渋川に出た。

塚原、須川と赤間川の渓流に沿った街道を相俣の部落まで来ると、道は崖と切立った山肌に挟まれ、むせかえるような青葉の匂いと山鳥の声が、平八を包んだ。

「もう大丈夫だ。此処までは追っても来ねえだろう」

平八は、にわかに気が軽くなった。

この半月ほどは、執拗な小栗一家の追跡に、夜もろくろく眠れなかったものだ。

陽は大分かたむいてきたが、暮れるまでには猿ヶ京の関所もうまく抜けて、永井宿に泊り、翌朝は……。

(三国峠を越えて、俺ア初めて越後へ足を踏み込むんだ)

小栗の伝吉を殺してくれたので、竹原の喜助は大よろこびであった。

「済まねえが、平八どん。これでほとぼりを冷まして、また帰って来てくれ。伝吉が居なくなれば、このあたりはみんな俺の縄張りにしてみせる。旅人のお前さん一人に喧嘩一切を引っかぶって行って貰うんだ、俺ア黙っちゃいねえ。二年三年たったら、きっと戻って来てくれ。悪いようにはしねえからな」

と、五十両よこした。

兇状旅は何度もやっているし、半分は金ずくで引受けた仕事だけに、平八も竹原の喜助の甘い言葉を鵜呑みにしてはいない。

(フン。戻って行きゃア、きっと厭な面をしやがるに決ってらあ)

十軒にも足らぬ相俣の、農家の草葺き屋根に、紫のあやめが咲いていた。

風が出て雲が頭上に動いて来て、何処かで雷が鳴りはじめた。

相俣から曲がりくねった街道が、赤間の渓流を渡ったところで、手越の平八の顔の色が、さッと変った。

(来やがったな!!)

小栗の乾分に違いなかった。旅仕度の博徒が二人、崖下の木立から影のように街道へ出て来たかと思うと、平八の後からも一人——これは小栗一家の利け者と言われた七五三場の重太郎という三十がらみの骨っぽい男で、平八も一、二度真岡で見かけたことがある。

「野郎!!　捕まえたぞ、捕まえたぞ」

重太郎が呻くように言った。

「執念深えな。そんなに俺を斬って、株を上げてえのか」

平八は素早く三度笠を捨てて、重太郎から、前に立ちふさがっている二人に眼を移した。

若い方が白い眼で平八を睨み、長脇差を早くも引抜いて、じりじり迫って来た。

もう一人は五十がらみの男だ。平八と同じ旅人で、小栗一家に草鞋を脱いでいたのだろう。

年を老っているくせに太々しく落ちついていて、ニヤニヤ笑いながら襷をかけている。

「下へ降りろ。逃げても無駄だぜ」

重太郎は喧嘩の場数を踏んでいて、平八も機先を制する隙がなかった。

街道を一丁ほど下った河原で、一対三の決闘が、行われた。

若い方の奴は、抜討ちざまに撲りつけるような一撃を浴びせて斃したが、重太郎との斬合いになると、平八も冷汗をかいた。

「くそったれめ!!」とか「あきらめやがれ!!」とか「この鼠野郎!!」とか、やたらに喚き声を散らしては息もつかせず、たたみ込んで斬かけてくる重太郎の攻撃は凄まじいものであった。

それに老博徒が、適当なところで、ちょいちょいと無言の助太刀を入れてくる。平八は、むしろ逃げ廻るようにして二人の攻撃のおとろえを待った。歯を喰いしばって辛抱した。平八の紺盲縞の着物のあっちこっちが鋭い重太郎の刃に切裂かれた。

平八を呑んでかかり、一気に片をつけてしまおうとしただけに、七五三場の重太郎の長脇差に疲れが浮いて出るのも意外に早かった。

沛然と雨が叩いてきた。

渓流の浅瀬に踏込み、岩と岩の間を廻りながら水しぶきをたてて刃を嚙み合せつつ、次第に平八は攻撃に転じた。

「爺つぁん!!　何をしてるんだッ」

重太郎は鉛色になった顔をくしゃくしゃにさせ、老博徒に助太刀を求めながら、平八に斬立てられた。

爺つぁんは、もう手出しをしない。抜いた長脇差を杖にして、ぽかんと突立っている。

喰いしばった唇を決して開かぬ手越の平八の長脇差が、やがて重太郎の腹を突刺し、「ぎゃッ!!」と叫んで、倒れながら必死に振り払った重太郎の刃が平八の左肩の肉を切裂いた。

爺つぁんは、ゴソゴソと逃げにかかった。

「と、爺つぁん。逃げるのか」

血と汗に喘ぎ、平八は声をかけた。

渓流に突伏した重太郎の体を、川の水が血の泡をたてて深みにゆっくりと押流している。

「斬合ってもお前さんにゃ敵うめえよ」と、爺つぁんが言った。

脱け上った胡麻塩頭の、痩せた爺つぁんだ。陽に灼けた顔の皺に隠れてしまっているような細い眼だった。

雨と汗で、びしょ濡れになった爺つぁんは、街道へ上りかけて振向いた。

「肩の傷は大丈夫かい？」

「お前に心配してもらうのは筋違いだよ」

「血がひどく流れてるがなあ」

平八は、黙って、若い博徒の着物を引裂いて肩の傷を巻きにかかった。うまくゆかない。

爺つぁんが近寄って来て手をかしてくれた。平八は油断なく爺つぁんを注視した。

「爺つぁんは小栗の身内じゃねえのだろう？」

「うむ。旅人だ。この年をして当もなくうろつき廻っているんでな、もう欲も得もなく体が可愛いよ。一宿一飯の義理も無理には果したくねえやな」

「ひとりぽっちか？」

「お前さんもかい？」

「まあな……」

「若いからな、お前さん……若いうちには気にならねえもんだ、ひとりぽっちでもね」と、爺つぁんは呟き、

「この先の谷間に、湯が湧き出てるんだ。傷には滅法いいらしい。俺ア前に一度来たことがあるんだ。どうだい、其処へ行ってみねえか」

「ふーん。案内してくれるのか？」

「お前さんさえ厭でなけりゃな」

肩の傷が激しく痛んだ。出血が平八の気力を萎えさせた。

平八は爺つぁんの肩にすがり、渓流沿いにさかのぼる小道を谷間に入って行った。

「爺つぁんの名は？」

「前砂の甚五郎っていうよ」

雨は全く止み、雲間から、残照が黄色い光を河原に投げ落してきた。

平八は、まだ気を許してはいなかった。右腕を甚五郎の肩に廻し、傷で知覚が鈍った左の手を、いざというときには無理にも利かせて懐の匕首を引抜くつもりである。

事実、前砂の甚五郎は、まだ平八を狙っていたのだ。

平八を殺せば、旅人のつとめを立派に果したことになる。顔も売れるし、ツギハギだらけの老いた体に最後の花を咲かせることが出来ようというものであった。それを機会に、何とか畳の上で死ねる算段もつきそうに思われる。

（何処かの良い親分のところに居ついて、もう無理な旅をしたくはねえ……）

常陸から野州にかけ、手越の平八の名は、かなり売れている。その平八を斬ったということになれば、甚五郎の株も一躍はね上ることだろう。

一刻の後に――二人は、唐沢と稲包の山裾に狭まれた湯場へたどりついた。

湯場といっても番人の爺さんが一人いるきりだ。木樵や炭焼きが時たま浴びにくるだけの山の湯である。

くろぐろと眼に迫る山肌と崖に谷底はビッシリと囲まれていた。

月が出て、仏法僧が鳴いた。

首

温泉は河床から噴き出していた。

丸太造りの小屋がけの下に、岩と丸太で囲んだ浴槽がある。野天風呂に近い浴舎のまわり

には、渓流が岩を噛んでいた。

　手越の平八は、この山の湯へ来て三日目に、繃帯された肩の傷を温泉に浸した。

「何だ、こいつは……」

　甚五郎は平八を助けて、ともども湯につかりながら、細い眼を平八の右腕に近づけ、

「どうも年を老ると眼がいけねえ。何と書いてあるんだい？……女の名前だね」

　板屋根の軒先から見えるものは対岸の山肌だけであった。

　初夏の陽は、この谷底にも強い光を投げ込んできていたが、あたり一面の樹林が、その陽射しを反射して、浴舎の中にいる裸の男二人の体までも真っ青に染めた。

　平八は、右腕の刺青を手拭いで隠し、てれくさそうに言った。

「ああ。女の名前だよ」

「ふうん——お前さん、いくつになるね？」

「二十七だ」

「若えなあ……」

　甚五郎は嘆声をもらして、

「女に打込めるうちは博打うちも悪かアねえ。その女、何処にいるんだね？」

「俺の在所の、寺にいるよ」

「死んだのか？」

「二十年も前にな」

「え？……それじゃお前、その女は、おふくろかえ？」

「おふくろじゃいけねえのか——」

「ふうん。見かけによらねえ、しおらしいところがあるんだな」

　いきなり、平八は湯を掬って、甚五郎の顔に叩きつけた。

「怒ったのか」

　甚五郎は顔の皺に汗の玉を浮かせ、苦く笑った。

　平八は不機嫌に黙り込んで、午後の陽射しを跳ね飛ばしている渓流の水泡に見入っている。

「悪かったな……古傷は痛えもんだ。もっとも俺ア、お前さんの古傷がどんなものか、そいつは知らねえがね」

　甚五郎は湯に火照った体を、岩と岩との間に掛け渡した厚板の上にあげて呟いた。たるみかけた左の股のつけ根から膝にかけて、長い刀痕がある。これも、絶えず喧嘩出入りに体を張って生きて行かねばならぬ博徒の宿命が残した古傷なのだろう。

「前砂の爺つぁん」

　平八が湯の中から首を振向けて言った。

　歯が白く笑っている。

「何だ？」

「爺つぁんは何時になったら、あきらめるんだ？」

「何をよ？」

「俺の首をさ。早くとらねえと肩の傷が癒っちまうぜ」
　今度は、甚五郎が沈黙した。
　平八は、げらげらと笑った。
　事実、こうなる前に、甚五郎は何度も平八を狙った。
　浴舎から丸太の段梯子を登ったところに建てられている番人小屋は、山肌の斜面に在って、下の小屋には番人の市蔵爺さんが住んでいる。そこに若い女の湯治客がいるらしいが、爺さんは二人の博徒に、女の姿を見せないように気をつかっていた。
　平八と甚五郎は上の小屋に入った。
　畳も無い板敷きの部屋で、大きな炉が切ってあり、爺さんがとってくる山女を串に刺し、この炉の火で焼いて食べるのである。
　この小屋で、五日の間、甚五郎の老獪な襲撃に指一本をも出させなかったのは、手越の平八にとっても容易なことではなかった。
　夜半に、はッと眼ざめると、ちょろちょろ燃える炉の炎が、じいっと、息を殺してこっちをうかがっている甚五郎の気配を平八に知らせてくれる。
（危ねえ、いっそ、突殺してやろうか……）
　何度もそう思ったが……平八は、思い切って決行出来なかった。この老いぼれ博徒が、眠いのをこらえこらえ、自分の隙をうかがっているのが可笑しいようでもあり馬鹿馬鹿しくもあり、

（えへん!!）咳ばらいをして（爺つぁん、無駄だぜ）と知らせてやると、いかにもガッカリしたような甚五郎の溜息がきこえるのである。
（いっそ、爺つぁんに、この首をやって死花を咲かせてやってもいいんだが……）
　そんなことも考えた。
　これから先も、ただいたずらに当途もない放浪の旅と、一宿一飯の義理を果す為の喧嘩出入と一瞬の本能を駆きたてる博打の昂奮と、行きずりに出会う女達との情事とを積み重ねて行くだけのことであった。
　しかも、ひとりぼっちでだ。
　二十七歳という若い肉体が人生の行手に見出す希望の一片すらないのである。
　それに手越の平八は、今までに何人も殺していた。殺したものの身内や朋輩や親分が、平八を狙って諸国に待構えている。
　若い身空で、絶えず〔死ぬこと〕に向い合っている平八であった。
（斬られてもいいよ、爺つぁん。何時でもやっつけな）
　だが、平八の若い体が承知しなかった。
　甚五郎が、とぼけてたてている寝息がピタリと止まるや否や、平八の鋭い防衛本能は咄嗟に体中の備えを固めてしまう。
　五日間は、またたく間にたってしまったのだ。
　その日――甚五郎は、湯から上って着物を着る平八に手を貸してやったとき、平八の腕の

刺青を読むことが出来た。
おなか――と彫ってあった。
甚五郎は、その夕暮れに、炉端で山女を焙りながら、平八に言った。
「平八どんの在所は、手越だったな？」
「うむ……」
「東海道のか……」
「府中の一寸先だよ」
「ふうん……」
甚五郎は又も何か訊きたそうに口ごもっているようだったが、やがて、ぽつんと、
「平八どん。俺ア、あきらめたよ」
「俺の首をか――」
「うむ……今の今、きっぱりとあきらめた」
二人は、しばらく互いの顔を見守っていたが、急に、どちらからともなく笑い出した。二人とも淋しい笑い声であった。

夏　鶯

手越の平八の傷は、ほとんど癒えた。
この山の湯へ来てから半月余もたってしまっている。平八と甚五郎は、ともかく一応は越

後路へ向うことに決めた。
「何処で何時、別れてもいい。出るときは一緒にしようぜ」
前砂の甚五郎は、こう言って、旅仕度をととのえる為に、或る日の午後、小屋を出て一泊の予定で須川宿へ向った。
「明日の朝、発つときいたが、本当かね？」
翌日の朝になって、番小屋の市蔵爺さんが、珍しく平八の小屋へ顔を出した。
「厄介をかけて済まなかった。お前さんが何のちょっかいも出さずに俺達を置いてくれたんで、俺も甚五郎の爺つぁんも、よろこんでいるんだ。少ねえが取っといてくれ」
愛想よく礼をのべ、平八が小判で十両を包んで出すと、市蔵は口をぱくぱくさせ、木菟のような顔や体をすくめ、あわてて手を振った。
「こりゃア困る。こんなにお前さま、大金を貰ういわれはねえ」
「お前さま方さえ乱暴をしなけりゃ、おらだって何も言うことはねえ」
「猿ヶ京の関所まで二里。お前さんが俺達のことを訴えるつもりなら、山女釣りの帰りにでも行けた筈だ。それをお前……」
「だって、おらは、お前さま方が、どんなことをして来たお人か、何も知らねえ」
「ふん。刀傷を受けて転げ込んで来た俺だ。お前さんが怖がっていたことは、よくわかっていたぜ」
市蔵は、済まなそうにうつ向き、上眼使いに平八を見ては、薄く笑った。

「一緒に暮している若い女は、ありゃお前さんの娘かい?……まあ何でもいいや。俺達が何かするのではねえかと思って、お前さんは、あの女を俺達の眼の届かねえところへ隠すので一生懸命だったものなあ。アハハハ……」
「すまねえ。お前さま方のことを何も知らねえものだからよウ」
「怒ってるんじゃねえ。無理もねえことさ」
下手に騒ぎたてて、自分や、その娘に危害でも加えられたら……という計算を市蔵爺さんはしていたに違いない。たまに湯へ入りに来る近くの猟師や木樵にも、平八達のことは黙っていたようである。
出発すると聞いてむしろホッとした思いで平八の小屋を訪れたのだが、口をきき合ってみると、平八の意外に気さくな一面を知り、市蔵も小心な自分の警戒ぶりを悔いた。
「あの娘はなあ、お客さん。おらの昔の友達の娘でよウ。ひょんなことから孤児になっちまっての、永い間、沼田のお城下で奉公していたのだが、ちょいとわけがあってね。それに体の工合も悪いので、おらが引取ったんでよ。もう一月ばかし前のことだがね。あの娘はなあ……」
「もういいやな。今さら、いろいろ聞いたところで手の伸しようがねえじゃねえか。俺達は明日発つんだものな」
冗談めかして、平八は笑った。
どうしても金をとらぬ市蔵爺さんが下の小屋へ帰ってから、平八は、とろとろと眠った。

前砂の甚五郎は今朝早く須川宿を発って戻って来る筈であった。
眼ざめると、陽は高かった。
小屋を包む鬱蒼たる樹林の緑は今やしたたるばかり濃い。
老鶯が、しきりに鳴き、木の間がくれに光る渓流からは、陽炎のような湯けむりが上っていた。
(湯へ入ってくるか)
体中が快く気だるい。すっかりナマになっちまったな、と思いながら平八は藁草履をつっかけ、木立の下の小径を渓流の浴舎へ降りて行ったが……。
(や……)
平八は眼を見張った。
白く細い女の裸身が、屋根囲いのみの浴舎の、丸太の柱の間に動き、それをすぐに湯けむりが包んだ。
(あの女だ……。爺さんも安心して、まっ昼間から外へ出したんだな)
苦笑いをして一度は自分の小屋へ引返そうとした平八だが、
(どんな女かな……?)と、ふと覗き見をしてみる気になった。傷も癒えた平八の体は精気に満ち、汗ばんでいた。
湯けむりの中に揺れ動く女の背中や腰に眼を吸いつけているうちに、平八の体中の血管がふくれ上った。

対岸の岩を伝って木立に吸い込まれる市蔵爺さんの姿を、平八は見た。
爺さんは、すっかり安心して、別れの食膳に供する山女でもとりに出かけたのだろう。
平八は着物をかなぐり捨て、獣のように湯けむりの中へ躍り込んだ。
女は悲鳴もあげなかった。
一度は激しくもがいたが、すぐに温和しくなった。
眼を閉じたまま苦痛に耐えながら、しかもあきらめきった細い裸身を力なく平八に任せた。
平八の欲情は、あっけなく白じらしく鎮まった。
平八は娘から体を離し、舌打ちでもしたいような気持になり、後悔を苦く噛みしめながら、
(素人の、生娘を、俺ア……)
「ごめんよ」と言った。
娘は、黙って何度も湯をかぶった。
それを見ていて、平八は自分の何も彼も厭になった。
こういうときには決まって死ぬことが考えられる。
(無宿もんは、みんな俺みてえな奴なんだろうか……)
娘が、ろくに体も拭かずに浴舎を出て行こうとして急によろめき、岩に足をすべらせて湯壺の中に落ち込んだ。
「ど、どうしたんだ!!」
平八は湯を掻きわけて近づき、娘を抱き起した。

娘の両眼が焦点の決まらぬまま、うつろに平八の肩のあたりに向けられている。
「お前……お前、眼が悪いのか」
手越の平八が、すぐそれと知ったのにはわけがあった。
平八が七歳のときに死んだ母親のお仲も内障眼であった。
お仲は盲目になってからも尚、平八を手越の知り合いの家に預け、府中の宿場女郎をやっていた。
「お前のお父つぁんが私から逃げてしまってから、私の眼は悪くなっちまった……悪いものはみんな眼に出てくる体に、おっかさんは生まれついているのだねえ」
お仲は、手越へ来るたびに、よく平八に言ったものである。
父親は渡りものの板前で、そのときから飯盛女をしていたお仲と出来たのだという。その父親は、お仲にさんざん貢がせておいて、他国へ逃げてしまったのだ。
いずれ平八が大きくなってから、くわしく話すつもりでいたらしいお仲は、文政五年の梅雨どきに風邪を引き込んだのがもとで、一夜のうちに、あっけなく死んでしまったのだ。
平八は娘を助けて、小屋へ連れて行った。
小屋の奥の、日中は陽当りの良い小部屋へ娘はひとりで入って行き、境の板戸を閉めた。
「怒っているのか？　そうだろう、それに決まってらあ——俺ア悪いことをした。済まねえ、出来るだけのことはしてえから——勘弁してくれ」
平八は月並な言葉を、板戸越しに娘へ、くどくどと送った。

「どうなっていいんです」
娘の声が、冷たく聞えた。
「え？……」
「あっちへ行って下さい、うるさいから」
平八は、さっき自分が組敷いていた娘の顔を思い出そうとして思い出せなかった。
小さいが固く締まった乳房の感触だけが、まだ生なましく平八の頰に残っている。
平八は青い顔をして小屋を出た。
明日発つときに、竹原の喜助から貰った五十両をそのまま置手紙と一緒に市蔵爺さんへ残して行くつもりであった。
（娘さんの眼を癒してやってくれ……）と書きのこしてだ。
（俺ア字も書けねえ。前砂の爺つぁんはどうかな。少しは書けるだろう）
そのうちにまた、平八は居たたまれなくなって、下の小屋へ降りて行った。境の板戸を開けようとすると、中から娘のすすり泣く声が聞えた。平八は嘆息して河原へ出た。
（あ、帰って来た）
前砂の甚五郎だった。桐油で包んだ荷物を肩にかけた甚五郎は、妙に眼をギラギラさせ、荒い呼吸をしながら近寄って来た。
「前砂の爺つぁん。遅かったぜ」
「遅いにも何にも……危ねえところだったよ」

「小栗の身内が追って来やがったか？」
「そんなんじゃねえ。ま、聞いてくれ」
甚五郎は、下の小屋へ平八を引張り込むと、すぐに語りはじめた。
二刻ほど前のことだが、旅仕度を整えて須川を発ち、半月前に来た路を保戸野山の山裾まで河原伝いにやって来たとき、甚五郎は汗みどろになった体を、渓流の冷たい水に浸したくなった。
「体を洗って一服して、弁当の残りでもつかってから帰ろうと俺ア思ったんだ」
水に飛込むと年寄りの甚五郎も子供のような気になった。
バチャバチャと、水を跳ね飛しながら、山女を追っかけてみたり、泳いでみたりしているうちに着物を脱いだところから、かなり離れた谷間の深みまで来てしまった。本流から山間に切れ込んだところで、水はとろりと青い。
そこで、甚五郎は、かなり遠くの赤沢山へでも通じるらしい小径を、何気なく水中から見上げて、ぎょッとなった。
径を走っていた木樵らしい男が、樹林の中から飛出して来た男に斬倒されるのが丁度眼に飛込んできたからである。
幻影のようなその場面に、甚五郎は何度も眼をこすった。
木樵の悲鳴は、ほとんど聞えなかった。
だが行なわれたことは事実だ。

林の中から六人ほどの旅人が現われて来て、あッという間に木樵の体を樹林に運び込んだ。
甚五郎は水にもぐり、そっと対岸の灌木の茂みに身を潜めた。
息を殺して頭上の小径をうかがっていると、やがて、一人二人と林の中から出て来たらしく、押殺したように太い人声が増えてくるのがわかった。
「何だと思う、平八どん……」
「わからねえ」
「そいつら泥棒だぜ」
「ふうむ……」
「しかも大がかりなやつだ。みんな旅商人の恰好をしていやがって荷物を背負っている。中に入ってる金が五千両だとよ」
「五千両――?」
甚五郎の話すところによると、盗賊達は、その小径から一度林の中へ戻り、其処でしばらく相談したらしい。
「怖かったが盗み聞きもしてみたかったんだ。というのはな、平八どん――そいつら、この小屋へやってくるようなことを、径で、ひょいと洩らしゃアがったからさ」
丸裸のまんま、甚五郎は林の中へ忍び入った。
小屋の番人や浴客を叩き殺して一夜を明かし、翌早朝、木樵の抜ける道を三国峠へ出ようという案と、稲包山の山腹を縫い、廻り道をしてもよいから三国峠へ出ようという案とに分

れて、盗賊達は大分論争したらしい。
「越後へ出ればこっちのもんだ。それまでは一分の隙もあっちゃならねえ」と首領らしい男が裁決をした。
「荷物を包み直しているところへ、ひょいと今のように木樵のおやじなぞが飛出して来やがる。峠をこえるまでは油断出来ねえぞ」
小屋の番人を殺すのもいいが、もしひょんなことで手違いがあったら、猿ヶ京の関所はすぐ近くだからなと、首領は言って、結局一同は稲包山の林中へ去って行ったと甚五郎は語った。
「話によると、どうも美濃と越後の泥棒が力を合せてやったのらしいぜ。まあ、何にしても此処へ来ねえでよかった。その泥棒の親分って野郎を俺ア見たが、骨張った背のいやに高い、狼のような眼つきをしている野郎だったよ。あいつらを七人も相手にしたのじゃア、お前と俺とでかかっても到底見込みはねえ。来ねえでよかった。よかったよ、なあ」
「前砂の爺つぁん。それで、そいつらはその大金を何処で盗ったんだ?」
「東海道の何処からしい。道中でよ――何でも土岐様の御用金らしい。どうせ今どきの大名が使う金だ。ろくな金じゃあるめえがね」
「そう言えば、そんな噂を、真岡に居た頃に聞いたことがある」と、平八は呟いた。
土岐侯と言えば上州沼田の領主で、このあたりのつい近くまで支配している大名である。
「大飢饉の後で民百姓は食うものも食わねえでいるのに、侍大名だけは贅沢をしていやがる。

へん、盗られていい気味だ」
甚五郎はこう言い捨てて、
「小屋の爺いは居ねえのかい?」と訊いた。
「うむ……」
と、平八がこの問いに答えようとしたときである。
さっと境の板戸が開かれ、あの娘が気狂いのように飛出して来た。
「あッ——ど、何処へ行くんだッ」
平八の手を振払って、娘はさぐり馴れた小屋だけに迷いもせずに炉端を駈け抜け、土間へ飛降りた。
「爺つぁん!! 止めてくれ」
甚五郎がびっくりしながらも径へ飛出して娘を抱き止め、土間へ引擦って来た。娘は凄まじい声を張って叫んだ。
「お前達のようなやくざもんには頼まない。私が行く、私が行く!!」

御用金五千両

娘の名はおときといった。
沼田領内の寺間村の農家の娘だが、天保四年から七年にわたる全国的な大飢饉によって、父親を失った。父親は餓え死をしたのである。

一人っ子のおときが九歳になった冬のことで、その翌年には母親が病死した。
これは何も、おとき一家に限ったことではなく、飢饉ともなれば、米を中心にして動く当時の日本の国家経済であるから、どうにもならない。全国の餓死者は厖大な数に達した。江戸や京都のようなところでも、何万という餓死者、何十万という給恤者を出したのである。
天保八年に大坂で、かの大塩平八郎の乱が起ったのも、この大飢饉が原因であり、各地の百姓一揆が頻発した。
それから約八年——今年は弘化二年であるが、大飢饉の復旧もようやく目鼻がついたかと思うと、アメリカの軍艦が浦賀の港へ入って来たりして、世の中は騒がしくなるばかりであった。
平八や甚五郎のような博打うちは、その日その日の景気不景気に身を任せているだけだから、そんなことは一向、身に沁みてわからないのだが、しかし飢饉の恐ろしさだけは痛切にわかる。
餓死、流離によって、貧しい百姓達の団欒が、あッという間に叩き潰され、子は親の手から、無惨に自然の暴力が奪いとってしまうのだ。生き別れ死別れの悲劇は数え切れない。
おときは孤児となってから、村の庄屋が引きとって世話してくれたが、十四歳の春に世話する人があって、沼田藩の馬廻りをつとめる沢口孫九郎の屋敷へ、下女奉公に上ったのだという。

沼田藩は五年前の天保十一年に、当時十八歳の伊予守頼寧が家督し、天保飢饉に疲弊しつくした領内の治政に当った。

　頼寧は自ら率先励行して質素勤倹につとめ民政の復興を計った。

若くして歿したこの殿様は、沼田代々の領主の中でも、まれに見る偉材であったといわれているが、それはさておき、おときが昂奮して語る一番の重大事は——沼田藩が大坂の蔵屋敷を通じて、二年越しの念願がかない、ようやく大坂商人から借り入れることが出来た七千両の金を、東海道藤枝の宿で群盗に強奪されたということである。

　十数名の盗賊達は、御用金輸送の沼田藩一行が泊まる本陣青嶋治右衛門方へ火をかけ、その騒ぎにまぎれて侵入し、藩士四名、足軽八名を殺傷して金を奪い逃走した。この年の春もまだ浅い頃である。

　その金の大半を運んで、越後の盗賊達が、つい目の前の山の向うの谷間を通過していると聞いて、おときは矢も楯もたまらなくなったのであった。

「そのお金は大切なお金なんです。殿さまが、そのお金で、民百姓の暮しがたつようにと、いろいろ……」

　疲弊ただならぬ領内に、伊予守頼寧は自ら采配をふるい、この七千両をもって民政に何とか活を入れようとしていたのだろう。

「殿さまばかりではない、城下のお侍方も、領内の民百姓も、このことを聞いて、夜も眠れずに口惜しがりました」

　盗賊達は、きびしい探索の目を巧みに逃れ、協力した美濃方に二千両を分け、残りの五千両を持って隠れ潜みつつ、ようやく越後の本拠へ逃げ込もうとしているに違いなかった。

「私は仇を討ちたいんです。奥様や坊っちゃまや、私の……私の仇も……」

「何だと？　そりゃどういうわけだ」

　平八は思わず、おときの肩をつかんだ。

「言ってみろ。言ってくれ、言ってくれ!!」

「旦那様は、あいつらに殺されたんです」

「じゃ、御用金を運んで来た沼田のお侍の中に、お前の御主人が居たってえのかい」

　甚五郎も眼を白黒させた。

「で——お前の仇ってのは何のことだ。聞かせてくれ。頼む」

　手越の平八は、尚も問いつめた。そして、その主人の供をしていた足軽の一人が、おときの恋人であったことも知った。

　平八は、叫んだ。

「と、飛んでもねえことをしちまった」

「どうしたんだ？　平八どん——何がよ？」

　おときは言った。

「いいんです。私は、この知らせを聞いて、一晩のうちに眼を悪くしてしまったのだもの。もう何の、のぞみもない。死んだっていいのです。けれど、そのお金だけは、何とか取り返

して殿さまに届けてあげたい。百姓達が助かるんです」
　おときは再び立ち上って飛出そうとした。
「そりゃ、お前が行くより番小屋の爺つぁんを呼び戻して行って貰った方が早えよ」
と甚五郎は、
「俺が駈けつけてもいいんだが、そうなると俺達の方が面倒になる」
　市蔵爺さんはまだ帰って来なかった。
「それよりも、早くしねえと、あいつらは、三国峠を越えてしまうぜ」
　空はまだ明るかった。
　夕闇が降りるころには越後路へ彼等は足を踏み入れていることだろう。
「おそらく俺の足で関所へ駈けつけても間に合うめえ。それから役人達が三国街道を峠まで駈けつける間に、彼等はのうのうと逃げてしまうからな」
　甚五郎は舌打ちをして、
「そうと知ったら、先刻見たとき黙って引下りゃしなかったのにな」と強がりを言った。
　おときは泣き咽んだ。
　平八はどす黒い顔つきになり、腕を組んで黙り込んでいる。
　裏の林で、しきりに瑠璃鳥が鳴いた。
「まあ、あきらめるんだな。な、な」

　甚五郎が、おときの肩を叩いてなぐさめたとき、平八が言った。
「此処からすぐに、谷川に沿って三国峠へのぼって行けば、間に合うだろうか？　爺つぁん——」
「間に合うかも知れねえ。奴等は廻り道になる。此処からなら一刻（二時間）はかからねえと、此処の小屋の爺さんが言ってたぜ——けれど平八どん。誰が行くんだ。まさか、お前じゃねえだろうな」
「前砂の——奴等は七人だと言ったな」
「行くのか？——え、お前さん行くのかい？」
　我にもなく甚五郎の表情が狼狽と不安で一杯になった。
「爺つぁん——俺達無宿者は、金もなく、家族もなく、親類もねえ。暮しの元手になる職も手についちゃアねえ。世の中ってものを相手にして、何の助けも借りることが出来ねえ。ひとりぼっちだ」
　平八は、素早く甚五郎が背負ってきた包みを開き、衣類や帯を引出した。
　藍と茶のみじんの単衣が一枚ずつあった。藍みじんのやつを裸になった体に羽織り、茶の帯をしめながら平八は、せかせかと言いつづけた。
「俺達は一生不住の身だ。悪いことや下らねえ何の薬にもならねえことをやりつづけて、何時も悔んでいる。だからといって浮かび上る綱の一本も持っちゃいねえ」
「そりゃそうだ、けれどお前」

「爺つぁん」
「え……？」
「こんな虫けらみてえな俺達が、普通の人間にやれねえことをやってのける折は、めったにねえのだ」
「何だと平八どん……」
「五千両の金が助かれば大勢の人間が助かるんだと、この娘は言ったぜ。だからやるんだ」
平八は断固と言放って、長脇差を取りに上の小屋へ行こうとした。
甚五郎は、ぐっと平八の腕を摑んだ。
「平八どん。死ぬぜ」
「死ぬかもしれねえ」
「うまくいくかどうか、そいつもわからねえぜ」
「爺つぁん。俺達の毎日毎日は、みんなそいつだ。今更尻込みは可笑しいや」
「よし！」
甚五郎は、唇のあたりをピクピク震わせ、
「俺も行こう。一人より二人だ」
「爺つぁんは関所へ知らせてくれ」
「それは小屋の爺さんで沢山だ。もうじき帰って来るに決まってる。おときちゃんから話してもらえばいいやな」

「いけねえ。俺ア爺つぁんを連れて行きたくねえ」
「平八どん。お前の言う通りだ。俺達は虫けらだったもんなあ。よしうまくいかなくても、今度のことで死ねるなら、いっそ有難えかもしれねえ。行くぜ俺は――お前が厭なら勝手に行くぜ」
おときが、平八にすがりついた。
白濁した双眸から涙の玉がふくれ上って彼女の顔を濡らした。
「おときちゃん。許してくんな」
おときは懸命に、かぶりを振りつづけた。

三国峠

手越の平八と前砂の甚五郎は一分もすかさぬ渡世人の喧嘩仕度で、汗にまみれながら赤間川をさかのぼって行った。
小屋を出るときに市蔵爺さんが戻り、これに関所へ駈けつける役目を頼んできただけに、平八は勇気百倍していた。
盗賊達の現われるだろう峠の道も市蔵から教えてもらってきている。
「せめて――せめて俺達だけでも、間に合うといいんだが……畜生め、見ていていやがれ。間にあったら只じゃアおかねえ」
喘ぎ喘ぎ平八は言った。その平八の脳裡をおときの顔が消えては浮かび、浮かんでは消え

た。

甚五郎は、しっかりと唇を結び、速い平八の足に遅れまいと必死であった。

甚五郎は塩からく眼にしみる汗を手の甲で払うたびに、前を進む平八の後姿に複雑な一瞥をくれては、また下を向いて山径をのぼりつづけた。

陽は、ようやく西の山肌に隠れ、東の空から桔梗色の夕暮れが迫ってきていた。

一刻もかからぬうちに、二人は三国峠にたどり着くことが出来た。

七ツ半（午後五時）頃になるだろうか。

山と山の鞍部にあるこの峠の空は夕焼けて、三国街道の白い道は影も濃くなった越後の山山に吸い込まれていた。

もう通行する旅人もないようである。

「しいんとしてやがる……奴等はもう峠を越えてしまやアがったかな」

平八は呼吸をととのえ、はじめて竹の水筒を腰からとって喉をならして飲み、甚五郎に渡した。

峠の東から南へ、くねり曲がって下る街道は、二里余も下の猿ヶ京の関所へ通じている。

猿ヶ京の関所は幕府が管理している。

市蔵爺さんは、ようやく今頃、関所へ着いたかどうかというところだろう。

関所役人が駈けつけて来るまでには、まだ一刻余りはかかると見ていいのだ。

峠には石の道しるべがある。風雨にさらされた素朴な丸木造りの鳥居が道端にあり、その

彼方には祠が、峠より上の三国山の山腹にたてられている。

あとは檜と杉の山林が峠を囲んでいた。

「来た!!」

「何処だッ!!」

甚五郎が唸るように言った。

「叱ッ——そら。耳をたてて見ねえ、平八どん。話声が聞えやしねえか」

「…………」

何も聞えなかった。

しかし甚五郎は、峠の西側の樹林に注意深い眼を投げて動かなかった。

「何か見えるか？　爺つぁん——」

甚五郎は首を振った。

「奴等は通りすぎたのかも知れねえ」

甚五郎は、また首を、今度は激しく振った。

「来た。間違いねえ」

「何処だ？」

「木の間に人が見えた。三つもだ。奴等に違えねえ」

甚五郎は平八の手をとって、鳥居の後ろの黒松の蔭に引張り込んだ。

「平八どん。いよいよ始まるぜ」

「爺つぁん。お前さんを引張り込んで済まなかった」
「余計なことをいうねえ」
甚五郎は顔中をくしゃくしゃにして上ずった声で言った。
「俺は向うへ廻る。はさみ打ちにしようじゃねえか」
「うむ……爺つぁん。俺が先へ出るぜ。相手は七人だ。五分五分にゃいかねえ。俺が引っつけてたところへ後ろから出て一人でもいいから、やっつけてくれ」
「わかってるよ」
人声がした。
平八と甚五郎はうなずき合った。
甚五郎は、繁みに隠れ、姿を消した。
平八は手馴れた動作で襷をかけ、長脇差を引抜くと、竹筒の水を口に含んで刀の柄に吹きつけた。
喧嘩場での闘志が、平八を冷静にした。
(なあに、何時もの通りにやればいいんだ)
平八の眼に、街道の一部が見える。
盗賊達は、道の向うの木立から一人、二人と現われた。
先頭の一人が、あたりを見廻してから合図をすると、七人の旅商人が笠をかぶったまま街道に揃った。そのうち五人が行李の荷を背負っている。

その荷物の中は、商品ではなく勿論小判が隠されているに違いなかった。
甚五郎が言った背の高い首領らしい男の顔は、笠に隠れてよく見えなかったが、平八は一眼見て浪人上りだなと思った。
首領が何か言った。
一行は休みもせずに越後の方向へ、国境の峠道を下りかけようとしていた。
平八は繁みから飛出し、矢のように鳥居を潜り抜けて先頭の一人の笠の上から撲りつけるように長脇差を振った。
笠が裂けて血が噴いた。その男は背負った荷物の重味に引かれ、絶叫をあげて後ろざまに転倒した。
そのときには平八の体が弾みをつけてクルリと廻り、次の一人の胸から首のあたりを掬い上げるように斬りつけていた。
「野郎!!」
「誰だッ!!」
「散れ!!　散れ!!」
盗賊達は口々に喚き、平八の攻撃に驚きながらも荷物を捨て、脇差を抜いて街道一杯に飛び下った。
平八は無言だ。
彼は闘うときには口をきかない。

平八が二人目を斃したときに、盗賊達はやっと構えを立直して平八を取囲んだ。
盗賊達は白い眼をむき出し、互いに低く合図を交わしながら、じりじりと平八に刃の輪を詰め寄せてきた。
首領は笠をかなぐり捨て、仕込杖にした無反の太刀を抜き、激怒に歯をむいて、
「きさまは何だ!!　何者だッ!!」
平八は答えなかった。
前砂の甚五郎はまだ現われなかった。
(爺つぁん、逃げたな)
ニヤリと平八は笑ったが、しかし二人の人間を殺すということは並大ていのことではなく、刀を握りしめた両腕が硬張り、喉はひりつくようだし、五本の刃の輪に、平八は何時になく圧迫感をおぼえた。
やくざ同士の斬合いと違い、正面から向い合うと盗賊共の刃には訓練があった。
平八は懸命に機会を狙った。
「斬れ!!　早くしろ」
首領が低く叫んだ。
同時に右手の一人が動きかける機先を制して、平八は躍り込んだ。
体ごとぶつけた一撃に相手は腹を刺されて悲鳴をあげたが、平八も左から斬込まれて、
「うう……」

癒ったばかりの左肩を後ろから切裂かれて呻いた。
前砂の甚五郎が何処からか躍り出して来たのはこのときである。
平八の肩を斬った奴は甚五郎の一撃を顔のまん中に受け、血しぶきを跳ねあげて転がった。
平八は長脇差を相手の腹から引抜き、甚五郎と共に三人の敵を迎えた。
西の空の一端に夕陽は残っていたが、街道は夕闇に包まれ、血の匂いと決闘の激しい呼吸がたちこめた。
五本の刃と五つの人影は、どれが敵か味方か区別のつかないほどに入り乱れ、もつれ合った。
甚五郎は、一人の盗賊に抱きつくようにして押倒し長脇差を胸に突刺したが、そのとき後ろから襲いかかった首領の一刀にもんどりうった。
平八はもう一人の奴をようやく倒し、首領に向った。
首領は疲れのひどい平八を圧倒し、右股を斬払った。
「こいつ!!　とんでもねえことをしやがったな。死ねい!!」
首領が振りかぶった刀の下に、蛇のように忍び寄って来た甚五郎が体を投げ込んだ。
「うわッ!!　う、う、う……」
首領は崩れ込むように倒れた。
甚五郎の手に匕首が光った。その光は二度三度と首領の胸元へ吸い込まれた。
静寂がきた。

平八の笛のような喘ぎも、ようやく絶えた。

峠の上の空に星がまたたきはじめた。

平八も甚五郎も倒れたまま動かなかった。

ややあって、平八が身を起した。一時は失神していたらしい。

「と、と、爺つぁん……前砂の爺つぁん……」

平八は、うつぶせになっている甚五郎の体にすがりついて何度も呼び、そこらを這い廻って盗賊の死体のひとつから竹筒を見つけ出すと、中の水をふくんで、口うつしに甚五郎に飲ませた。

甚五郎の胡麻塩頭に血がこびりついていた。

「爺つぁん!! しっかりしてくれ!! 眼をあけてくんねえ」

甚五郎が鈍く眼を開いた。平八は狂喜した。

「爺つぁん!! 俺だ。平八だ。わかるか」

「わかる」

甚五郎はうなずいた。

「みんな、やっつけたか? 平八どん……」

「やっつけた。やっつけたともよ」

「よかった……」

「うむ。よかったな、爺つぁん……」

「もう……もうじきに関所の役人が来るだろう——お前、大丈夫か?」

「大したことアねえ。でも、また此の間のところをやられたよ」

「まさか、死ぬようなこともあるめえ、お前の声でそれがわかるよ」

「爺つぁん……」

「俺ア駄目だ、もう……」

「もう少しだ。もう少し辛抱してくれ。もうすぐに関所の……」

「気休めはいらねえよ」

甚五郎は、血だらけの顔を上げ、平八の腕に助けられて半身を起した。

「平八どん。奴等の荷物を開けて見せてくんねえ」

「よし……」

平八は荷物のうちの一つを引擦ってきて、甚五郎が握りしめていた匕首をとり、それで荷物の綱を切って行李の蓋を開けた。

中身は縮の反物だったが、その底に薄板で造られた箱があり、それを匕首でこじあけると、小判が音をたてた。

「あった!! 爺つぁん、あったぜ」

甚五郎は嬉しそうにうなずいた。

平八は小判を掴み、甚五郎の手に握らせてやった。

「賭場で掻っさらった小判の手ざわりは、こんなに良いもんじゃアなかった」

甚五郎（じんごろう）は弱々しく平八に囁（ささや）き、急に震える両掌（りょうて）で平八の腕を摑んだ。

小判が街道に落ちた。

「平八どん」

「何だ？　爺つぁん！……」

「言うめえと思ったが……言わずに死ぬのが淋（さび）しくなった。だから言いてえ」

「何をだ？　何をだよ、爺つぁん……」

甚五郎の顔は、濃い夕闇（ゆうやみ）に蔽（おお）われてしまっていたが、平八は爺つぁんの眼に涙が光るのを、はっきりと認めた。

「平八どん。だ、抱いてくれ……」

手越の平八に抱かれた前砂の甚五郎は、息絶える直前にこう言った。

「俺を許してくんねえ……俺ア、板前くずれの博打（ばくち）うちで、お前のおふくろをめくらにした悪い野郎だ……」

（「小説倶楽部」昭和三十五年三月号）

あばれ狼（おおかみ）

芒の中

鳴滝の半蔵が、その浪人者を見つけたのは、中山道が信州小田井の宿場へもう少しというところにある前田原の芒の群れの中でだった。
「浪人さん。俺が誰だかわかるかい？」
半蔵は、振向いた浪人へ言った。
「わかる」
落ちかかる陽が赤くそめている浪人の顔は、むしろ屈たくのない穏やかな表情をうかべている。
色が白く、ぼてっと小肥りな浪人は、がっしりと陽灼けして旅から旅の博徒渡世が顔にも体にもしみついてしまっている半蔵よりも、むしろ背が低いほどだった。年齢は半蔵よりも少し上らしい。三十を出たか出ないかというところだろう。
眉が濃くて、栗鼠のような小さくてまるい双眸が人懐こい光をたたえているその浪人は、
「おぬしに斬られてもいいんだが、今は、ちょいと困る」
じりじりと退りながら、そっと左手を刀の鍔もとへのばし、
「やるかね!?」
「まあ、やるつもりだがね」

半蔵は、笠をとって投げ捨てた。
「俺は、浪人さんの名前も知らねえんだが……」
「関口弥十郎というが、わしの名さ」
「わかった!!」
「おぬしは、竹原の身内じゃなかったっけね」
「二日前に草鞋をぬいだばかりさ」
「そうだった、旅人さんだっけなあ」
「そうよ。俺ァ、鳴滝の半蔵ってもんだがね」
「わしを追って来たのは、半蔵さんひとりかね？」
「なに、俺ひとりでもよかったんだが、何しろ竹原の喜助親分を叩っ斬って逃げ出したお前さんだ。しかも、お前さんは竹原一家の用心棒だったんじゃねえか」
「その通り」
「何年やったね？　この渡世の用心棒をよ」
「二年位だ。竹原一家へは、草鞋をぬいでから半年ほどになる」
「ふうん、そうかい。この渡世はね、浪人さん……」
「わかっておる。一宿一飯の仁義というやつだな」
「その通りよ。俺だってお前、二日ばかり厄介になったおかげで、こうやってお前さんと命のやりとりをしなきゃァならねえ。それをお前、何で世話をかけた親分を殺っちまったん

だ?」
「金が貰えたのでなあ」
「誰に貰った?」
「そいつは言えない。言わぬ約束でね」
「まあ、言いたくなけりゃ言わねえでもいい」
半蔵は、茶みじんの着物の片肌をぬぎ、長脇差を引抜いて、ぱッと飛退った。
「行くぜ」
「ひとりで大丈夫か。竹原の身内がいるのではないのか?」
「後から二人来る、それに、小諸のあたりから岩村田へ抜けて来る追手が三人もいるぜ。俺を斬ったところで、もう逃げられねえし、また俺も、めったに殺られねえ筈だ」
「なるほど」
関口弥十郎は、半蔵の捨身の構え方を見て、ちょいと眉をしかめた。
「半蔵さんは、なかなかやるねえ」
「もう無駄口は止しねえ。早く抜くんだ。抜かねえのなら勝手に行くぜ!!」
半蔵は地を蹴った。
長脇差の光芒が、半蔵の五体と共に弥十郎へぶつかっていった。
「む!!」
弥十郎の体も毬のように芒の中へ飛んだ。

「野郎、逃げる気か!!」
「待て!!　ちょいと待ってくれ」
「何を!!」
「こいつはいかん。わしは、おぬしに斬られるかも知れん。だから待ってくれ」
「厭な侍だな。助けてくれとでも言うのか、まさかそうじゃねえだろうが……」
「勝負はつける。だが、半蔵さんの捨身剣法には勝てるかどうかわからぬから、その前に頼みがあるのだ」
「厭な野郎だな、そんな斬合いがあるかい」
「まあ聞け!!　もし、わしがおぬしに殺られたら、わしのふところにある胴巻を、そっくりそのまま届けてもらいたいんだが……」
「何だと?」
「厭か。厭なら逃げるぞ」
「逃がしゃアしねえ」
「だから頼むんだ。もう、おぬしに頼むより仕方がないものなあ」
弥十郎は、芒の向うに半身を見せ、さびしそうに苦笑するのだ。
(……?)
何だか半蔵も、気が抜けてしまった。
もともとやる気のない斬合いなのである。

二日ほど草鞋を脱いで遊んでみた竹原一家なのだが、親分の喜助という男は、何とも半蔵から見て厭な奴だった。
竹原の喜助は、野州真岡一帯に縄張りをもつ親分で、先年、縄張りを争っていた小栗の伝吉を暗殺し、その勢力を一手に納めていたし、宿場の女郎屋にも睨みをきかせ、あくどい儲け方をしていたことは、二日居ただけでも、半蔵には手にとるようにわかった。
喜助には養子の庄七というのがいて、これが若親分というわけだ。親父の敵討ちだというので、腕利きの子分を八方に散らし、弥十郎を追わせた。
「半蔵どん。すまねえがお前さんも」
庄七に言われるまでもなく、一宿一飯の義理は欠くことの出来ないものだ。半蔵は、十人の身内と一緒に赤城の山麓を渋川へ出て、そこで二手に別れ、一手は上州へ、半蔵達は信州へ向って弥十郎を追って来たのである。
「頼みを聞いてくれよ。どうだな？」
弥十郎は、まだ刀を抜かずに芒の向うから、およそ命のやりとりにはつりあわぬ間のぬけた声でさいそくしてくるのだ。
半蔵は舌打ちした。
「いかんか？」
半蔵は、また舌打ちをし、長脇差を地面へ突き立て、両腕を組んで、まじまじと関口弥十郎の童顔を見つめた。

「駄目だなあ、浪人さん。すっかり気が抜けちまったじゃアねえか」
「そうかね」
「そうかねも、ねえもんだ。これじゃ斬合いは出来ねえや」
「すまんなあ」
「一体、その金は、誰に届けるんだね？」
「ある女にだ。美濃の太田にいるんだがね」

消えた二人

その夜——鳴滝の半蔵は小田井宿の旅籠〔かわ屋伝右ヱ門〕方に泊った。
半蔵のあとから二人。それに善光寺道を岩村田へまわり到着した三人と合せて五人の竹原一家の乾分たちも、かねて打合せた通り〔かわ屋〕へ草鞋をぬぎ、半蔵と落合った。
「野郎め、こっちへは飛ばなかったのかも知れねえ。うまく俺達の眼をかいくぐって、三国街道を越後へ抜けやがったか……？」
「または東海道へ出たか……」
「東海道へも五人は追っかけてる筈だ」
などと、口ぐちに乾分達が言うのへ、半蔵は、
「どっちにしても、親分が殺されて間もなく、あっし達は追って出たのだから、息もつかずに此処まで来て、まだ見つからねえとなりゃア、こいつは見当違いでしたかね」と断定を下

してやった。
「客人も、やっぱりそう思いなさるかい」
小砂川の仁吉というひょろりと顔の長い、そのくせ妙に陰気な感じのする三十がらみの男は、手酌で、ぐいぐいと酒をあおりながら、
「どっちにしても、あの浪人を叩っ斬るまでは真岡へ帰らねえと、お前達も心をきめたがいいぜ」と言う。
「当り前だ!!」
「このまま帰ったのじゃア若親分に顔がたたねえ」
あとの四人も、酒を飲みながら息まいている。
彼等は、何かと「若親分」を言いたてる。
半蔵は黙って酒を飲みながら、五人のあげる気焔を聞いていた。
いま旅籠の二階で、こうしているうちに、関口弥十郎は夜の街道を、とっくに岩村田へ抜けてしまっていることだろう。
（こうなったら、俺もうまく消えてしまおう）と、半蔵はひそかに考えているのだった。
あれから、芒の中で、とっぷりと暮れきってしまうまで、半蔵と弥十郎は語り合った。
「おぬしは竹原の身内ではないのだし、わしの言うことを聞きわけてくれたし……言ってみてもはじまらないが、実はな……」
と、こう弥十郎が語るところによると……。

竹原の喜助の暗殺を弥十郎に頼んだのは、喜助の養子の、つまりあの若親分の庄七だったというのだ。
「まさか……」
「いや本当なのだ。庄七はな、喜助の甥に当る男で、こいつ喜助に負けぬ悪党でな」
竹原の喜助は、二年ほど前に、旅人の手越の平八という男を金で抱き込み、目の上の瘤だった小栗の伝吉を暗殺させ、その後で小栗一家を駆逐し、真岡一帯の縄張りを一人占めにした。小栗の残党も、その後は絶えず喜助の身辺を狙って蠢動していたようだったが、喜助も油断はしなかった。
ちょうどその頃に草鞋をぬいだ関口弥十郎の腕を見込み、給金もはずんで自分の護衛にしたことなどもその一つで、小栗一家の仕返しに備えるに万々抜かりのない喜助だったのだ。
そのうちに、小栗一家の蠢動も消えたようである。
ここで、庄七が牙を磨ぎはじめた。庄七を焚きつけたのは、小砂川の仁吉だった。
仁吉も旅人だったが、三年ほど前に草鞋をぬいでから、小栗一家との数回にわたる喧嘩にも目ざましい働きをして、見る間に親分喜助に取入り、竹原一家の軍師だとか何だとか言われるようになってきている。
「若親分。ぐずぐずしていると飛んだことになりますぜ。あっしは、お前さんのことが他人ごとには思えねえ。何故って言うとね、お前さんは、あっしの死んだ弟に瓜二つなばかりか、名前までも同ンなじなんでさ」

などと、嘘をならべながら、仁吉は巧みに庄七へ喰い込んでいった。
「飛んだことになるとは、一体、どういう？」
「姐さんが親分を口説いてね、お前さんを、そっと消しちまうように手筈をめぐらしているんでさ」
「何イ。ほんとか、仁吉」
庄七は背中が冷めたくなってきた。もともと義父の喜助の女房お仙とは仲がよくない。
お仙は坂本の宿場女郎上りで、喜助とは二十も年が違うし、去年の夏に男の子を生んでいるのだ。
前の死んだ女房との間に子がなく、好んで博奕うちになりたがっていた甥の庄七を養子にもらって跡目を継がせる気でいた喜助なのだが、お仙の若い体によだれを流しっぱなしにしている喜助だけに、お仙の中傷ひとつで、どんなに気が変るか知れたものでもない。
こういう一家の内紛の芽を早くも気づいた仁吉が、あることないことを焚きつけるうちに、庄七の眼の色が違ってきた。
「仁吉。こうなったら、思いきって……」
「おやんなさいますかえ、若親分」
「お前は俺の軍師だな？　間違いねえな？」
「おっしゃるまでもございませんよ」
「誰がやる？」

「あっしに考えがあります」
或夜――宿外れの竹藪の中へ呼び込まれた関口弥十郎は、庄七や仁吉の他十数名の〔若親分派〕に囲まれ、喜助の暗殺を頼まれた。
「関口さんは、何とか二十両ため込みてえと言っていなすったね」と仁吉は、厭だと言えばこの場で命は無いものと思えという肚のうちをはっきりと見せ、
「どうだね、先生。五十両出そうじゃねえか？」
「若親分は親分の肉身ではないか。それでもいいのか」
「文句はつけねえことだ。やるのか、やらねえのか？」
「やってもいい。五十両くれるならな」
「よし!!　きまった」
暗殺は翌日の夜と決めた。
その日は夕方から、木綿の買継問屋の旦那衆に竹原の喜助が招待され、宿の料亭で酒宴がある。供をするのは関口弥十郎他二名ほどの乾分だけだ。
近頃は、真岡の問屋達も江戸の問屋と提携し、抜売り抜買いをしばしばやっては儲けをふくらませている。半ば公然の事実だけに綿作を行う農家の不満を威圧したり、代官所をまるめ込んだりするのに竹原の喜助が問屋達にとって便利な存在だったことは言うをまたない。
むろん利権も大きいのだ。
それだけにまた、博徒の親分としては大いにめぐまれた一家の縄張りに養子の〔若親分〕

が執着をもつのも充分にうなずける。

喜助暗殺は、その宴席の帰途、二人の乾分もろともに、ということに決まった。

もちろん小砂川の仁吉も数名を従えて出張ることになる。

「引受けたが、そのかわり、半分二十五両は今すぐ貰いたい」

「何だな、先生。若親分を疑ぐっちゃいけねえやな」

「そういうわけではないが、他のこととは違う」

「よし。仁吉よ、渡してやれ」と、これは若親分だ。

金は渡しても、どっちみち戻ってくるのだ。

喜助を殺させ、あとで半金を渡すときに、仁吉達十数名が弥十郎を取り囲み、めった斬りにしてしまうつもりなのだ。

どっちにしても下手人は弥十郎にしてしまえば表向きは通ることだ。

こういうたくらみだったが、見事にしてやられた。

関口弥十郎は、その夜のうちに親分の寝所へ忍び入って喜助を斬り、半金だけ持ったまま逃げてしまったからだ。

「喜助を斬らんで逃げてもよかったのだが、しかし考えてみると、奴は随分ひどいことをやっている。喜助を殺したところで、ああいう無頼漢どもの根は消えないが、斬ってもいいと思った。それに喜助さえやっつければ、わしの後を追っては来まいと思ったんだが……」

弥十郎は半蔵にそう言ったものだ。

「冗談じゃねえ。もしも庄七や仁吉のたくらみが、お前さんの口から世の中へ洩れたら、あいつらも大きな面は出来ねえ。こういうことにかけては、俺たち渡世は、これで仲々しつっこいもんなんでね」と半蔵。

「そうらしいな」

「うん」

「で——その二十五両を、いよいよ女にとどけようと、こういうわけだね」

「その女は、関口さんの色ですかい?」

「一晩、寝たがね」

「商売女か」

「うん」

「聞きてえね、その話を——」

「右腕がな、肩のつけ根から無い女なのだ」

「へへえ……」

「まだ小娘の頃にな、加納城下の旅籠で下女奉公をしておったらしいが、そのとき、旅の侍が無理無体に、その、何しようとしたので、必死に拒んだという。そうしたらな、その侍が怒り狂って、いきなり……」

「女の腕を斬落しやがった……ひでえ野郎だ」

「わしも、そう思うがね」

侍は番所へ引立てられて行ったが、落ちた片腕は二度と元へ戻らない。女もひどい苦労をしたらしいが、そのうちに、その〔米屋〕とかいう旅籠へ泊った旅の男が、たくみにもちかけ一緒になろうと女をだまし、美濃太田の宿場女郎まで流れ落ちたいきさつも、いろいろとあるらしいが、わしは、よう訊かなんだよ」

弥十郎浪人のつぶらな眼が赤く腫れてきたのを、濃い夕闇の中で、はっきりと半蔵は見た。

「関口さん。もう少しすると俺のあとからやって来る竹原の身内が此処を通りすぎるだろう。そいつをやりすごしてから、お前さんは行きなせえ。俺が小田井の宿で喰い止めてしまうからよ」

「斬り合いはやらんでよいのか?」

「もう馬鹿々々しくって手も足も出なくなったよ」

「そうか」

芒の中に身を潜めていると、間もなく小砂川の仁吉ともう一人が通りすぎて行った。その後から半蔵は飛出し、先まわりして小田井宿へ入ったというわけなのである。

夜が明けた。

さんど笠を並べて六人の博徒は、前田原の芒の中を引返して行った。

関口弥十郎は今頃、夜道をかけ、長久保のあたりまで行ってしまっていることだろう。

それから三日ほど後になって、三国街道を越後に向って弥十郎を追い求める竹原一家の博徒達の中から、鳴滝の半蔵の姿は消えてしまっていた。

「半蔵の野郎め、厭気がさしゃアがったんだな。渡世人の風上にもおけねえ奴だよ。あいつは——今度出会ったら只じゃアおかねえ」

小砂川の仁吉は、肉の厚い青黒い唇から何度も唾を吐いて半蔵をののしった。

あばれ半蔵

庭で蟋蟀が鳴いている。

鳴滝の半蔵は屋根から引窓をこじ開け、台所へ忍び込んだ。

台所から廊下へ……。

其処此処に詰めている乾分達の寝息や鼾が屋内にこもっているようである。

竹原の喜助暗殺のことがあってから、一時は鳴りをひそめていた小栗一家の残党が再び暗躍をしはじめ、竹原二代目の親分となった庄七の命を狙っているという風評は、この真岡へ引返して来る途中で、半蔵の耳にも入っていたことだ。

そこのところは庄七も抜かりはなく、関口弥十郎を追わせた者達以外の腕利きの乾分を残しておき、外に世帯を持っているものまで呼び寄せて、小栗一家の撲りこみを警戒しているらしい。

半蔵は廊下を伝わって、そっと死んだ喜助の寝間に近づいて行った。親分の座を獲得した

庄七は、きっとその部屋に眠っているに違いないと思ったからだった。
「いやだよォ。まだ疑ぐっているのかえ……」
女の声だ。喜助の女房だったお仙の甘ったるい声だ。
(おや……?)
廊下は暗いが、寝間にはうすく灯がともっている。
半蔵は、身をかがめ、障子際まで近寄って行った。
「あたしが若親分を……」
「若親分じゃあねえ。おれはもう二代目竹原の喜助になっているんだぜ」と、これは庄七の声である。
「ごめんなさいよ、ねえ……そんなに怒った顔をしないでおくんなさいよ。ねえ、親分。私アねえ、お前さんを憎んで、死んだ親分を焚きつけ、お前さんを殺そうとしたなんて……そりゃア、とんでもない間違いだって、さっきから言ってるじゃございませんか」
「だがな、お仙さん。おれの耳にはちゃんと……」
「小砂川の仁吉が吹き込んだんでしょ？　それに違いない。いいえ、それに決まってます、あんな厭な奴はありゃアしない」
「仁吉の讒訴はよしてくれ」
「いいえ言います。あいつは何度も、そりゃもうダニみたいに、私のことを口説いたくせに、死んだ親分にも若親分にもうまく取入って、あわよくば、この竹原一家の跡目を引っさらおうという魂胆なんだから……」

「何だと」
「ねえ若……いえ親分。この次は、お前さんが狙われる番ですよ」
「何ィ」
「知ってますよォ。親分をお殺んなすったのは、みんな仁吉にそそのかされて、お前さんが……」
「馬鹿!!　何をぬかしゃアがる。親分は用心棒の関口弥十郎にお前……」
「いいの、隠さなくっても……だってさァ、私も、そりゃ死んだ喜助さんにお世話になりましたけど……私アねえ親分。この家へやって来たそのときから、お前さんのことが忘れられなくなってしまったのさア」
二十六のお仙が、脂っ濃い肌を擦り寄せて、庄七を口説いているのだ。もともと義理の母子とは言っても、庄七の方が二つも年上なのだ。
(お仙のやつ、早えとこ、乗り替えやがったか……)
半蔵は廊下の闇の中で苦笑した。
(よし!!　面白え。わざわざ引返して来た甲斐があったと言うもんだ)
三国街道相俣附近の杉林の中で、小砂川の仁吉達を撒き、半蔵は、まっすぐに真岡へ引返して来たのだ。
関口弥十郎の話を聞き、半蔵は、竹原一家の奴どもに一泡ふかしてやりたくなったのであ

る。

(渡世人の風上にもおけねえ野郎共だ!!)

これである。

博徒も、一生不住の旅人と、縄張りを持って勢力を張る親分乾分とでは、おのずから違う。どっちみち博徒の群に落ちるものは、金もなく肉親にも縁が薄く、暮しの元手になる職も手につかず、世の中に対して何の助けも得ることが出来ない、ひとりぽっちの男どもが多いのである。

それだけに絶えず世の中に負け目を感じ、堅気の人びとの世界には顔をそむけ、一歩も二歩も、へり下って生きて行くという性格が、いつの間にか身についてくる。これが本物の博徒だ。

ことに半蔵のような流れものは、親分から親分の家をまわりまわって一宿一飯のめぐみにあずかり、そのためには何時なんどきでも命を投げ出さなくてはならないという掟にしばられている。

そこへ行くと、一家をかまえている博徒は、土地の利権と結び勢力を伸ばし、中には立派なものもいるが汚いといえばこれほど汚いのもいないという奴も、うようよしているわけだった。

「ねえ……親分。親分たらア」

またもお仙の甘い声が、しきりに庄七へ囁いている。

「ねえ。ねえったら、ねえ……」

帯のすれる音が、かなり永い間していたかと思うと、部屋の中の気配が、突然、妙なものに変った。

庄七の喘ぎが高まってきて、お仙が鼻を鳴らしながらこれにこたえている様子だ。

(ふん。庄七てえ野郎も、存外、甘え奴だ……)

半蔵は、台所から拾ってきていた棍棒を握りしめ、いきなり寝間へ飛込んで行った。

寝間には、汗ばんだ男女の体臭と白粉の匂いが蒸れていた。

お仙の悲鳴と、庄七の怒声が起るかと見るまに、半蔵は無言で、棍棒を振った。

庄七は頭を撲られて気絶し、お仙は湯文字ひとつの裸体になっていた腹のあたりに棍棒をくらって、これも失神した。

「ざまァ見やがれ」

半蔵は長脇差を抜いて、男女二人の髪の毛をばっさり切り落し、庄七の下帯も、お仙の湯文字もはぎとり素裸にしておき、行灯の灯はつけたまま、廊下へ出た。

はじめは、こうしてから火をつけてやるつもりだったのだが、火事が大きくなって堅気衆の家にまで迷惑をかけてはと思い直したのである。

乾分達が手に手に長脇差を抜いてイナゴのように飛出して来た。

「やッ!! 半蔵だ」

「何をしやがった!!」

「手前、小栗一家のまわしものだったのか!!」
口ぐちに叫んで飛びかかって来るのへ、
「うるせえ!!　ダニの乾分どもめ」
半蔵は、長脇差をおさめ、棍棒を振って突進した。
廊下も部屋も、台所も暗いし、二十人近い乾分達は、半蔵の棍棒と野猿のような跳躍を、到底つかまえ切れるものではなかった。
「野郎!!」
「叩っ斬れ!!」
「逃がしちゃアならねえ」
などと無駄に喚いている奴らは、次々に棍棒の餌食になった。
ひと渡り撲りつけ叩きのめしておいて、半蔵は土間から表口の戸締りを叩きこわし、
「手前たち、早く親分のところへ行って見ろい!!」
にやりと笑って、鼠のように街路へ飛出し、一散に夜の闇へ溶け込んでしまったのだ。
(やれやれ、これで胸がすいたぜ)
風を切って走りながら、鳴滝の半蔵は、
(もう一度、関口さんに会ってみてえ。うまく腕なしの女に金を渡せたかな?)
だが、金を渡し、女を自由にしてやってから、どうするつもりなんだろう。
(まさか、女房にする気じゃアあるめえけどなあ……)

中山道あたりは、まだ弥十郎探索の竹原身内がうろついている筈だった。
半蔵は、そのまま東海道へ出て、会えるかどうかわからないが、関口弥十郎にもう一度会ってみたい気がしている。
どうせ何ひとつ、人生の目的の一片すら持ってはいない半蔵である。
今度のような事件は、或る意味で、彼に生きて行くことへの刺激を与えてくれると言ってよい。
(関口さんが惚れたらしいその片腕の女、一寸見てみてえもんだ)
丸裸で、髪を切られた庄七とお仙が、乾分どもの前で息を吹き返したとき、どんな顔をしゃアがるかと思うと、半蔵は込み上げてくる笑いを押え切れなくなっていた。

瀬戸川騒ぎ

鳴滝の半蔵は、両親の顔をよく覚えてはいない。
両親が一年ほど間をおいて、それぞれに病没したのは、半蔵が六歳の頃だった。少し年上の兄がいたことも、かすかにおぼえている。
半蔵たち兄弟は、両親の死後、散り散りになった。親類もいたのだろうが、それが何処の誰か知ってはいない。物ごころがついたとき、半蔵は両国の見世物小屋に暮していたのだ。
誰かに売られてしまったらしいのだ。
親方は竹沢藤治といって、両国広小路に大きな小屋を持ち、曲独楽や曲馬、八人芸などを

看板に大変な人気があったものだ。ここで半蔵は、きびしく芸を仕込まれた。博徒(やくざ)になった現在でも、半蔵は馬にも乗れるし独楽芸もやれる。

まあ、こういうわけで、二十になる一寸前まで、半蔵は見世物小屋の空気を吸って生きて来たのである。

「まだガキだったお前の体を商売人から買ったのだから、よくは知らねえが、何でも東海道掛川のあたりの、鳴滝とかいう村だそうだ」

親方が、何時かこんなことを言ったので、半蔵は生れ故郷というものが自分にもあるのだということを知った。その他(ほか)のことは何を聞いても、

「知らねえものは答えようがねえ」

藤治親方は苦笑するばかりだった。

やがて、半蔵は博奕(ばくち)の味をおぼえた。酒にも、女にも並外れた溺(おぼ)れ方をするようになっていったのである。

喧嘩(けんか)好きな、というよりも、半蔵の喧嘩は、いつも買ったものばかりだった。

「手前(てめえ)が、どういう生い立ちをしたのか……この世間に、手前の血のつながっている人間てえものが一人もいねえのか……こう思うと、もう哀(かな)しくって、ムカムカしてきやがって、たまらなくなるんだ」

前に半蔵は、一座の仲間のひとりにそんなことを言ったことがある。

親方も可愛(かわい)がってくれていたのだが、どうにもこうにも取返しのつかぬ失敗をやってしま

い、半蔵は小屋から逃げた。

それからおよそ十年——今では博徒暮しにもタコが入っている半蔵だ。

さて——話は前に戻(もど)る。

真岡から江戸へ——それから東海道を上って行く半蔵は、江戸から約三十五里、沼津から四里半というところにある吉原宿(よしわらじゅく)手前の茶店で、名物の白酒をすすっているとき、このあたりまで関口弥十郎を追って来た竹原身内の四人と出会った。

「おうおう。お前さん、半蔵どんじゃねえか」

そのうちの一人で岩淵(いわぶち)の源次郎というのが、街道からズカズカと近寄って来て、

「お前さんは、たしか中山道へ……」

「へえ」

半蔵は、ニコリとして縁台から腰を浮かせ、

「こりゃア、いいところで——あの用心棒野郎は、あっしどもで叩っ斬りましたぜ」

「え——本当か?」

「へえ。小田井宿の手前の原ッぱで、小砂川の仁吉どんと、あっしら五人、おっとり囲んで、めった斬りにしちまいましたよ」

「なあんだ、そうかい」

「へえ、へえ——あっしは若親分のお言いつけで、兄い方をお探し申し、このよしを伝えるよう、申しつかりましたんで——へえ……」

「そうかいそうかい。おい、みんな。これで真岡へ帰れるというもんだな」
「全くだ。半蔵どん、御苦労だったね」
みんな、大よろこびだ。
「野郎は腕がたつ。ちょいと手強かったろう」と源次郎。
「いやもう、まるで暴れ馬のようでござんしたが、何しろ、あっしどもも親分の敵、一寸も退きませんでしたがね」と半蔵である。
「そうだろうとも、そうだろうとも……」
「これであっしも御用ずみだ。それではこれで……」
「何処へ行きなさる？」
「へえ。京大坂を見てこようと思いましてね。若親分にもおことわり申してありますんで——」
「そうかい。そりゃ残念だな」
「来年にでも、また御厄介をかけにまいりとうござんす」
「おう。そうしてくんねえ。待っているぜ」
「へえ、へえ……」
そいつらと別れ、半蔵は早足になった。
空は冷めたく青く晴れている。
風もめっきりと冷めたくなっていたが、半蔵のふところは温かかった。

ここへ来るまでは諸方の賭場で遊んだやつが芽の出っぱなしで、五十両に近い金が胴巻に入っているのだった。
街道から見える富士の山の頭にも雪が降りている。
鵙が、しきりに鳴いていた。
その夜は蒲原泊り、翌朝は早立ちで、半蔵は足にまかせて飛ばし、昼すぎには府中の城下へ入った。
少し強いが、これから五里余り先の藤枝宿へ泊るつもりの半蔵である。
（ともかく、美濃へ入って見よう。おそらく、関口さんは女と一緒に太田の宿場を離れてしまったろうが、行って見れば行先がわからねえものでもねえ）
関口弥十郎の持っていた金は、女を受け出すのに一杯一杯というところだ。場合によっては、ふところの金をやってもいい。
（それにしても、あの浪人は、くたびれている割合に、いい眼つきをしていやがったっけ）
何処が気に入ったのか知れないが、一夜馴染んだだけの、腕が一本しかない女を忘れかねて、中山道を上って行った弥十郎の純な気持が、半蔵にもまた忘れかねるものになってしまったらしい。
（とにかく会いてえもんだ）
翌日は藤枝をゆっくり発って、宿外れにある瀬戸川へ出て来ると、人足が五人ほど、河原にしゃがんで煙草をふかしている。

この川は歩渡りで、旅のものは人足の肩に乗って川をわたる。すぐ先にある大井川とは比べものにならないほどの川幅だから、元気のいいものは自分で渡るのだが、半蔵は、すたすたと河岸の野菊の群を縫って河原へ下りながら、
「おーい、頼むぜ」と、声をかけようとした。
そのときだった。
川向うからわたって来る人足の背につかまっていた女から裂くような悲鳴があがった。
(や……?)
こっちの人足共も総立ちになる。
「ひゃア!! 斬合いだ」
人足たちは、かたずを呑んで見守る。
対岸で侍が六人ほど、どれが敵か味方かわからないほどの激しさで飛び交し、刀を振りまわしている。その刀と刀が、朝の陽にきらきらと光る。
旅の女を背負った人足だけが一人、ざぶざぶと川をわたって近づいて来る。
と見る間に、斬合いの中から浪人風のが一人、鳥のように飛び抜けて来て、川へ飛び込んだ。喚き声をあげて後の五人も浪人を追って川へ入る。
旅の女は、こっちへ着いた。人足の背から転げるように下りて、
「早く逃げてエ」と絶叫した。
それを見て、半蔵はぎょっとなった。

女は右の腕がなかった。肩口から袖、たもとがだらりと下ったままなのである。
(関口さんか……)
必死に、川の中を見る間に近づいて来る浪人者へ眼を移し、
「や。違えねえ」
半蔵は叫ぶより早く長脇差を引抜き、
「関口さん!! 俺だ。半蔵だぜ」
「おお——」
ざぶざぶっと河原へ駈け上って来た関口弥十郎の真っ青な顔は、べっとりと脂汗にぬれていた。
「どうしなすった?」
「逃げなきゃならん」
弥十郎は女の腕をつかみ、
「走れ!! 走るんだ!!」
半蔵が叫んだ。
「手伝いますぜ」
「すまん」
女の顔を見る間もなく、半蔵は長脇差をおさめ、女をいきなり横抱きにして走り出した。
それを見て、弥十郎は再び川へ飛び込み、河原へ上りかけた先頭の一人を撲りつけるよう

に斬った。

「えい!!」

「うわ……」

しぶきをあげて、川へ倒れ込むのを振向きもせず、弥十郎は半蔵の後を追った。

藤枝の宿へ入ると、半蔵は、問屋場の前につないであった馬に飛びついた。

女を投げ乗せ自分も飛び乗り、

「関口さん、馬は?」

「何とか乗れる」

弥十郎も、別の馬へ飛び乗る。

問屋場の中から宿役人や人足どもが叫び声をあげて駈け出して来る。

弥十郎を追って来る侍達(たち)も、すぐそこに白刃(はくじん)をきらめかして迫って来る。

往来の旅人(たびにん)たちが悲鳴をあげる。

馬がいななく。

「二、三里借りたぜ」

半蔵の手から数枚の小判が飛んだ。何とも早業だというより他はない。

「待て!!」

「逃ぐるな、弥十郎」

「卑怯(ひきょう)なり」

とか何とか叫びながら駈け寄る侍達と間一髪の差で、二頭の馬は土煙りをあげて走り出していた。

安倍(あべ)峠(とうげ)

関口弥十郎は敵持ちだった。

弥十郎は、信州飯山(いいやま)二万石本多豊後守(ぶんごのかみ)の家来だった。徒士組(かちぐみ)で二十石二人扶持(ぶち)という下級武士の家の次男坊に生れた弥十郎は、言わば持て余しものだった。

ところが、うまい具合に養子の口が見つかって、同じ徒士組の関口家へ婿入り(むこいり)することが出来た。

近ごろの侍の暮しが楽でないことは、どの家中でも同じことで、ことに弥十郎が婿となった関口家では、微禄(びろく)の上に、五十両もの借金があった。

男子を三人も病気で亡(な)くした上に、先代からの借金が雪だるまのようにふくれ上っている関口家なのである。それでも贅沢(ぜいたく)はいえない。

どうせ実家は兄のものになるのだし、養子の口がなければ、一生、兄の厄介ものになるより他に途(みち)はなかったのだから……。

弥十郎は関口家へ入ると、みずから率先して倹約につとめた。一国の経済でもない貧乏侍の家の切りもりは、こうするより手がないのだ。

義父母や妻と一緒に、非番の日は耕作もするし内職もやる。城へ出勤するときの弁当は、

くろ麦の握り飯に塩だけにした。

関口の父は、

「すまぬのう。すまぬのう、弥十郎どの」

人のよさをむき出しにして感謝してくれたものだった。父ばかりではない、母も妻もだ。

事件は、しかし、この麦の握り飯から発した。

或る日、詰所で昼飯をしていると、上役の山崎平馬と平野助左衛門の二人が、しきりに鼻をつまみ、黙々と握り飯を食べている弥十郎をチラチラと見やっては、ひそひそ話しをしている。

弥十郎は、むっとしたが、尚も沈黙を守っていた。

弥十郎が関口の婿となってからは、同僚や上役達の口がうるさくなってきている。というのは、関口の娘の津禰は、飯山小町などとよばれたほどの美貌で、養子の口はいくらもあった。関口家の借金を払ってやるから婿にしろというのもあったし、城下の富商からものぞまれていたのだ。

しかし、津禰は、弥十郎をえらんだ。

家も近かったし、父親同士の交際もあり、津禰は少女のころから弥十郎の穏やかで温い人柄を好んだものであろう。

「弥十郎め、女のためには、ひぼしになってもよいと申すのだから恐れ入る」というやつもいるし、

「空き腹でいたしては、子も生めまい」などと怪しからぬことを聞こえよがしに言い放つものも出て来る。

こういう罵詈雑言を耐えてきていただけに、弥十郎は、その日、山崎平馬が、

「くさい、くさい」と言い、平野助左衛門が、

「弥十郎のところでは、焚木を惜しんで何日分も一緒に飯をたくらしいわい」こう言って笑うのを見たとき、

(もう、これまでだ!!)と、決意をかためたのだ。

その決意を、その夜、義父に話すと、

「おぬしの思うままにしてよい。これは、許せぬことだ。あとのことは決して心配するな」

涙を浮べながら、キッパリと承知してくれた。

妻の津禰にも話した。

「侍の意地をおたて下さいまし」

津禰は、顔色も変えずに言ってくれた。

翌日になって、弥十郎は北町の通りに山崎と平野を待受け、出勤して来る二人に駈け向い、見事に斬倒すことが出来たのである。

その時刻に、何と関口の父母も妻も奥座敷で、それぞれ立派に自決して果てたのだった。

弥十郎は飯山城下から逃走した。

そして、山崎と平野の伜が親類ども四名と共に、父の仇、関口弥十郎探索の旅に出たのは

四年ほど前のことになる。
「そいつは大事だ。関口さんは、二組の敵討ちに狙われているんですかい」
鳴滝の半蔵も一寸おどろいた。
まるまると肥り、見るからに柔和そうな弥十郎は、とうてい芝居に出て来るような敵持ちには見えない。
「いや、全く、あのときは危なかった。半蔵さんがあらわれてくれなかったら、わしもおみよも、こうして山の湯なんぞにつかってはいられない」
弥十郎は、渓流にのぞんだ丸太造りの素朴な浴舎の中で、半蔵に礼を言った。
あの片腕の女、おみよは、対岸にある湯宿の一室に、二人を待っている筈だった。
瀬戸川の斬合いから、もう十日も経っている。
あれから三人は府中の手前まで馬を飛ばし、安倍川の川越人足に金をやって馬を藤枝宿へ届けさせると、そのまま、府中から安倍川をさかのぼり、山峡の道を駿河と甲州の国境近くまで分け入り、梅が島の温泉へたどりついた。
温泉といっても、山と崖と渓流の叫びに包まれた一軒家で、湯治客も近辺の木樵や百姓たちが多い。
ここまで来るのに、おみよは疲労の極に達してしまったようだ。
おみよという女は、二十を出たか出ないかという年ごろで、体つきも顔だちも細そりと白く、片腕になった不幸へ反撥して自暴自棄になるというのではなく、その不幸の泥水の中を、

しずかに押し流されているといったような感じがする。
自分をだました男に叩き売られ、片腕の女郎だというので物好きな客もつくのだが、如何にも哀れに、悲嘆の感情をじいっと耐えているおみよには客も一度きりというのが多く、三つほど宿場を変えて売りつぎをされ、最後に、美濃太田で、弥十郎とめぐり合ったのだ。
一夜明けて、名残り惜しそうに去った弥十郎が、一年もたたぬうちに戻って来て、
「ああ、よかった!! よく此処に居てくれたなあ」と、二十五両の金を投げ出したときには、おみよも、この人と、たとえ一と月でも一緒に暮せたら死んでも悔いはないと覚悟をきめたのだという。
体も強い方ではないし、瀬戸川の斬合いから此処までの逃避行は、おみよに、ひどい衝撃を与えたらしい。
宿へつくと、高熱を発し、どっと寝込んでしまったのである。
「でも、もう大丈夫だ。あと五日もしたら元気になると、あっしは思いますがね」
「何も彼も、半蔵さんのおかげだよ」
「で、これからどうするつもりなんで?」
「うむ――おみよが元気になったら、峠を越えて甲州へ出ようと思う。下の諏訪の小さい寺の住職が、わしの実家の遠い親類に当るのでな。このことは奴等も知ってはいない筈だから、とにかく、そこへ……」
「大丈夫ですかい?」

「親切な坊さんだそうだから、何とか隠まってくれると思う」
「よし。それじゃ、雪が来ねえうちにお発ちなさい。あっしが安倍峠の上まで送りますぜ」
「半蔵さんは、どっちへ行くのだ?」
「まず京大坂を見て来ようと思ってねえ。その帰りに下の諏訪へ寄ってみますよ」
「そうか。ぜひ、来てくれ」
それから十日ほどたって、晩秋の底ぬけに澄んだ空の下を、三人は安倍峠へ向った。
弥十郎と半蔵は、替る替るおみよを背負い、細い山道を喘ぎながら登った。
峠は、密林と山肌に包まれていた。
落葉が重く散りつもったその峠の上で、
半蔵は、胴巻を出して、
「関口さん。こいつを持って行っておくんなせえ」
「あっしどもには要らねえ金だ。どうせ何に遣ったかわからねえうちに無くなってしまう金だもんね」
「すまん」
弥十郎の双眸が、きらりと光った。
おみよの眼も、まっ赤になっている。
弥十郎のふところには、ほとんど金が残ってはいないだけに、よほど嬉しかったのだろう。
「みにくいようだが、遠慮なしに頂いておく」

胴巻を受けて、押しいただいた。
「おみよさんも、しっかりしなくちゃアいけねえよ」
「はい……何と申していいのか……あたし、言葉が出ないんです……」
弥十郎は、おみよの手を引いて甲州側へ下りかけ、
「なあ、半蔵さん。竹原一家はどうしたかなあ?」
「今頃は、小砂川の仁吉が、三代目におさまっているでしょうよ」
「なるほどなあ……」
二人は、苦笑をかわした。
弥十郎は、しきりに遠慮するおみよを強引に背負った。
「もう大丈夫なんですったら……」
おみよは、ちらりと半蔵を見て、青白い顔に血のいろを微かに浮べた。
「これからは、わしが女房。体は大切にしてくれなくては困るよ」
「はい……」
「なあ、半蔵さん……わしはなあ。これから、この女と一緒に追手の眼を逃れて、逃れ切ることを生甲斐にするつもりだ」
弥十郎は決然と言った。
「よくお言いなすった!! うらやましいねえ。あっしなんぞは生甲斐の一片もありゃアしねえや」

やがて、弥十郎とおみよは、甲州側の山道を下って行き、樹林の中に消えてしまった。
半蔵は、かなり永い間、凝然と立ちつくしたままだった。

血の雨

（おや……？）
半蔵は眼を見張り、ハッと足を止めた。
山道がうねって一巻きした、その丁度下のところを見下せる位置だったので、五人の侍達の姿が、はっきりと視界に飛び込んで来たのである。
さっき弥十郎たちと登って来た山道を下りはじめてから、まだ半刻は経ってはいない。
まぎれもなく、その侍達は弥十郎を敵と狙う連中に違いない。瀬戸川で見たそのうちの二人ほどの顔を、半蔵はおぼえていた。
侍達は、ひとかたまりになり、竹筒の水筒を飲みながら何か話し合っている。
その声も耳をすませば聞こえてくるのだ。
半蔵は山道に突伏し、息をひそめた。
「梅が島の宿では、やはり三人連れだということだったな」
「女連れだ。道は、はかどるまい」
「今度こそ逃しはせん」
「こちらは五人だ。ふ、ふふ――わけはないぞ」

「身延まで道は一つきり。二刻とはかからず追いつけよう」
侍達は殺気に満ちている。
東海道筋から此処までの足どりが、誰か半蔵たち三人を見たものの口から、洩れたものであろうか……。
一人がひろげた地図のようなものに顔を寄せ合い、今度は小声で話しはじめた。
中には気早く刀の下緒を引きぬいて襷にまわすやつもいる。
野鳥の声が鋭く樹間を縫った。
半蔵は唇を噛み、ちょっと考えこむ様子を見せたが、すぐに決意がかたまったようである。
（やれるかどうかわからねえが、ともかく此処で、あの五人を叩っ斬ってやる!!）
決意とはこれだった。
家もあり、帰る故郷もあり、親や女房や子供もあり、そして一日一日を将来に向かって積み重ねて行く堅気の世界と違い、半蔵には、その中の一つもないのだった。
博奕と喧嘩と、宿場宿場で買う女と酒。あとに何があると云うのだ。
博徒の、ことに旅人は絶えず死を考え、深い厭世観を胸に抱いている。堅気にならなくてはいけないと思いつつ、いつの間にか渡世の泥沼にはまり込み、足がぬけなくなる。
もっとも足を抜こうにも何にも、通常の人間としての背景や環境が爪の垢ほども用意されてはいないのだから深みへはまるばかりなのだ。
字も読めず、従って、もちろん信仰などというものも持てない。

博徒には、半蔵のような不幸な生い立ちのものが、だから多いということになる。
こういう人間というものは「死」を怖(おそ)れない。
行手に希望がないから、年老いて路傍に野たれ死するのはまだいい方で、渡世の義理や喧嘩で、何時(いつ)なんどき下らなく命を捨てるときがくるか知れたものではないのである。
(だが、此処で死ぬのならいいや。弥十郎さんとおみよさんのために闘ってみるのだからなあ……あの二人は、生きて行く幸せてえものを見つけ出したのだものなあ。そういう人たちのために喧嘩するのだから、もう思い残すことはねえ)
半蔵は、そっと身を退(ひ)き、下の山道から見えないところまで来てから、腰の竹筒をとって二口ほど飲み、これを投げ捨て、もろ肌ぬぎになり、両袖(そで)は帯と上じめの間へ、しっかりはさみ込んだ。
胸までまいた腹巻ひとつに上体をさらし、手ぬぐいで鉢巻(はちまき)をした。
下の山道で、侍の声が動きはじめたようだ。
(もうじき登ってきやがる)
半蔵は、ふと気づき、捨てた竹の水筒を拾い、口にふくみ、両足の草鞋(わらじ)に霧を吹きかけた。
風が鳴りはじめた。
少し前から雲が動き出して陽(ひ)をさえぎっていたが、樹林と切りたった山肌を縫っている山道だけに、昼下りの時刻だとは思えないほどの薄暗さになってきている。
山肌を巻いて此処へ伸びている道を囲む杉木立(すぎこだち)の中に身を潜め、鳴滝の半蔵は、ゆっくりと長脇差(ながどす)を抜き放った。

侍達の足音が近づいて来る。一人、二人……ひとかたまりになっては歩みにくいほど道は狭い。
山肌の蔭(かげ)から一人あらわれた。若い侍である。
その侍は後を振向き、
「おい、急げ」と言ってから、唇を固く結び、鼻から荒く呼吸(いき)を吐きながら登って来る。
急に、雨が叩いてきた。
杉木立に音をたてはじめた雨と一緒に、半蔵は躍り出して行った。
「何者だ!!」
侍の顔が恐怖にゆがんだ。
半蔵は無言で長脇差を叩きつけた。
「あ——うわ、わ、わ……」
侍の顔が真赤になった。
生あったかい返り血を半蔵も首のあたりに浴びながら体当りで、その侍の体を突き飛ばした。
山道の向うで叫び声が起こり、だだっと駈(か)け登って来る気配だ。
一人、二人——出て来た。
半蔵は突進した。

一人を斬った。
絶対に声は出さない半蔵だ。口をあけると息が乱れる。喧嘩場の心得なのである。
「おのれ‼」
「ごろつきめが――」
雨がしぶいてきた。
幅一間に足らぬ山道で一対三の争闘が始まった。
「こいつ‼　何者だッ」
「瀬戸川のときも、おのれ――」
「うぬ‼」
三本の刃(やいば)を潜(くぐ)りぬけながら、半蔵は必死に長脇差を振った。
「えい‼」
半蔵の左の肩に、ずーんと衝撃がきた。
「むう……」
死にもの狂いで飛び退(さが)ったとたん、上に待っていた一人が、
「こやつ‼」
振りおろした一刀を払うはずみに、半蔵の長脇差は宙に撥(は)ね飛ばされてしまっていた。
「えい‼」
「う、う……」

また半蔵が左腕を斬られた。
半蔵は、ころげるように山道へ倒れて対手(あいて)の足を右手で掬(すく)った。
「あッ」
尻(しり)もちをつく対手に飛びかかった半蔵は、はじめて声をあげた。
「野郎‼　くたばれ」
はね起きて、対手の小刀を引抜き、ずぶりと腹に突きたてる。
「ぎゃ、ぎゃア……」
もう夢中だった。
半蔵は、また飛び退り、小刀を投げつけておいて、斬られた侍の手から大刀をもぎとり、下から迫る二人の侍に構えた。
半蔵の体も顔も、血でべとべとになっている。それに雨が叩いてきて血が洗い落されるそばから、またもふき出してくるのだった。
半蔵の呼吸は荒かった。
じりじりと迫り、詰めよって来る二本の白刃(はくじん)に、半ば、もうろうとなってくる双眸(そうぼう)を懸命に見張りつつ、鳴滝の半蔵は、また闘志をみなぎらせていた。

（「小説倶楽部」昭和三十六年八月号）

盗賊の宿

憎い奴（やつ）

橋羽（はしば）の小五郎は夕焼けの空を見上げながらも、風のように中山道（なかせんどう）を駈（か）けていた。

(畜生め!!　出合ったら、どうするか見ていやがれ!!)

熊谷（くまがや）の宿場も一気に駈けぬけた。

荒川に沿った宿外れの八丁堤まで来て、

「おう。ごめんよ」

道ばたの川守（かわもり）地蔵と向い合っている茶店へ入った。

「いらっしゃいまし」

中年の女房（にょうぼう）が出て来るのへ、

「冷やでいいから茶わんに入れてくんな。そのあとで、何か食いてえ」

小五郎は軒先にぶら下っている〔うんどん〕の掛看板をちらりと見て、

「うどんでいいから熱くしてくれ。それから提灯（ちょうちん）だ。それからろうそくだ」

一気に言いつけてから、

「おかみさん。ひょんなことを訊（き）くんだが、……今日、それも、たぶん、昼すぎごろに、年のころは三十二、三で、顔の――ほれ、この眼（め）じりから頬（ほお）っぺたにかけてと、こっちの顎（あご）から喉（のど）へかけて、ざっくりと傷痕（きずあと）のある、おれのような旅人（たびにん）を見かけなかったかえ?」

茶店の女房の顔色は青くなっていた。

「おかみさん、どうしたんだ?」

女房の眼は、茶店の縁台にかけた小五郎の左腕に吸いつけられていた。

長脇差（ながどす）のつばの下へかけもたせている小五郎の腕は、手首から先が無い。

まだ繃帯（ほうたい）もとれないままだし、傷口も固まりきってはいないのだった。

それでなくとも、茶みじんの袷（あわせ）に包まれた細い小五郎の体からは、むんむんと殺気がほとばしっていた。

切れ長の眼も血走っていたし、重傷の体を気力ひとつで走らせてきている小五郎の顔は不気味な鉛色に沈んでいる。

ちょっと、凄（すご）かった。

橋羽の小五郎は舌うちをして、もう一度、同じことを、今度は調子をゆるめて女房に訊き直した。

「へえ――へえ。たしかに通りました」

「何、やっぱり通ったかい。で、そいつは何時（いつ）ごろ、此処（ここ）を通りゃアがったのだ?」

「八ツ（午後二時）をちょいとまわったころだと思いますだよ。ここへ寄って、わらじをはき替えておいでなせえましたっけが……」

「ようし、わかった!!　さ、たのんだものを早くしてくれ」

「へえ、へえ――」

夕焼けの赤い空は、川の向うの遠い山なみに消えようとしている。茶店の前に桜の木があって、いまやぷっくりと蕾が割れそうになり、それが桔梗色の夕闇の中でかすかにふるえていた。

街道には人影もなかった。

小五郎は、酒をあおり、うどんを搔っこみ、提灯の支度をしてもらうと、勘定をすまし、あわただしく立ち上った。

「あばよ」

夜道をかけてでも、これから約六里先の本庄まで飛ばすつもりの小五郎が、見る見る堤の道を遠去かって夕闇にとけこんでしまうのを、茶店の夫婦は口をあけて見送っていた。

「博打うちの足は速いなあ」と、茶店の亭主が言った。

「速いにもなんにも、今の人は特別だ」

「何か、あったんかなあ?」

「どうで、喧嘩のいざこざだろうよ。こっちの腕が、手首のとこからなかったによウ。いやだねえ、あの連中はよウ……」

たしかに喧嘩が原因だった。

十日ほど前に、この熊谷から百里余もはなれた東海道・岡崎の城下から南へ六里ほど切れこんだ三州・西尾で土地の親分、西尾の兵吉と、平坂の番蔵の縄張り争いがもとで大喧嘩が始まり、番蔵方にわらじをぬいでいた橋羽の小五郎はもちろん助人に出た。

双方の喧嘩は矢矧川の河原で行われた。小五郎の手首が斬り飛ばされたのはこのときである。

斬った男は、これも西尾の兵吉方へわらじをぬいでいた手越の平八という旅人だった。

喧嘩は西尾藩・奉行所や町方からの出役でおさまり、牢へ入るものは入れられ、逃げるものは逃げた。

小五郎も、その手越の平八という旅人も、いち早く姿をくらましたわけだが、

(十何度もの喧嘩に、ただの一度もひけをとったことのねえ俺の……)

俺の片方の手首を斬り飛ばした憎い奴を、このままにはしておけないと、小五郎は後を追って来たのだ。

後を追うのには都合がよかった。

斬り合うときには互いに名乗り合ったことはもちろんだが、それよりも、手越の平八の苦みばしった浅黒い顔の、右の半面と左の顎から喉へかけて、二カ所の深い傷痕が平八の足どりをたしかなものにした。

傷の痛みをこらえ、火の玉のようになって、東海道を江戸へ——江戸から中山道へ、小五郎は血まなこで憎い奴を追って来たのである。

(野郎め、江戸へまぎれこんだら、ちょいと見つかりにくいところだったが、まっすぐに中山道へ抜けやがった。ひょっとすると、俺の匂いをかぎつけたのかも知れねえ)

夜半近くに、本庄の宿へ入った。

広木屋という旅籠の戸をたたき、
「遅くなってすまねえが、泊めてくんねえ」
眠そうな眼をこすりながら出てきた女中に、小五郎はわらじをぬぎながら手越の平八のことを訊いた。
「お前、そんな男を見かけなかったかい？」
女中は、見たと言った。
「もう夕暮れに近えころでしたけんどネ、うちの番頭さんが丁度おもてに出ていて、お泊りはいかがさまでというたら、まあ、もうちっと先までと、そんなようなことを言って、笑いながら、さっさと行ってしもうたで……ちょいと良い男でしたけんどネ、何しろ、顔中ひでえ傷あとだもんでネ、はあ――あとで、みんなで、いろいろ噂してたネエ」
「よし。ありがてえ。明日中には追いつけるな」
「何か、あったんで」
「こっちのことだ。もう何もいらねえから、酒を二、三本、たのむぜ」
「へえ」
旅籠の内は、しんかんと静まり返っていた。
黒光りのする階段を二階廊下へ上ったとき、小用にでも起きたらしい旅の男が、廊下のうす暗い掛行燈の向うから、小五郎を見て、ハッと立止った。
小五郎も、ちらりとそっちを見たが、その男は、むろん目ざす手越の平八ではない。

別に気にもかけず、小五郎は案内された部屋へ入った。
「あの、お風呂は？」
と、酒を運んで来た女中が訊くと、小五郎は、
「いらねえ。明日は早だちだ、いまごろ湯へつかったら、体がこんにゃくみてえになっちまうからな。おう、すまなかったな。こいつは少しだが、とっときねえ」
「あれ、まあ、どうも……」
夜更けになっても、いやに生暖い。
傷の手当をしてから酒を一気にのみ、小五郎は床へ倒れた。
煙草が吸いたくなり、思わず左腕をのばしてみて、小五郎は舌打ちをした。まだ手首が残っている。感覚的に残っているのだ。
（野郎!!　こんな目に会わせやがって……）
こっちが斬り込んだ長脇差を叩き落し、相手は真向からするどい一撃を送り込んできたのである。
思わず身をかわしつつ、左腕で顔をかばったのがいけなかった。
小五郎の顔から一尺ほどのところで、ばっさりと手首が落ちてしまったのだ。
（手でかばわねえでも、あの斬りこみはとどかなかった筈だ。俺にも似合わねえ、何てえバカな……）と思い出すと、いてもたってもいられなくなる。口惜しかった。
（畜生め、明日こそは……）

さすがに気は張っていても、無理な道中を押し通してきているので、口惜しさや怒りを眠気が奪った。
どの位たったろう。
小五郎は身のまわりに異常な気配を感じて、ぱっと眼をさました。
行燈は消えていた。
暗闇の中で、数人の男たちが、いきなり小五郎へ襲いかかって来た。
「あ……」
声も出さぬうちに、ぐわーんと一撃、頭を何かで撲りつけられ、橋羽の小五郎は手もなく気を失ってしまっていた。

ふたり重蔵

両手も両足も固く縛られていた。
口には猿ぐつわまでかませられ、橋羽の小五郎は長持みたいな箱に入れられていた。
箱はゆらゆら揺れている。馬の背にのせられているのだ。
数人の男の足音が、ひたひたとまわりを包んでいる。
気がついて見ると、すでにそうなっていたのだ。
(ど、どういうわけなんだ、こいつは……)
手越の平八の仕業ではあるまい。

(俺に恨みをもっていやがる連中は、いくらもあるが……)
それなら、こんな手間はかけない。とっくに小五郎の命は無い筈である。
十六のときからこの渡世に入って十二年。その間に、小五郎は諸方の喧嘩に出て何人もの博徒とわたり合い、何人もの命を手にかけている。博徒渡世のこれが常法なのだから、互いに恨みっこはないわけだが、そうもいかない。
殺した相手には血縁のものもいるし、兄弟分・子分のものもいる。
腕のきいた博徒で、しかも小五郎のようにこれといった親分の身内でもなく、〔さいころ〕と長脇差と、渡世の掟だけをたよりに旅から旅へ流れているものほど、何人もの恨みがつもってくるのである。
げんに小五郎自身が、手首を切落されただけでも、その恨みをはらそうと死もの狂いになっていたのだ。
どこからか馬子唄がきこえている。
長持のふたのわずかな隙間も、上から何かすっぽりとかぶせてあるらしく、何も見えないが、もう陽は高くのぼっているようだった。
ときどき、馬をかこんで歩いている奴らの話声もするが、よく聞きとれない。
愉快そうな笑い声をたてる奴もいた。
(じたばたしても、もうこうなっちゃア、仕方がねえな)と小五郎も、あきらめるより仕方がなかった。言うまでもなく長脇差も奪いとられてしまっているのだ。

夜になった、らしい。

どこの宿場に泊るのか――逃げる機会はそのときだと思っていたが、奴らの通って行く道は街道から逸れて行くらしい。

やがて、小五郎の入った長持は馬の背からおろされた。

「出ろい!!」

ふたをあけられ、地面へ放り出された。

森の中である。

ぱちぱちと焚火が燃えていて、五人の男の姿を小五郎は確認したが、全く見おぼえはない連中のようだ。

「眼隠しをしろ。何をするか知れたものじゃねえからな」

五人のうちの一人が言うと共に、いきなり汗臭い手ぬぐいで目かくしをされてしまった。もとより猿ぐつわも取ってもらえない。

「やい、重蔵。思い知ったかい」

と、誰かが言う。何が思い知ったのか、さっぱりわからないが訊き返すこともできない。

小五郎は身をもがいてうなり声をあげてみたが、それも奴らの笑い声に消し飛ばされてしまった。

「重蔵に飯を喰わせますかい?」

「いや、そんなことはするに及ばねえ。どうで、あと二日の命だ。お頭が自分の手で仕末を

してえというんだからな」

「けれども、信楽の兄い。まったくうめえところで見つけましたねえ」

「この野郎も、よっぽどぼけていやがったのだな。あの本庄の旅籠で、俺が小便に起きて、廊下へ出たそのときだ、こいつが、とんとんと景気よく階段を上ってきやがって、ちらッとおれの顔を見たことは見たんだぜ」

「何しろうす暗がりだし、それにあっしたちはみんな堅気の商人姿だ。重蔵も、うっかり見逃したわけですねえ」

「こいつにも似合わねえ、どじを踏んだもんよなあ」

何が何だかわからないながらも、自分が重蔵という男に間違えられているということは、小五郎にもわかってきた。しかし、何故だ……?

「やい、裏切者の末路がどんなものか、ちっとは身に沁みたか、この大馬鹿野郎め」

信楽の兄いとか呼ばれたやつが、そう声を投げつけてきた。

(裏切者……何だ、そいつは――ともかく、こいつらは、博打うちでもねえ、堅気でもねえ)

と、小五郎はわかってきたが、口にかまされた猿ぐつわは革をなめしたもので、うなり声をあげるだけで、喉がひりひりするほど固く唇の中へ喰い込んでいる。

焚火にかけられた鍋から汁の匂いがたちのぼってきた。

小五郎の腹が悲鳴をあげた。

「おい。もういいだろう。こいつ臭くっていけねえ。長持の中へ放りこんどけ!!」

汚い話だが、下の始末もさせてくれないのである。

ふたたび、小五郎は長持の中へ投げ入れられた。長持は大きくて、体は充分に伸ばすことが出来たが、

(こんな目に会わせやがって、どうするか見ていやがれ!!)と、小五郎は手越の平八への憎悪も忘れて歯を噛みならした。もっとも歯と歯は猿ぐつわで合わすことも出来なかったが、つまりそれほど、激怒が小五郎を狂い死にさせてしまうかと思われるほどだったわけだ。

翌日も、同じことがつづけられた。

その次の日の夕暮れに、この不思議な一行は、目ざす場所へ到着したのである。

長持から連れ出されて見ると、あたりは鬱蒼とした樹林にかこまれ、両側の山肌が切り立って空に突き上がっている。

その、山と山にはさまれた樹林の中に、がっしりとした丸太造りの小屋、と言ってもかなり大きなものが二棟あった。

一棟は右手の山を少しのぼったところにあり、一棟は、ごうごうと音をたてて流れる渓流に沿って建てられている。

山も、よほど深く入ってきたものらしい。

それは、長持の中でゆられていてもわかったが、此処がどの辺にあたるのか、旅馴れた小五郎にもちょっと見当がつきかねた。

長持から出され、橋羽の小五郎は、渓流沿いの一棟のとなりに建てられた物置きのような小屋に突き入れられた。

そのとき、

「何だと、お頭は須川の宿へ出かけたのか? ――ふうん、そうかい。それじゃア重蔵の命も明日までは保ったというわけだな」と、あの信楽の兄いとかいう奴の声を、小五郎は聞いた。

(須川……須川てえと、何処だろう?)

思い出せなかった。

眼かくしはとってくれたが、とっぷりと暮れてしまったらしく物置きの中は、もう真暗である。体中が粉々に千切れてしまいそうに痛かったが、それももう何かしびれてしまって知覚がなくなっていたし、あまりの空腹に、ものを考える力もわいてはこない。

ただ、山深いこのあたりは春もまだ浅いらしく、ひしひしと冷気が小五郎の無惨な体を押し包んだ。

間もなく、橋羽の小五郎は半ば失心状態のうちに、底知れぬ眠りの中に、いや仮死状態の中に落ちこんでいった。

手越の平八

「おい、おい。橋羽の――おい、起きねえか、おい!!」

いきなり顔を張り飛ばされ、小五郎はハッと意識をもどした。
「う……う、う……」
「おれだ。手越の平八だ」
「う、う、うう……」
「怒っちゃアいけねえ。お前を助けに来たんだぜ」
「う、う……」
「起てるか。肩につかまれ、いいか」
ぐいと引き起こされた。
「臭えなあ、小五郎どん」
「う、う……」
「うなるなよ、おい。黙っていろ。奴らに気取られたら元も子もなくなるんだぜ」
顔は見えないが、まぎれもなく手越の平八だ。
(何だっておれは、こいつに助けられなきゃならねえのだ!!)
胸のうちにわめいてみたが、どうにも助けてもらうより他に道はなさそうである。
「いいかえ？　小五郎どん。お前さんが手向いしねえのなら、手足の縄はほどいてやる。けれども、もし、お前さんが、俺につかみかかるようなら、このまま放っておくより仕方がねえ。ここでお前とつかみ合ってるひまもねえし、そんなことをしたら二人ともあいつらに殺されてしまうかも知れねえ。見張りのものは眠らしたがな」

平八は、囁きつづけた。
「わかったかえ？　わかったら、うんと頭を下げて見てくれ」
と、平八は小五郎の顎のあたりに手をかけて、そう言うのだ。
(畜生め)
口惜しかったが仕方がない。小五郎はこっくりとうなずいた。
「ほんとだな。お前さんも橋羽の小五郎さんだ。旅人仲間じゃア顔の売れた、しっかりした渡世人だ。嘘は言うめえなあ」
「う……」と、うなずく。
「よしきた」
きらっと平八の長脇差が闇の中に光ったと思うと、ばらり縄が切れた。切れたが、動けない。小五郎の五体は、まったく知覚を失っていた。
猿ぐつわも平八がほどいてくれた。
「手越の……」
「叱ッ。声をたてちゃアならねえ。さ、しっかりとつかまるんだ。いいか――いいな……」
妙なもので、今の小五郎には全く平八への憎悪が消えてしまっている。気力も体力も萎えきっていたし、それに何よりも、自分をこんな目に会わせた奴らへの怒りの方が先になってしまっている。
戸外は、底も知れない闇だった。

その闇の中に、ぽーっと白い煙のようなものがただよっている。
「あれア、湯けむりだ」と平八が言った。
「おれはな、八年も前に此処へ来たことがあるんだ」
草をわけ、岩につまずきながら、手越の平八の肩にすがって、小五郎はよろよろと歩いた。
「めんどくせえな。おぶさりねえ」
とうとう平八の肩におぶさってしまった。
（橋羽の小五郎も形なしじゃアねえか……）
命びろいをした安心で、またも小五郎は失心してしまった。
気がつくと、焚火が燃えていた。
手越の平八が、鍋に煮えた重湯のようなものをのませてくれた。
「どうだ？　ちっとは元気が出たかい」
「すまねえ」
「なあに……お前さんとは、とんだ縁があったんだなあ。おれを追いかけて来たのかえ？」
「当り前だ」
「どれ、見せて見ろよ――なるほど……左手は、もういけねえなあ」
「いけねえにもなんにも……」
「まあ勘弁してくれ、互いにこの渡世のもんだ。そうだろう」
「う……仕方がねえ。おれも、お前さんに、こうして助けられたんだものな。これで帳消し

だい」
「わかってくれて、有難え」
「ところで、平八どん……おれは、何でこんな目にあったのか、そいつがわからねえ」
「そりゃアおれにもわからねえが……なあ小五郎どん。お前、あの小屋を何だと思う？」
「さあ……」
「盗人宿だぜ」
「え……」
「お前を助け出す前に、おれはそっと奴らが酒を飲んでいる小屋の床下へもぐりこみ、この耳でたしかめたんだ」
平八の顔の傷痕が、ぎゅっと歪んだ。
「八年前には、この山の湯の小屋は、そんなものじゃアなかったんだが……」
「平八どん。お前は、一体全体……」
「ま、聞いてくんねえ。聞いてくれるかえ？」
「き、聞くともよ」
「ちょうど八年前。おれが、そうよ、二十七のときだ。小五郎どんと同じ位の年ごろじゃアねえかな」
「うん……」
「そのとき、俺ア野州の真岡で、小栗一家と竹原一家の喧嘩に巻きこまれ、小栗の伝吉を叩

っ斬って、ここまで逃げて来たんだ」
「話の腰を折ってすまねえ。此処は？」
「この先が三国峠よ。猿ヶ京の番所は、向うの山をのぼればすぐだ。何と太え野郎共じゃねえか。番所の真下に盗人宿をかまえていやがるのだ」
盗人宿については、小五郎も耳にはさんだことがある。
諸国の盗賊たちの連絡場所のことを〔盗人宿〕というのだ。それは、山間の農家であったり、または堂々と宿場に名をつらねる旅籠であることもある。城下町の商家にもそれがあるし、ひどいのは、ちゃんとした寺院の和尚が盗賊の一味だったということもあったそうだ。
盗賊たちが一仕事始める前の連絡とか、または仕事をすましての集合とか、盗んだものを隠しておくとか……つまり、そういう役目を果すわけなのだろう。
「それで、平八どんの話というのは……？」
「うむ……」
手越の平八は、この上州と越後の国境にある山峡の小屋へたどりつくまでに小栗一家の追撃をうけ、相手三人を斬ったが自分も重傷を負ったのだと言う。
しかも、その追手の中に、平八の父親がいたのだ。その老博徒は前砂の甚五郎という男で、東海道・府中の宿場女郎をしていた平八の母親をさんざんしぼりつくし、平八をはらませておいて逃げ出してしまい、二十年ぶりで父子が――それも共に博徒姿で出会ったというのだ。
「肌ぬぎになった俺のこの右腕の刺青を見て、親父もわかったらしい。俺は若気のいたりで、

早死をしたおふくろの名を、腕に彫っていたもんでなあ」
平八父子は、この山の湯にひたって、平八の傷の癒えるのを待った。
「そのころ、あの小屋には市蔵という爺さんと、めくらの……めくらの若い女がいた。二人きりなあ……」
平八の声が沈んだ。
傷も癒り、いよいよ明日は越後へ抜けようという日の夕暮れに、平八は渓流の中に突き出している浴舎で、そのめくらの娘おときを犯してしまったのだと言う。
「若えとは言いながら俺も、むごいことをしてしまったもんだ。そのおときって娘はみなし子でな、沼田の御家中の何とかいう侍のところへ下女奉公に上って、そこの若え足軽と良い仲になった。ところが、その足軽の人がなあ、主人の御供で、殿様が大坂から借り出した御用金を守って沼田へ帰る途中、これがお前、十人もの泥棒に、その御用金を奪いとられ、しかも、主人もろともばっさり殺られちまったというわけよ」
「ふうん……」
「がっかりしたのと、もともと丈夫ではなかったのと、いろいろあったんだろうが、そのあとで、おときさんは目が見えなくなり、死んだ父親の古い友達で、そのころ、この湯の小屋の番人をしていた市蔵爺つぁんに引きとられたというわけでね」
「ふうん……」
「この八年の間、俺は三度、金を送りとどけてきたもんだが、むろん、ちゃんと届いている

と思っていたんだ」

「なるほど……」

「とにかく、その娘にひでえ目をさせたことを俺ア、つくづく悔んでいる。俺が、あのめくらのおときさんを押えつけたとき……」

「平八どんも、思いのほか気が小せえな」

「小五郎どん。俺のおふくろもめくらだったんだ、死ぬ少し前にはよ」

「……そうかい……」

「お前さんのおふくろさんは？」

「知らねえ」

「おやじさんは？」

「知らねえ。俺ア捨て子だものな」

「……そうかえ……」

二人とも、黙って、焚火の火の色を見つめたままだった。

激しい共感が、それぞれの胸の中を渦巻き、通い合っていた。

「それで、平八どんのおとっつあんは？」

「もういねえ。死んじまったよ」

「お互えに、いい星の下には生れてねえのだなあ、平八どん」

「だから、こんな渡世に足を踏みこみ、今じゃア抜きも差しも出来やアしねえ」

「どんな奴が何時どこで、こっちの命を狙っているか知れやアしねえし……」

「身柄を受合ってくれる親類兄弟も居やアしねえ」

「文字も読めなけりゃア後ろだてもねえ」

「世の中へ出て堅気になりたくとも、世の中がならせてくれめえよ」

「ぐれたらもう足は抜けねえからなあ」

「俺も、もう三十五だ。旅の空で死んだ親父みてえに、いつどこで、死ぬか知れたものじゃアねえよ、小五郎どん」

「いや、俺だって手前の死にざまを考えねえ日はねえよ」

二人とも眼を見合い、淋しく笑い合った。

「ときに、此処は……？」

「心配はいらねえ、あの小屋から大分離れている。すぐ下が谷川だ。赤間川って言うのだがね」

「ふうん……」

「この先の山道をどんどん上って行けば、猿ヶ京の番所を通らずに三国峠へ出られる。峠から向うは、もう越後よ」

「ときに、どうする？　平八どん」

「そいつを俺も、先刻から考えてるんだ」

「猿ヶ京の番所へ届け出ようか」

「馬鹿言っちゃアいけねえ。そんなことをして見ねえ、兇状旅がつもりつもっている俺たちだ。いっぺんにお縄がかかるぜ」
「そりゃアそうだが……このままにはしておけめえ。お前さんは何よりも、その、おときさんとかいう女の身の上が知りてえのだろう?」
「その通りだ。心配でならねえ。あいつらの来る前に何処かへ行ってしまっているのならいいのだが……さっき、床下にもぐっているとき、何でも、おときがどうしたとかこうしたとか、あいつらが言っている声が聞こえたもんでなあ」
「と言って、朝までは待てねえぜ。俺の張番をしていた野郎をお前さん眠らしたのだろう?」
「うむ……」
「朝になったら俺もいねえ、張番もいねえというので大騒ぎになる。野郎どもは何人位いるのだろう?」
「十人とは下るめえよ。何でも明日になると、奴らの親分が帰って来るらしい」
「それにしても……」
と、橋羽の小五郎は自分が盗賊どもに捕えられたいきさつを平八に語った。
平八も、床下でおよそのことは聞きとったらしく、
「全くおぼえのねえことなのかえ、小五郎どん」
「あるにもねえにも、野郎共を裏切ったという重蔵とかいう奴の名前さえも聞いたことがね

え」
手越の平八は、三国街道の相俣の村外れで、下の山道を通って行く盗賊たちを見つけたらしい。馬の背に大きな荷物をのせて、その一行はたちまちに赤間川の川辺りの木立の中へ消えてしまったが、平八は街道から切れこみ、唐沢山と稲包山にはさまれた山道をたどるうちに、ふいと十間ほど先の木立から先刻の一行があらわれたので、
(おや……?)
このあたりの木樵たちが、たまに谷川から湧く温泉へつかりに来るだけの、誰にも知られぬ谷底の湯小屋なのである。
可笑しいなと思ううちに、盗賊たちも安心したのだろう。
「猿ヶ京の番所の役人も、まさか目の下の谷底に、盗人宿があるとは考えて見たこともあるめえよ」という声が耳に入った。
それから気をひきしめ、見えがくれに後をつけて、小五郎が長持から引き出されるのを見とどけたのだという。
「いま、お前さんに食べさせた重湯の米も鍋も、みんなあの小屋からそっと持ち出して来たんだ」
と、平八は笑った。
「よし!!」と、小五郎は言った。
「平八どん。ぐずぐずしていても始るめえ。ともかく引返して様子を見よう。場合によった

ら、何、十人やそこらは二人で叩っ斬って……」
「お前、体が動くかえ？」
「む……」
　さすがに自信がなかった。

そっくり

その翌日——。
橋羽(はしば)の小五郎は、三国峠への山道を南に分け入った樹林の中にある無人の炭焼き小屋に隠れていた。
　体も谷川の水で洗ったし、茶みじんの袷(あわせ)も洗って外にほしてある。
　夕方になると、手越(てごし)の平八が戻(もど)って来た。
「小五郎どん。少しは元気が出たかい？」
「もう大丈夫だ。それよりも、やつらはどうしている？」
「この山道をまわって半里(はんみち)も行くと、丁度、あの小屋のまん前の山へ出る。木の蔭(かげ)から谷川の向うの小屋の様子を見ていると、いやはや大騒ぎよ」
「そうだろうとも。俺(おれ)を助け出した上、見張り番を殺(や)っつけ、その上に鍋やら米まで物置きから引っさらってきたお前さんだものなあ」
「野郎どもは出たり入ったり、昼前には五人ばかり俺達二人を追って何処かへ行ったようだぜ」

「ところで、その……その、めくらの娘さんは？」
「わからねえ」
平八は哀(かな)しげに首を振ったが、今度は急に眼を光らせ、
「やるなら今夜だ。小屋に残っているものは四人か、五人——もしも、おときさんが奴(やつ)らにひでえ目にあわされているようなら……」
「平八どん。俺も手伝うぜ」
「いや、いけねえ。これは俺ひとりのことだ」
「冗談言っちゃアいけねえ。俺があいつらからどんな目にあわされたか……」
　小五郎は憤然として、
「こうなったら一人残らず叩っ斬らなけりゃア、気がおさまらねえ」
「叱(し)ッ」
　平八の手が、いきなり小五郎の口を押えた。
「……？」
「誰か来るぜ……」と、平八は低くささやいた。
　耳をすますと、去年の落葉がくさりきって土の上につもった炭焼小屋の前の小道の彼方(かなた)から、カサ、カサと、たしかに人の足音が近寄って来るのだ。
「平八どん……」

「よし。俺が見て来る」
平八は夕闇(ゆうやみ)の中に姿を消した。
けたたましく、何処かで山鳥が鳴いた。
小五郎は焚火の炎に、そっと土をかけた。
(や……? 帰(け)えって来たな)
手越の平八は、まっ青な顔をして、一人の男を横抱きに小屋へ戻って来た。
「あいつらかい?」
「それが、わからねえ……」と、平八は、失心しているその男を投げ出し、うめくように言った。
「小五郎どん、こいつの顔を、とっくりと見てみねえよ」
「何……」
その男の顔を見た橋羽の小五郎は、声も出なかった。眼をまるくして、ぽかんと平八を見返り、
「こいつは、俺だ」
「小五郎どんに生きうつしだ」
着ているものは、いかにもこのあたりの猟師か炭焼きの風体だが、切長の眼も、ふとい鼻も、引きしまった唇(くちびる)のかたちも、それは小五郎そのままなのである。
「お前、兄弟はねえのか……?」

「ねえ、だろうと思う。だって俺は、捨子だ。裸のまんま、東海道は橋羽の村外れに捨てられていただけよ」
「そうか……おい、小五郎どん。もしや——この男が、お前が奴らに間違えられた、その重蔵という男じゃねえかな」
「あ……」
「そうだとしたら、こいつは、あの泥棒どもの裏切りものというわけだろう?」
「そうだ。そう言っていたものな」
平八は小屋を出て、すぐに山道の脇の杉(すぎ)の木蔭にひそみ、近寄って来るこの男の頭を撲(なぐ)りつけ、男が倒れるその顔を見たときには、さすがにぎょっとしたらしい。
「おどろかせやがったよ、こいつは——」と、平八は男の背中をのばして、膝(ひざ)がしらで活を入れる。馴(な)れたものだ。
「う、うう……」
男はうすく目をあけたが、ハッとなり、平八を突き飛ばして逃げようとした。
「野郎!!」
小五郎が飛びかかって突き戻した。その顔を見て、男も立ちすくんだ。
「あ……」
「野郎。手前は、俺とそっくりの面(つら)をしているな。おどろいたか、畜生め」
「お前さんは……」

男の声は喉にからまったが、
「もしや……小五郎さんと、言わないか？」
「何イ？」
小五郎もびっくりして、平八と顔を見合せた。
「小五郎さん――小五郎さんだね、お前さんは――」
「そうよ」
「兄さん……」

三人鴉

その男は、やはり奴らの一味の裏切り者、重蔵だった。
「おれも浜松へ捨てられ、浜松の旅籠、なべ屋三郎兵衛という人に拾われ、十六のときまで、その旅籠で働いていた」と、重蔵は語った。
なべ屋方でも重蔵を親切に扱ってくれたが、或年の冬に、なべ屋へ泊った旅商人が腹痛を起こし、数日の滞在を余儀なくされたそのとき、まめまめしく看病をしてくれた重蔵から身の上話を聞き、
「こりゃア、おどろいた。私は、お前さんのおふくろさんに出会ったよ」と言ったそうである。
その旅商人は五年前に、越後国・新発田の城下にある旅籠屋〔山口屋〕の中年の女中から

身の上話をきいたのだという。
「私は、もと遠州・浜松の近くの増楽村の庄屋の家に奉公しておりましたが、そこの、下男の……」と、その女中は語った。
下男の弥助という男が出来、子をはらんだ。そのことを知って、いち早く弥助は、きびしい主人の目をおそれて村を逃げ出してしまい、女おこうは、主人にうちあける勇気もなく、一日のばしにしているうちに、誰の目が見ても、体の異常に気がつくほどになってきた。たまりかねて、おこうは逃げた。そして岡部の宿の飯盛女となり、子を生み落したのである。
双生児だった。
そのときの、おこうの身としてはどうにもならない。朋輩の女たちにけしかけられ、生れて間もない子を、一人は浜松の〔なべ屋〕の門口に、一人は橋羽村の知命寺という寺の門前に捨て、そのまま、ふらふらと江戸へ出て――それから、ずいぶん辛い目をしてきたらしい。
「そのあとのことは、もう何も訊いてはくれるなと言っていたが、せめて、子供の名前だけはと思い、一人の子には死んだ兄の名を、一人の子には父の名をつけて、それを紙きれに書き、捨てた子の体につけておいたと、おこうさんは言っていたがね。お前さんの名が重蔵さんなら間違えはねえ。もう一人は、小五郎さんとか言うそうだよ」
旅の老商人は、そう重蔵に語ってくれた。
「ふーむ……」
橋羽の小五郎もうなり声をあげずにはいられなかった。ぴしゃりと話があっている。小五

郎という名札をつけられ、知命寺門前に捨てられていた自分を拾ってくれたのは橋羽村の農夫・伊兵衛だった。

伊兵衛はやもめで、小五郎が五つのときに急死をした。今でいう脳溢血である。

それからの小五郎は、もちろん伊兵衛の親類からも爪はじきにされ、両国の見世物に売られ、それから後は、親も家もない若い男がたどる道を、ぐれて曲ってたどって来たということになる。

「親どもが勝手なまねをして生んでくれた俺達は、みんな同ンなじ、こうなってしまうものなのか……」と、手越の平八は嘆いた。

小五郎は夢を見ているような気持だったが、

「それで、その、おふくろは……？」

「その旅商人から話を聞き、おれは矢もタテもたまらず、なべ屋の主人にわけを話し、三両もらって越後へ駈けつけて行ったもんです」と、重蔵は言った。

新発田には、すでにおこうという女の姿はなかった。

山口屋では「何でも米沢の方へ行くとか言って、この夏に暇をとって行った」と重蔵に言い、あとはわからないと冷たく答えるのみである。

越後から奥州へ——重蔵は探しに探したが、もうどうにもならなくなり（金もなく頼る人もなかったのだ）切羽つまって、会津若松から一里半ほど離れた高久の大川橋で、旅びとを襲い、その財布を奪いとって逃げた。

あとは転落の一途をたどるばかりで……。

「おれが、あいつらの仲間になったのは三年前のことだ」

重蔵は顔を伏せた。

「あいつらは、どこの泥棒なんだ」と、小五郎。

「へえ。越後・綱木の近くに住んでいる角嶋の定右衛門という大泥棒です。越後から上州。もっと飛んで加賀や東海道筋まで、二十人も手下を使って、大がかりな仕事をやっているんだよ、兄さん」

「兄さん兄さんと馴れ馴れしく言うねえ。俺ア、泥棒の弟なんか、持ちたかアねえや」

と小五郎も、しどろもどろで、

「おい、平八どん。俺アもう、何が何だか、さっぱりわからなくなっちまったよ」と、まるで泣きたそうな声をあげる。

すでに夜の闇が下りていた。

焚火を燃やしつつ、黙って耳をかたむけていた手越の平八は、

「ま、いいやな——それよりも重蔵どん。お前さんは、何で仲間を裏切りなすったんだ？」

「へえ……」

重蔵は眼を赤くして、まだ昂奮に体をふるわせながら、

「あっし共が、あの小屋に押し込み、湯番の爺さんを殺し、あそこを盗人宿にしてしまったのは、一年ほど前のことで……」

「何!!　市蔵爺さんは殺されたのか……」
「親分の定右衛門がやりました。むごいこって――」と重蔵は眼を伏せる。
「で……おい、重蔵どん。もう、ひとり、めくらの女がいたろう?」
「え……?　お前さん、よく御存知で」
「何をぬかしゃアがる……」と小五郎が口をはさむのを、平八は「お前さんは黙ってろ!!」
と、きびしく制した。
「それで……その、めくらの女は?」
「へえ……それが、気の毒な身の上でしてね」
重蔵は、口ごもった。
「話せ!!　おい、兄の俺が話せと言ってるんだぞ!!」
小五郎は凄んでみせた。
「話しますよ、兄さん……」
「お前、いやに人馴つこいところがあるんだな。やたらに兄さん呼ばわりをしゃアがる。片腹痛えよ」
「すまねえ、兄さん……」
重蔵も小五郎の気性とよく似ているらしい。
不幸な生い立ちにしては、手越の平八にただよっている哀しさよりも、がむしゃらな、さっぱりとした肯定感を自分の運命に持っているようだった。

「私は、一年前から、湯番に化けて、あの小屋に、そのめくらの女を見張りながら盗人宿の番人をしていたんだ」
「女だけ、なぜ生かしておいたのだえ」と、平八。
「女――おときさんは、親分が手をつけてね」
「何だと!!」
平八の顔色が、さっと変った。
「ひでえことをしやがると思いましたよ、おれも……それ以来、おれは親分の野郎が大きらいになっちまってね。何しろ平八さん。目の見えねえおときさんを無理無体に……」
「もういい、わかった……」
手越の平八は、がっくりとうなだれた。
小五郎も黙っている。
「おれが、見張って暮したこの一年に、女は何度も死にかけました。川へ飛びこもうとしたりしてね」
「………」
「だが、どうしても死なれねえと言うんです。会わなきゃアならねえ人がある。その人は、きっと何時か、此処を訪ねて来てくれるに違いない……その人にお礼を言ってから死にてえと、そうおときさんは言うんです」と重蔵は、ひたと平八の顔を見据えた。
「あっしにも、だんだんわかってきた。お前さんが、その人なんですね」

「…………」

「そうか。そうだったのか――あっしはねえ、平八さん。この一年の間に、三度ばかり親分がやって来て、めくらの、体も弱えおときさんをなぶりものにするたびに、だんだんとこう、この身うちの血がさわいできて、もう、どうにもならなくなっちまったんだ。それで、おときさんを連れて逃げようとしたんですよ。ところが間一髪のところで見つかっちゃった。あの女の眼があいていれば、うまく行ったかも知れねえんだがね……何あっしは、みじんも、あの女にア変な気持はもっていねえ――ただ、ただあの女が一目会いてえという男に、会わせてやりてえと思っただけなんで……」

「出かした!!」

橋羽の小五郎は、重蔵の肩を叩いた。

「やっつけよう!! こうなったら迷うことはねえ」

「兄さんと平八さんが助けてくれるなら、おれもやりますぜ!!」

「よし。平八どん。おれも、弟も命はいらねえ、お前にやるぜ」

手越の平八は、涙にうるんだ目を二人に向け「すまねえ」と言った。

決闘

突きせまった両側の山と山の間から、星空がのぞいていた。

重蔵が、いきなり小屋の戸を叩きこわして中へ入って来たのを見ると、盗賊どもは、あっ

けにとられた。

「やい!! 何をきょときょとしていやがるのだい。裏切者の俺が戻って来たんだ。何とかしたらいいじゃねえか」と重蔵はいきまいた。

炉端の向うで、親分の角嶋の定右衛門が、でっぷりとした体をゆすり、

「重蔵。てめえ、一たん捕まって、よく逃げられたのう」と笑った。

定右衛門は夕刻に、須川の女郎宿から戻って来たらしい。

盗賊どもが、あくまでも小五郎と重蔵を同一人と見て、しかも手越の平八の存在を知らないらしいのは好都合だったが、

(定右衛門の野郎、帰って来ていたのか……)

逃げた重蔵――いや小五郎を追って今朝のうちに出て行った五人のかわりに、定右衛門の供をして行った四人が帰って来たので、盗賊どもの人数が元の十人になったわけである。

彼等は、久しぶりに近江の豪家へ目をつけて稼ぎに出かけるために集まったのだ。

(まあ、仕方がねえ)と、重蔵は覚悟を決め、

「やい。これでもくらえ!!」

いきなり、手にもった松明を定右衛門めがけて投げつけたものである。

「何をしやがる!!」

わざわざ殺されに来る馬鹿もねえものだと、重蔵を呆気にとられて見つめていた盗賊たちは、わめき声をあげ、いっせいに重蔵の体へ飛びかかった。

「しゃらくせえ!!」
重蔵は一人を突き飛ばし、脇差(どす)をふりかざして、
「表へ出て来い!!」と叫ぶなり、鼠(ねずみ)のように戸外へ飛び出し、一散に逃げはじめた。
「野郎、待て!!」
ばらばらっと追って行く六人ほどの盗賊の後から、残りの三人も飛び出して行こうとするのへ、定右衛門は、
「あの野郎、何を仕出かすか知れたものじゃねえ。おときの女(あま)を此処へ引っ張り出してこい」と命じた。
「へい」と、二人が裏部屋へ駈けて行く。
そのとき、橋羽の小五郎と手越(てごし)の平八が闇(やみ)の中から躍り込んで来た。
「や!! 重蔵――」
思わず叫んだ定右衛門へ、
「野郎!!」
小五郎は、棍棒(こんぼう)をふるって突進した。
定右衛門の傍(そば)にいた乾分(こぶん)の一人が、わめきながら長脇差を抜きかけるのへ、
「む……」
平八が低い気合と共に殺到した。
手越の平八の長脇差がきらりと光った。

「わあッ!!」
そいつが血しぶきをあげて倒れる。裏部屋へ入りかけた二人が叫び声をあげて刀を抜く。
「小五郎どん!!」
平八は、斬(き)った奴(やつ)が振り放した刀をとって、炉端ごしに小五郎へ放(ほう)ってよこした。
大力の定右衛門に突き飛ばされた小五郎が右手にぱッとその刀の柄(つか)をつかみとめたのは、小さいころに両国の見世物に売られ、曲芸の一手二手は身にしみついているからだろう。
「有難(ありがて)え!!」
びゅっと一振りして長脇差を右手一本にかまえると、
「さあ、こいつら。片っぱしから――」
小五郎の体は矢のように定右衛門のふところへ吸いこまれて行った。
「ぎゃあッ!!」
「こん畜生め!!」
「野郎!!」
「わあッ!!」
五人の影が、炉に燃える炎のゆらめきの中を飛び違い、すぐに、しいんとした。
小五郎も平八も手傷ひとつ受けてはいなかった。
「平八どん!! 早く、女を……」

「おう」

平八が裏部屋へ飛び込んだ。

小五郎は戸外へ出て、あたりに目をくばった。

(弟の野郎、うまく逃げてくれたかな……?)

山肌に吸いこまれている小道には人影もなかった。

「小五郎どん!!　いた、いたぜ!!」

「そうか」

振り向くと、手越の平八が、痩せおとろえた二十四、五の女の軀を抱きあげて裏部屋から出て来たところだった。

「それが、おときさんかい」

「うむ」

おときが泣き出した。

「よし。平八どん。俺ア弟の奴が心配だ。これから、見て来る」

そう言いかけて、小五郎は、

「や。あいつら、戻って来やがったぜ」

「そうか」

平八は戸外へ出てから、戸をたて、

「おときさん。中から心張棒をかっておくんだぜ!!」と叫んだ。

ひたひたと、山道を駈け戻って来る乾分たちの足音を耳にしながら、小五郎と平八は、小屋の横手の木蔭へ、道をはさんで身を隠した。

「親分!!」

叫びながら戸口へ近寄った一人へ、小五郎が躍りかかった。

「あッ!!」

手越の平八も飛び出し、猛然と刀をふるった。

一人――二人……三人……。

またたく間に盗賊どもは倒れた。

血が飛び、長脇差がぶつかり合い、怒声と絶叫が狭い小道いっぱいにふりまかれた。

勝負馴れのした小五郎と平八の奇襲だけに、盗賊どもは、六人が六人とも、あッという間に小道の草むらや、渓流の中へ倒れ込んでしまった。

「やったなあ……」

「やった……」

荒い呼吸を吐き、小五郎と平八は顔を見合せた。

「弟の野郎――うまく逃げたらしいや」

翌朝になって、おときを背負った手越の平八と橋羽の小五郎は、赤間川に沿った細い小道を右へ切れ込み、左の山の向う側二里ほど離れた猿ヶ京の関所から遠去かりつつ、逃げにか

かっていた。
「わたしは、もう、平八さんにお目にかかれる躯じゃないんです——でも、一目だけ会って、お礼を言いたかった……」
と、おときは言った。
旅の空から平八が送ってよこしていた金は五十両近くもあり、湯番の市蔵爺さんと二人で、何時かは平八が姿を見せるだろうと望みをつないで生きてきたのだと、おときは語った。
あの小屋が盗賊どもの手に落ちてからは、おときは一歩も戸外へ出ることは出来なくなった。
「何度、死のうとしたか知れやしません……でも、そのたびに、重蔵さんにとめられて——」
おときが、はじめは愛情も何も感じてはいなかった手越の平八を心待ちにするようになった理由は何か……。
（わかるような気もするなあ……何しろ、女にとっちゃア、ことに、おときさんみてえな芯の強い女にとっちゃア初めての男は忘れられねえもんだ。それに、平八どんという男なら尚更のこった）おときの心は、旅の空から送りとどけてくる平八の金と共にとけたのだろう。
金の中にこもる平八の後悔の念にとけたのだろう。
「おい……」
おときを背負っていた平八が、小五郎の袖をひいた。
「あれを見ろよ、小五郎どん……」

朝の陽が、ようやく山肌を越え、谷川の水へまっすぐに落ちかかってきていた。
若葉の芽を吹き出しかけた樹林は生々しく匂っていた。
「あ……」
橋羽の小五郎は、つんのめりそうになって小道から谷川へ飛び込んだ。
川の岩と岩の間にはさまれ、重蔵の死体が——その顔が灰のように白く水泡の中に浮いて見えたのだ。
「どうしたんです？　何か——何かあったんですか!!」
おときが、平八の背中から叫んだ。
「いいや、何でもねえよ」
小五郎は、弟の死体を見つめながら答えた。
「小五郎どん」
「平八どん。先へ行ってくんねえ」
「そうか……」
「まだ五人位は、俺を——いや、重蔵を追って出ているやつらが、このへんをうろついていやがるに違えねえ。須川の宿へついていたら、おときさんをうまく、あいつらの眼から見てもわからねえようにしなくちゃアいけねえ」
「うむ……」
「俺ア、後から行く」

「すまねえ……」
手越の平八は、片手で小五郎を拝んだ。
「よせよ、平八どん——お前も、おときさんというものが出来たんだ。うまく、足を洗えるといいがねえ」
「うむ……お前さんは、どうする?」
「どうするもこうするも、行先はわからねえのが渡世人の常法じゃねえか。さ、早く行きねえ。気をつけてな」
「うむ……」
平八とおときが木の間の中へ消えてから、小五郎は重蔵の死体を引きずりあげ、山道から逸れた林の中へ埋めてやった。
「仇は討ってやったぜ——だがなあ……お前も俺も、一つ腹に生れた兄弟ながら、何とつまらねえ出合いをしたもんだ。おまけに、他人のために命まで捨ててしまってよ。それでも、お前よかったのかえ? ……よかったんだろうなあ……」
一人になった小五郎は、大胆に赤間川をわたって三国街道へ出た。相俣の村をすぎて、崖っぷちの道を歩いて行くうちに、小五郎は背後に只ならぬ気配を感じ、振り向いた。
と……。農家の軒先へ、ぱッと身をひそませた男たちが、三、四人ほど目に入った。
(あいつらだ!!)
昨日の朝——逃げた重蔵を、いや小五郎を追って、このあたりを探しまわっていた盗賊ど

もに違いなかった。
(さあ、いくらでもやって来いよ。待っているからなあ)
笠の中で、橋羽の小五郎は冷んやりと笑った。
繃帯をした左腕をふところに入れ、右手の指先で長脇差の柄にちょいとふれてみてから、小五郎は、ゆっくりと歩きはじめた。その後ろから、盗賊どもがおよそ十五間ほどの距離をおいて、じりじりとつけてきている。
(うまく行ったなあ。これで、平八どんも安心だ)
相手は六人だが、負けるとは思っていない。
もし負けて、ずたずたに斬りさいなまれても、それで、平八とおときは安全圏内に入るわけだった。
手越の平八の存在は、盗賊どもの知るところではない。
(おい、弟の重蔵よウ。俺も、もしかすると、すぐにお前のところへ追いつくかも知れねえぜ)
曲りくねった街道を、赤間川の流れに近寄り、川にかかった三間ほどの橋のたもとまで来たとき、後を振向いて叫んだ。
「おーい、てめえ達!! この辺でやらかそうぜ」
橋羽の小五郎は笠をはねて河原へ降り、ゆっくりと長脇差を抜き放ち、近寄って来る六人の盗賊を待ちかまえた。

(「小説倶楽部」昭和三十七年五月号)

白い密使

六人の盗賊

森蔭から現れた男は、五人であった。

浪人風のが三人と土民風のが二人——いずれも笠を真深にかぶっているので顔は見えないが、そのうちの一人は、どうやら少年らしい。

河内と大和の国境にある暗峠付近の、鬱蒼たる樹林と樹林の切れ目にある小さな草原に出て来た五人の男達は、しばらくの間、あたりを見廻し、囁き合っていたが、浪人風の一人が、手を振って合図をすると、少年の方ではない土民風の男が心得てうなずき、懐から小さな竹笛を出して、鋭く吹き鳴らした。

そして、五人の男達は、樹林の入口に一かたまりになって、じいっと息を殺し、あたりをうかがっている。

すると、草原を間にはさんだ彼方の樹林から、影のように一人の男が出て来た。

がっしりと躰も大きく、背も高い、托鉢僧であった。

「おう、お頭——みんなも、早かったな」

と、托鉢僧が言った。五十に近い年齢なのだろうが、眉も髭も濃い、僧衣よりも鎧の方が似合いそうに思われる托鉢僧なのだ。

僧が近づくと、五人の男達は、それぞれに笠をとった。

彼等は、いずれも盗賊の一味であった。

元和元年の初夏の或る日の午後のことで、この山中から河内平野の彼方三里ほどにある大坂では、大坂城に立籠る豊臣軍と、これを攻略しようとする徳川軍とが、今にも爆発しそうな戦機をはらみ、きびしく対峙している。

このあたりは、大坂軍の前線から余り遠くはないが、この山——つまり生駒の山脈を東へ越え、大和の国へ出れば、其処は徳川軍の手によって固められているという、いわば両軍の微妙な接触地帯なのである。

山鳥の声が、あたりに満ちていた。

青葉が陽に輝き、草原の一角にある二本ほどの朴の木が、白い花をひらいている。

「せの村の庄屋の屋敷。獲物はありそうだったか?」

こう訊いたのは、先程、合図の笛を吹けと命じた男である。

この男が、主領の伊丹十兵衛であった。

十兵衛も托鉢僧の玄良と同年配に見える。

しかし、豪傑風の玄良の風貌とは違い、十兵衛は瘦せていて、眼が細く、太い鼻をもった、いかにも精悍な面がまえをしている。

瘦せてはいても狼の体軀を持つ弾力を感じさせる十兵衛の肉体であった。

「獲物は……?」

ニヤニヤしている玄良に、また十兵衛が訊いた。坊主くずれの玄良は大きくうなずき、

「うむ。金もあり、銀もある。女もあると見てとった!!」
と言う。
仲間の盗賊達の眼はギラギラと光り、口ぐちに、よろこびの声をあげる。
「静かにせい!!」
十兵衛が一同を叱り、
「玄良坊主。それで……?」
「わしはな、この通りの托鉢坊主に化けて、その庄屋の屋敷へ行ったよ。ふふん——寄進の金を貰った上に、昼飯まで馳走になってなあ。屋敷の間取りも、およそわかった」
玄良は懐中から庄屋の屋敷の見取図を出して十兵衛に渡し、尚もつづける。
「今夜押入られるとも知らず、わしを親切にもてなしてくれてなあ。これで、わしも人相はおだやかだでな」
玄良は数珠を出して、まさぐりつつ、いたずらっぽく片眼をつぶって見せた。
仲間の男達は苦笑した。
その中で、さも可笑しそうに吹き出した土民風の男は、足軽くずれの彦蔵であった。
ずんぐりした躰つきの、まだ若い彦蔵はニチャニチャと鼻に浮いた脂を指でこすりながら、
「その数珠を持った手で、此間はよ、難波村の庄屋へ押しこんだとき、隠居の婆あをしめ殺したっけよ。あのときの和尚さんの顔は、まるで鬼だったぜ」
「ふふん!! 鬼も仏も紙一重だでな」

と、玄良はうそぶいた。
見取図を見ていた十兵衛が顔を上げて言った。
「よし!! 予定通りに、今夜押込むぞ」
彦蔵が、好色そうな眼を光らせ、
「和尚。女、女がいたとな。若いのがいたか?」
「若いのも年寄りもな」と、玄良。
「しめた!! 久しぶりでありつけるぞ」
「黙れ!! 彦蔵。此頃はな、明日にも戦さが始まろうとて、何処の陣所も警固がきびしいのだぞ。女に手出しする暇はない。仕事が終り次第、すぐに引揚げるのだ。よいな。わかったか!!」
十兵衛に叱られた彦蔵は、しゃぶっていた飴をとりあげられてしまった子供のように頬をふくらませる。
「全く、この前のときも危なかったでな」
と玄良は声をひそめ、
「徳川の間者も大分、大坂に入りこんでいるので、尚さらに大坂方の見張りが、きびしいのだ」
彦蔵は、十兵衛に叱りつけられたこともすぐに忘れて相槌をうった。
「全くなあ。この前は鉄砲ブチかけられて冷や冷やした。獲物を乗せた馬がよ。びっくりし

くさって暴れ出し、俺も、ほとほと弱ったっけよ」

やや離れてしゃがみ込み、十兵衛の一挙一動を見守っていた鞍掛甚五郎が、立ち上って、陰気な声で、

「だが、この半年の間、よく俺達も稼いだものだ。丹波の赤郷へ運んだ獲物だけでも大したものだからなあ。お頭。分け前は、きちんとしてもらいたいな」

甚五郎は、分け前を首領の十兵衛にごまかされるような気がしてならないらしい。疑い深い性格だと見える。この男も十兵衛と同じ浪人くずれだ。

いや、もう一人、浪人くずれの佐々木源八がいる。

額がてらてらと禿げ上った中年男で、せむしのように首が肩にめりこんでいる。源八は、少年の牛之助の傍を、さっきから少しも離れようとはしない。

まだ前髪をつけている牛之助は、少年ながら骨格がたくましい。

それでいて初夏の陽にも灼けずに、顔から腕、足までが女のように肌目こまやかに白いのである。

その肌の白さに血がのぼると桃色になる。

男色好みの佐々木源八は、何時でも嫌がる牛之助を追い廻しているのだ。十兵衛と甚五郎は短い袴をつけているのだが、源八は汚れくさった小袖の裾を端折り、素足に藁草履という姿であった。

盗賊達が車座になって、今夜の手筈をととのえはじめた頃――この樹林の下の崖道を這う

ようにして登って来る二人の男がある。

二人とも鼠色の布を頭から頬にたらし、その上に笠をかぶっている。

土民らしい。

そして、怪我でもしているらしい男の腕を肩にかけ、満身汗みずくになって喘ぎつつ、必死に山道をのぼっているのは、牛之助と同じ年頃の少年なのである。

少年に助けられ、よろめきつつ、これも懸命に足を運んでいる男の脇腹から背にかけて、べっとりと血が滲み出している。

この二人が、ようやく樹林に分け入って、盗賊達が押込みの相談をしている草原に出たとき、盗賊達の姿はなかった。

「う、う、う……」

彼等は、何かわけがあるらしい二人の土民が近づく前に早くもこれを知り、コソリとの音もたてず、栗鼠のような素ばしっこさで、反対側の樹林に潜み隠れてしまったのだ。

草原に出た男は、少年の肩から崩れ落ちるように倒れ、夏草の中に顔を突込んでしまった。

「す、菅井様!! しっかりなされて……」

少年はすがりついて介抱にかかる。

樹林の中に潜み、じっとこちらを見詰めている六人の眼を、少年も、それから重傷の男も、全く気づかなかったようである。

竹筒の中

いうところの「大坂冬の陣」は、大坂方の強烈な抵抗に会い、自軍の出血をおそれた徳川家康が申し出た和議によって休戦状態となった。

それは去年（慶長十九年）十二月二十日のことである。その後、家康は——城の総構えの濠を埋めるという和睦の条件の一つを、たちまちに実行し、またたく間に三の丸の濠ばかりか、二の丸の濠までも埋めつくしてしまった。

「総構えの濠」というのは三の丸だけに限ってのことと思っていた大坂方が抗議を申し込んできたが、家康は知らん顔で通してしまい、二の丸の矢倉や石垣までも壊しはじめた。

「狸爺いにまんまと、してやられたわい」

と、大坂方はくやしがったが後の祭りだ。

戦いの邪魔になった大坂城の長大な濠を埋めてしまえばこっちのものだというので、いったんは駿府の居城へ引揚げた徳川家康は、再び軍容をととのえて引き返し、今は、京都二条の城にいて戦機熟するのを待ちうけている。

徳川家康は、すでに七十余歳。その老軀をもって、あくまでも徳川の手に天下を握ろうとし、かつては天下に号令をした豊臣秀吉の遺子、秀頼を中心に結束した大坂（豊臣）方の勢力をこの際、徹底的に叩き潰し、後顧の患いを絶ち、徳川家の繁栄の礎をきずこうとしている。

こういう最中にあって、大坂周辺の町や村は、ひどい混乱状態に陥っていた。

農民も町民も、何時始まるか知れない戦いを前にして、遠い土地へ逃げ出すものもあり、逃げるところのないものは息を殺して震えている。

こういう中にあって、大坂軍に加わり一旗揚げようと大坂へ集まってくる浪人達や、治政の混乱に乗じて跳梁する盗賊や、変装して入り込む徳川方の密偵などが、渦を巻いてひしめき合っているのだ。

伊丹十兵衛を首領とする盗賊の一行も、そのうちの一団だが、この生駒山脈の一角に、どうやら大坂からたどりついたらしい血だらけの土民の男と少年には、何か由くがありそうである。

おそろしい呻き声をあげて倒れた男は、介抱にかかる少年に向って、しきりに手を振り、

「行け!!　密書は、先程、お前に渡してある。それを持って早く……頼むから、俺を捨てて、行ってくれい」

「でも、それは……」

行けというわけは呑み込めても、男を捨てて一人で行くことには耐えられない様子を見せて、少年は、

「今少し、今少しの辛抱です」

「どうしても一人では……？」

「菅井様を置いては行けませぬ」

細い声だが屹っと言い放って、少年は肩を出し、

「さ、早くおつかまり下さい」

男は、笠のうちから、じっと少年を見て、

「よし」

少年の差出す腕に摑まって腰を上げたとたん、男は全力をふりしぼって、少年の躰を突飛ばした。

「あッ!!」

よろめいて、膝を突く少年を見向きもせず、男は、手負いのけだもののように草原を走った。

「菅井様ッ!!」

少年は、すぐに立直って追いかけたが、駄目であった。

崖の淵に立った男は、さっと振り向き、

「頼むぞ!!」

血を吐くような一声を残し、崖から身を躍らせた。

「ああッ!!」

両手を力一杯に伸ばした少年のその指先が、わずかに男の躰へふれた。

男は、落下する土や石の音と共に、谷へ落ち込んでしまったのだ。

少年は顔をおおい、崖の上に崩れ折れた。

森閑とした山林の気配を山鳥の声が縫っている。

まだ顔をおおっている少年の白い、むっちりとした指の間から嗚咽が洩れはじめた。

(………?)

少年は、背後に迫るものの気配を感じて、ハッと振り向いた。

六人の盗賊達が、何時の間にか、少年の後ろを取り巻いている。

少年の手に、キラリと刃が光った。

「ひやッ!!」

頬を斬られたのは彦蔵である。

尻餅を突いて喚く彦蔵の傍を走って逃げようとした少年は横合いから襲いかかった鞍掛甚五郎に足を掬われ、転倒した。

少年の手から短刀が飛び、草に埋まった。

倒れた弾みを利用して、自分から草の上をころころと転がって行き、向うへポンと立った少年の躰の働きも尋常ではなかったのだが……。

「畜生!!　このガキめ!!」

猛然と飛びかかった彦蔵の体当りに、

「あッ……」

ふたたび少年は横倒しに倒れるその上へ、彦蔵は大手をひろげて殺到する。

二人は、もみ合った。

盗賊達は、二人を遠巻きにして眺めていた。

「や……？　何だこれは？　こりゃ何だと」
少年ともみ合いながら、突然、彦蔵が頓狂に叫んだ。
すでに笠は飛び、笠のかけひもをアゴにくくりつけたまま彦蔵と争っている少年の顔の美しさに、盗賊達は眼を見張った。
「離せ。離さぬかッ」
少年は、髪も男の子のように短く切ってヒモで結んでいた。細くやさしい眉が吊り上り、黒ぐろとした瞳が燃え、小麦色の、ぷっくりした頰に血がのぼっている。
それよりも尚、彦蔵や盗賊達をおどろかせたのは、紺色の単衣の肩のところが破れて、そこからムキ出しになった少年の、こんもりした肩や、胸一杯に巻きつけた腹巻がはち切れそうになっている胸元のふくらみであった。
「女だ!!　畜生め、女だ、女だ!!」
彦蔵は喚きながら、その腹巻の中へ手を突込もうとした。
少年……いや、娘が悲鳴をあげた。
「彦蔵!!　もうやめろ。早くこっちへ引っ立てて来い」
と、伊丹十兵衛が言った。
どっと盗賊達が少年を囲み、ぜいぜいと息を切らしている娘を引き立てて来た。
裾を端折った、泥だらけの、まるい娘の膝と脚が、力なげに抵抗を示すのだが、無駄であった。

「女……おい、女。きさま、何か密書を持っておるそうだな」
「知らん」
「何が知らんだ。は、は、は、……さっきのお前達の話を、俺は、その朴の木の蔭から、みんな聞いてしまったわ」
娘は、十兵衛を睨んだが、ハッと眼を伏せた。
「出せ。出せよ、おい……」
また娘が逃げようとした。
十兵衛が、軽く当て落した。
「う、む、む……」
腹を押えたまま、娘は失神したようだ。
十兵衛は屈み込んで、眼を閉じ、横たわっている娘の腹巻の底へ手を突込んだ。
腹巻の布がまくれ、ちらりと、紅い乳首が見えた。
彦蔵が、ゴクリと喉を鳴らした。
牛之助は顔をそ向けた。
その牛之助に、さっきからベタベタとくっついていた佐々木源八が、顔を突き出し、ペロリと牛之助の頰をなめた。
「何をするんですかッ、佐々木さまは……」
「いいではないか、わしはな、お前が可愛いのだ。可愛ければなめたくもなるし、撫でたく

もなるのが当り前だろ。なあ、牛よ……」
　男色を好む源八の、しつこさに、鞍掛甚五郎も玄良坊主も失笑した。
「よせ、佐々木。またお頭に叱られるぞ」
　玄良は源八に言っておいて、
「お頭。密書の中身は何だ？」
と訊く。
　少年の腹巻の底に隠されていた、小さな細い竹筒――その中には、薄紙に、びっしりとしたためられた三枚ほどの密書が入っていたのだ。
　伊丹十兵衛は、黙然と、この密書を読み終った。
「お頭……」
と、今度は甚五郎が、
「わしにも読ませてくれ、お頭……」
　十兵衛は、密書を甚五郎と玄良に読ませた。源八も傍からのぞき込んでいる。
　字が読めない彦蔵は、
「お頭!!　一体、あの密書には、何と書いてあるので？」
「うむ……。あの密書の中身は大変なものだ。使いようによっては、どんなにも使える」
「儲けになるので？」
「儲けも儲け。大儲けになる」

「へえ……聞かせておくんなさい。あの密書の中には、何が書いてあるので……」
「うむ……簡単に言えばだな……」
　十兵衛が彦蔵に語りはじめた。
　その声を聞きながら、牛之助は、失神している男装の娘を見入っていた。
　小さな唇を、かすかに開いたまま、娘はまだ息を吹返してはいない。
（このひとは、俺と同じ位の年頃だなあ）
　牛之助は、ふっと、そう思った。

家康の危機

　密書は――徳川方が、大坂軍の中へ放っておいた密偵から、奈良奉行の中ノ坊秀政に当てたものであった。
　とすると……この密書を懐に、この生駒の山を越えようとしている男装の娘も、さっき、みずから谷底へ飛び込んだ男も、徳川方の密使だということになる。
　おそらく今日の未明に大坂を脱けだしたものだろうが、此処まで来る途中で、大坂方の警戒網に引っかかり、狙撃されて、男は重傷を負ったのであろう。
「使いようによっては、どんなにも使える」と言った伊丹十兵衛の言葉通り、密書の中身は大変なものであった。
　日毎に迫る合戦を前に、京の二条城で戦備に怠りない徳川家康が、明日の早朝に京を発っ

て、ひそかに奈良へやって来る。これを探り出した大坂方が、この山なみの北にある木津のあたりに待伏せ一挙に家康の行列を襲撃して、首をあげようというのだ。その密計を知った徳川方の間者が、明日に迫った大将軍の危急を奈良奉行に知らせようとしたのが、この密書の内容なのであった。

谷へ落ちた男も男装の娘も、おそらくは軍兵か足軽、または陣地つくりの人夫にでも化けて大坂軍へ潜入していたものと思われる。

「牛之助。油断なく見張っておれよ」

と、十兵衛が言った。

「はいッ!!」

牛之助が嬉しそうに答える。

無口な十兵衛は、めったに牛之助へ言葉をかけないが、何時も暖い、慈父のような眼ざしで、この少年を見守っている。

牛之助は孤児であった。

父も母も、故郷も無い——というよりは知らないのだ。生まれて気がついたときには、近江の国の山寺にいた。そこの和尚が拾ってくれたのだという。

十歳のときに寺を飛び出し（彼は両親を探すつもりだった）、乞食をしながら放浪しつづけ、飢死をしかけたときに、伊丹十兵衛が救ってくれたのである。

仲間達にはきびしい十兵衛も牛之助には優しい。黙ってはいるが、十兵衛が、じいっと自

分を見つめてくれていると、牛之助は躰中が、ぽかぽかと暖まってくるような気がする。

（俺、お頭が好きだ!!）

だからこそ、厭々ながら盗賊の手伝いをしている牛之助なのだ。

密書は甚五郎の手から十兵衛の手に戻された。

盗賊達は、十兵衛のまわりに円陣をつくった。

「それにしても、家康が隠密に奈良へ出かけることを、よく捜り出したものだな。うむ……きっと大坂方からも、よほど腕の利いた間者が、京へ入り込んでいると見える」

鞍掛甚五郎が、尖った顎を突き出して言う。

玄良坊主も、濃い髭を撫でながら、うなずき、

「この密書によると、大坂方の——真田の鉄砲隊はだの、今夜だ、大坂城を出てだな、この向うの山を奈良の北側に抜け、京からやって来る家康の駕籠を待伏せようというわけなのだな」

「だが和尚——家康は、何故、ろくに供廻りもなく、忍びに忍んで奈良へ来るのだろう？こいつは、いよいよ合戦が始まる前ぶれかも知れぬぞ」と、甚五郎。

「うむ……」

と、十兵衛も考え込む。

いろいろと考えてはみたが、結局、盗賊たちにはわからなかったようだ。

天下分け目の戦いを控えた徳川家康が、二十人ほどの供を従え、誰にも知られずに奈良へ

やって来るというのは、わけがある。
そのわけというのも、盗賊達が深刻に考えているような重大なものではない。
もっと簡単なことだ。もっと下らないことかも知れない。十兵衛やその仲間が聞いたら、およそ馬鹿馬鹿しくなって、徳川家康という名将としての、大政治家としての価値をも疑うことだろう。
家康は女に会いに奈良へ来るのであった。しかも家来の女房を見に……。
奈良周辺を守る、奉行の中ノ坊秀政の妻は、名うての美女である。若く、みずみずしい。秀政とは十六も歳が違う。
去年の十一月から一カ月にわたった「冬の陣」の戦闘の合間にも、家康は、数度、奈良へ足を運んでいる。
女色にかけては、少年時代から、有名な家康だが、さすがに七十をこえた現在では、家来の女房まで強引に我物とする、ということはない。
ただ、美しい女に茶の一服もたててもらい、女らしい、優しくて、つやめかしい接待を受けて、老いた官能を楽しませるだけのことであった。
「供はいらぬ。なれど、このことは、よくよく内密にせねばならぬぞ」と、腹心のものに言いつけ、ニヤニヤと顔中を笑みくずしつつ、京から奈良へ出かけて来ようというのも、徳川家康なればこその、心の余裕というものかも知れない。たかが女ひとりに会うため、何千もの軍勢に駕籠を守らせるわけにもいかない家康だ。

こうした家康の心境までは、十兵衛も玄良も、甚五郎も源八も、まして彦蔵には、とうていわかろう筈はない。
けれども、家康が奈良へ来る!! それを狙って大坂方の軍師真田幸村が指揮する鉄砲隊が出動する!!
これだけは確かなことだ。
「これこそ、大坂方にとっては唯一無二の機会だ。真田幸村は、是が非にも家康の首をとらずにはおくまい」
と十兵衛が言えば、彦蔵までが、昂奮の色を隠し切れずに、
「こいつは面白えや。今ここで、狸爺いの家康が殺されてみろ。総勢二十万といわれる関東勢も、手綱をとる馬喰が居なくなって大あわてだな。お頭――いや、大あわてどころかよ、そうなれば、この戦さは大坂の、豊臣方の勝ちになるぞ」
佐々木源八は、チラチラと横眼で牛之助を見ては、手を握ろうとしたり頬をなめようとしたりしていたが、このとき、あまり気が乗らなそうに、
「ふふん。その密書が、奈良か京の徳川方に届かねえとなると、家康の首はねえというわけかい」
「むろんだ」と、十兵衛は、
「真田幸村自ら指揮する鉄砲隊槍隊、約千五百と、この密書には書いてある。これでは、先ず家康も逃げ切れまい」

「家康も、まさか、このことが洩れはすまいと思っているだろうな」
「そうだ。だからこそ、このことを探り出した奴はえらい奴だ。もしかすると、その大坂方の間者め、奈良へ来る家康の供に加わっているのかも知れぬな」
玄良が、たまりかねたように進み出た。
「お頭!!　どうするつもりじゃ」
「この密書のことか?」
「当り前よ」
「今な、考えているところだ」
「何を……?」
「どっちへ売り込んだら高く売れるか……」
「うむ。そいつが難しいところだの」
初夏の陽は、かたむきつつも尚、明るい。
顔を集め、相談にかかる盗賊達の油断を見すまし、少し前から蘇生していた娘が、突如跳ね起きて走り出そうとしたが、十兵衛に油断はなかった。
十兵衛は、杖にしていた木の枝を放りつけ、娘の股にからませて倒した。
「この女め!!　何てえしぶとい女だ」
彦蔵は娘を摑まえ、わざともみ合っては、娘の首や、むき出しになった肩のあたりへ臭い唇をくっつけたりする。

「よせ、彦蔵。その女、縛っておけい」
十兵衛の命令で、娘は手と足を縛られ、口に布を巻かれて、朴の木の根元へころがされた。
牛之助が、見張りの役になった。
盗賊達は、また相談をはじめた。
その相談は、中々まとまろうとはしない。
密書を、間者の娘もろとも、大坂方へ届けようと言うのは鞍掛甚五郎である。
密書が徳川方の手に落ちれば、家康襲撃という千載一遇の機会を見す見す失うことになる。
その密書を奪い返してくれたとあれば、きっと恩賞が出るに決まっている。ことに大坂軍が最も頼みとする軍師の真田幸村は話のわかる大将で、たとえ、どんな小さな功名でも必ず賞を与える。寄せ集めの浪人どもさえも、濠を埋められ裸となった大坂城から逃げようともしないのは、幸村の人望が大きく、幸村への信頼も深いということになる。
おそらく大坂方は、真田幸村の腕を買って、徳川方にみすみす負けをとろうと思ってはいまい。
もしも大坂方が勝利をおさめれば、幸村は四十万石ほどの大々名に出世するだろう。甚五郎の狙いは其処にある。
今のうちに恩を売っておけば、いずれ自分も幸村の庇護をうけて、ひとかどの侍になれるかも知れぬ。いや、なれるに違いない。
甚五郎は仲間の儲けというよりも、自分ひとりの出世を考えている。それだからこそ、

「お頭。俺が使者に立つ。俺が半刻(はんとき)の間に金を持って戻らぬときは、すぐに徳川方へ知らせろ。どうだ？　どうだ？」
「危ない、危ない。どうもな、おぬしに手柄(てがら)を一人じめにされそうだわ」
と、早くも玄良は甚五郎の心底を見破っているものと見える。
「勝手にしろ。和尚に言うてはおらん――なあ、お頭、頼む、わしを行かせてくれ」
十兵衛は黙っている。
「わしは、この密書を徳川方に売り込みたい」と言い出したのは玄良坊主だ。
むろん、この密書の内容を見れば、さすがの家康も首に冷汗を滲(にじ)ませるに違いない。
密使の娘は殺してしまえばよいのだ。
大坂方の銃丸(たま)に仆(たお)れた二人の密使――その代りとなって危険を冒し、密書を届けてくれたとあれば、徳川家康も黙ってはいない。
どっちにしても、密書だけを受取って金をよこさないというようなことになれば一大事である。
密書を持ち込む方法には慎重な用意と駈引(かけひき)がいる。
「もし徳川方へ届けるとなれば、あの娘を殺してしまうのだな」と、彦蔵が言う。
「バカもん。当り前だ。女を届けたら、俺達(たち)のしたことが、みんなバレてしまうわ」
佐々木源八が嘲笑(ちょうしょう)した。
「もったいねえ。殺す前に一度抱かせろ」

と、彦蔵は、舌なめずりしながら、彼方(かなた)の朴の木の根元にころがっている娘を見た。
牛之助は、娘の傍(そば)にしゃがみ、じいっと、こっちを見ている。
「お頭!!　大坂方へ……」
「お頭。徳川方へ売りこめ。わしが使者に立つ!!」
「どっちにしても、ぐずぐずしていると日が暮れてしまうぞ、お頭……」
十兵衛は、組んでいた腕を解き、
「待てよ!!　もう少し考えさせてくれ」
彦蔵が、十兵衛の腕をつかんだ。娘を一度だけでいいから抱かせてくれと言うのだ。
「あの餅肌(もちはだ)の手ざわりのよさ。汗ばんでてよ、こう冷んやりしていてベタベタと手の平に吸いついてきやがる。俺は何も彼(か)もお頭に任せるから、あの女を、殺す前に一度だけ……頼む、頼むよ、お頭」
このとき、草が騒いだ。
振り向いた盗賊達の眼(め)に、娘の縄(なわ)をほどいてやった牛之助が娘の手をとって樹林に駆け込む姿が飛び込んできた。
「ヤッ。あのガキめ」
「牛ッ。何をするのだッ!!」
十兵衛が叫んだ。
「追えい!!　早く、早くッ」

彦蔵と甚五郎と源八が、二人を追って樹林に駆け込んで行った。
つづいて追おうとする十兵衛の袖を押え玄良が言った。
「大丈夫。間をおかずに追ったから逃げ切れるものではない。それよりもどうする。早く決心せぬと、せっかくの儲けもふいになるぞ――大分、陽もかたむいてきたしなあ」
「うむ……」
十兵衛は、尚も牛之助のことを気にしているらしい。
「そんなに、お頭は、あの小僧ッ子が可愛いのか、ふん、バカバカしいこっちゃ。お頭の気持がわからぬよ、わしには……」
「うるさい!!」
十兵衛は、いらいらと怒鳴った。
「和尚!! 俺達はな、いずれも打ちつづく戦乱の世に生きて来て、どの合戦にも運をつかみそこねた、あぶれ者ばかりだ。他人の心の中までほじくりまわすのはよせ!!」

痣と短刀

牛之助も娘も捕えられた。
「撲られたな牛――当り前だ。お前は裏切り者になろうとしたのだからな」
目の前に引き据えられた牛之助を見て、十兵衛が言った。
牛之助の手足は血がこびりつき、顔は青黒く腫れ上っている。

「ごめんなさい、お頭。でも、でも、おれは……」
「でも?……。何だ? 言えい」
「おれは、このひとをえらいと思いました」
「何をぬかす、ヒヨッコ野郎め」と、彦蔵は牛之助を蹴飛ばすと、源八が割って入り、「何をするかッ。足軽くずれの、もぐらもちめ」と彦蔵を突き飛ばした。
「何をしやがる!!」
十兵衛が二人を叱りつけた。
「よせ!! おい源八。この際に言うておくが、牛之助は女ではない。間違えて変な真似をすると、俺が叩き斬るぞ!!」
源八は、白い眼で十兵衛を睨んだ。
(お頭さえ居なければ、牛は、きっと俺のもの、俺ひとりのものになるのだが……)
源八が何時も考えていることは、このことであった。
「牛之助。お前は、この女のどこが偉いと思ったのだ?」
尚も十兵衛が訊く。
「はい。このひとは、おれと同じ位の年だ」
「それで?」
「だのに、このひとは命投げ出して立派な働きをしている。おれは、盗っ人の手伝いをしている」

甚五郎が嘲笑して言った。
「ふん。お前の方が利巧なんだ。それが、わからんのか」
このとき、娘が屹と顔を上げ、甚五郎に、
「お前には父も母もないのか。大人になるまで育ててくれた人はないのか」
「何ッ」
「ないのであろう。お前達は、けだものの腹から生まれたに違いないのだ」
「生意気千万!!」
甚五郎は飛び掛って、娘の頰を撲りつけた。
「よせ!! 甚五郎」
十兵衛が制した。
「お頭!! 早くせぬかい。時が移るぞ」と、玄良が足踏みをして催促する。
「よし!!」と、十兵衛も決意をしたとみえ、
「俺はな、この密書を大坂方へ届け、礼金を貰い、今度は、すぐに馬を飛ばし、鉄砲隊の先廻りをしてだ、家康の行列を待ちうけて、一大事を知らせてやるのだ。むろん、そのときは口で言う。そこは俺がうまくやってみせる」
「二重どりか。成程のう」
「その代り命がけだぞ。やってみるか」
「俺を大坂方へ行く使者にしてくれれば承知する」と、これは甚五郎だ。

「おぬしでは、金をもらって、一人でコソコソ逃げてしまう恐れありだ」
十兵衛が冷笑した。
「お頭!! 鞍掛甚五郎を見損うな」
「俺は、とっくに、おぬしのずるさを見破っている。駄目だ」
「くそ!!」
口惜しがる甚五郎に代って、玄良が乗出し、
「よし。わしがひとつ、大坂方へ行ってみよう」
「よし。和尚に任せよう」
密書が巻き込められた竹筒が、十兵衛の手から玄良の手に移ろうとした、その一瞬に……。
「俺が行く!!」
ぱっと手を伸して竹筒を引ったくり逃げようとした鞍掛甚五郎の背に、伊丹十兵衛の抜討った刃が斜めに走った。
それは、おどろくべき早業であった。
「うわ……」
ぐらッとよろめき、尚も必死に逃げようとする甚五郎に、今度は玄良が躍りかかり、短刀を振った。
「わあッ」
甚五郎は絶叫し、草の上にもんどりうった。

甚五郎の手に握りしめられていた竹筒を、彦蔵がもぎとって十兵衛に渡した。
「蝮は早く殺すに限るわい。こっちの躰に毒がまわらぬうちにな」
玄良は、ぽっと短刀を放った。
短刀は、十兵衛の足元の近くに落ちた。
この短刀は、さっき密使の娘が持っていたものだ。盗賊達に捕まり争ったときに落したものを、玄良が拾って、甚五郎を刺したのである。
「お頭!!　密書を……」
手を出して、玄良は十兵衛の視線が、ひたと草に落ちた短刀に注がれているのを見た。
十兵衛が短刀を拾った。目ばたきもせずに見入っている。顔も青ざめていた。
「どうしたのだ？　お頭……」
十兵衛は玄良の問いには答えず、娘に向って、
「おい女。この短刀はお前のものか？」
「わたしは、お前方のように、盗みはせぬ」
「だ、誰に貰った？　言え、言えい!!」
「その刀は、わたしのものじゃ。それがどうした？」
十兵衛が、すっと娘の躰に近寄り、身を屈めた。
「あッ。何をする」
矢のような速さで十兵衛の手が伸び、娘の裾をまくった。

ふっくらとした白い娘の太股が見えた。
娘は青ざめ、膝を固くして十兵衛を睨んだ。
十兵衛は、それ以上、何もせずに突立ったまま、むしろ茫然と空間に眼を投げ、太い嘆息をもらした。
盗賊達は呆気にとられ、十兵衛を見詰めている。
やがて玄良が進み出た。
「お頭!!　どうしたのだ？　密書をよこしなされ」
「和尚……こいつは、渡せぬ」
十兵衛の声は重かった。
「何じゃと？」
「気が変った」
ぎらりと、玄良の眼が光った。
「おい、おい、お頭。いや伊丹十兵衛。おぬし、この儲けを一人じめにする気か。それとも、この玄良まで疑う気か」
「違う」
「わけを言え」
「言わぬ」
「こやつ……お頭お頭とたてておればよい気になり、頭にのぼせたか。この玄良を只の坊主

じゃと思うていたのか」
玄良は、さッと飛び退り、懐中から数本の手裏剣を出して身構えた。
「わしの手並は、おぬしも、よう知っておろう。密書をよこせ。厭か?」
「厭だ」
佐々木源八が、玄良の傍へ擦り寄って、
「和尚!!　打て。殺してしまえ」と、けしかけた。
娘が逃げかけようとするのへ、彦蔵が飛びついて押え込みながらも、おろおろして、
「おう、おう、みんな。一体どうしたのだよう。仲間割れは厭だぜ、おい」
十兵衛と睨み合っていた玄良の手が、ぱッと上った。
手裏剣は細い閃光を引いて十兵衛の肩口へ吸い込まれた。
同時に、牛之助が、彦蔵の脇差を横合いから引き抜くと、玄良の背後から飛び掛った。
「ああッ」
三本目の手裏剣を飛ばそうとした玄良は、思いもかけぬ牛之助の刃を腹に受けて、よろめいた。
肩に刺さった手裏剣を抜き取って十兵衛が走り寄り、刀を振った。
頭から鼻筋まで割りつけられ、玄良は転倒した。
隙をうかがっていた娘は彦蔵を突飛ばして逃げにかかった。その背中へ十兵衛の声が飛んだ。

「女!!　この密書を持って行け」
「………?」
娘は振向き、信ぜられぬという風に、眼を見張って十兵衛に見入った。
「さ、早く……」
十兵衛は片手に竹筒を持ち、娘に近づいたそのとき、佐々木源八が十兵衛に斬りつけた。
「くそ!!　牛は俺のものだぞ」
浅く背を斬られ、十兵衛は飛退いて源八を睨み、
「去れ!!　俺には勝てぬ」
「何を……」
一刀で打ち殺すつもりが、間合を誤って失敗した源八は、かーッとなり、むやみやたらに刀を振廻し、十兵衛に向って行ったが……。
二合、三合したかと見る間に、源八は十兵衛に斬倒されてしまった。
「牛……牛よう……」
玄良の死体の傍で、まだ喘いでいる牛之助に、両手を差しのべつつ、源八は息絶えたのである。
樹林の向うの山道に、数騎の馬蹄の音が近づいてきたのは、このときであった。
「大坂方だ!!」
彦蔵が、うろたえて叫んだ。

今朝方から大坂を脱出した密使らしい二人の男を、大坂方が探索しているに違いなかった。
「いけねえ。こうなったら、もう何も彼もお終いだ。お頭、逃げるぜ、俺は……」
「うむ。お前の好きにしろ」
「今までの分け前は、どうする？」
「お前一人にくれてやるわ。丹波へ行って早く売捌け」
「ほ、ほ、本当かい、お頭」
「うまく逃げろよ」
「ありがてえ」
ぴょこんと頭を下げ、彦蔵は、馬蹄が近づいて来る反対側の樹林へ駆け込んでしまった。
夕陽が空を染め、草原には夕闇が漂っている。
十兵衛は、竹筒の密書を娘に渡し、
「早く行け」
「あ、有難うございまする」
「おぬしの名は？」
「於寿々と申しまする」
「おう」
十兵衛は、ニコリとうなずいた。
樹林の中で呼笛が鳴った。

「来るぞ。大坂方が……早く行け」
「お名前は忘れませぬ。伊丹様、とか……」
「それは今の名。元、元は……」と言いかけて、十兵衛は、
「女。おぬしは誰に育てられた？」
「は——？」
「おぬしも、この牛之助と同じ、みなし児だったのであろう」
「何故、それを……？」
「無駄なことを訊くな。誰に育てられた？」
「は——本多平八郎様家来の、岩崎右近が養いの親でございまする」
「いずれも徳川の方々じゃな。そうか。そうだったのか……」
樹林からも、谷間からも、呼笛が鳴り、近づいて来る。
「牛之助。そうだ、お前も於寿々殿を助けて奈良へ行けい」
「お頭。俺は厭だ。お頭の傍に居てえ」
「いかん!! お前が付いておれば於寿々も心丈夫だ。早くしろ!!」
十兵衛は刀を振って、威嚇するように牛之助を立たせた。
「この原を突切り、森の中を、ひた走りに走れ。山を下れば、すぐに奈良だぞ」
「厭だ。俺は行かねえ」
「牛!! 十兵衛の言うことが聞けぬと言うのかッ」

「でも、お頭……」
於寿々が叫んだ。
「伊丹様危ないッ!!」
樹林の中から現れた大坂方の侍が二名――槍を振って十兵衛に殺到してきた。
「曲者!!」
十兵衛の刃が、槍を二つに切り割った。
「逃げろ!! 早く逃げろ!!」
寸秒の猶予もならなかった。
於寿々は十兵衛に一礼を送り、まっしぐらに草原を走り出していた。
二人の鎧武者と闘い、これを倒したときには、もう十兵衛の顔も躰も血塗れになっていた。
夕闇は、いよいよ濃い。
草原には血の匂いが立ちこめている。
十兵衛は草に顔を埋め、喘いでいた。
「お頭!! しっかりして下さい、しっかりして……」
牛之助がすがりつくのへ、十兵衛は、
「まだ、居たのか。おい、頼む。あの女の後を追いかけ、無事に、奈良へ送り届けてやってくれい」
「でも……」

「よく聞けよ、牛――あの娘はなあ、十四年も前に、俺が、駿府の城下へ、捨児にした娘だったのだ」
「えッ……」
「捨児したときに、形見がわりと思い、名前を書いた紙と共に、あの子の躰につけておいた短刀が、さっきの、あの短刀だ。あの子の太股にあった小さな痣も、ちゃんと残っていた」
牛之助は泣き声をあげて、
「お頭は何故、捨児した。何故、自分の子を捨てたんだ」
「許せ。お前も捨てられた子だったなあ――女房にも死なれ、その日の食ブチにも困った貧乏浪人の俺は、あの娘を捨てるより仕方がなかったのだ」
樹林の中で、また呼笛が鳴った。
山道で、馬蹄の音が、しきりにする。
於寿々の駆け込んだ森の方向には、まだその気配はないが、彦蔵が逃げた樹林の奥からも呼笛が近づいて来た。
牛之助に於寿々の後を追わせ、奪い取った槍を振って、伊丹十兵衛が大坂方の士卒と闘い、十余人の追手を倒してから、ずたずたに切り裂かれた躰を、静かに草の上へ横たえたのは、それから間もなくのことであった。
草原の真上の空に、星が輝いていた。

死の昏睡の中へ引きずり込まれそうになりながら、十兵衛は星を見ていた。
(俺が父親だったなぞと、娘には言ってくれるなよ。よいか!!)
逃げろと牛之助に念を押しておいたが大丈夫だろうか……。
(俺が、盗賊の俺が実の父親だと知ったら……)
於寿々の健気な心にまでも、汚みがつくような気がしてならない。
(だが、よかった……娘の役に立って、よかった。娘を育ててくれた徳川の方々へも申しわけが、いくらかは立つというものだ)
十兵衛の網膜から、星の光が消えた。
樹林の中で、また呼笛が鳴った。
松明の灯影も樹の間に揺れ動き、近づいて来る。
(もう大丈夫、逃げ切れるだろうよ)
息絶える前に十兵衛はそう思った。

(「小説倶楽部」昭和三十五年十一月号)

角兵衛狂乱図

二十年ほど前まで、長野県・松代町に住み、いまは神戸市に居住されている筈の佐藤慶治氏が〔角兵衛狂乱之図〕という画幅を所持しておられる。

画は、異様なものだ。

たくましい老年の武士が、右手の小柄に突き刺した眼の玉をかかげ、にんまりと不敵な笑いをうかべている全身像が描かれている。

その武士の右の眼窩から、おびただしい血汐が噴出しているところを見ると、彼は、みずからの手によってえぐりとったものに違いない。

ほとんど墨一色で描かれているのだが、小柄の先に形を強調して描かれた眼球と、武士の眼窩にぬられた血の色にのみ、赤い絵具がつかわれ、それが何とも凄まじい効果をあげている。

よく見ると武士の顔は、顎の張った肉のあつい、なかなかに立派なもので、濃い眉も、ふとくて形のととのった鼻も尋常のものではない。

画の右上方に〔樋口角兵衛狂乱之図〕と書かれ、左下方に〔伊木彦六尚正〕とあって、朱印二顆が捺されてある。

もちろん、画は、かなり古いものだ。

六年前に亡くなられた松代の郷土史家・大平喜間太先生に、私が、この画を見たという話をしたとき、

「ああ、佐藤さんのとこのね……私も見ました。おもしろいものでしたねえ」

「あの画は、伊木彦六が、何歳のころに描いたものでしょうか?」

「おそらく、明暦以前のことでしょうな。だって、そういうことになりましょう?　どうです」

老先生は、眼鏡の中から、じっと私を見つめつつ、

「ほら、ほら……」

と、私の記憶がよみがえってくるまで、私をうながされた。

「あ……そうでした」

その日は、あかるい秋の陽ざしが、川中島平に燦々とふりそそぎ、一点の雲もない好晴であった。

松代の城下町の古い武家屋敷を住居とされていた大平先生を、おとずれたのは、その日が、たしか五度目であったかと思う。

私が、信州・松代十万石・真田家を舞台にした小説を書きはじめたときから、先生は何かと私をはげまし、惜しみなく貴重な史料を見せて下すったものだ。

夫人が何度も替えて下さる茶をのみながら、その日は先生と、樋口角兵衛について語りつづけ、夜ふけとなって長野市の旅館へ帰るのがめんどうになり、松代の〔定鑑堂〕という小

さな宿へ泊ったことをおぼえている。

一

樋口角兵衛正輝は、元亀二年二月七日にうまれた。

父は、武田勝頼の重臣で、樋口下総守という。

角兵衛のうまれたころには、勝頼の父・武田信玄が健在であり、信玄は武田の全軍をひきい、京へのぼって天下に号令すべく活動を開始していた。

目まぐるしく天下の覇権を争い、領土の拡張に狂奔していた大小の武将たちが、ようやく大きな勢力のいくつかにふくみこまれ、武田信玄と織田信長の二大勢力が、目ざす目的に向かい突進していたのである。

信玄は、翌年に発病し、翌々年に征旅の陣中で死んだ。

信玄の死によって強大な武田家が見る間に衰弱し、織田・徳川の連合軍に攻めたてられた信玄の子・勝頼が天目山において自殺をとげたのは天正十年で、ときに樋口角兵衛は十二歳であった。

「おれが、殿さまのおそばについていたら、むざむざと殿さまを死なせずにすんだものをな」

と、この少年は臆面もなく、ほざいてのけた。

当時、角兵衛は、上州・岩櫃の城にあった。

岩櫃城は、真田昌幸がたてこもっており、昌幸は、この城に主筋の武田勝頼を迎え入れ、織田の大軍をひきうけ大暴れをしてやろうという意気込みでいたのだ。

ところが、勝頼は他の重臣たちの言をいれて岩櫃へ逃げることをやめ、ついにほろんだ。

織田軍との戦がはじまる直前に、真田昌幸は籠城準備のため、甲斐の国から一族郎党をひきつれて上州へ急行した。このときに、角兵衛も同行させたのである。

角兵衛の母は、真田昌幸の妻・山手どのの妹にあたる。だから昌幸と角兵衛は伯父甥の間柄になるわけであった。

母は自分と共に岩櫃へ来たので死ぬことをまぬがれたが、父の樋口下総守は勝頼にしたがい、ついに戦死をした。

「おれがついていたら、父上も死なずにすんだものをな」

と、また角兵衛は放言をした。

「ほう。そうか、そうか——」

伯父の昌幸は目を細めてよろこび、

「こやつ、いまに味な男になろうぞ」

と言った。

子供の言うことだから、昌幸も息の信之も幸村も笑っていたし、家来たちの中でも、

「大殿の申さるる通りじゃ。ありゃ末おそろしい大将になる」

評判もたかい。

前に、こんなことがあった。

角兵衛九歳のとき、野道を暴走して来た狂い馬の前に飛び出し、大手をひろげた。

眼をみはり、腕を張って、馬が眼前にせまるまで身じろぎもしなかった角兵衛を何人かの武田家中のものが目撃している。

馬は、少年を蹴殺すべく棹立ちになった。

そのとき、角兵衛の体が鳥のように、ななめ横へ飛んだ。

馬が前足をぱッとおろした。おろして蹴り直そうとしたのであろう。その馬の足が地におりるかおりないかという間一髪に、角兵衛が飛びこんで、馬の前足を払った。腕の力だけで払ったのである。おそらく、馬の足が地につく直前であったものか、地響きをうって狂い馬が横ざまに転倒した。

（血は、あらそえぬものじゃ）

と、母の久野の方が、このことをきいて、さも満足気にうなずいたそうな。

久野の方も、姉の山手どのも、菊亭大納言晴季のむすめであった。

真田家は、清和天皇の皇子・貞元親王から出ていて、数代の後、昌幸の父・幸隆のころになって信濃・真田庄に居城をかまえ、以来、真田姓を名乗るようになった。

こういうわけで、真田家は、むかしから京の公卿たちとも縁がふかい。すでに財力をうしなった公卿の娘たちが武将の妻になった例は、いくらもある。

久野も、義兄・昌幸の口ききで樋口下総守に嫁いだものである。

公卿の娘にうまれた彼女が、我子の腕力と気力のすばらしさを知って「血は争えぬもの」と、思わず口にのぼせたのは、夫・下総守の武勇を思ってのことであったのだろう。

二

武田家の滅亡以後、戦乱は尚もつづいた。

織田信長が明智光秀の反逆によって急死すると、あとは豊臣秀吉と徳川家康の急激な擡頭が見られる。

どちらにしても、大勢力の傘下へ入らぬと領国の安堵が危うくなる。

真田家は、徳川の麾下へ加わることになった。

家康のゆるしを得、昌幸は信州・上田に居城を築城した。

千曲川の断崖を利した堅城である。

この城へ、徳川の大軍が攻めかけたのは、天正十三年八月のことだ。

上州・沼田の領地をめぐって真田家と関東の北条氏直が争い、これを調停にかかった徳川家康のあつかいが、

「気にくわぬ!!」

真田昌幸の癇にさわったのだ。

「麾下に入りながら、真田の態度はけしからぬものがある。このまま放っておいては増長するばかりだ」

家康も、前年に尾州・長久手の戦闘で、秀吉の大軍を破っているので意気軒昂たるものがあった。

徳川軍は、真田の前線基地を攻めると同時に、本隊は、まっしぐらに上田へ迫った。

総勢一万余の編成である。

これに反して、上田城へこもる真田軍は、わずかに二千。五分ノ一の劣勢ということだ。

だが、この上田攻めによって、徳川軍は手ひどい痛手をこうむり、真田の武勇は一躍、天下にとどろきわたった。

真田昌幸は三十九歳の壮年であったが、戦闘が始まっても、上田城内で家来を相手に、じじむさく碁をうっている。

「戦は息子たちにまかしておこう」

と言うのだ。

長男の信之二十歳。幸村（当時は信繁）十九歳という若さなのだが、この二人の駆引に、老巧の武将たちがひきいる徳川軍は翻弄されつくした。

戦場の地形は、真田軍にとって我庭のようなものであった。

地形と天候とを応用した猛烈果敢な奇襲を行うのは、兄の信之である。

この奇襲部隊を無事に城内へ収容するため、疾風のような新手をひきいてあらわれるのが、弟の幸村である。

樋口角兵衛は、この幸村勢に属していた。

十五歳の角兵衛が、上田の攻防戦にどのようなはたらきをしめしたか。

「血は争えぬものじゃ」

またも、上田城内にこもっていた母の久野をよろこばせたものだ。

角兵衛は、長さ六尺のふとい六角棒へ、びっしりと鉄輪・鉄条をはめこんだものを持ち、徒歩立ちで出撃をした。

まだ前髪もとらぬ角兵衛の戦闘ぶりは瞠目に価した。

「無理じゃ、いかぬ。この次から出してつかわすゆえ、今度は出るな、出るな」

真田昌幸は、なぜか、しきりに角兵衛の出陣をとめにかかると、そばにいた幸村が、

「父上。私の出陣は十三歳の夏でありました」

と言い出したので、

「うむ……」

昌幸は苦い顔になった。

幸村は、父が従弟の角兵衛を甘く育てすぎると思っている。

「当然ではないか」

と、兄の信之が弟をたしなめた。

「角兵衛は叔母御の一人子じゃ。思うままに我子をあつかうようにはまいらぬ」

ともかく、角兵衛は伯父の言うことなど聞こうともしない。

「伯父上。まあ、見ていて下され。なっとくがまいりましょう」

などと言ってのけるものだから、

「よし。おれのそばにいろ。鍛えてやる」

幸村が叫んだ。

が、それには及ばなかった。

角兵衛は、武田家にいたころからの家来六名をしたがえ、

「おれが叩き落した奴どもを片端から突きまくれ」

と命じて、進んだ。

喚声と悲鳴と、飛びはねる血が渦巻く中で、角兵衛の六角棒が唸りをたてた。

狙うのは、敵が乗った馬の足である。

土けむりをあげ、地響きをたてて、適確に馬が倒れた。

ころげ落ちる敵へ、角兵衛の背後にいた家来たちが猛然と槍を揮うのである。

「兄上。十五の小童とも思えませぬ」

幸村も信之に言って、ためいきをもらした。

八月二日の決戦となった。

徳川軍は上田城下へなだれこみ遮二無二城門へ押しかけたが、石垣の上から、仕掛けた大木が頭上に落ちかかり、銃火の一斉射撃と同時に、真田軍の精鋭が城門をひらいて逆襲した。坂の多い城下町の街路に、刀が槍が、馬と馬がひしめき合い、目も当てられぬ混戦となったのだが、これこそ、真田の思う壺にはまったわけで、民家に火をつけ、徳川軍を追い込み

つつ、

「それ!!」

前後左右の隙間から突いては退き、退いてはまた突きかかる真田軍の馴れきった襲撃ぶりに、徳川軍はたちまち押し返された。

この市街戦をもって、徳川の敗績は決定的なものとなった。

火煙と土けむりが立ちこめる狭路で、樋口角兵衛は屋根にいたかと思うと下へ飛び降り、猿猴そこのけの活躍をした。

戦が終ると、角兵衛の勇名は敵にも味方にも、評判にならざるを得ない。

戦国時代には、いうまでもないことだが戦争が流行する。流行の寵児は武勇の士である。

角兵衛は、わずか十五歳にして、時代の寵児の名をほしいままにすることが出来たわけだ。

「おりゃ、こんな彊勇の士を甥にもとうとは思わなんだ」

昌幸も、だらしなく満面をゆるませ、好みの褒賞をとらせると言うと、角兵衛は、

「八尺の六角棒がほしゅうござる」

甘えてねだった。

これがまた、昌幸を大いによろこばせたようだ。

「欲も得もないやつ。お前のような武士が真田の家に居てくれると思えば、涙がこぼれるわ」

殿様が手放しでほめるのだから、家来たちも先を争って、角兵衛をほめそやす。
慢心の発芽は、老成した人物の胸にも忍びこむし、成熟した五十男の分別をも狂わせてしまう。

三

まして、十五や六の少年が、このようにもてはやされては、たまったものではない。
上田合戦の翌々年のことである。
このころになると、秀吉と家康は握手し、家康は秀吉の日本制覇に協力するようになっていた。
秀吉の口ききで、幸村は、大谷刑部の娘と婚約をした。
記念として、秀吉が、来国俊の名刀を幸村に贈った。
幸村はよろこんで、この刀を侍臣たちに見せまわしたものである。
この席に、十七歳の角兵衛がいた。
「なるほど、なるほど」
角兵衛は横合から手をのばして国俊の刀をつかみとり、
「さむらい冥加に、このような名刀を、ぜひぜひ腰にしたいものでござる」
言い放つや、すばやくこれを腰に帯し、
「私、頂戴つかまつる」

と、怒鳴った。
「これ、角——」
あわてて、幸村が叫ぶ間もなかった。
「頂戴、頂戴!!」
と連呼しつつ、角兵衛は庭へ躍り出し、あっという間に、どこかへ消えてしまった。
「おのれ、角めが……」
幸村は激怒した。
すぐに追わせたが、どこにもいない。
角兵衛は、上田城三の丸外に屋敷をもらって、母と共に暮しているのだが、むろん帰ってはいない。
「父上には申すな」
幸村は家来たちを動員して城下、城外をくまなく探しつづけたが、いない。
三日、四日とたつうちに、
「父上も感づかれたらしい。申しあげて見ろ」
兄の信之に言われ、幸村も仕方なく、昌幸の居館へ出かけて行き、
「我ままがすぎまする」
すべてを報告した。
「ふむ……」

昌幸は、じろりと幸村を見やって、
「放っておけい」
事もなげに言う。
「なれど……」
幸村は、むっとした。
もとはと言えば、父上が、あまりにも角めを甘やかせすぎたからでござる、と、言ってやりたいところである。
昌幸は、たちまちに、これを察したらしく、
「こりゃ、信繁」
「はい?」
昌幸が、二十一歳になる次男を見て、にやりと口もとを笑わせた。笑ったのは口もとだけだ。両眼が白く光っている。
「おりゃ、めくらではないぞ」
と、昌幸が低く言った。
「は――」
「捨ておけい」
もう一度言って、髭をしごきつつ昌幸は、ひとりで碁石を盤にうちはじめた。

「どうも、わからぬ」
幸村は帰って来て、信之に言った。
「父上は、何と思うておられるのか……」
「放っておけ」
と、兄も言うのである。
「兄上……」
「父上は、人を煽てあぐるが御上手だということよ」
幸村は、ハッとした。
そのまま、兄弟は互いの眼を凝視し合っていたが、ややあって、信之が言った。
「わかったか、弟――」
「わかりました」
数日後、垢と泥にまみれた角兵衛が城下の町家で、にごり酒を飲んでいるところを、家士が見つけた。
「あッ」
思わず声をあげた家士へ、角兵衛が振向き、
「おれが、ここに居ることを城へ知らせて来いや」
と言った。
腰には、まぎれもない来国俊がおさまっている。

家士は、飛ぶようにして城中へ駆けた。
間もなく、幸村の侍臣が四名、馬をひいて角兵衛を迎えに来た。
「おい、捕らまえンのか?」
角兵衛が訊いた。
侍臣たちは、厭な顔つきで首を振った。幸村の侍臣だけに、角兵衛の暴慢ぶりを憎んでいるらしい。
「ふン、ふン。そうか、そうか、そうか。なるほど、そうか。そうだろうとも――」
角兵衛は、ひとりがてんに何度もうなずきつつ馬へ乗り「早く連れて行け」と、わめいた。
どうも手がつけられない。
それもこれも大殿（昌幸）の愛寵がすぎるからだと、侍臣たちは胸のうちで舌うちをくり返した。
（もう大丈夫。おれの思った通りだ）
と、角兵衛は酒に火照った顔を空に向け、くさい息を吐きながら馬にゆられて行った。
城へ入ると、すぐに幸村の居室へ通された。
「おい。どこへ行っておったのだ?」
幸村が、意外に、おだやかな口調で言う。
「奇妙山にいました」
「山の中で何をしておった?」

「草を食っていた」
「なるほど……」
「この刀は返しませぬ。たって返せと申されるなら、私の首をはねて下され」
「気炎が強いな」
「返しませぬ」
「わかっておる」
「首をはねますか?」
「はねぬ」
幸村が微笑をうかべたので、角兵衛は、少し気味がわるくなったようである。
昌幸は、可愛がってくれるだけだし、信之は自分を相手にもしない。幸村だけが角兵衛を叱ったり訓戒をあたえたりする。それがまた、おもしろくてたまらなかったのだ。
（あまり、伯父上が、おれを可愛がるので、信繁殿は、おれを嫉んでいるのだ）
愉快なのである。
ところが、七日ほど留守にしている間に、がらりと、この従兄の態度が変ってしまっている。
「刀は、お前にくれてやる」
「え……」
「父上がな……」

「伯父上が？」
「うむ。こう申された。さむらい一人と刀一腰と替えらるべき事かは、とな」
「ははあ……」
「お前に、その刀をつかわせば、名刀を帯した男の常として、いざともなれば、刀に負けぬはたらきもしよう……と、父上は申されたぞ」
「左様ですか。伯父上が、そうおおせられることと私も思うていました」
意気揚々として自邸へもどり、母に知らせると、この母が、また言うのである。
「母も、大殿が、そのように申されることと考えていたわえ」
翌日、角兵衛が昌幸のところへ行き、礼をのべると、
「よし、よし」
猫撫声で、昌幸が、
「雲行きが怪しゅうなってきた。いずれ、嵐が来よう。そのときには、はたらけよ」
と言った。
「はいッ」
角兵衛の歓喜は頂点に達した。

四

天正十八年の春から夏にかけて、関東の北条氏直を討伐すべく、豊臣秀吉が、小田原城を

包囲した。
すでに秀吉は、九州の島津氏を降し、海内に秀吉の命を奉ぜぬものは、ひとり、小田原の北条氏直のみであった。
家康も秀吉に屈服している。
いまや天下統一は目の前というところだから、秀吉は諸国の大名に命を発し、大規模な小田原包囲軍を編成した。
同時に、関東一円に散在する北条方の豪族たちをも徹底的に粉砕すべく、それぞれに指令をあたえた。
これによって、北陸の前田利家・上杉景勝の二将は、信・上二州を経て、沿道の諸城を征服しつつ、小田原包囲軍へ参加することになった。
真田昌幸は、この先鋒をつとめよと、秀吉から命ぜられた。
「心得て候」
昌幸は秀吉が大好きなのである。
「家康めは肚の底が知れぬ。血の冷えた厭な男じゃ」
昌幸は、冷厳で抜かりのない行動をとるくせに、いつも微笑を絶やさぬ徳川家康を、
「あの男の笑顔には化けものが隠れている」
と言った。
それにくらべて、豊臣秀吉は、愛嬌と哄笑のうちに豪快きわまる戦さぶりを押しすすめ、

天下をつかもうとしている。
「関白殿下とは肌が合うわい。信玄公亡きのちに、これほどの人物があらわれようとは思いもよらなんだわ」
これは、本音であった。
秀吉の威勢が強大になるにつれ、昌幸は、しばしば家康の領地へ侵入しては戦をいどんできている。
「内府とは仲ようせよ」
秀吉は、このことを心配し、何とか、両者の仲を融和させようと、
「徳川のむすめを、長男の信之に嫁がせよう。そして縁をむすべ」
何度も言ってよこしているが、昌幸は、承知をしない。
むすめといっても家康の本当の子ではない。しかるべきものの女を養女にして縁組みをさせるわけであった。
まず、こうしたさなかに、小田原攻めが行われたのである。
小田原城は名だたる堅城であった。しかも広大である。城の中にまで町が入っていたのだ。
北条氏直も籠城には自信満々であったのだが、秀吉も悠々と腰をすえ、箱根・湯本の早雲寺の本営から一里近い山中に城を築き、居館をもうけ、女たちもよび寄せ、連歌・狂言・茶の湯などをたのしみつつ、落城を待った。
大軍に囲まれた上、攻めても来ずに、城中の食糧が絶えるのを二年でも三年でも待とうと

いうのだから、たまったものではない。
秀吉の威勢というものが、ついに頂点に達したことを、北条方もみとめないわけには行かなかった。
小田原城は落ちた。
この戦役で、真田昌幸は、上州・松井田、武州の松山、鉢形などの北条方の属城を攻めて落した。
樋口角兵衛も、二十歳になっていた。
あらためて、このときの彼の奮闘ぶりをのべるには及ぶまい。
戦闘は、いつも角兵衛によって突破口があけられた。
銃丸も刀槍も、向うから角兵衛を避けて行くと言われたものだ。
「やるわい、やるわい」
昌幸は手をうって、
「どうじゃ、来国俊も生きたと思わぬか」
と、幸村に笑いかけた。
翌天正十九年に、真田と徳川との縁組がととのった。
秀吉に説きふせられ、昌幸も困り果てたが、
「おぬしは、どうじゃ？　家康のむすめを貰ってもよいのか。厭なら申せ。無理にとは言わぬぞ」

昌幸は、長男・信之に念をおした。

このとき、昌幸は息子の拒否をのぞんでいた。それほどに、家康がきらいだったのである。

「なれど、関白殿下のおすすめをことわるわけにもまいりますまい」

「おぬしが厭なら、ことわる。ことわってよい」

「源二郎（幸村）も、すでに妻を迎えました」

「何も次男が先に嫁もろうたとて、急ぐことはない」

「私も、そろそろ……」

「何——承知するというのか？」

「はい」

「家康のむすめじゃぞ」

「はい」

昌幸は苦虫を嚙みつぶしたような顔つきになった。

「徳川と手をむすぶことは悪いことではありませぬ」

信之は、言いきった。

平常はおだやかな息子なのだが、一度決意したとなると、その厳然たる気魄に、父親が呑まれてしまうことが度々あった。

若いうちから、そうなのである。

「おぬしが承知なら、反対はせぬ。わしが貰う嫁ではないのだからな」

昌幸も仕方なく、秀吉の仲介をうけた。

家康の養女として、駿府（静岡）から、はるばる信州の真田家へ嫁いで来たのが、本多平八郎忠勝の娘・小松であった。

——家康に、すぎたるものが二つあり。唐の頭に本多平八——と、世にうたわれた本多忠勝の血をうけた小松は、女ながら、夫信之と徳川家の間を決定的なものにする役割を果した。

日本は、すでに秀吉のものである。

翌文禄元年から、秀吉は朝鮮出兵の準備にかかった。

今度は朝鮮と支那を手中におさめ、そこに理想の都を建設しようという夢の実現に、秀吉は乗り出した。

これには、さすがの秀吉びいきの昌幸も、

「太閤殿下の意中が、わからぬ」

首をかしげた。

信之は、眉をひそめた。

この年の第一次進発は、戦果もあげたが、莫大な戦費を消耗して尚も思うような発展を見せず、六年後の慶長三年八月、豊臣秀吉は伏見城に病死をしてしまった。

六十三歳の秀吉は、只ひとりの幼児・鶴松（秀頼）の将来を案じ、家康など五大老に向けて、次のような遺書をしたためている。

秀より事、なりたち候ように、此かきつけのしゆとしてたのみ申候。なに事も、此ほかは、おもいのこす事なく候。かしく。

太閤

八月五日

いへやす（家康）
ちくぜん（前田利家）
てるもと（毛利輝元）
かげかつ（上杉景勝）
秀いへ（宇喜多秀家）

秀吉亡きのちの勢力は、二つに割れた。
すなわち豊臣派の石田三成を主軸とするものと、徳川家康のそれとに分れたのである。
そして関ヶ原の合戦が始まり、終った。
真田家も、このとき二つに割れた。
昌幸は次男・幸村と共に上田城へこもり、徳川秀忠の大軍を釘づけにして関ヶ原参戦を喰いとめた。
長男・信之のみ、家康に従って父と弟を捨てた。
関ヶ原合戦での勝利によって、家康は、ほとんど天下の実権をにぎった。
昌幸と幸村は敗軍の将である。

首をうたれても文句は言えないところだが、家康は信之の嘆願をいれ、真田父子を、紀州・九度山へ押しこめることにした。
「角兵衛よ。おのしは信之のところにおれ。わしと共に九度山へ隠れ住んでも仕様があるまい」
と、昌幸が角兵衛に言うと、
「伯父上は、九度山に老い朽ちるおつもりでござるか？」
にやりと、角兵衛が昌幸の眼をのぞきこみ、
「よも、左様なことはござるまい」
「なぜだ。天下は徳川のものよ」
「豊臣家には秀頼公おわします」
「まだ八歳の若君ではないか」
「十年たてば十八歳になります」
「そうなったら何とするぞ」
「そうなれば、また、伯父上の血もさわぎましょうず」
「何……」
「この角兵衛の血は、今から、さわいでおります」
角兵衛には、徳川家に従属した真田信之のもとへ身を託す気は少しもなかった。
むかしから信之には親しみがわかぬこと、昌幸が家康に対するそれと同じようなものだと

言える。

九度山へ配流される真田昌幸・幸村父子の胸の底には、秀頼の成長を待っての豊臣家が、ふたたび天下を席巻する夢のひそんでいることを、角兵衛は見ぬいていた。

「来たければ来い。なれど、おぬし、退屈をするぞよ」

昌幸は、表情のない声で、

「これからは刀槍のかわりに鋤鍬をもって生きて行かねばならぬ。それでよいのか」

「ようござる」

真田父子について九度山へ供をした家来は、十六人とも二十人とも言われている。

昌幸の妻・山手どのも、角兵衛の母・久野も、幸村の妻子と共に九度山へおもむいた。

(ふふん。いざともなれば、おれ一人で九度山を出て行き、家康の首をはねてくれるわ)

角兵衛は、そう考えている。

従兄・信之と家康のイメージが、角兵衛には一つのものとなっていた。

十五歳の初陣から十五年の間に、大小とりまぜての戦闘に角兵衛が展開した猛勇ぶりを、みとめぬものはない。

だが信之だけは、角兵衛に対し、終始冷然たる態度をくずさなかった。

まるで相手にもしないのである。

戦闘がすみ、歓声に迎えられつつ、血だるまのような角兵衛が陣へ引きあげて来て、

「今日は、首を八つもあげた。突き殺した敵は数えきれぬ」

などと叫んでみても、すぐそばにいる信之だけは、角兵衛の声を微風にも感じない様子であった。

(信之殿は、おれのはたらきを何と思っておるのだ。少しは、ありがたいと思案すべきではないか。角兵衛あればこそ、勝利の糸口が、いつもついているのを忘れたのか——)

くやしくて、たまらないのである。

その信之が、父と弟を捨てて、

(徳川の狸に、頭を下げるとは何たることだ)

端正な信之の顔貌を思いうかべるたびに、

(今に見ておれ!!)

角兵衛の慢心は、烈しい忿懣と化した。

五

高野山の北谷にある九度山は、京坂の地にも近い。

大坂城にいる豊臣秀頼のすぐ近くへ、真田父子は押しこめられたということになる。

家康にとって危険きわまりない爆薬を、今は只一つ残された反対勢力のそばにおいたということだ。

東北か、九州か、或いはどこかの小島かに流されても当然な真田父子なのである。

「近くのほうがよいのだ」

と、家康は老臣たちにもらした。
何をたくらむか知れたものではない真田父子を監視するためには、
「どこへ流したとて、あのものたちのうごきには変りない。出たくなれば、どこからでも出て来よう。それなればいっそ、わしの目のとどくところがよい」
家康は冗談のように、
「豊臣を奉ずるものたちの誰よりも、わしは真田父子がこわい」
と笑った。
この家康の肚のうちは、真田昌幸も幸村も熟知している。
それでいて、父子は九度山へ入った翌々年ごろから、活動を開始していた。
九度山は、紀の川にも近く、丹生川を眼前にのぞむ段丘に点在する村落を言う。
ここに、ささやかな隠宅をかまえ、真田父子は農耕に狩猟にはたらき、まったく世上とのつながりを絶ったかに見えた。
家来や女たちは組紐の製作にも従事した。いわゆる〔真田紐〕が、これである。
こうした世捨人の生活の裏側では、幸村の指揮によって、隠密たちが縦横に活動をした。
真田の隠密活動は、永年の体験と訓練によって、精妙をきわめていた。
ゆらい、すぐれた間諜網をもつ大名ほど戦闘に勝ち、変転する時代の推移に生き残ったと言われている。
かつて、武田信玄が組織化した間諜網は天下に鳴ったものだ。

信玄があやつる間者、忍びの者のはたらきは古今無類と評された。
この信玄のもとで真田昌幸は働き、戦いつづけてきている。
武田家滅亡後、秀抜な武田の間者たちは諸方に散ったが、真田家へ移った者が非常に多い。
九度山へ主人の供をした家来たちは、いずれも手だれの間者たちであったと見てよい。
事実上の政権は、家康の手にあるとは言え、先の天下人としての豊臣秀吉の遺子・秀頼は、厳として大坂城にある。
真田昌幸ほどの武将が、一も二もなく敬慕のかぎりをつくした秀吉の人間的魅力は、まだ濃厚に、諸国大名や武将たちの心を支配していた。
家康としては、ぜひにも、この〔幻影〕の威力を破砕しなくては、政権の安定がのぞまれない。
（そのときこそ……どちらが破れるかじゃ）
昌幸は、待っている。
九度山から、種々雑多な風体に身をやつした間者たちは間断なく諸方に散った。
これによって、もっとも新鮮な情報が、隠宅で碁ばかりうっている昌幸の耳へもたらされたのである。
徳川方の間者も絶えず、九度山を監視していた。
しかし、真田方のほうが一枚上手であったようだ。
幸村自身、何度も九度山を出て京や大坂のみか関東にまで探偵活動に出て行ったことを、

徳川方では見のがしている。
幸村が九度山を留守にしているときには、奥村弥五右衛門（やごえもん）という者が身がわりをつとめた。
顔も似ているが、姿かたち、歩行の様子まで、幸村と寸分違わぬ弥五右衛門であった。
山陰から森の中から、ひそかに隠宅を見張る徳川の隠密たちも、
「幸村は一度も、九度山を出てはおりませぬ」
と、報告している。
樋口角兵衛が、九度山へ来て、心ならずも真田独自の隠密技術を身につけたことは、彼にとって幸であったか不幸であったか、それは知らない。
（こりゃ、おもしろい）
そのうちに、角兵衛は或種の興奮をもって、この仕事に従った。
戦場で暴れられぬ鬱憤（うっぷん）は、充分に探偵活動によってむくいられた。
行商人やら旅僧やらに化け、京や大坂をうろつきまわり、諸国大名の微妙なうごきや天下の情勢に聞耳をたてることによって、角兵衛は、まるで舞台上の俳優のような愉楽を味わっていたと言ってよい。
もともと大胆で、しかも身のうごきのすばやい角兵衛であるから、かなりの役にもたったが、
「一人では放せませぬ」
幸村が昌幸に言った。

「角めは、二つのことを同時に出来る男ではござらぬ。思いこんだことのみに妄動（もうどう）しかねぬ男で……」
「いかにもな」
だから、角兵衛は、いつも幸村と共に出て行った。
そのうちに、幸村の杞憂（きゆう）が妙なかたちであらわれた。
紐売りに変装した幸村と角兵衛が、京の四条河原で休んでいたとき、その近くで、勧進（かんじん）角力（ずもう）の興行がおこなわれていて、「亀（かめ）ノ甲」という力士と見物人との力くらべが人気をよんでいた。
「あの角力めを打ち負かしてやりたい」
と、角兵衛が言った。
「つまらぬ。よせ」
「どうしてもいかぬとあれば、それがし自害いたす」
「力くらべと自害とが、どこでむすびつくのだ。角兵衛。おぬしは実に妙な男だな」
「どうしてもいけませぬか」
「よしよし。やって見よ」
幸村も苦笑して許可をあたえると、角兵衛はよろこび勇んで、野天の角力場へ駆けて行った。

六

このとき、あの樋口角兵衛が、亀ノ甲に投げつけられ、右の臑の骨まで折られたのは、どうしたことか――。

「世の中のことは、こうしたものだ」

京の裏町の汚ない旅宿へ帰り、唸り声をあげている角兵衛に手当を加えつつ、真田幸村が言った。

「おぬしも、戦場を駆けまわることだけしか出来ぬ男であってはならぬ」

少しは会得するところもあろうか、と、幸村は考えていたのだが、無駄であった。

びっこをひきひき九度山へ帰った角兵衛は、その日から周辺の山野へ出て右足を鍛えはじめたものである。

「今度、亀ノ甲に出合うたら、首をねじ切ってくれる」

せっせと山や野を駆けまわりつつ、角兵衛は何度も叫んだ。

「角めも、もう三十をこえたのか……どうも仕様のないやつではある。年を食えば今少し何とかなろうと思うていたが……」

昌幸も、匙を投げたように言った。

慶長十六年六月四日――。

真田昌幸は、六十五歳をもって九度山に病没した。

九度山へ入ってから十一年目にあたる。

死にのぞみ、昌幸は幸村ひとりを枕頭によんだ。

「家康の首を見ずに死ぬのが心残りじゃ」

昌幸は、喘ぎつつ、

「いまは、秀頼公も徳川に屈しておるが、そのままではすまされまい。と言うのはな、家康は、どこまでも豊臣家の滅亡に意をそそぎ、手を変え品を変えて、戦を仕かけよう」

「はい。豊臣を奉ずるもの少なからず。とても、徳川に屈しきれまいかと存じます」

「どうじゃな、幸村」

「はい?」

「戦起らば軍勢の比は、あきらかじゃ。徳川の大軍にかこまれて豊臣勢は大坂の城にこもるということになろうが……それでも、狸の首はとれるか?　おぬしにとれるか……」

幸村は黙って微笑をした。

蟬の声がたちこめている真昼であった。

幸村が、しずかに昌幸の汗をぬぐってやると、

「おぬしにまかす。わしの野望を、おぬしなら、しとげてくれよう」

「力の及ぶかぎり……」

「そこでじゃ……」

「は――?」

「つまらぬことを、これから申す。聞いてくれい」

昌幸は、目のくらむような庭先の陽光の中に、はらはらと舞っている白い蝶を、しばらく見つめていたが、

「角兵衛はな、わしの子じゃよ」

ぽつりと言った。

「何と……」

さすがに、幸村の顔色が変った。

「おどろくな。間々あることじゃて」

「父上……」

「わしは、妻の妹に手をつけた。久野は愛くるしいむすめでのう。公家の生れにしては気立てが色めいておっての。ついつい、手を出してしもうた」

「そのこと、母上は御承知で……？」

庭をへだてた別棟には、家来たちと共に、久野と角兵衛の母子が住んでいるのだ。

幸村は庭の気配をうかがい、次いで病間の外廊下へ出て見た。廊下をへだてた部屋には、昌幸の妻であり幸村の母である山手どのが臥している。昌幸発病以来、山手どのも健康が思わしくない。

「誰も来ぬよ」

「なれど……」

「母は知らぬ。知っておるのは、わしと久野のみじゃった」

「叔母御から角兵衛へは……？」

「申してはおらぬ。ま、聞けい。わしはな、久野が妊娠だと知るや、すぐさま、樋口下総守へ縁づけてしもうた。こういうことは早いにかぎる」

幸村は嘆息した。

「わしに似ず、おぬしも信之も、身もちが堅くて結構じゃった」

「まさか、隠し子は角兵衛のほかにも……」

「無い……筈じゃが……」

昌幸は苦く笑った。声のない笑いである。

「角めの出来の悪さは、わしも、早くから知っておった。只一つ、あの男の武勇のみは他に絶したものじゃ。ゆえにこそ、わしは、彼の唯一の美点を生かしてやり、その美点の中に彼の一生を終らせてやりたかった。あまりぼろを出さぬうちにな……ところが、いくらけしかけても、いくら角めが捨身の突進を行うても、敵の弾や刀槍は、彼をよけて通った。よくよく運の強い奴じゃ」

「なるほど……叔母御は、よく、角兵衛の血は争えぬものと満足げにおおせられましたが……その血は、父上の血から流れていたものでございましたのか」

「それを、申すな」

昌幸の喘ぎが高まった。

「わしは、すぐに死ぬるぞ」
「母上をおよびいたしましょう」
「よせ。つまらぬことじゃ。息をひきとるところは、おぬし一人のみに見てもらえばよい。女は泣こう。泣かれてはたまらぬ。天より生れ、天に返る自然の道理に、涙など禁物じゃよ」
「はい……」
「白い蝶は、まだ庭に舞うておるか？」
「はい」
「……もう、見えぬわい」
昌幸の喉仏が、つよい痙攣を起した。
「角兵衛を、戦場において死なせよ」
つぶやくように言ったかと思うと、昌幸の満面が硬直した。

七

慶長十九年十一月――。
徳川家康は、二十万の大軍を動員し、豊臣秀頼を大坂城に囲んだ。
真田幸村は豊臣のまねきに応じ、九度山を一夜のうちに脱して大坂城へ入った。
冬の陣と夏の陣にわかれたこの戦役について、くだくだしくのべることもあるまい。

幸村は豊臣軍の参謀総長として、その端倪すべからざる知略をふるい、家康をなやませた。事実、伏見における真田の奇襲部隊によって、家康は危うく首をとられかけたこともある。
だが、戦争の実体は参謀総長ひとりの手のうちに在るのではない。豊臣方の内部にも複雑きわまる派閥のあらそいがあって、秀頼の母・淀君をかこむ大きな勢力が、いつも幸村の作戦の実行に邪魔を入れてきた。
冬の戦が終り、和議がととのい、その間隙に、すばやく、家康が城の外濠を埋めてしまい、豊臣方の戦闘力を半減させてしまったことにも、
「戦うなら肚は据えねばならぬ。老獪な大御所の手にあやつられていながら尚、むかしの威光をふりかざし虚栄を張ってみても、どうなるものではない」
もう、幸村は、あきらめていた。
この上は、いさぎよく亡父の遺志を、来るべき最後の戦闘に発揮するだけのことだと、決意をした。
「馬鹿な!!」
樋口角兵衛は激怒した。
「このような物のわからぬ奴どもと一緒に戦うても仕方ござらぬ。われらのみにて城を脱し、家康めの首を……」
「闇討ちにするというか……」
「いかにも――」

「無駄じゃ」

「いや、出来る」

「大御所は、そのように甘いお人ではない。おぬしにはわからぬのか？　いや、わかるまいな」

「ああ、わかり申さぬ。このまま手をつかねていては、信之公に笑われましょうが――」

「兄が……兄が何で笑おう」

「いや、笑う。笑うに違いない」

「おぬしには、わからぬことよ」

幸村は苦笑していた。

口に出して言ったわけではないが、父子兄弟が敵味方にわかれた関ヶ原合戦のときにも、暗黙のうちに、

「どちらの勢力が勝っても負けても真田一族の血を絶やしてはならぬ」

という理解が、昌幸・幸村と信之の胸に通いあっていたのである。

戦国大名は、一国の主であった。

日本が、いくつもの国にわかれて戦い合っていた時代なのである。

家は、国なのだ。

表面は休戦状態であっても、すぐに次の戦闘への準備が双方にすすめられた。

この間に、信之と幸村は、十五年ぶりで会見することが出来た。

信之は、後詰として京の二条城にあった。

兄弟の会見は、二人にとって母方の叔父に当る菊亭大納言季持や、これも徳川方について大坂表へ出陣をしていた真田信尹（昌幸の弟）などのはからいによって、ひそかに計画された。

ひそかにといっても、これには家康の意志が、ふくまれている。

「あれほどの男を死なせることはなかろう」

家康は、幸村を味方にしたがっている。

味方にしたいということは、敵にしたくないということであった。

来るべき決戦に、幸村の魔神のような作戦・戦闘がどのようなかたちをとってあらわれるか、さすがの家康にも見当がつかない。

自分の首をねらわれるということよりも、自軍の犠牲を家康はおそれた。

何をやってのけるか知れたものではないのである。

年があけて元和元年となった正月十五日の夜に、真田兄弟は東山を背にした八坂の塔の近くにある小野のお通の館で会見をした。

お通は、その才色を世にうたわれ、宮中にもつかえ、秀吉にもつかえ、いまは家康の庇護をうけているという賢婦である。

豊臣方にとって、京は敵地だ。

幸村が、お通の館へ忍びであらわれるまでには関係者の並々ならぬ苦労があった。

兄弟は、会った。

そして信之は、弟の、あくまでも豊臣方に殉ずる決意の牢固たることをあらためて知ったのである。

「秀頼公に殉ずるというが、それのみではあるまい」

と、信之は言った。

「まだまだ、大御所の御首をあきらめてはおらぬようじゃな」

「はあ……」

幸村の双眸が光を発した。

「かなわぬまでも――」

「おぬし。いつまでも合戦の好きな男よな」

「血でござる」

「わしには流れず、おぬしにのみ伝流した父上の血か――」

信之は嘆息をして、

「では、おぬしのせがれだけは、わしのもとへよこせ」

幸村の息・大助は十六歳になっている。

「そうなりましたときには、よろしゅう……」

と、さからわずにうけておいてから、

「ときに兄上……」

幸村が切出した。

「角兵衛めが、独りにて城を脱け出し、行方知れずとなりましてな」

「ふむ……」

「只一人にて大御所の首をとってみせると言い置いて行きました」

「困った奴。あやつ、何歳になる？」

「四十五歳になります」

「早や……そうなるのか」

「当然ではございませぬか。兄上は五十歳。私めは四十九歳」

「夢のような気もする」

「ときに、兄上」

「何か？」

「角兵衛には、われらの同じ血が流れておりましたぞ」

「何……？」

「あやつ、父上が叔母御に生ませた子でござった」

「まことか、それは――」

沈着な信之も、しばし茫然とした。

「私めの手もとにおりますならば、私一存にて、いかようにも取りはからいましょうが……いまは野放しの狼一匹。兄上にも、このことをおふくみおき願いとうござる」

「角兵衛は、そのことを知っておるのか？」
「知ってはおるまいかと思われます」
「して、叔母御は――」
「九度山を下る折に、他の女どもと共に、しかるべき者をつけ、しかるべきところへ隠しありまする。いずれは兄上のもとへ送りとどくことと存ずる」
「それは、ひきうけた」
「安心いたしました」
この一夜をもって、兄弟は永別した。
ふたたび戦がはじまった。
この夏の陣で戦死をとげた幸村のはたらきが、いかに凄烈なものであったかは、決戦の五月七日、家康本陣が真田部隊の猛襲にくずれたち、家康は身をもって逃れたことを見ても知れよう。
世に戦火が絶えた。
家康は、余命の一日一日を戦後の経営へかたむけつくした。
樋口角兵衛の行方は、まったく知れなかった。

八

家康は、上田の城を信之に返してくれた。

関ヶ原以来、上田城は幕府の管理下にあり、信之は沼田城に在って上田領の政事をも行っていたわけである。
間もなく、家康は、駿府城に七十五歳の生涯を終えた。
真田信之は、妻の小松や長男・信吉などを沼田へ残し、みずから上田城へ移って城下町の再建に熱情をそそいだ。
すでに、九度山にあった久野の方はじめ、幸村の妻やむすめたちも、上田へやって来ている。
このことについては、家康が没する前に、信之は許可を得ていたので、幕府もうるさいことを言ってはこなかった。
久野は、もう六十をこえていた。
「おう、おう。この年になって上田の城に住もうとは思うても見なんだ。なつかしや、ありがたや」
久野は、まだ矍鑠たるものであった。
信之が、この叔母に、
「角兵衛がことは、すべて聞き及びまいた」
と、事情を打ちあけると、久野はたじろぎもせず、
「大殿が左衛門佐（幸村）どのにもらされたとなれば、仕方のないことでありまするな」
恬澹としたものである。

戦国のころの女たちは、これほどのことに気を病むことはしない。そのような弱い神経では生きて行けぬ時代でもあったし、むしろ武家の女たちは、女の特質を武器として男に負けぬ活力を発揮し、堂々と生きぬいて行ったのである。
「角兵衛も、まだ生きておりましょう。お心にかけられたし」
わかった以上、信之の異母弟になるわけだから、角兵衛の身をたててやってもらいたいと、久野は胸を張って言い出した。
「心得てあるゆえ、御安堵めされ」
信之は、この老いた叔母を大切にあつかった。
元和四年の春となった。
ふらりと、樋口角兵衛が上田へあらわれた。
「母が生きてあるか——おりゃ、母に会いに来ただけじゃ」
城門で名乗りをあげ、角兵衛は母の住む館へ通された。
少し、びっこをひいていた。
亀ノ甲に折られた右足が、である。
「おう、おう。無事であったか」
久野のよろこびは一通りではない。
髭むじゃらで蓬髪。垢じみたねずみ色の衣服を着流しにして素足に藁草履という角兵衛の姿は、いかにもむさくるしかった。

が……幸村から強奪した来国俊の一刀は、依然、角兵衛の腰に、どっしりと横たわっていた。
久野は、四十七歳になった一人息子を、すぐさま信之に会わせようとした。
「厭でござる!!」
角兵衛は吐き捨てるように、
「だれがくそ。あのような卑怯者の禄を食むものか」
どうしても言うことをきかない。
一目、母に会えばもうよい、すぐに上田を出て行くと言い張り、座を立ちかけた。
たまりかねて、久野が言った。
「待ちやれ。そなたに言いきかすことがあるぞえ」
「何でござる、母上——」
「されば……」
ついに、秘密をあかした。
「ふうむ……」
唸ることしばし、角兵衛も、さすがにおどろいたらしい。
ややあって、
「なるほど……おりゃ、亡き伯父上を伯父上とは思えなんだ。そう言われてみると、やはり、おりゃ、わが父のごとく伯父上を考えておったのだな」

めずらしく感傷をむき出しにした声をつまらせ、角兵衛は、ひとりごちたものだ。
「ならば、信之殿に会いましょうず」
今度は胸を反らし傲然（ごうぜん）と言った。
「なれども、角兵衛。このことは信之殿に明かしてたもるなや」
「いけませぬか」
「そなたをひきとめようがため、思わず口走ったことじゃ。母の身にもなってたもい」
かきくどいたのではない。厳然と言ったのである。
大名の家の、このような秘密が、いま突然に表向きとなったのでは、久野の義理が立たぬのである。
角兵衛は承知をした。
こちらで言わなくとも、向うでは知っているのだ。
しかるべき待遇があるべき筈（はず）、と思ったからである。
で、信之に会った。
「ほう――やつれもせず、いかめしいのう」
信之が微笑を投げた。
「首をはねる前に、大御所（おおごしょ）に病死をされてしまいましたわい」
と、角兵衛は肩をいからせた。
ちらりと信之が眉（まゆ）をひそめたが、

「待て」
すぐに筆をとって墨付（すみつき）をしたためてくれた。
「これで辛抱せよ」
「は――」
墨付をうけとり、角兵衛が見た。
禄高二百石で奉公せよという墨付であった。
「おうかがいつかまつる」
髭をぴりぴりとふるわせつつ、角兵衛が膝（ひざ）をすすめた。
両眼が光り、信之を睨（にら）んでいる。
「何か？」
「この文字は、二百石、と読めますが――」
「いかにも、その通りである」
「書き間違いではござらぬな？」
「いかにも――」
ぱっと、角兵衛が突立った。
そのときには、音をたてて墨付が引裂かれていた。
「二百石の捨扶持（すてぶち）にて、この樋口角兵衛をお抱えある気か。片腹痛し」
角兵衛が、わめいた。

「これ、角兵衛。これよりは戦の無い世の中となるのだぞ。われら大名は、何よりも民を養い、国をおさむるために生きねばならぬ。槍鉄砲よりも国を肥やすための財力をつちかわねばならぬときじゃ。わからぬか」
「わかり申さぬ」
「おぬし、何のために、年を食ろうたのじゃ」
「もはや問答は無用でござる」
引裂かれた墨付の紙片が書院いっぱいに振りまかれた。
角兵衛は、風のように去った。

九

樋口角兵衛が、一転して徳川幕府直属の隠密となったのは、この後であったかと思われる。
(よくも、のめのめと、このおれの頭を二百石で下げさせようとしたものだ。信之というやつの肚の底は、正にわかった。槍鉄砲よりも金銀をためこむが武士の道じゃとほざきおった。何というやつだ。ああ、亡き伯父上……いや亡き父上は、あのようなせがれを恥さらしに生き残して、さぞ地下に流涕しておられような)
信之に対する嫌悪は、むかしからのものである。
上田へ戻ったのは、母の顔を見たいということのみにあった。
それが、意外な秘密を打ちあけられ、

(ならば、おりゃ信之に屈従するのではない。当然のこととして禄をうけてよいのだ)
落魄の身の虚勢へ名目がついたことで、角兵衛は信之の前に出る気になったのである。
それなのに、二百石とは……。
そのころの真田家は九万石であった。
(少なくとも五千石は、くれてよい)
家老職に取立てられても不思議はない、と、角兵衛は思ったのに、
(ようも恥をかかしおったな、信之め――)
嫌悪が憎悪に変った。
上田を飛出した樋口角兵衛の動静は、すぐに幕府へつたわっている。
上田城下には、幕府の隠密が、いくらも入りこんでいた。
信之は、城下町の繁栄を願い、どしどしと他国から商人たちを誘致した。
商・工の種々雑多な職業にたずさわる隠密たちは、容易に城下へ潜入することが出来たのである。
信之の、もっともよき理解者であった家康が死ぬと、幕府が真田家を見る眼も変って来た。
(これからは、風当りも強くなろう)
と、信之も覚悟はしていた。
権謀術数ただならぬ戦乱の世に、信之の忠誠を、家康は少しもうたがわなかった。
関ヶ原の戦に敵方へまわり、家康の作戦を狂わせたほどのはたらきをした父と弟を、信之

の嘆願ひとつで、
家康は命を助けてくれた。
それだけに、二代将軍・秀忠も、これを補佐する重臣たちも、
「真田には目を放せぬ」
警戒は、きびしさを加えるばかりとなった。
もともと、秀忠は真田家をきらいぬいている。
昌幸・幸村がこもる上田城を、ついに落し切れず、大切な関ヶ原への参戦におくれて、父の家康から烈しい叱責をうけたものだ。
その昌幸や幸村の遺族たちの面倒を見ることまで、信之は亡き家康からゆるされている。
秀忠の眼から見ると、真田信之という大名は、偉大な亡父の愛寵を楯にとって、どこまでもつけ上って来るようにも見えた。
徳川幕府も、諸大名を力によって征服した政権である。
しかもまだ、豊臣家ほろびてより年月も浅い。
幕府は、神経を尖らせ、諸大名の謀叛をおそれて、複雑な諸制度を次々に発令した。
同時に改易（領主の入替え）や取りつぶしを容赦なく行い、残存する諸大名の出城（本城以外の小さな城）は、くまなく破壊してしまった。
諸大名への監視は、巧妙で陰険で苛酷なものとなった。

隠密が探り出した資料によって、幕府は大名たちの動静を、いつも、完璧に知りつくそうとしていた。
「樋口殿ではないか。よう生きておられたものだ」
上田を飛び出した年の秋の或日に、角兵衛は声をかけられた。
伊勢国・安濃郡の産品という村にある置染神社の境内においてである。
声をかけたのは、もと真田の臣で、冬の陣の直後に行方不明となった羽田長右衛門という男であった。
むろん、角兵衛は流浪の旅をしていたのだ。
境内の木立に、つよい初秋の陽ざしをさけ、うつらうつらとまどろんでいたのである。
「おのれ!!　長右衛門。よくも、陣中を逃げたな」
はねおきて、角兵衛は長右衛門を投げ倒した。
「待たれい!!」
倒れつつ、長右衛門は体をまるめ、毬のように飛んだ。角兵衛の手がとどかぬところまで逃げて、ぽんと立ち、
「わしも、そこもとと同じじゃ」
と言った。
「何――」
「ひとり、大御所の首をねらうつもりであったのだ」

「そ、そうか……」
「うまく行かなんだが……」
「残念であった」
「ま、語り合おうではありませぬか」
「うむ……」
長右衛門は、かなりととのった服装をしていて、血色もよく、あぶらぎっていた。
「こうなると、憎いのは信之公でござるな」
と、道を歩みつつ、長右衛門が言う。
「いかにも――」
「このままには、しておけませぬな」
「いかにも――」
角兵衛の貌は、怒張していた。
「いかにも、このままでは、父上も……いや伯父上も幸村殿も、浮かばれまいと思う」
「そこでござるよ」
「無念である」
「いかさま――」
二人、仲よく旅をつづけた。
一年ほどして、樋口角兵衛が、尾張六十一万九千石・徳川中納言義直に召抱えられたとい

う噂が、信州・上田へもきこえた。
徳川義直は、現将軍・秀忠の弟である。
「ほほう……角兵衛がのう」
真田信之は、家老の小山田壱岐守に、
「あの男の武勇も、まだすたれてはおらなんだようだ」
と言った。
「失態をおこさぬとようござるが……」
小山田は気づかわしげに、つぶやいた。
小山田壱岐守は、信之の姉を妻にしている。真田家重代の家老であった。
信之も、小山田にだけは、角兵衛出生の秘密をあかしている。
となれば、小山田にとっても角兵衛は義理の弟ということになるのだ。
温厚で情味のある小山田壱岐守は、このことを知ってから、角兵衛の身を案じ、久野への心づかいも只事ではなくしてやっている。
城外・方宮に百石の領地を久野へあたえ、小者や下女をつけて久野を居住させるよう、信之に進言してくれたのも小山田であった。
失態をおこさねばよい……と案じた小山田壱岐守の言葉が現実のものとなったのは、間もなくのことであった。
角兵衛は、名古屋城中の溜部屋で、同僚と共に双六の賭事をやり、それがもとで喧嘩とな

り、同僚二名を斬って、尾張を脱走したという知らせが、上田へ入った。
「捨ておけ」
信之は、苦々しげに言った。
「もはや、樋口角兵衛と、わが真田家とは何のかかわり合いのなきことを公儀へ届け出よ」

十

羽田長右衛門は、昌幸の代から真田家に仕官した男だ。
真田の家来となってからの戦功も多い。
九州・熊本の牢人というふれこみであったが、彼も、徳川が真田へ潜入させた間者の一人なのである。
大坂落城前に、長右衛門が脱走した理由も、これでわかる。
「憎みても余りあるは信之公じゃ」
長右衛門と角兵衛は大いに共鳴をした。
むろん、長右衛門の、たくみな煽動と誘致があったからである。
「よし。こうなれば……」
という気に、角兵衛はなった。
こうなれば、信之を手ひどい目に会わせてやろう、それでなくては気がすまぬと決意をした。

「わしも、その気じゃ」
すかさず、長右衛門も言う。
長右衛門は、角兵衛を江戸へ連れて行った。
老中・土井利勝の屋敷で、角兵衛は、はじめて、家康股肱の重臣といわれた利勝に会った。
長右衛門の手引きによるものである。
幕府が、もっとも知りたがっていることを、角兵衛は申したてた。
大坂戦役の休戦中に、信之と幸村の兄弟が、京都で密会を行ったとき、角兵衛は幸村を乗せた舟を伏見まで護衛していたのだ。
「密議の内容は知らぬのか？」
と、土井利勝が訊いた。
「それは、存じ申さぬ」
「ふむ……ま、それのみにても……」
それだけのことでも充分だ、と、利勝は思った。
敵味方に分れた兄弟が、決戦の前に密談をとげているということだけで、土井利勝が打つ芝居の種に不足はない。
この種をどうふくらませるか、利勝には成算があった。
「角兵衛。苦労であった」
密告の報酬として、角兵衛は尾張家への仕官がかなったのである。

角兵衛の申したては書類になり、そこへ、角兵衛は署名血判をして、利勝に差し返した。
(信之め、今に見ておれ!!)
裏切ったという気持は少しもなかった。
(血を分けた弟のおれに、二百石とは……)
その忿懣(ふんまん)のみであった。
尾張家に一年いた。
賭事が原因で斬捨てた同僚二名も、角兵衛同様の新参者である。
逃げた角兵衛の前に、また、羽田長右衛門があらわれた。
「上田へ帰れ」
長右衛門が言った。
「馬鹿(ばか)な——」
「このままでは尾張の討手にとどめを刺されようがな」
「かまわぬ」
「おぬしの母御は、まだ達者なそうじゃ。会いたくはないか」
「そりゃ、会いたい」
「戻(もど)れ。あとは、うまくしてつかわす」
一年見ぬ間に、長右衛門の声も言葉づかいも全く変っていた。
有無を言わせぬ冷やかな威圧をうけて、角兵衛は怒った。

「長右衛門。きさまは、ようも、そのような口をおれにきけるな」
つかみかかろうとする角兵衛の右腕が宙に泳いだ。
夜の街道である。
その夜の闇(やみ)の中へ、角兵衛の体が、もんどり打って投げ飛ばされていた。
首をしめられ、よだれをたらしつつ、角兵衛は、しびれかかる脳裏に、長右衛門の声をきいた。
「きさまは、真田を裏切ったのだ。証拠は御老中の手のうちにあるのだぞ」
「む……むう……」
「きさまの裏切りが真田に知れたなら、きさまの母親は、どうなる? どうなると思うか」
「く、くく……は、放せ」
「信之公へのうらみは、はれたか?」
「は、はれぬ」
「まだ憎いか?」
「憎いとも……」
「よし」
ふわりと、長右衛門の手がゆるんだ。
闇の中から胴巻が、角兵衛の頭上に落ちて来た。
「上田へ行け。あとの指図は、追々にいたそう」

「長右衛門……」
「さらば……」
声が消えた。
信州へ向かう樋口角兵衛には、尾張家からの追手もかからなかった。
(よし)
と、角兵衛の心もきまった。
公儀隠密として生き、徹底的に信之を苦しめてやろうと決意したのである。
道中で、角兵衛は絶えず、羽田長右衛門の無気味な視線が、どこからか自分を見つめていることを知った。
道で、旅宿で、音も気配もないうちに、角兵衛は長右衛門の声をきいた。
(こりゃ、おもしろい!!)
かつて、九度山にいたころ、幸村と共に姿を変え諸方をめぐっては、真田の残党たちと連絡をたもち、隠密活動を行っていたときの快味と刺激を、角兵衛は想起した。
(信之め、今に見ておれ)
である。
上田城下へ入った。
母の居宅をさぐり出し、そこへ出かけた。
「まあ、角兵衛ではないか」

久野は、もう七十に近い。
角兵衛も五十歳になっている。
「久しゅうござる」
「尾張家へ折角に仕官したそうな……それなのに人を殺めたとか……」
「こなたへも知れてありましたか?」
「さいわい、殺めた相手に落度あり、しかも賭事の上のこととて、尾張家でも内聞にしようということであったそうな」
早くも公儀の手がまわったのだな、と、角兵衛は北叟笑んだ。
「なれども、このたびは信之殿もお怒りじゃそうな。角兵衛との縁は切れたと、公儀へもお届けあったというわえ」
「申しわけなし」
神妙に角兵衛は、ひれ伏し、泣いた。
号泣である。
久野は、目をみはり驚愕していた。
このような息子を見るのは、およそはじめてだと言ってよい。
(角兵衛も、五十じゃものなあ……)
殺伐で、傲岸な気性も折れたのであろうと、この母親は見た。
翌々日、久野はみずから上田城内へ角兵衛を連れて行き、信之に謝罪をもとめた。

ひれ伏した角兵衛を見て、信之は、おだやかな声で、
「禄はやらぬぞ」
と言った。
「はっ――」
「母御へ孝養をつくせ」
「はい」
「嫁でも迎えよ」
「は……」
それですんだ。
信之が奥へ入った後で、小山田壱岐守があらわれ、
「角兵衛。よかったのう」
心から祝ってくれたものだ。
「何事も、つつしめ。殿も黙っておくまい。おぬし次第じゃ」
「はい」
素直である。
方宮村の母の屋敷で、角兵衛は暮すことになった。
「まるで、人が変った」
「牢人暮しの苦しさが、よくよく身にこたえたと見ゆるな」

角兵衛を知る者の評判も、よい方へかたむいて行く。
「たまには、顔を見せよ」
やがて、信之からも声がかかるようになった。
禄は貰えぬが、自由に城内へ出入りすることもゆるされたし、角兵衛もまたすすんで、
「御供つかまつる」
と、沼田の妻子のもとへ出かける信之の行列の警護に加わることもあった。
（そのうちに、身を立ててやってもよい）
と、信之も考えはじめたようである。
角兵衛の孤独で陰鬱な放浪生活にきざまれた年輪は、するどい狡智を生んだ。
屈服することが、信之に復讐することになるのだ。
（このおれを二百石で……）
あのときの口惜しさは忘れられるものではない。
（血を分けたこのおれを、二百石で……）
なのである。
角兵衛は、幕府からの指令にもとづき、知れるかぎりの真田家の内情を送りとどけた。
（なるほど……）
角兵衛も舌をまいた。
三十年も前から、親子二代にわたって真田家へ潜入している隠密が三人もいるのだ。

城下の商人の中にもいる。
彼等との、ひそかな連繋をもつようになると、角兵衛の愉悦は倍加した。
(信之め。何も知らぬのだ)
信之の微笑が深まるにつれ、その微笑へひれ伏すたびに、
(今に見ておれ)
角兵衛は胸のうちに叫んだ。

十一

元和七年十月——。
真田藩士・馬場主水というものが上田を脱走した。
主水は、江戸へ行き、幕府へ訴え出た。
主水の訴えは、次のようなものであった。
一、大坂合戦の折、信之の密命によって、徳川方の真田勢の一部が、豊臣方、すなわち幸村の部隊を助けた事実がある。
一、豊臣方の敗戦が確定したとき、信之は、大坂城内にある弟幸村にたのみ、幸村の守る出城へ、わざと信吉・信政の二子を突撃させ、一番乗りの手柄をたてさせた。
一、どちらが勝っても負けても、真田一族の存続をはかる相談が、ひそかに、信之と幸村

の間に行われた。その密会の場所は、京の小野お通邸においてである。
たちまちに、真田家の江戸屋敷へ通告があり、江戸家老の木村土佐が、江戸城内において老中の訊問をうけた。
馬場主水も、幕府が潜入させた隠密である。
主水の訴えは、少なくとも三カ条のうち二カ条は捏造であった。
これに対し、木村土佐の弁明は堂々たるものであって、いささかも老中の質問に切りこませる余地をあたえない。
それはまた、土井利勝も承知の上だ。
残る一条こそ、樋口角兵衛という生証人あっての〔訴え〕なのである。
すでに、利勝は、京の小野お通から、
「菊亭大納言様よりのおたのみにて、たしかに、真田御兄弟の密談に席をあたえました」
との自白を得ている。
この一条だけが真実なら、前の二条も真実となる。いや、真実にしてしまえる。
最後まで家康の首級に迫った幸村と、家康に従っていた信之との密談があったということだけで、真田家を取りつぶす理由は、強引に成立するのである。
「この一条については、どうじゃ?」
ぐさりと、土井利勝が切りつけたとき、木村土佐の面には微少の狼狽も見えなかった。

「……？」
いぶかしげに、土井利勝が木村土佐を見やったとき、
「そのことは、まことにござります」
木村家老は、よどみもなく言ってのけた。
「何――」
利勝は、戸惑った。
真田の家老なら言下に否定すべきである。
そうなれば、徐々に、利勝は首をしめて行くつもりであった。
「ごらん下されましょう」
と、木村土佐が一通の書状を差し出した。
「亡き大御所より、われらが主にたまわりたる御書状にござります」
「何と言う……」
利勝は、その手紙をひろげて見て愕然とした。
まぎれもなく、信之に当てた家康の筆跡であった。
――幸村に会え、と書いてある。
――手筈はととのえてつかわす、と書いてある。
――幸村ほどの男を死なせては惜しい、と書いてある。
「むむ……」

かすかに、土井利勝はうめいた。
表情は、うごかない。
ややあって、利勝は、書状を木村土佐に返し、
「疑い、はれた」
と、苦い顔で言った。
「訴人めにお会わせ下されたし。馬場主水をこの場に――」
つめよる木村土佐へ、にべもなく土井利勝は、
「主水めは追放いたした」
言い捨てて、去った。
家康の書状を、このときまで温存し、このようにつかいこなしたのは、すべて、真田信之の卓抜した器量によるものであった。
「公儀の隠密なぞ、いささかも恐れることはない。来たければ来い。わしの為すことをすべて公儀の耳へ知らせよ。わしは只、世の平穏をねがい、領国の繁栄に心をつくすのみじゃ」
かねてからの、これが信之の信念である。
それにしても、まさか樋口角兵衛の申告が素因となって、このときの喚問がなされた、とは、信之が思っても見なかったことだ。

十二

その翌年の元和八年八月——。
真田伊豆守信之は、幕命によって、江戸へよびつけられた。
上田から、信州・松代へ国替えを申渡されたのである。
表向きは、栄転であった。
沼田と上田を合せて九万石の真田家を、沼田はそのままに、松代へ転ぜしめて十三万石と増えたからだ。
〔加恩〕という名目である。
これは受けざるを得ない。
しかし、幕府の意図は明白であった。
実りもゆたかな上田の領地であり、北国街道の要路に当る上田城である。
それに反して、松代の領地は荒廃がひどく、表向きは十万石でも、実収は七万石程度のもので、表街道に面した城下町ではないから商業の繁栄ものぞまれぬところだ。
栄転という名目で、左遷したわけだが、
「ありがたき仕合せに存じ奉る」
信之は、老中・土井利勝の申渡しを受けた。
桜田の屋敷へ戻った信之は、家老の木村土佐に、

「家来どもの怒りを押えよ。これよりは家中八百余人、いや小者・下人を入れて二千余人の家来どもと、その家族の命運を守ることのみ——もはや、徳川の天下は、ゆるぎなきものとなっておるのじゃ」
しずかに言った。
同年十月十九日に、上田城を発した真田信之は、松代へ移った。
三十余年にわたる真田の善政を惜しむ領民たちの号泣が、行列を包んで止まなかったという。
樋口角兵衛も、母と共に松代へおもむいた。
新しい真田の領地は、上田から約十里。千曲川を北上し、善光寺平にのぞむ城下町を中心にした四郡二百余村である。
松代の城下町の北方一里にある柴村に、小さな隠居所をたててもらい、久野と角兵衛は住むことになった。
信之が移る前の松代城主は、酒井忠勝であり、酒井は出羽国・鶴岡へ国替えとなり、その後へ真田家が入ったわけだ。
新領主としての治政は、むずかしい。
人情風俗のことなる土地の領民を新たにおさめるのだから、移封後三年は、治政もととのわない。
けれども、上田と松代は同じ信州の内でもあったし、真田の善政は松代の領民たちの耳へ

も古くから伝わっている。
むしろ、領民は双手をあげて新領主を迎えたと言ってよい。
「松代を日本一の領国にしてみせよう」
信之も、新しい領地への経営に気負いを見せ、家来たちをよろこばせた。
この年の十二月五日の未明に、久野の方が病没した。
ときに六十九歳というから、天寿を全うしたと言えよう。
死の前夜、久野は、五十二歳になった息子をよびよせ、
「明日は死ぬるぞえ」
と言った。
「は……」
角兵衛も、うなずく。
「母上には御苦労のかけ通しでおざった」
「今さら、何のいのう」
「申しわけござらぬ」
「その言葉は、殿に申されよ」
「は……」
「信之殿の、われらにおかけ下された仁慈のこころを忘れてはならぬぞえ」
角兵衛は答えなかった。

(このおれを、わずか二百石の捨扶持で……)
忘れてはいない。
馬場主水をあやつっての計画が見事に失敗をしたことに、角兵衛は無念をこめていたのである。
それ以来、幕府から角兵衛へ対する指令は、まったく途絶えていた。
何となく無気味でもあった。
あのとき、いざともなれば生証人として、角兵衛は江戸へ駆けつける手筈になっていたし、そのときは、母の身も共に江戸へ移されるという幕府の指令があったものである。
「角兵衛……」
久野が、ふるえる手をさし出し、
「この手を握ってたもれ」
と言う。
角兵衛が母の手をつかむと、久野は、
「あわれや。五十をすぎて尚、妻も子もなく、わが家もなきそなたじゃのう」
「…………」
「世は変った。私は、そなたの武勇が戦場にはたらき、真田家の栄えのための一助ともなれかし、それのみにて、そなたの男一匹の面目は立つと思うていたが……いまは戦も絶え、そなたも老いた」

何の、と角兵衛は無理な笑いをうかべて見せた。

(母上は、おれの隠れた使命を御存知ないのだものな)

と言って、うちあけるわけには行かない。

これからも自分が公儀隠密として、真田家にあることを知ったら、母は、どんな顔をするだろう、と、角兵衛は思った。

「角兵衛。言いのこすことがある。あたりに、人はおらぬかえ?」

ややあって、久野が、ささやいた。

角兵衛は、うなずいた。

病間の炉に、薪が、あかあかと燃えている。

外は、雪であった。

「よう聞いてたもれ」

久野の灰色に沈んだ面へ、血がのぼってきた。

「母の恥をうちあけよう。終るまで、黙って聞いていてたもい」

夜が明け、母の死顔を見つめていたときの樋口角兵衛は、まさに、茫然自失していた。

十三

翌日は、雪晴れとなった。

信州でも、このあたりは雪が浅い。粉のように、さらさらとした雪の質なのだ。

樋口角兵衛が、小山田壱岐守の屋敷へあらわれたのは、昼近くなってのことだ。

小山田老人は眼を病んで、頃日は出仕もしていない。

病間へ通った角兵衛は、母の死も告げずに、

「おん目の患いは、いかがでござるか?」

と訊いた。

「見えなくなるばかりじゃ。右の眼は、ほとんど見えぬ」

「何やら、人の活目玉さえあらば、見事に治癒して見せんと、医者が申したそうで」

「聞いたか。は、は、は——あれは、医者めの冗談じゃよ」

「こころみてはいかが?」

「馬鹿な——誰の活目玉を貰うのじゃ」

小山田がこう言ったとき、

「それがしの目玉、御役にたてば——」

あッと言う間もなかった。

小山田壱岐守が手をのばしたときには、角兵衛が抜いた小柄に、角兵衛の眼球が剔出されていたのである。

「か、角兵衛……」

その小柄を小山田の枕もとへ置き、角兵衛は走り去った。

これと同じ時刻に、久野につかえていた侍女の寿賀というものが、角兵衛から真田信之に

あてた書状を持ち、別の家老・矢沢但馬の屋敷をおとずれている。

「可笑しなことをするやつ。角兵衛は在宅なのか?」

「はい。今朝、久野の御方さま、お亡くなりあそばしまして……」

「何――なぜ、早く、それを申さぬ」

何のことかわからぬが、すぐに、矢沢但馬は城へ出仕をした。

「角兵衛が、わしにか……」

矢沢から受けた書状を、信之は、ひろげて見た。

ずっと重く、厚い手紙であった。

この手紙を読み終えたとき、矢沢但馬の命をうけて、久野の隠居所へ走った家来が城へ駆けつけ、

「樋口角兵衛殿、久野の方さまの枕もとにて切腹いたしおりまする」

と告げた。

「何じゃと――」

矢沢但馬が腰を浮かしかけると、

「さわぐな」

信之が、角兵衛の手紙を巻きおさめつつ言った。

「あやつも母を想う心のみは厚く、深かったようじゃ」

しばらくして、小山田壱岐守も登城し、角兵衛の所業を語った。

「気が狂うたのであろう。母の死が、あやつの心を狂わせたのじゃ」

事もなげに、信之が言った。

哀しい狂乱である。

「あわれな……」

「あれほどの武勇の士の末路がこれ、と思うと、以前の暴慢ぶりをも忘れるほどな……」

と、家中のうわさにも、何かしみじみとした哀悼の匂いがただよっていたようだ。

信之が、小山田壱岐守に、

「おぬしが、あの母子へかけてやったいつくしみを、角兵衛も身にしみてありがたく思うていたのであろう。なればこそ、おのれの眼球をえぐりとって見せた。気の狂うたあやつが、おぬしへの精一杯な、最後の礼ごころでもあったのじゃ」

これより三十六年後の明暦四年に、真田家で騒動が起った。

ときに、真田信之は九十三歳の高齢に達し、かつて久野と角兵衛が住んでいた柴村に広大な隠居所をかまえ、家督は息・信政にゆずり渡していた。

騒動は、この信政の死によって起った。

信政の子の右衛門佐は六歳の幼童にすぎない。

真田十万石は、分家の沼田三万石を継いでいた真田信利の手に渡ろうとした。

信利のうしろには、幕府老中・酒井忠清の暗躍があり、松代十万石は、この騒動のうちに、ふたたび、幕府の執拗な高等政策によって破滅せんとした。

九十三歳の真田信之は、このときも、家中や城下に蠢動する幕府の隠密を押え切って危機を乗りこえ、無事に、家督を孫の右衛門佐にあたえることが出来たのである。

「役に立ったわい」

騒動がおさまり、幕府の陰謀に打ち勝ったとき、はじめて、信之が矢沢但馬と、寵臣の伊木彦六に語った。

「樋口角兵衛は、おのれの知るかぎりの、公儀隠密の仕組みを書きのこして腹切ったのじゃ。三十何年も経って、あの角兵衛の手紙で知ったことが、役に立とうとは思わなんだわい」

この騒動で、信之は、家来として潜入していた公儀隠密を、そ知らぬ顔であやつり、幕府の陰謀と闘った。

そのことについて、角兵衛の遺書がどのように役立ったかは、信之の胸中にあって、うかがい知れるものではなかったが、矢沢家老も伊木彦六も、これを聞き、非常におどろいた。

「狂気では、なかったのでございますな」

「いかにも――」

矢沢但馬にも伊木彦六にも、信之が語らなかったことが一つある。

角兵衛は、あの遺書の中で、母が死の前夜に語ってくれたことを信之に報告している。

あの夜、久野は角兵衛に、こうもらした。

「亡き大殿が、私に生ませた子が、そなたであったなどとは大嘘じゃ……母が嘘を吐いたのじゃ。大殿のお手がついたことはたしかであったが……そなたは大殿の子ではない」

まっ青になった角兵衛に、久野は、

「私は、甲斐の真田屋敷にあったころ、武田家中の若ざむらいで、小畑亀之助というものと忍び合うた。勝頼公の御供をして天目山に討死したその男が、そなたの実父じゃ」

と言った。

「その最中に、大殿がお手つけられた。若いころの私は、遊びごころのはげしい浮かれ女であってのう」

と言った。

「亀之助の子をはらんだと知ったとき、すぐに、私は、大殿に申しあげた。名もない若ざむらいの子では、そなたの身が立たぬ。それが証拠に、大殿から幸村殿へ、そして信之殿へと……あばれもののそなたの命運が無事につながれて来たのじゃ。このことを忘れまい」

と言った。

「このことを誰にも、もらしてはならぬ。もらさずして殿（信之）の御恩を忘れず、殿のおんために命をかけてはたらいてくりゃれ、と言うても、もはや、そなたのはたらこう場所も無い世の中となったが……」

と、久野は皺だらけの面に浮いた死の影の中から、

「母は、女ながらに、おもしろう世を送ったわえ……あわれなは、そなたじゃ」

にこりと笑い、

「早う、嫁を迎えてたもい」

と、それが最後の言葉であったという。

——角兵衛が生涯は、まことに腑抜けとも哀れとも、言語に絶し申し候。今となりては、只々、母をうらみ申すべく候……。

と、角兵衛は手紙に記している。

このことを主君・信之から聞く数年前に、伝説として幾度も耳にした樋口角兵衛の所業を、伊木彦六は画に描いたものであろう。

彦六が、すぐれた画才を駆使して、老年の真田信之をなぐさめたことは、かなり知られている。

信之は、騒動が解決して間もなく、改元のことあって万治となった同じ年の十月十七日に急死をした。

思うに、老軀をひっさげて幕府と闘った疲労が、はなはだしく健康をそこねたものと思われる。

信之の死後、伊木彦六は僧籍に入って〔信西〕と名をあらためた。

伊木信西の残した仏画や仏像は、今も、信州の其処此処の寺に散見することが出来る。

〔「別冊小説新潮」昭和三十八年十月〕

幻影の城

一

沼田万鬼斎顕泰が、双眸をかがやかせ、
「あの女の……あの女の体の中には、小さな小さな可愛い蛇どもが、無数に泳ぎまわっておるわえ」
と、いった。
このとき万鬼斎は、豪勇無双をほこる武将としての資格をうしなったといえよう。
「あの女を城に連れ帰る」
と、いった。
「あの女を、ゆのみと名づけよう」
と、いった。
「新左衛門。あの女の親もとは誰か？」
と、訊いた。
「私めでござりまする」
と、金子新左衛門がこたえた。
「何……」
「あの女めは、私めの妹にござりまする」

「ふむ、そうか。よし、おぬしも城へ来い。どうじゃ」
「かたじけのうござります」
新左衛門は、こうして、わけもなく初期の目的を達したことに、
（あまりにも、うまくはこびすぎる）
雀躍りした。
金子新左衛門は、上州・追貝の土豪で、沼田の領主である万鬼斎顕泰の支配をうけていた。
この年——天文十五年の秋に、万鬼斎が、追貝と山ひとつをへだてた〔川場の湯〕へ滞在し、大がかりな狩猟をおこなうという触れを聴いたときから、
「妹。よいか、よいな」
十八歳になる妹に念をおした。
狩りがはじまると、万鬼斎は、金剛神の彫刻を見るようなたくましい体軀を山や谷に駆使して獲物を追い、日が落ちると谷間に湧く温泉にひたった。
金子新左衛門の妹が、万鬼斎の身のまわりの世話をやいた。
「村の女でござりまする。おつかい下されましょう」
とだけ、新左衛門はいった。
万鬼斎が、丸太づくりの浴舎へ入ると、むすめは共に入って万鬼斎の体を洗った。
万鬼斎は瞠目した。
むすめの背丈は高く、胸や腕や腰部の野性的な発達が、そのころの女体には見られぬもの

であった。

　このむすめが、腰のものをまとっただけで万鬼斎の体を洗い、もみほごしてくれるのである。精気にみちみちた万鬼斎の腕は、いささかの躊躇もなくさしのばされた。

　次の日から、万鬼斎は狩りにも出なかった。

　沼田万鬼斎が、川場の谷間を引きあげるとき、ゆのみと名づけられた女は、わざわざ沼田の城からはこばせた輿にのり、川場の村を去った。

　むろん、万鬼斎には正室も子もいる。

　だが万鬼斎は、ゆのみの女体におぼれつくした。

　翌年の春になると、金子新左衛門が沼田へ来て屋敷をかまえ、金子美濃守鎮久という堂々たる名までもらい、沼田家の重臣の一人に列した。

　というのも、ゆのみが身ごもったからである。

　この年の晩秋になって、ゆのみは男子を生みおとした。

「平八郎景義と名づけよ」

と、万鬼斎は眼を細めた。

　万鬼斎の正室・阿牧の方は、三人の男子をもうけたが、そのうち二人は早世し、三男の弥七郎朝憲のみが健在であった。

　こうなると、ゆのみの勢力も正室におとらぬものとなったし、金子美濃守も万鬼斎側室の兄ということになる。

　土豪から名ある武将へというのぞみは、すでにかなえられたが、

「妹。ようも男子を生んでくれた」

「兄上はなあ、平八郎が成人したるときの右腕でごじゃりまするぞ」

　兄妹は光る眼と眼を見合せた。

　ゆのみのような女は、男の出世のために身をささげるというよりも、男と同じように〔女〕という武器をもって、いくらでもはたらいてくれようという意気ごみがつよい。

　戦国時代における政略結婚の悲劇の一面には、こうした女たちの烈しい意欲がひそんでいたことを見のがしてはならぬ。

　若いころの沼田万鬼斎は、

「このおれは、沼田にのみ甘んじてはおらぬ。今に見よ!!」

　関東制覇を夢みていたらしい。

　薄根川と利根川の合流地点の台上に城をきずき〔蔵内城〕と称し、万鬼斎は東奔西走し、戦闘のあけくれをくりかえしつつ、やがて上州一帯に君臨した。

　けれども、

「このたびの出陣には、ゆのみを連れて行くぞ」

などといい出すようになっては、万鬼斎の野心も怪しいものとなってきた。

　万鬼斎が、

「今に見よ、今に見よ!!」
と、ゆのみを抱きながら叫んでいるうちに、
甲斐の武田氏。
関東の北条氏。
越後に上杉氏。それに尾張の新興勢力の織田氏などが、見る間に勢力を伸張させてしまい、いまの沼田氏は上杉輝虎（謙信）の傘下にふくみこまれている。
上杉輝虎は、甲斐の武田晴信（信玄）とならんで、天下制圧を目ざすもっとも有力な大名であった。
六十に近い年齢になると、万鬼斎も、
（こうなれば、上杉の手に天下をつかませることじゃ）
上杉に忠誠を誓い、共に沼田家も大きくふくらんで行こうと心をきめた。
このころになると、万鬼斎は、しきりに腰の痛みをうったえはじめた。
馬を駆って戦場にのぞむことをあきらめた万鬼斎は、
「弥七郎に家をゆずる」
と、いい出した。
正室が生んだ弥七郎朝憲は、早世した兄二人と違って強健な体格をもち、名だたる武勇の士である。
永禄十年正月に、朝憲は家督をついで沼田の当主となった。ときに二十八歳であった。

「これで心も安まりましたぞえ」
正室・阿牧の方は、万鬼斎が、ゆのみと平八郎を溺愛することははなはだしいので、ひそかに案じていたものらしい。
病弱で床につきがちの阿牧の方は、それでもよく、五十を越えたそのときまで生きぬいてきたといえよう。
ゆのみが、万鬼斎の側室となってから二十余年の歳月を経ていた。
ゆのみと金子美濃守の、沼田家における勢力は万鬼斎あるかぎりゆるぎないものと見えた。
ゆのみの生んだ平八郎景義も二十一歳となり、これも万鬼斎の血をうけ、たくましい青年武士に成長をしていた。
阿牧の方が、我子の朝憲が家をつぐまで、不安におびえていたのも無理はなかった。
「さすが御屋形さまじゃ」
阿牧の方は病室を出て、侍女たちにたすけられつつ、万鬼斎の居館へ出向き、
「弥七郎家督のよし、祝着に存じまする」
と、のべた。
万鬼斎は見向きもしなかったが、ゆのみがあらわれ、こぼれんばかりの愛嬌をたたえて、阿牧の方を介抱したという。
それに、弥七郎朝憲は異母弟の平八郎を愛した。
弓も馬も、共にはげみ、

「平八は、わしの片腕じゃ。共に力を合せ、家名をまもりぬこうぞ」
と、朝憲がいえば、
「兄上に、私の命を……」
平八郎も誓った。
眼にうつるもののすべてに善意を見出し、これを信じてやまぬ素直さが、平八郎にはある。
これは、天性のものといってよい。
沼田領主となった翌年の二月に、沼田朝憲は、三百ほどの部隊をひきいて信州に出陣をした。
上杉と武田の戦闘に、沼田勢は上杉麾下の部隊として参加したのである。
上杉と武田の両軍は、毎年、雪どけと共に戦闘をくりかえしてきている。
いえば習慣的な索制戦のようなものだし、大きな戦闘は、永禄四年の川中島合戦以来、あまり行われなかった。
だが、この年の戦闘では沼田勢に十余人の戦死者が出たし、沼田朝憲の寵臣・和田十兵衛光政が、右肩と太股にふかい矢疵を負った。
初夏になり、部隊が沼田へ帰って来ると、
「ただちに、小川の温泉へ養生に行けい」
沼田朝憲は、この寵臣をいたわり、輿にのせて沼田を出発させた。
金子美濃守が、ゆのみにいった。

「妹——和田十兵衛のみは、われらに手なずけられるを強くこばみ通して来た。これは困ったことと思うていたが……どうやら、うまく行きそうじゃな」
あまり見栄えのしない瘦馬のような顔貌に、うす笑いをただよわせて、美濃守は、妹のうなずくのを待った。
ゆのみは、ふとやかな肩のあたりをかすかにふるわせ、
「兄上。そろりと腰をあげてもよいかと思われますな」
と、こたえた。

二

温泉は、山襞を奔る渓流の岩間に湧き出ていた。
〔小川の湯〕は、沼田万鬼斎が、ゆのみを得た〔川場の湯〕から山二つをへだてた谷間にあり、創傷に効いた。
このあたりは金子美濃守の領地なのだが、和田十兵衛は渓流の小屋に起居し、老いた小者ひとりの世話をうけて、養生につとめた。
夏のさかりであった。
（もう、癒えたな）
十兵衛は、湯壺にひたり、傷所の肉のあがりを指先でたしかめた。
湯壺には、かたちばかりの板屋根がさしかけてあったが、周囲は鬱蒼たる樹林である。

(明日は城へもどろう)
その日、十兵衛は心をきめた。
(殿の顔が見たくなってきた)
主従ながら、沼田朝憲と和田十兵衛は年齢も同じ三十歳であるし、少年のころには、何事につけても、十兵衛が朝憲の相手を命じられた。
武術も学問も、二人は共にまなんだ。
十兵衛の家は、代々、沼田家にあって重い役目を果してきているし、十兵衛の亡父・和田光久には、万鬼斎も一目おいたほどである。
「十兵衛には、いつまでも、そばについていてもらわねばならぬ。自重してくれい」
と、朝憲は口ぐせのようにいった。
時代は、大きく変りつつあった。
王城の地。京都を制し天下をつかもうとする何人かの強大な戦国大名たちのうごきは、まさに、あきらかなものとなった。
沼田家は、上杉謙信の勝利に賭(か)けている。
沼田の地は山岳にかこまれ、城は薄根川を見下す崖上(がけうえ)にあった。
西北を三国山脈にかこまれ、東北は日光山脈の一部をもって奥州(おうしゅう)と区切られ、信州・越後・奥州と関東をむすぶ要衝の地でもある。
この城をまもることに、和田十兵衛は三十歳の情熱をそそいでいる。

「城は、わが家である」
と、十兵衛の父はいった。
「主君は父であり、家臣は子である」
ともいった。
「むずかしいことではあるが、主従とはそうしたものでなくてはならぬ。それでなくては、何で命を捨てて戦い、城をまもり、主君をまもれよう。わかるか、十兵衛」
少年のころの十兵衛は、懸命に父の言葉へうなずくだけであったが、
(おれは、武人として申し分のない主君を得た)
沼田朝憲へかける十兵衛の期待は大きい。
しかも、老いた大殿の万鬼斎は、近いうちに〔川場の湯〕へ引きこもる筈(はず)であった。
川場にいとなむ万鬼斎の新邸も、間もなく完成するという。
万鬼斎の体の痛みは烈しさを加えるばかりなので、わざわざ沼田から三里余の道のりを、川場へ湯治に出かけるのが面倒になってきたものらしい。
ゆのみも平八郎も、万鬼斎にしたがって、川場の新邸へうつることになっていた。
(これでよい)
何も彼(か)もうまく行くと、十兵衛は思った。
家臣たちも、これからは金子美濃守やゆのみに尾をふることもなくなろうし、若い主君の朝憲を中心にうごきはじめよう。

また、朝憲が異母弟の平八郎を愛している度量のひろさを、十兵衛は尊敬の目をもってながめた。

朝憲をしたう平八郎にも好感をもっている。

明日は、騎馬で城へもどるつもりであった。

一カ月の休養で、十兵衛の小ぶとりな体には贅肉がつきすぎたようである。

城へ帰って、この無駄な肉をけずってしまわねばならない。

弓をひき、太刀をふるい、馬を走らせて五体の筋肉を強靭なものにしておかねばならない。

おそらく近いうちに、甲斐の武田晴信は大軍を発して上洛の途につくことと思われる。

そうなれば、上杉謙信も麾下の諸将を総動員して、思い切った手を打つに違いない。

そのときこそ、沼田勢は、すばらしいはたらきを見せなくてはならぬ。

上杉謙信が、沼田朝憲の武将としての資質を大きくみとめ、何かと懇切な態度を見せているのも、十兵衛には愉快であった。

「茂助……茂助」

湯壺の中から、十兵衛は声をかけた。

「明日、沼田へもどるぞ」

答えはない。

渓流の向うに見える小屋を出て、茂助は岩魚でも漁りに行ったらしい。

十兵衛は湯をはねあげて、立ちあがった。

ふりむいて、

「あ……」

十兵衛が息をのんだ。

湯壺の向うに、若い女の裸身がうずくまっていたのである。

夏の陽射しにつらぬかれた樹林の鮮烈な反映が、二歳仔の雌鹿のような女の体を、まっ青にそめていた。

「誰だ?」

「於布以と申しまする」

女の声は、甘くかすれていた。

「何をしに来た?」

「湯をあびに……」

十兵衛に背を向け、女は、するりと湯壺へ入って来た。女の長い髪が、藻のように湯の中でゆらいだ。

十兵衛の脳裏を、二年前に子も生まず病死した妻の、骨張った肉のうすい裸身がかすめていった。

女も十兵衛も、黙ったまま、山鶯の声をきいていた。

ややあって、十兵衛が両腕をのばし、女の肩をつかんだ。

女はふりむき、声もなく笑ったが、十兵衛の双眸に射すくめられ、笑を消した。
「お前は、金子美濃守殿のいいつけで、ここへ来たのか？　そうであろう」
うつ向いた女の、しなやかな頸すじに、生毛が光っていた。
十兵衛は女を抱きすくめ、
「それもよいわ」
と、つぶやいた。

三

七日後——。
和田十兵衛は沼田へ帰った。
城へ出て、朝憲に挨拶をすませ、本丸から水の手曲輪をぬけ、水の手門へかかると、
「おお、十兵衛殿。いつ、戻られましたな」
家来たちをしたがえ、門を入って来た金子美濃守が、すっと十兵衛に近寄り、
「あの女、お気に入られたかの？」
ささやいた。
十兵衛は、にこりとした。
「美濃殿のお心入れでありましたか」
「おなぐさみにと思い、手をまわしておきました」

「まさに、頂戴いたした」
「連れ帰られたかの？」
「大殿のようにはまいりませぬ」
「左様か……あ……左様か」
長いあごを指でなでつつ、美濃守は何度もうなずき、離れて行きかけたが、ふと戻り、口臭のつよい息をふきかけつつ、顔をよせてきて、
「あの女、わしがむすめでござる」
といった。
「何といわれる」
これには、十兵衛もおどろいた。
「六沢の豪家の女に生ませたむすめじゃ。十八になったという。山家そだちじゃが、歯ごたえはござったろうがな」
美濃守は表情も変えず、十兵衛をのぞきこむようにして、ぼそぼそというのである。
「沼田へ迎えてはいかが？　十兵衛殿」
「いま一度、申しあげる」
「何……」
「大殿と十兵衛とでは、また仕様も違うと申すのです」
言いすてて、十兵衛はさっさと城門を出た。

門外の榛名坂に、十兵衛の屋敷はあった。
（馬鹿め）
十兵衛は、苦笑をしていた。
（美濃守も四十をこえたばかりだというのに、老いぼれたな）
万鬼斎やゆのみが、川場へ引きこもるとなると、さすがの金子美濃守も心ぼそくなったのであろうと、十兵衛は思った。
この二十年の間に、美濃守やゆのみが手をつくして味方にひきこもうとし、ついに一度も尾をふらなかったのは和田十兵衛のみであるといってよい。
（美濃守も、よう申した）
あの於布以というむすめが、美濃守の子であるなぞと、十兵衛は考えて見なかったし、いまでも信じようとはしない。
（あのような女が、美濃めの子である筈がない）
小者の茂助さえも先に帰し、川場の湯小屋で於布以と暮した七日間の、目眩めくような明け暮れを、十兵衛は嚙みしめていた。
夏が去った。
万鬼斎の正室が病没した。
すでに、川場の新邸へ移っていた万鬼斎は城へもどろうともせず、ゆのみと平八郎が葬儀にのぞんだ。

秋がふかまるころになると、越後の上杉家から騎馬の使者が何度も来た。
来年の雪どけを待っての出動についての打合せである。
その夜ふけに、寝所へ入っていた和田十兵衛は、朝憲の使者におこされた。至急に登城せよ、というのである。
朝憲は居室にいて、十兵衛を迎えた。
「何事でござります」
「十兵衛――」
朝憲が腰をうかせ、切りつけるようにいった。
「そち、奥と情を通じたな」
十兵衛は茫然とした。
「いえ、十兵衛」
いえない。馬鹿げていすぎる。
朝憲夫人は〔御曲輪の御前〕とよばれ、五年前に沼田へ嫁いできた。実父は、上州・前橋の城主・北条弥五郎である。
朝憲は側室というものを一人も持たない。
〔御曲輪の御前〕との間に二人の女子をもうけ、満足し切っているからだ。
その曲輪御前と十兵衛が姦通したというのである。
いいわけをするよりも、十兵衛は、

「いえ。いわぬか、こやつ――おのれはようも、朝憲を白痴(こけ)にしおったな」

狂人のようにわめく朝憲を見上げて、

（これが殿なのか……）

すぐには、声が出なかった。

居室のまわりの廊下に警固の者の太刀が光って見えた。

そのことにも、十兵衛は驚愕(きょうがく)した。

（これが、殿の仕様なのか……）

朝憲が太刀をぬいて、

「なおれ」

怒鳴ったときに、はじめて、十兵衛はいった。

「これは何者がお耳に入れましたか？」

「黙れ」

「おきかせ下さい」

「父上が申されたぞ」

「大殿が……」

「は、腹を切れ」

「申しあげます。このことを御曲輪の御前のお耳に……」

「黙れ、黙れ」

「御前との相対吟味を願わしゅう存じます」

「無礼な――」

朝憲が、太刀をふるって躍りかかった。

十兵衛の体がはね起きて、猛然と朝憲へつかみかかり、太刀をうばいとって投げ捨てた。

廊下から十人ほどの家臣が、いっせいに十兵衛に切りつけて来た。

灯(ひ)が消えた。

十兵衛は、居室から脱出し、まっしぐらに戸外の闇(やみ)の中へ飛びこんだ。

城内からの追手が出るよりも早く、十兵衛は屋敷へ戻って門をとざし、家来二十余名に武装をさせ、自身も甲冑(かっちゅう)に身をかため槍(やり)をつかんだ。

追手を迎え撃つ覚悟である。

（美濃めの仕わざだ）

美濃守からゆのみへ――ゆのみから万鬼斎へふきこまれたスキャンダルに違いなかった。

そのことよりも、

（あの殿が……）

まるで子供だましのような流言を信じ、あのような狂態を見せたことに、十兵衛は怒った。哀(かな)しい怒りであった。

なるほど、十兵衛は曲輪御前の厚い信頼をうけている。

御前の居室で、二人きりになり談話をかわすこともある。

それも、朝憲の、
「奥の相手をしてやってくれい。そちの話を聴きたがっておる」
という言葉があったからではないか。
追手は鉄砲隊までくり出し、十兵衛の屋敷を包囲した。
翌朝——この包囲がとけた。
沼田朝憲が、曲輪御前を詰問したのだ。
曲輪御前も、あきれはてた。
「十兵衛とわたくしとの相対吟味をなされたがよろしゅうございましょう」
堂々といい張る。
川場の万鬼斎からは、
「両人を斬れ!!」
と命じてきているのだが、
「む……」
朝憲も困惑した。
自分の妻のことである。差し向かって語り合えば、真偽のわからぬ筈はない。
とりあえず、十兵衛邸の包囲を解いたが、城へよびよせて、あやまることも急には出来かねた。
万鬼斎に対してよりも、十兵衛の怒りを思って、沼田朝憲は困惑したのである。

ぐずぐずしているうちに、川場の万鬼斎から、
「十兵衛をよこせ。余がみずから取調べてくれる」
といって来た。
これは、こばむわけに行かない。
使者をもって、このむねを十兵衛につたえた。
「承知——」
十兵衛はこたえ、只一人、平服に着替え、騎馬で川場に向かった。

四

川場の居館には、万鬼斎直属の家来が、五十名ほどいた。
これが鉄砲十挺をふくめた戦闘体形をもって、雨乞山のふもとに散開し、和田十兵衛があらわれるのを待った。
訊問も何もない、いきなり殺してしまおうというのだ。
十兵衛は馬を駆って上久屋の部落まで来ると、少しもためらわず、右の道へ入った。左へ行けば川場であり、右は〔小川の湯〕へ通ずる。
だから、つまり逃げたのだ。
たった一人で、沼田家を捨てたのである。
このころの、十兵衛のような武士にとって、主君とのつながりに〔親愛〕の念が消えたと

きは、すべてを捨て去るより仕方がないのである。

そこは、実にはっきりとしたものであった。

親愛の心がもてればこそ、城のために、主君のために死ねるので、これがなければ、次の新しい天地をもとめて、いさぎよく一切を捨て去る。これが戦国武士の典型であった。

典型たることはむずかしいが、十兵衛はやってのけた。

家財の一切は家来たちに分けあたえ、これも逃げた筈だ。

「まだ見えぬ、まだ見えぬ」

と、川場に待ちかまえたものたちがしびれをきらしているうちに、十兵衛は沼田から十四里の道を一気に飛ばし、日のあるうちに小川の湯へついた。

穴場の村の土豪・穴場助右衛門の屋敷に馬を乗りつけ、

「於布以はおるか!!」

と、十兵衛が叫んだ。

於布以が飛んで出て来た。

「乗れ」

「あい……」

抱え乗せて、十兵衛は馬腹を蹴った。

穴場の家のものが、あっという間もない速さであった。

馬を疾駆させつつ、十兵衛がいった。

「於布以は誰の子だ?」

「美濃守さまと母の間に、生まれました」

「では……まことであったのか」

「なれど、美濃守さまにはお目にかかったこともありませぬ。父とは思えませぬ。わたしには、亡き母と、穴場の祖父のみが肉親でございます」

「お前は、なぜ、おれに抱かれたのだ」

「祖父が美濃守さまに命じられたので……」

「それだけのことでか……?」

「でも……十五日も、そっと、とのさまを見ておりました、岩間の陰から……」

「で……?」

「厭なお方なら逃げるつもりでございました」

「ほう。どこへ?」

「白根の山奥へ——」

「ひとりでか?」

「白根の山には仲のよい猟師の爺もおりまする。谷間には温泉がわき、熊も鹿も人と共に湯壺へ入りまする」

十兵衛は鞭をふるい、夕闇の濃い街道に馬を飛ばしつつ、

「そこへ行こう」

と、いった。
「於布以は、ゆのみなぞとは違うな」
「は……？」
「おれと共に暮すか？」
「あい……」
「美濃守には、もう会えぬぞ」
「他人でござりますもの、かまいませぬ」
はっきりとしたものである。
こうして、和田十兵衛は消息を絶った。
翌永禄十二年の正月――。
沼田万鬼斎が輿に乗り、めずらしく沼田の城へやってきた。
「隠居が年賀に来たのじゃ」
往年のおもかげはなく、ぶよぶよとたるみきった面をほころばせて、万鬼斎は朝憲に愛嬌をふりまいた。
去年のこと以来、この父子の間は気まずいものになっていたが、正室の葬儀にも出て来なかった万鬼斎が、息子の機嫌をとりにあらわれたものである。
朝憲も、こうなっては、
「わしも川場へ一度、うかがわねばなるまい」

と、いい出した。
「大殿が、いかにおよろこびなさいますことか……」
涙ぐみ、金子美濃守がいった。
和田十兵衛の去った後の沼田家は、美濃守の思うままとなった。
「今だぞ、ゆのみ――」
美濃守は、ゆのみの口から、
「おそれながら、朝憲さまは平八郎を亡きものにせんと、ひそかに、たくらみを……」
と、万鬼斎に告げさせた。
「何と申す」
万鬼斎は、もう何も見えない。成長した平八郎と、四十になっても、まだ豊熟しきっているゆのみだけが見える。
「あまりにも、平八郎が武勇にすぐれた若武者になってくれましたので、朝憲さまは、沼田の城を平八郎に乗取られるやも知れぬとお考えのようでおじゃりまする」
「ふらちな奴。その心も知らいで、わしは可愛い平八にも家をわたさず、人道を重んじ朝憲に家をつがせたのじゃ。」
「わたくしも平八郎も、こうなりましては生きておられませぬ」
「憎い奴!!」
その憎悪を微笑の下に隠し、万鬼斎は沼田へ年賀に来たのである。

万鬼斎が川場へ帰った数日後に、沼田朝憲は八名の士をしたがえ、父の隠居所へおもむいた。

そして、朝憲は、二度と、沼田へ帰らなかった。

五

沼田朝憲と供の家来たちは、川場の隠居所で惨殺された。

だが、梶田左平次という家来が一人だけ、重傷を負いながらも、重囲を破り、必死に沼田へ逃げもどってきた。

沼田の城内は大混乱となった。

重臣たちも、大殿の万鬼斎が朝憲を手にかけただけに、

「恐るべきことじゃ」

「いかなるわけにて、このような……」

などといい合うだけで、適切な処置がとれない。

御曲輪の御前だけが、奮然とうごいた。

彼女は、朝憲の死をきくや、すぐさま侍臣を上州・前橋へ飛ばせた。

前橋と沼田の距離は、きわめて近い。

前橋の城主・北条弥五郎は娘からの急報に接して、

「つづけ!!」

半刻もたたぬうちに武装した四百数十騎を引きつれ、沼田へ駆けつけて来た。

あまりにも速い、速すぎた。

（いかぬな、これは……）

金子美濃守も、まさか曲輪御前が、これほど敏速な処置をとろうとは思わず、

（いつ、急使を城から出したものか……）

苦り切った。

北条弥五郎は城へ入ると、

「これはみな、川場におる側室のなせる業である。親が我子を殺す、殺された者の妻を我むすめにもった余は、黙ってはおれぬ。おのおの肚がきまらずば、それでよし。われはすぐさま川場へ向かい、故朝憲殿の、とむらい合戦をいたす」

てきぱきといいわたし、出動の準備にかかった。

「御供つかまつる」

と決意をした重臣は、下沼田豊前・発知刑部・岡谷平内の三名であった。

近くの名胡桃の城主で、沼田家にしたがっている鈴木主水も百五十騎をつれて馳せつけ、総勢千余騎が、川場へ進撃した。

こうなると、

「やはりこれは、亡き殿の敵として大殿を見るべきが至当であろう」

といい出すものも増えた。

すぐに、後から千騎が出動した。
川場にいる万鬼斎の手勢は五十余名にすぎない。
（いかぬ、もういかぬ……）
金子美濃守は、朝憲の死を知り、ひどい衝撃をうけ、発熱したと理由をたて、三の丸の屋敷にひきこもってしまった。
（いかぬなあ。大殿も平八郎も、ゆのみも、とうてい助かるまい。こうなれば、わしはわしで出直すのじゃ。それより仕方がないことになった）
悲嘆ではない。
これから平八郎を城主にして、自分の勢力をかため、行く行くは沼田の城の主になってみせようという野望がつまずいたことへの落胆なのである。
甥（おい）の平八郎を毒殺することなどは何でもない。
ゆのみさえも、いざとなれば巧妙に始末をしてしまうつもりであった。
その夜から、雪になった。
翌朝になって、烈風と吹雪の中を、万鬼斎は、ゆのみをつれて川場を脱出した。
寄手を迎えた平八郎は、五十の手勢をたくみにうごかし、
「退（ひ）くな!!」
六尺に近い巨軀（きょく）を縦横に馳せ、矢を射、太刀をふるって奮戦した。
彼は、何も知らなかった。

彼の耳へは、父の万鬼斎と母のゆのみの言葉しか入ってはこない。
朝憲が川場の館（やかた）で殺されたときも、
「朝憲は罪もなきそちを殺し、その上に、この老いたわしの命をも狙（ねろ）うていたのじゃ」
切々とうったえる万鬼斎の言葉を、そのまま信じきっていたものである。
「兄上も、あまりじゃ」
そこへ、北条・沼田の攻撃であった。
「やはり、そうであったのか……」
平八郎は激怒した。
万鬼斎たちの脱出に、吹雪が幸いした。
しかし脱出してからは、吹雪が不幸を見舞った。
栗生（くりう）峠から針山を越え、会津へ逃げる途中の山道で、ゆのみが死んだ。
矢疵（やきず）をうけていた上に、雪と寒気が、ゆのみの気力も体力もうばった。
この悲惨な脱出行に、万鬼斎が死ななかったのは奇跡というべきだ。
後から追いついた平八郎の肩に背負われ、万鬼斎は、ようやく会津の芦名盛隆（あしなもりたか）の城へ入った。
死は数日の猶予（ゆうよ）を万鬼斎にあたえたが、
「平八郎。沼田の城をうばい返せよ」
一言をのこして息をひきとった。

万鬼斎の没年は六十六歳。
ゆのみは、四十歳であったという。
やがて、沼田の蔵内城は、
「みだりにさわぐな」
上杉謙信が、家臣の柴田右衛門尉を城代として送ってよこした。
上杉の部隊七百余が柴田と共に入城した。
武将の家として、沼田家は、まことにみにくい内乱をひきおこしたといえる。
上杉の指揮下に入らざるをえなかった。

六

十二年たった。
赤城山の南麓にある女淵の豪族・矢羽助信の屋敷に、沼田平八郎はひそんでいた。
助信のむすめ小松を妻にしてから二年たっている。女子一人をもうけたところだ。
矢羽助信は、金山城主・由良国繁の一族である。
由良国繁は反上杉派であり、かつては沼田家とも小戦闘をくり返したこともある。
上杉軍の侵攻にも屈しない。
城は、現在の群馬県・太田市の北山にあり、周囲三里十四町という堅城であった。
沼田平八郎が由良家をたよった理由も、これでうなずけよう。

沼田城は、すでに上杉の手をはなれていた。
武田信玄も死んでいた。
上杉謙信も、平八郎が矢羽家へ来た翌年に死んだ。
いま、信玄の子・武田勝頼が、真田昌幸をさしむけて沼田城（蔵内城の名称は廃された）を守らしめている。
このとき、武田・真田の支配をうけることをきらった旧沼田家の家臣たちが、大量に城を出、牢人となって諸方へ散った。
時代は、さらに大きく変りつつあった。
信玄・謙信の死によって、織田信長の威風が世を圧している。
信長は、もっとも京都に近い近江・美濃一帯を手中におさめ、三河・遠江の新興勢力・徳川家康を傘下にひき入れ、皇室の信頼も厚い。
（いよいよ、織田殿の天下じゃ）
由良国繁は先を見越し、信長と通じた。
「沼田をとられよ」
と、信長は命じてきている。
「由良殿が庇護しておられる沼田平八郎というやつ、うまくあやつれば死身のはたらきをしよう。やらせてみてはいかが？」
そそのかしてもくる。

信長にとっては、いまのところ甲斐の武田勝頼をほうむらなくては、安心して京都へのぼることが出来ない。
「早く――」
と、急いていた。
信長は、こういうことがうまい。
中国の毛利家にくさびをうちこむため、尼子家の遺臣・山中鹿之助をけしかけて大いにはたらかせたのも信長である。
「沼田城をとれば、由良殿にあたえよう」
ともいってきている。
「平八郎などは、どうにでもなる」
というわけであった。
内心よろこびつつ、由良国繁は平八郎に、
「沼田は、もともとおぬしのものなのじゃ。首尾よく城をうばい返し城主となったあかつきには、国繁、たよりにいたしますぞ」
などといい、矢羽助信には、
「いざともなれば平八郎の命はない。はたらかせるだけはたらかせた後にな、わしが沼田の城主となる。おぬしには、この金山城をあたえよう」
「は……なれど平八郎は、むすめの聟……」

「言うな。城と聟とどっちがほしいのだ」
「は……」
「むすめには、また聟をとればよい」
「左様でありましたな」
助信も割りきっている。
割りきらなくては、すさまじい弱肉強食の世をわたりきれない。
沼田万鬼斎が、川場の湯壺の中で豊満なゆのみの女体を愛撫しつつ、
「今に見ていよ。われは関東を手中におさめてくれるぞ」
息まいていたような大らかな時代ではなくなってきているのだ。
世にいう戦国時代にも、いくつかの段階がある。
武人である以上、この段階をふみ外してはならない。
天正九年正月――。
織田信長の密使が、由良国繁のもとへやって来た。
「上州における武田と真田の勢力を殺いでもらいたい」
というのだ。
由良国繁は、矢羽屋敷から沼田平八郎を金山城へまねいた。
「いよいよじゃ、平八郎どの」
「では……」

「おぬしを総大将にする。軍勢は二千ほどでよろしいか」
「はっ。旧沼田の牢人たちも、かねてから集りおりますれば……」
平八郎は勇みたった。
かつて万鬼斎や平八郎を川場に攻撃した家来たちが、
「沼田をうばい返せるなら、平八郎様を頭にいただいてもよい」
と、続々上州へ入りこんで来ている。
「先ずは一献」
由良国繁は、酒肴をはこばせた。
「そうじゃ」
思いついたように国繁が、
「旅絵師が来ておる。平八郎殿も描いてもらうがよい」
と、いった。
当時の絵師は、よい職業であった。
室内の装飾——つまり襖絵や天井の飾り絵などのほかに、肖像画というものがある。
写真のない時代であった。
少しでも名のあるものが、自分の顔かたちを絵にしておきたいという気持は、うなずける。
諸国をまわり、見本をしめして城や屋敷へとどまり仕事をして歩く絵師も多い。
「酒興じゃ。描かせて見られよ」

「では……」
絵師が、よばれた。
あかるい表主殿の灯をうけてあらわれた中年の絵師は、色白の、ふっくりした顔だちで、物腰もやわらかく、
「およびでござりましたか」
国繁に平伏をした。
まじまじと絵師を見つめていた沼田平八郎が、おどろきの声をあげた。
「和田十兵衛……ではないのか?」
絵師が向き直り、平八郎に平伏をした。
「久しゅうござりました」
「おお……」
十兵衛の頭は青々と剃られ、両眼には、やさしく澄みきった光りが、おだやかにたたえられていた。
「今は和田十兵衛ではござりませぬ。京に住む絵師、住吉雪峰と申しまする」

七

その夜、沼田平八郎は金山城の一室へ泊った。
「奇遇じゃ。心ゆくまで語り合うたがよい」

由良国繁も、そういってくれたし、そっと平八郎の耳へ、
「それほどの豪勇の士なれば、味方にひき入れよ」
ともいった。
「十兵衛も、朝憲殿には、ひどい目にあったそうな」
二人きりになると、平八郎が、
「兄は、ひどい男であったな」
憤激の声なのである。
十兵衛は、これに答えなかったが、
「琵琶の湖のほとりに、妻と二人の子と住み、折にふれては、こうして旅をまわり絵を描いておりまする」
と、語った。
「そちが絵師とは……思いもよらなんだわ」
「わたくしめも、同様に思いまする」
「なぜ、武士を捨てた？」
「武士は城を取り、城を守るが、いのちでござります」
「いかにも――」
「なれど、絵も、わたくしのいのち、わたくしの城でござります。沼田を出てより白根の山中に三年もおりましたが……そのとき、高野山の法師どのと出会い、つれづれに絵筆をもて

あそびました。それが病みつきでござりましてなあ」
「思いもかけぬことであった」
「今の世の戦ぶりも、ひどう変りました。もはや世におくれた十兵衛の槍は、つかいものになりませぬ。槍や太刀で戦うより先に……」
と、このときの十兵衛は、するどく平八郎を見守り、
「沼田の御城で、あのときに引起された内乱なぞは、いまや日常茶飯のこととなりました。いまの戦は騙し合い、裏切り合い、主従もなく親子もなく、血なまぐさいばかりのものとなりましてござります」
平八郎は苦笑していた。
十兵衛も臆病な男になったものだと思っただけである。
十兵衛は尚もつづけた。
「なれど、わたくしの城は決して、わたくしを裏切りませぬ。わたくしの城は、わたくしの絵……わたくしの手が描く絵でござりますれば……」
「まあ、よいわ」
と、平八郎はいった。
「沼田の城をうばい返したなら、そちも遊びにやって来い」
十兵衛は眼を伏せ、一礼すると引き下って行った。
そのとき、十兵衛はふりむいて、もう一度、何かいいかけたが、口をつぐみ、ややあって、

「御武運をいのりたてまつる」
両手を合せ、祈りをささげてから去った。
（やつめ、四十をこえたばかりというに……老いたわ）
声をたてて、平八郎は笑った。
沼田平八郎が、由良と旧沼田の軍勢を合せて三千余をひきい、金山城を発したのは、天正九年三月一日である。
「小癪なり。まだ生きておったのか」
沼田城にあった猛将・真田昌幸は、ただちに陣ぶれをおこない、平八郎を迎え撃った。
両軍、闘い合ったが、
「こりゃ、いかぬな」
真田昌幸は無謀の出血をこのまない。
平八郎が陣をかまえた阿曾の地は、赤城山の裾にある断崖上にあって、沼田城を見下す位置にある。
昌幸としては、まことに攻めにくい。
それに、沼田一帯の民百姓は、旧主の沼田家の遺子の挙兵ときいて、いっせいに真田昌幸へ背を向けてしまい、せっせと兵糧などを平八郎の陣へ送りとどけたりしている。
「美濃守をよべい」

と、真田昌幸がいった。
何と、金子美濃守は、まだ沼田にいたのである。
いまは真田の臣といってよい。
美濃守は、五十七歳になっていた。
沼田城が上杉の手にわたり、武田のものとなり、真田にうつされた十三年の間に、
「何とかせねば、何とか……」
あせるばかりで、少しも美濃守の野望は実らなかった。
上杉も武田も、ことに真田昌幸なぞという武将は、沼田万鬼斎をあやつるようには、とても行かない。
昌幸の、らんらんたる双眸は、美濃守の肚の底までも見透し、乗ずる隙をあたえないのだ。
老いて、よろよろと、美濃守は真田家にしがみついていたのである。
それだけでも大変な努力であった。
「美濃殿――」
真田昌幸は、にこやかに、
「平八郎は、貴公の甥御なれど、あえて非礼をゆるされたい」
「は……」
「平八郎を討つには、美濃殿の知謀にたよるより道はない。貴公が平八郎の首討って下されば、利根川の西方、千貫文に価する土地をさしあげよう。いかが？」

昌幸は、証文も書いてくれた。
武田勝頼の朱印がある証文である。
これを見て、老美濃守の血はおどった。
最後のチャンスである。
「よろしゅうござる」
昌幸は、うなずき、
「先ず、きかれよ」
と、策をさずけた。

八

三月十一日の早朝――。
「平八郎、ようも生きていてくれた……」
阿曾の陣所へ、金子美濃守が、二名の家来を従え、あらわれた。
「伯父上は、まだ沼田におられましたのか……」
「いうな。すべては、そなたを待ち、そなたを迎える日を夢みて、苦難に耐えてきたのじゃ」
平八郎は、感動した。
万鬼斎やゆのみと同じように、美濃守が平八郎にあたえておいた印象は善いものばかりで

ある。
「よう御無事でいて下された。明日は城を攻めとりますぞ」
「待て――沼田城を守る真田昌幸は剛勇無双の大将じゃ」
「恐るるところではありませぬ」
「いや、待て」
「何といわれる」
「真田殿が申されたぞ」
「え……？」
「この上は無用の血を流したくはない、もともと、沼田の城は平八郎殿が入るべきもの、明けわたしてもよいとな」
「まさか……」
「まことじゃ。そなたの働きぶりに舌をまかれて、この上は戦などしても無駄とさとられたようじゃ。見よ――これが、起請文じゃ」
真田昌幸の起請文を見ても、平八郎は心をゆるしたわけではない。
「よろしゅうござる」
うけ合って見せ、約束の三月十五日に、平八郎は五百騎を従えて、沼田城外・町田の観音堂前へ進んだ。
真田軍の抵抗は、まったくなかった。

沼田城からは、金子美濃守が真田昌幸の案内にたち、わずか二百の兵と共に出て、観音堂前の草原へ向かった。
大胆不敵な謀略である。
（まことかも知れぬ）
これを見て平八郎は、緊張を解いた。
五百と二百である。押しつぶすのは、わけもないことだ。
「平八郎殿。では、約定によって――」
真田昌幸は丁重に会釈をすると、みずから武装をとき、つづいて真田勢も甲冑をぬぎ捨て、太刀も槍も捨てた。
いさぎよい、と、平八郎は見た。
「では――」
平八郎方も、みな武装をとく。
「これより沼田城をお返しつかまつる。いざ――」
昌幸は馬に乗り、平八郎を先導した。
なつかしい城門の扉は、ひらかれていた。
門内に出迎える真田の重臣たちは、いずれも平服であった。
この中から、
「若君――」

叫んで走り出た者がいる。
山名弥惣といって、沼田家の旧臣であった。
「弥惣か。久しいな」
「この日を……今日の日を、弥惣は、歯を喰いしばり待っておりましたぞ」
泣声をあげて近寄り、平八郎の前へひざまずくかと見えたが、
「えい!!」
いきなり、一尺四寸の脇差をぬいて、平八郎の腹を刺した。
夢魔の一瞬であった。
間髪を容れず城門が閉まり、後につづいた平八郎の家来五百余名を遮断した。
門内に入りかけていた二十名ほどのものは、銃弾の餌食となった。
「う、うう……」
苦痛に顔をゆがめ、平八郎は太刀を抜き、伯父へ飛びかかろうとした。
金子美濃守は、どこにもいなかった。
門外では凄烈な戦闘が始まっている。
平八郎方は、みな平服になっていたのだから、伏せておいた武装の真田勢の猛襲に抗すべくもない。
「おのれ……おのれ……」
沼田平八郎も闘ったが、山名弥惣に刺された傷は致命的なものであった。

ずたずたに切りさいなまれた平八郎の死体へ、のこのこ出て来た金子美濃守が一太刀つけたという。

沼田平八郎は、ここに三十六歳の生涯を終えた。

美濃守は、吾妻の山中に住む昔の縁者・一場太郎左衛門をたより、そこで、間もなく病死した。

金子美濃守は、千貫文の土地をもらえるどころか、沼田を追放されてしまったのである。

真田昌幸は、平然と約束を破った。

群雄割拠する戦国の世は、まさに大詰の幕をあけた。

武将の家である〔城〕は、権力の象徴と化した。

絵師・住吉雪峰の消息については、その後、不明である。

（「小説新潮」昭和三十九年一月号）

男の城

一

城は完全に落ちた。
城主の留守に裏切者が出て、敵を城内へ引き入れたのである。
城主の妻と子が裏切者の手に捕えられ、城内・二の丸の締所（牢）へ押しこめられた。
「私は死にます」
と、城主の子が母にいった。
彼の名を鈴木右近忠重という。
もっとも、十六歳のそのときは小太郎とよばれていたのだが、この物語では始めから〔右近〕で通したい。
右近が、さらにいった。
「母上も死んで下され」
〔堀切の御前〕とよばれている母の栄子は、瞠目して我子を見つめた。
夫の鈴木主水忠則は、我子の右近を、
「小太郎は、わしの白毫子じゃ」
と、いう。
〔白毫子〕すなわち白うさぎのことで、一城の主の後つぎである男子の愛称としては、いささか優美温和にすぎる。

早世した二人の姉の後に生まれた右近は、その娘たちが生まれかわったかのような色白の美しい顔だちであったし、躰つきも小柄で華奢で、栄子が母の眼から見ても、
（このような子が、武将の家をつぐことが出来るであろうか……!?）
不安をおぼえ、右近の後に男子が生まれることを、ひたすら祈りつづけたほどであった。
戦乱の絶え間ないその時代の、しかも武人の妻としては立派な男子を生み育てることが必須のつとめである。
しかし、右近の後には、ついに子をもうけることを得なかった。
栄子は夫・主水より三歳の年長であった。
さいわいに右近は、小さく細い体軀ながら一度も病患にかからず、十六年の歳月を無事にすごして来たけれども、性質も温順で、武術や学問にはげむ様子もなく、家来たちも、
「当代さまの後は、とてもつげぬ」
「あれではのう……」
「この名胡桃の城も、当代さまかぎりのことだ」
などと、うわさし合っているらしいし、〔当代さま〕の夫人である栄子から見ても、家来たちの考えがむりはないとおもわれるほどであったが……。
肝心の〔当代さま〕である鈴木主水は、そのようなことをいささかも心配してはいないようなのである。

「白毫子よ、我子よ」
眼に入れても痛くないほどの溺愛(できあい)ぶりで、
「当代さまが、あのように甘やかしては、尚更(なおさら)にいかん」
重臣の中には「当代さま」に向い、右近の教育について進言する者もいたようだが、
「よう申してくれた」
と、鈴木主水は決してこれをとがめたりせぬかわり、依然、我子・右近への溺愛ぶりに変りがなかったという。
ともあれ……。
このように頼りなげな十六歳の若殿である鈴木右近が、母とふたりきりで押しこめられた牢内で、自分も自殺をするから、母にも、
「死んでいただきたい」
と、いい出したのである。
顔色平然として、しかも侵しがたい決意がこもった声で、
「父上が、この城をうばい返すためには、私と母上が人質になっていては強いこころになれませぬ。共に死んで、父上をはげましたいとおもいます」
いいながら、帯をほどいた。
身につけている武器は何一つないから、この帯で、先(ま)ず母のくびを絞めて死なせ、その上で、

「私は舌を嚙(か)み切ります」
と、右近はいう。
嚙み切った舌からの多量の出血によって、自分は死ぬつもりらしい。
(この子が……この白うさぎの小太郎が、このように強く烈(はげ)しいことを……)
目をみはっている栄子のくびへ、右近は帯を巻きつけようとした。
「待ちゃれ、小太郎」
「おゆるし下さい。私は胸の中で泣いています」
「いえ……わたしが死ぬはよい、かまわぬ。なれど、そなたは鈴木家の後つぎではありませぬか。むざむざといま……」
「後つぎは、いくらも出来ましょう」
「何という……」
すると右近が、事もなげにいいはなった。
「この城をうばい返し、父上が新しい妻を迎えれば、また男の子が生まれましょう」
「まあ……」
「この城は、鈴木家の国も同様です。なんとしても父上にうばい返してもらわねばなりませぬ」
右近の決意は、若者らしい性急なものであったが、この名胡桃城をうばった敵・猪股能登守(いのまたのとのかみ)の、

「妻と後つぎの子を捕え、これを人質にして、鈴木主水を降参させてしまおう」

というのが、名胡桃城乗取りの当初からの計画であった。

妻を愛し、我子を盲愛する鈴木主水の評判は、近国にも知れわたっていたのである。

「そなたが、それだけの決心をもっていたとは知りませなんだ……」

栄子が、ためいきのようにつぶやくと、右近は、

「日頃、父上のなさっていることを見聞きしていたことから考え、いまここにこころを決めたのです」

と、こたえた。

父は、母も家来たちも知らぬ〔場所〕で、右近にどのような教育をあたえていたのであろうか……?

ややあって、栄子も決意し、

「では、そなたのこころのすむようになされ。母はよろこんで死にましょう」

「では……ゆるされませい」

母のくびに帯を巻きつけ、右近はひたと母の肩を抱きしめ、自分の頬を母のそれに押し当て、しばらく身じろぎもしなかったが、

「ごめん」

低いが、凛とした声でいい、帯の両手にちからをこめかけた、その瞬間であった。

晩秋、というよりも初冬の、冷めたい夜の闇のたちこめた牢格子の向うから、

「お待ちなされ」

と、いった者がある。

いままで、居ねむりをしていたものとばかりおもっていた敵の番兵であった。

二

上越線の群馬県・沼田駅の次に〔後閑〕という駅がある。

以前は山間の小駅で、ここから三国街道を七里、湯宿・猿ヶ京などのひなびた山の湯をへて、三国峠の谷底にある法師温泉までバスが通じていた。法師の湯は、電気がひけぬほどの山奥で、少年のころの筆者がたびたび、この湯の宿をおとずれたころ、春先になると丸太づくりの浴舎の女湯から、

「あれまあ、これ、きれいな蛇だねえ」

などという女中たちの声が、のんびりときこえてきたものである。

浴舎の梁に巻きつき居ねむりをしている青い蛇が、湯気にあたって浴槽の中へ落ちてくるのだ。

いまはもう、そのような山の湯の深沈たるおもむきは消えてしまったそうで、沿道の旅館も近代建築を競い、後閑から三国峠を越えて越後へ通ずる舗装道路が完成し、シーズンには観光バスが列をなして往来するという。

ところで……、

鈴木右近の父・主水忠則の〔名胡桃城〕は、現・後閑駅に近い月夜野町の嘴状に突出している崖の上へきずかれてあった。

だから、鈴木主水も沼田城をおさめて上州一帯に君臨をした沼田万鬼斎顕泰の家臣で〔沼田衆〕とよばれる武将の一人ということになる。

鈴木主水が、まだ若いころに、主家の沼田家は分裂をした。

正夫人の子と妾腹の子を擁立する家臣たちの権力あらそいが、これである。

その結果、沼田万鬼斎は愛妾ゆのみと共に沼田を追い出され、会津へ逃げて死んだ。

妾腹の子平八郎が可愛さに、正妻の子で、すでに沼田城主となっていた沼田朝憲を我手で謀殺した沼田万鬼斎へ、こころある家臣たちも、もうついてゆけなかったらしい。

ここで沼田城は、新しい主人を迎えなくてはならなくなる。

戦国のころの沼田は、関東と上州・信州をむすぶ重要地点であったことが、地図を見ればたちどころに看取されよう。

あの〔応仁の乱〕以来、日本の諸国は百年余にわたる戦乱に巻きこまれていた。

天皇と、足利将軍の〔室町幕府〕と、この下にあって諸国をおさめていた守護大名と……

こうした天下統一の組織によっておさめられていた日本なのだが、諸国の豪族や守護代という実質的な武力や経済力をもつ武士たちが、たがいに国境と権力をあらそい、あくことなく戦いをくり返した。

彼らこそ〔戦国大名〕とよばれる新興勢力であった。

こうした小勢力同士のあらそいは、しだいに、大勢力の対決にしぼられてきた。

日本の首都である京は荒廃し、皇室も足利将軍もちからおとろえ、

「こうなれば、たれか一人、ちからのつよい戦国大名があらわれ、天下をおさめてくれるのを待つより仕方もあるまい」

と、いうことになった。

これらの期待をになってあらわれたのが甲斐の武田信玄である。

越後の上杉謙信である。

関東の北条家である。

駿河の今川義元である。

そして、彼らがたがいにすさまじい戦争をくり返し、やがて次々に死んでしまったのちには、織田信長という英雄が出現し、日本全国のうち三分ノ二を彼が平定した。

そのとき、信長は急死をしてしまった。

本能寺の変において、信長が明智光秀に討たれたのは〔名胡桃城〕が敵にうばいとられた七年前のことである。

織田信長が死んだ後は、羽柴豊臣秀吉の天下統一が成りつつあった。

主人・信長の後をうけて起った秀吉は、この七年間に、他のライバルを次々に蹴落し、駿河・三河の大勢力である徳川家康を屈服させ、去年は九州へ遠征して、これをおさめた。

「あとは関東の北条氏政のみじゃな」

と、秀吉は名実ともに天下人となった余裕を見せ、なんとか戦争をせずに、北条氏政を手なずけ、臣従せしめたいとおもっている。

だが、北条氏政は、なかなかにあたまを下げない。

古くから関東の盟主をもって任じ、武田や上杉の侵入を頑としてこばみつづけてきた家柄だけに、

「百姓あがりの秀吉のきげんうかがいなど、できるものか」

天下の名城と自負する小田原城にいて、

「一度、京都へのぼってまいられぬか」

いくら秀吉がさそっても、承知をしない。

京へのぼることは、秀吉への屈服を意味する。

こうした情勢の中に、沼田城は、信州・上田の領主、真田昌幸によっておさめられていた。

いまは〔沼田衆〕も散り散りになってしまったが、

「おれは、真田昌幸公という大将なら、この身をまかせて悔いはない」

と、鈴木主水はいった。

真田昌幸は、もと武田信玄につかえていた信州の武将だが、武田ほろびてのち、

「これからは、わしが一人でやる」

奮戦をつづけ、ついに信州の要衝・上田へ本城をきずいた。

信州の本国をまもるためには、何よりも、となりの上杉を我物にせねばならぬ。

だからこそ、

「どうしても、沼田城がほしい」

と、真田昌幸は、この城を取るために、どれほどの犠牲をはらったか……それは、すさまじいばかりの流血と謀略をともなったもので、ついに沼田を手に入れたとき、信州の鬼といわれた真田昌幸が、我子の信幸と幸村に向い、よろこびの泣声をはなっておどろかせたといわれる。

その後も、関東の北条氏政は、

「沼田は、むかしからこちらのものだから返してもらいたい。返さねば討つ!!」

などといい出し、真田家へいどみかかってくる。

徳川家康は、前に信州を攻め、真田昌幸からひどい敗け方をしているので、

「沼田を北条に返してやれ」

と、おどしつける。

「ばかをいうな」

真田昌幸は一歩も退かなかったのだが、

「ま、わしにまかせてくれ」

豊臣秀吉が間に入った。

「わるいようにはせぬ」
と、いうのである。
昌幸は秀吉が大好きであった。
武田信玄が天下統一する日をたのしみにしていた昌幸だが、信玄亡きいま、秀吉が天下の覇者となるためには、いくらでも手助けをしようと決意しているほどなのだ。
信州の〔一匹狼〕で、北条や徳川と苦しい戦いをつづけてきた真田昌幸に対し、豊臣秀吉はいつも好意的で、あぶないときには政治的な配慮でかばいつづけてきてくれた。
「おれといっしょにやろうよ」
秀吉は昌幸の肩を叩き、共に酒をくみかわす調子で、
「おい。たよりにしているから」
とか、
「京へあそびにおいで」
とか、それは実に人なつかしげな親情をよせてくれる。
真田昌幸にとって、こうした秀吉の人柄がたまらなく好ましいのである。
その秀吉が、
「わるいようにはせぬから、沼田を北条にやれ」
と、いってきたのだ。
昌幸は苦慮をかさねた末、ついに、秀吉のことばへ従うことにした。

「ただし」
と真田昌幸は条件をつけた。
「名胡桃城だけは返せませぬ」
これであった。
沼田は返しても、沼田に近い〔名胡桃城〕だけは我物としておきたい。そして、北条氏政のうごきを絶えず見張っていたい。それでなくては、
「安心できませぬ」
と、いうのである。
「もっともじゃ」
豊臣秀吉はうなずき、これを北条氏政になっとくさせた。
真田昌幸は、鈴木主水の手をつかみ、
「引きつづいて、名胡桃をたのむぞ」
と、いった。
もとは沼田衆であった鈴木主水に、もっとも大切な出城をまかせるというのだ。
このとき、主水は、
「もと沼田衆のひとりであったおれが、はっきりと真田の家臣になったことを感じた」
と、我子の右近に語っている。
これが、今年の七月のことであった。

この年、天正十七年は現在より三百八十年ほど前になる。
そして約五カ月を経て〔名胡桃城〕は敵にうばい取られた。
敵は、いうまでもなく、北条氏政というわけだ。
城が落ちる前日。
城主の鈴木主水へ、信州・上田城の真田昌幸から手紙がとどいた。
「このたび、伊那と箕輪へ城をきずくことになったので、いろいろと相談をしたい。すぐさま、上田へおいでねがいたい」
との文面である。
まぎれもなく昌幸の筆蹟であったから、主水はすぐに家来三十余名をひきいて、上田へ向った。
〔名胡桃〕から上田へ出るには、山ごえに吾妻高原をぬけて行くわけだが、途中に岩櫃の城がある。
この城は、真田昌幸の叔父にあたる矢沢頼綱がまもっていた。
で……鈴木主水は、ついでに岩櫃城へ寄り、
「実は、これこれにて上田へまいります」
と告げるや、矢沢が、
「おかしいな。わしは伊那へ城をきずくことなどきいてはいないぞよ」
「え……？」

主水も、くびをかしげた。
このような大事を矢沢が知らぬわけはない。
そこで主水は、真田昌幸からの手紙を出して矢沢に見せると、
「こりゃ、ちがうわえ」
矢沢頼綱が顔色を変え、
「これは、昌幸殿の筆跡ではない。にせ手紙じゃぞよ」
と、いった。
主水は、
（あっ……）
とおもった。
（はかられたか……）
いま、沼田城は、北条氏政の家臣で猪股能登守という武将がまもっている。
この猪股が謀略をもって、真田昌幸の偽筆の手紙をつくり、鈴木主水をさそい出し、その留守に〔名胡桃城〕をうばい取ろうとしたのだ。
主水は、すぐにそこへ気づき、変転して〔名胡桃〕へ引き返したが、すでにおそかった。
城門は堅く閉ざされ、城は猪股能登守の北条軍により、完全に占領されてしまっていた。
むろん城内には、鈴木主水の兵が五百ほどいたのだが、裏切者が出て、外から押して来る北条軍を迎え入れたものだから、どうにもならない。

この裏切者の名を中山九兵衛(くへえ)という。
鈴木主水につかえながら、ひそかに沼田城の猪股能登守と通じ、真田のにせ手紙を主水に取り次いだのも彼であった。
戦闘もおこなわれたが、中山九兵衛が城門を内側からひらき、北条軍をさそい入れたため、城内の鈴木部隊はたちまち潰滅(かいめつ)し、残ったものは屈服した。
寝所にいた右近と、母の堀切御前をすばやく捕えたのも、中山九兵衛とその輩下なのである。
ここで、鈴木右近が共に自殺をとげようとした場面へもどろう。
「お待ちなされ」
と、声をかけた番兵は、つい先刻、前の番兵と交替した中年男で、とぼしい灯(ひ)の下で顔かたちもはっきりと見えぬが、ずんぐりとした体軀(たいく)の、鈍重そうな足軽(あしがる)であった。彼のほかに二名の番兵がいたようであるが、いま気がつくと、この二名の姿は見えない。
「だまれ」
右近が叱(しか)りつけた。
「おしずかに……」
「なにを、おのれ……」
「若殿に申しあげたいことがござる」
「何……?」

「先刻、城内に知らせが入ったようでござる」
「え……?」
「御父君、鈴木主水さまがな、城の向うの正覚寺という寺へ入られ、切腹をなさいましたとか」
右近と母は顔を見合せ、凝然となった。
「主水さまはな……わしの首を上田の殿（真田昌幸）へ差し出し、わしが不明をおわびしてくれい……と、かように、御家来の人へ申しのこされたそうにござる」
母と子が、ひしと抱き合った。
それへ、番兵がこういった。
「なれば、いま死ぬはむだ死にでござる。いましばらくお忍びなさるがよろしかろうと存じまする」

三

「名胡桃城を、わしに無断でうばい取るとは……北条氏政はけしからぬ。天下の平穏をみだりに事をかまえてやぶったではないか。わしや真田が、すべておだやかにおさめようとしているのに、これは実にゆるせぬことじゃ」
と、豊臣秀吉(とよとみひでよし)が激怒した。
激怒しつつ、よろこんだ。

北条氏政を攻撃する理由が、これではっきりと立ったからである。
完璧な天下掌握を眼前にひかえているだけに、秀吉もむやみに北条家へ戦争をいどむわけにはゆかぬ。
それだけに〔名胡桃城〕へ武力進駐をした北条軍を、
「天下の平和をみだりにやぶった！」
と、きめつけることによって、
「このような北条氏政をゆるしておいては、いつまでも天下はおさまらぬ」
という開戦理由が、一応はたったわけだ。
年が明けた天正十八年二月一日。
秀吉は諸大名へ向けて、
「小田原の北条攻めへ参加すべし」
との命令を下した。
三月。豊臣秀吉はみずから大軍をひきいて京都を発した。
このときの秀吉は、つくりひげを鼻下へつけ、唐冠の兜をかぶり、赤のよろいに黄金づくりの太刀を横たえ、赤ぬりの弓を手に、金銀の飾りをいっぱいにつけた愛馬唐船へまたがり、
「それ唄え、やれ囃せ」
太鼓・笛の音に合せ、美麗をきわめた吹き流しや戦旗をつらね、まるで祭りさわぎの出陣であった。

この行列が御所の前へさしかかると、後陽成天皇は、高台にのぼられて、秀吉を見送られた。
大名の出陣を天皇が見送られたなどというのは、あとにも先にもなかったことで、秀吉はもう得意満面の態であったろうし、こうした秀吉のデモンストレーションは、彼の天真爛漫な虚栄心をまんぞくさせたばかりではなく、諸大名たちをして、
「もはや豊臣の天下じゃ。秀吉公にはそむけぬ」
ことを、おもい知らしめたことになる。
さらに秀吉は、あくまでも無駄な流血を避け、十五万の大軍をもって、小田原城へこもる五万の北条軍を包囲し、ゆったりとした持久戦へもちこみ、この間に、関東の北条方の諸城を一つ一つ討ち落していった。
小田原の攻防戦について、くわしくのべることは本篇に必要あるまい。
箱根の要害と、日本一を自称する小田原城をたのみに豊臣軍を迎え撃った北条氏政、氏直の父子も、あまり、はなばなしい戦ぶりも見せずに降伏し、氏直は徳川家康の聟にあたるということで一命を助けられ高野山へ放逐されたが、父・氏政と弟・氏照は切腹させられた。
このとき、
「名胡桃の城をうばい取れ、と、命じたおぼえはいささかもない」
と、北条父子がふしぎそうにいったそうである。
秀吉は、このことを耳にして、

「いまさらに、何の泣言かよ」
一笑に附してしまった。
もしも、北条父子の指令がないのに、沼田城代・猪股能登守が〔名胡桃〕をうばい取ったというのなら、これは主人の北条家を無視した猪股の独断ということになる。
しかし、責任は主人の北条家が負わねばならぬことだし、後から「知らぬことである」と、いい出したところで、もうおそい。
「沼田城を真田昌幸へ返してやれ」
いまや、天下統一を成しとげた豊臣秀吉の威令にさからうものはいない。
真田昌幸がよろこんだこと、いうまでもなかった。
昌幸の長男・信幸は、この年の秋に沼田へ入城し、城主として父のかわりに沼田領をおさめることになった。
事態がこうなれば〔名胡桃城〕がどうなるか、だれの眼にも判然としている。
〔名胡桃〕も、真田昌幸に取り返された。
締所に押しこめられていた鈴木右近と母御前は救い出された。
「いかい、苦労をかけたな」
と、真田昌幸は母子をなぐさめ、
「鈴木主水を、ついに死なせてしもうた……」
泪ぐんだ。

そして、押しこめられ、不安の日々をすごしていたときの様子を細々ときき取ったが、右近と母が自害をとげようとしたとき、これをとどめた番兵のことをきくや、
「ふむ。その男は、その後どうした？」
右近が、
「わかりませぬ。真田勢が入城する前に、どこかへ消えてしまったようであります。なれど、その番兵が絶えず、小田原攻めや、そのほかの様子をひそかに知らせてくれましたので、母上も私も、こころ丈夫に、救いの手を待つ気もちになれたのであります」
「なるほど……」
にっこりとうなずき、昌幸はもう、かの番兵のことを話題から外してしまったのである。
だが、鈴木右近にとっては、猪股能登守の家来の一人であるその男のことを、いつまでも忘れかねた。
十六歳という多感な年齢であれば、尚更のことであったろう。
「ときに右近よ」
と、真田昌幸は、
「もはや天下さまは秀吉公ゆえ、戦さ騒ぎもなくなろうし、名胡桃の城は不用のものとなった。わかるかな？」
「はい」
「どうじゃ。沼田へ行き、信幸につかえてくれぬか」

「は……」
うべないはしたが、右近としては真田昌幸の家来となって信州・上田の本城へ出仕をしたかった。幼少のころから、昌幸は右近を可愛(かわい)がり、彼が七歳の秋から八歳の夏にかけて、
「小太郎を、わしに貸してくれい」
わが居城へ連れ帰り、
「わしの可愛い玩具(てあそび)よ」
などといい、右近に少女の衣裳(いしょう)を着せたりして、舞いをやらせたり、笛を教えたり……こころゆくまで遊び暮させてくれたものだ。
父・主人(もんど)亡(な)きいま、鈴木右近にとって、真田昌幸は主人というよりも〔二人目の父上〕のようになつかしく、慕わしい。だから昌幸につかえたい。昌幸のために奉公をしたかったのである。
おもいきって、そのことをいい出すと、昌幸はうれしげに、
「そうか、そうか」
何度も、うなずいたけれども、
「沼田は、そなたの国じゃ。そなたも、そなたの父も祖父も、沼田に生まれ、沼田に育った。武士はわが国に生きてこそ武士なれ、と申すではないか。な、な……」
そういわれて見ると、右近も沼田を立ち去りがたい。
そのころも、後年の徳川幕府による封建の世も、日本はいくつかの国に別れ、その一国一

国が大名によっておさめられてきた。
それぞれに政治もちがい、法律も異なる。
だから、国境感覚もするどいものであったし、たとえば、関東や東北の人間が九州へ入りこんだとしても、同じ日本のことばながらそれぞれの国語(なまり)によって、会話すらもおもうようにはこばなかったようだ。
殿さまがいて、殿さまの象徴たる〔城〕があって……そこにこそ、
「武士の国がある」
と、真田昌幸はいうのだ。
当時の武人の考えとして、当然のことなのであるし、信州の小勢力の代表として悪戦苦闘をつづけ、ねばりにねばりぬいて真田の領国をまもりぬいた昌幸にしてみれば、わが国土への執着は層倍のものであったろう。
かくて……。
鈴木右近忠重は、沼田城主真田信幸の家来となった。
信幸は、右近を迎え、
「まいったな、白毫子(びゃくごうし)」
と、いった。
右近は、こたえなかった。不快であった。
からかわれたとおもったのだ。

信幸は、父と共に上田城で暮している弟の幸村（当時・信繁）とちがい、母・山手どのゆずりの美貌のもちぬしで、ときに二十五歳。

背丈が高く、小柄な右近を見下すようにしてものをいうのが、新しい主人とはいえ、何となく、右近に親しみをよばなかった。

このころの殿さまと家来の間柄には〔親愛〕のこころが介在せぬと、真の主従関係にならない。

主人がきらいなら、

「おれは別の主人をさがす」

さっさと、殿さまを捨てて出て行ってしまったものである。戦乱が絶えぬ時代に、ちからある戦士が食いはぐれることはあり得ないのだ。

秀吉が天下をおさめたばかりのいま、その気風は武士の胸へ濃厚に残っている。

十七歳の鈴木右近……白うさぎの温順な彼にも、こうした気風がつたわっていて、主人・真田信幸への不快を露骨にしたものであろうか……。

とにかく、このときの右近は、以後の自分が信幸との間に深い深いつながりを得て生死を共にすべき主従になる、などとは考えても見なかったといえよう。

（折を見て、やはりおれは、上田の大殿のもとへ行くことにしよう）

そう、おもった。

翌年の四月。

右近の母・栄子が、沼田城下の屋敷で病歿した。

そのころから、鈴木右近の身辺は急激な変貌をとげることになる。

四

それは、母が亡くなってから間もなくのことであった。

右近が用事で、沼田城内・二の丸外にある主人の居館へ出仕し、夕暮れになってから退出すべく、東側大廊下を歩いて来ると、

「もし……」

初夏の夕闇がただよう大廊下の柱の蔭から若い女の声がよびかけてきた。

「……？」

見ると、主人・信幸につかえる侍女で於順という女である。

於順は、真田の家来・杉野源右衛門の次女で、当年十七歳。細っそりとした躰つきの、どこか憂愁をたたえたさびしげな顔だちをしている。

父の源右衛門は、上田の本家につかえる槍組の武士で、だから於順は父母や家族と別れて、沼田の分家である信幸の居館に奉公をしているわけだ。

「於順どのではないか……」

右近も、彼女をよく見知っている。

殿さま夫妻や、家臣、侍女などの関係が複雑な制度のもとにおかれるようになるのは、も

っと後年の徳川幕府が成立してからのことであって、当時は、どこの大名の家の男も女も、いっしょになってはたらき、別に、きびしい〔わけへだて〕もなかった。

「何か、用か……？」

「はい……」

於順は、うつ向いている。

「何の……」

「は……あの……」

大廊下の向うから、武士のはなし声が近寄って来る。

於順は右近に、何か、秘密の相談があるらしい。

（それにしても、なんでおれに……？）

わからなかったけれども於順は全身で〔苦悩〕をうったえていることが、見てとれた。

とっさに、右近は於順の袖を引き、右側の〔塩部屋〕とよばれる部屋の板扉を開け、中へみちびき入れた。

〔塩部屋〕は、一種の納戸のようなところで六坪ほどの板敷きの部屋が三つ、つらなっている。

ほの暗い、器物をならべた棚の下へ来て、

「何か、心配ごとか？」

と、右近がきいた。

「は……」

実は、於順の父・杉野源右衛門は、右近の父・鈴木主水の組下にいたこともある男で、主水が真田家へ臣従するようになってから、信幸の家来に入り、さらに上田の本家へ転じたものである。

だから、於順が右近へ相談事をするというのも、うなずけぬことではない。

「いうてごらん」

「実は、あの……と、殿さまが……」

「殿が……」

「こわい……」

突然、於順が、ひしと右近へ取りすがってしのび泣きをはじめた。

わるい気もちではない。

肉づきのうすい、か細い躰ながら、さすがは十七の乙女の女体の甘やかさである。

於順より一歳上の右近だが、まだ女体を知らぬだけに惑乱し、惑乱しつつも、自分の躰へ全身を埋めこむようにして泣きじゃくっている於順を見ると、おもわず声をつまらせ、

「お前が父と、おれが家とは関合もふかい間柄だ。わ、わるいようには、せぬ。な、なんでも、いうてごらん。さ、泣いていてはわからぬ。泣声をきかれてはいかぬ。低い声で……な、はなしてごらん」

於順が、ためらいつつ語るところによれば……。

真田信幸が於順におもいをかけ、側室にしようというのだそうである。
　それなら別に、なんのことはない。
　家来の女(むすめ)が殿さまの側妾(そばめ)となることはむしろ名誉なことだし、男子を生みおとすようなことにでもなれば、当時の女として非常な出世というべきである。
「それが、いやなのか?」
　右近の問いに、於順はかぶりをふって見せた。殿さまが別にきらいではないらしい。
「それなら何も、おれに相談をもちかけることもないではないか」
　右近は、急に興ざめのかたちで、於順を突きはなした。
　どこの大名の家にもあることだが、一昨年妻を迎えたばかりの信幸なのに、女漁(おんなあさ)りをするとは、
（殿もあれで、よほどの御方なのだな）
　あまり好感を抱いていない主人だけに、若い右近は信幸を汚ならしくおもった。右近は無言で〔塩部屋〕から出て行こうとした。
「お待ち下されませ」
　於順の声は、切迫していた。
「もうよい。おれはいそがしいのだ」
「でも、あの……」
　煮えきらない。

　つまり、殿さまを慕っているわけではないが、側室になれというのならいやではない。しかし、於順は別のものを恐怖しているのだという。
「何をだ?」
　じりじりしながら、右近が怒鳴りつけるようにいうと、
「御方(おかた)さまが、おそろしゅうございます」
　於順は、ぞっと身をふるわせるようにしてこたえた。
〔御方さま〕とは、真田信幸夫人・小松をさす。
　小松の方は、徳川家康(いえやす)の重臣・本多平八郎忠勝(ただかつ)のむすめに生まれた。母は家康の孫にあたる。だから家康にとって小松は可愛い曾孫(ひまご)というわけだが、これをわが〔養女〕として真田信幸へ嫁入らせたのであった。
　この縁談がもちこまれたとき、
「わしはいやだ。はっきりことわる」
　家康ぎらいの真田昌幸は、一も二もなくはねつけようとしたが、
「嫁に迎えるのは父上ではござらぬ。この信幸でござる」
　長男・信幸は、乗気らしい。
　昌幸は激昂(げっこう)した。
　前々から北条(ほうじょう)氏政とむすび、真田家へは何度もひどい仕打ちをしている徳川家康の養女を、
（せがれの嫁にするなどとは、とんでもない）

ことなのである。

「家康は、わしが恐ろしいのじゃ。いかに攻めかかっても信州からわしを追い払うことができぬので、縁組をむすび、手なずけようという……いつもの手じゃよ、あの狸の」

「私は、徳川どのと手をむすぶこと、悪しゅうはおもいませぬが……」

「本気で申すのか、おのれ」

「はい」

「ばかな！」

「おまかせ下され」

「ならぬ」

「ま、おまかせあれ」

こうなると、平常は温厚な信幸が、微笑を絶やさぬままに、一歩も退かなくなってしまう。

真田昌幸は、若いくせに老熟のおもむきをそなえたこの長男を、きらうというのではないが、

「信幸の血は冷えておるのじゃ。わしが、いかに怒鳴りつけ、叱りつけても、乗りかかっては来ぬ。あの、あの、にんまりとしたうす笑いをうかべて、凝と、眼つきだけは冷ややかに、わしを見つめてくる。あの眼つき……どうもな、我子ながら気圧されてしもうて……」

いつか、苦笑しながら、重臣であり、叔父である矢沢頼綱にこぼしたことがある。

そこへゆくと、次男の幸村は一つちがいの弟ながら、顔つきも父親そっくりであるし、感

情の起伏も明快で、軍略にも武男にも長じ、幼年のころから昌幸の秘蔵子であった。

で……。

ついに、昌幸は信幸に押しきられてしまった。

小松は一昨年の秋に、はるばると駿府（静岡市）の徳川城下から信州へ嫁入って来た。

ときに、小松は十七歳であったが、夫の父真田昌幸と、はじめて対面がおこなわれたとき、昌幸をして、

「くやしいが、信幸の嫁にはすぎたる女じゃ」

嘆ぜしめたという。

矢沢頼綱も、

「とても、十七歳の小むすめとは見えなかった。堂々として、おのずから威厳がそなわり、しかも、声音やさしくして、立居ふるまいの女らしい、ふっくらとした姿かたちには見惚れるばかりであった」

と、のちに語りのこしているほどである。

真田昌幸や矢沢頼綱ほどの人物を、ひと目で感嘆せしめた小松の方であるから、於順のようなむすめが恐れるのもむりはないといえよう。

大名の側室は、ほとんど夫人の公認を得るかたちになるわけだが、それにしても、側室の身になって見れば、いろいろとむずかしいことがあるのは勿論のことであって、於順のように内気で弱々しい女が小松の方を正夫人にもつ真田信幸の側室の座につくことをおそれるの

は、当然というべきであったろう。
「なるほど」
すべてを聞き終え、鈴木右近も肯定せざるを得なかった。
右近だとて「殿さまと御方さまと、どちらがこわいか?」と問われれば「御方さま」と、こたえるにちがいない。
つつましく夫の信幸につかえながら、小松の方の挙動には一点の隙もなく、しかも、徳川家康の養女であり曾孫であるという誇りが小松の全身にみちみちている。
信幸も、この妻にはあたまが上らぬ。
それだけに、側室のいる一郭をつくり、息ぬきをしたいのであろう。
いま、小松の方は懐妊中であった。
秋ごろには、はじめての子が生まれる筈である。
これも、当時の武家のならわしで、小松の方は二の丸の別邸へうつり、信幸との夫婦生活を絶ち、ひたすら産前の保養につとめているのだ。
於順を側室にという信幸の意向は、侍臣・矢野丹後を通じて上田の於順の父にも通告され、於順は明後日の夜から、殿さまの寝所に近い〔鳥仙の間〕という一室へ入り、信幸を迎えることにきまった。
これをきいたとき、鈴木右近は突然、得体の知れぬ衝動に駆られた。
若いくせに分別くさい、殿さまのうす笑いが脳裡をかすめ、その殿さまが於順のか細い肉

体をかき抱くときのありさまが胸にうかんだ。
舌うちを一つ鳴らし、
「よし」
鈴木右近は於順に、こういいはなった。
「おれにまかせておけ。わるいようにはせぬ」
「では……」
「よいとも」
「かまいませぬか」
「耳をかせ。打ち合せておかねばならぬことがある」

五

その夜が来た。
闇がねっとりとまとわりつくような蒸し暑い夜であった。
それでいて夕暮れからふり出した雨が霧のようにけむってい、時刻がくると於順は老女たちの介添えで湯浴みをし、化粧をほどこされ、〔鳥仙の間〕へ入れられた。
しばらくして真田信幸が小廊下をわたって来、鳥仙の間へ入る。この部屋は三つに別れてい、一の間に信幸の侍臣二名がひかえ宿直をする。二の間は無人、奥の三の間に屏風をたてまわし、その中に於順が待っている筈であった。

眠り燈台の灯が、三の間の片隅にまたたいている。
屏風の中は暗かった。
「於順……」
信幸は声をかけ、しずかに近寄って行った。
夜のものの中に、早くも於順が臥っている。
信幸は、意外におもった。
こうした場合、侍女であるべき於順はきちんとすわったまま、主人を迎えなくてはならぬし、それだけの心得がない女ではない筈であった。
（はにかんでおるのか……）
微笑し、夜のものの下へ手を差し入れてみて、信幸は愕然とした。
臥っていた於順……ではない、その男が、はじけるように笑い出したからである。
鈴木右近であった。
「や、おのれ……」
信幸は激怒し、右近をつかみ出して、壁へ叩きつけた。
平常は温和な、しかも物やさしげな風貌の所有者であるこの主人の膂力に右近はおどろいた。壁に打ち当り、転倒したまま、しばらく呼吸もできぬ。
「おのれ、このふるまいは何事ぞ！」
信幸が叱咤した。

宿直の家来が次の間へ駈けこみ、くちぐちに、
「殿!!」
と、叫んだ。異常を感じたのである。
「よい。ここへ入るな。行け。大事ない」
信幸がこたえた。
家来たちは一の間へ去った。
「右近。於順はどうした？」
やっと右近は口がきけるようになり、
「え、縁の下に……」
辛うじて、こたえた。信幸の恐るべき腕力をはじめて知って、右近も顔面蒼白となっている。
右近は、午後の退出時に御殿から外へ出ず、奥庭の茂みにかくれて夜を待ち、於順が〔鳥仙の間〕へ入るや、縁の下から畳をはね上げて室内に入り、入れかわりに臥床へもぐりこんだものである。
真田信幸の怒気は消えなかった。
「おのれ、何ゆえにこのようなふるまいをした。次第によっては討ちとってくれる」
「か、かまいませぬ」
「申せ。いえ!!」

「は……」
　このとき、おもいもかけぬ衝動が右近の五体をつらぬき、彼は、ほとんど無意識のうちに口走っていた。
「於順と私めは、いいかわしたる仲にござります」
「なに……」
　うすぐらい灯の中で、信幸の顔面から見る見る怒りの色が消えてゆくのを、右近は、はっきりと見た。
「そうか……」
　信幸が何度もうなずき、あたたかい、やさしい声で、素直に卒直に、
「それは知らなんだぞ」
　と、いい、さらに、
「これは、おれがわるかった……」
　と、いいそえた。
　右近は、投げつけられたときの層倍のおどろきをもって主人を見つめた。
　当時の（いや現代でもだろうが）主たるものが召しつかっている者に対しての態度、ことばとしては、この信幸のそれは異例破格をきわめているといってよい。
　家来である右近と、侍女である於順の人格を尊重すればこそ、とっさに、このような態度がとれるのであろう。

「おれも知らなんだが、お前も於順も、なぜにそれをいわぬのか。おれにでなくともよい、矢野丹後に申し出てくれればよかったのだ」
「は……」
「よし、わかった。お前たちの間は、おれが取りもとう。夫婦になれ」
「………」
　右近にとって事態は、おもいもかけぬ方角へ進行してしまったことになる。
　もとは家来すじの者のむすめへの同情と、主人への反抗と、右近自身の若さがよんだ冒険のこころとが一つになって、無謀をもわきまえずしてのけたことなのだが、こうなっては退引ならぬ。
「おれが媒酌では不足か?」
　かさねて信幸にいわれたとき、ついに右近も、
「かたじけなく存じます」
　と、受け、決意せざるを得なかったのである。
　右近と於順の結婚は、この年の秋におこなわれた。
　折から、豊臣秀吉は朝鮮出兵の軍をおこし諸将に動員令を下していたので、真田家では本家の昌幸がみずから出陣することになり、
「あとは信幸にたのむ」
　といいおき、幸村と共に部隊（七百余騎）をひきい、朝鮮出兵の本陣となった肥前の名護

屋へ出発して行った。
幸村は新婚の最中であった。
豊臣秀吉の仲介によって、大谷刑部吉継のむすめを妻に迎えたのだ。一説には、信幸より先に幸村の結婚がおこなわれたともいう。
信幸夫人の小松の方も、ぶじに子を生んだ。すなわち、長女のまん姫である。
まん姫が生まれたのは九月二十一日であったが、その三日後に、突如、鈴木右近が沼田城下から失踪した。
新妻の於順も、自分の家来たちも捨てて、ただ独りの失踪である。
右近は、真田信幸に置き手紙を残していった。
その大要、次のごとし。
「……感ずるところがありまして、いささか修行の旅へ出たいと存じます。殿へ申しあぐるには、あまりにもわがまま勝手なる計画にて、ついつい、ためらううち、おもいきってだれにも告げず沼田を出てまいることにいたしました。
何故に私めが、このような挙に出ましたか……それは、突きつめて申しあげますと、真田信幸の臣として恥ずかしからぬ武士とならねばならぬとおもいきわめましたからでござります。いまの私は精神も肉体も、殿と共に沼田の真田家のためにはたらくだけのちからをそなえてはおりませぬ。いえ、あまりにも脆弱にすぎまする。これでは私めが禄を食んでいたとて殿が損害をこうむるだけのことでそこのところを、このごろになってつくづくと考えまし

た結果、私めは私なりの仕様によって自分をきたえぬいてまいりたいと存じます。私めの家来たちは私とちがい、亡父・主水のころからつかえくれましたる者どもにて御役には立ちましょうゆえ、なにとぞ御憐憫をもって、お召しつかい下さいますならば、この上もないよろこびでござります。
妻・於順がことも、なにとぞ、おあわれみ下さいますよう。
まことにわがまま勝手なる右近。御怒りをもって、いかような処罰をうけましょうともかまいませぬ。帰参いたしましたる折、腹切る覚悟にて沼田を出発いたします」
信幸は、一読してあきれ顔になり、
「白うさぎともおもえぬ……」
つぶやいた。
傍にいた小松の方は、信幸のゆるしを得て右近の手紙を読み、
「右近どのが帰参の日、たのしみに待たれまするな」
悠揚せまらぬ口調で、何気もなくいった。

六

それから、足かけ七年の歳月がながれた。
この年、慶長三年の秋に、豊臣秀吉が伏見城に病歿した。
秀吉の朝鮮出兵は、莫大な金銀と軍団のエネルギイを消耗しただけで、大失敗に終り、そ

の失意の中で、豊臣の後つぎとして只ひとり残された六歳の愛児・秀頼の将来を案じ、不安と淋しさにさいなまれつつ、老いた秀吉は死んだ。

このため、再度の朝鮮出兵軍の第二軍として名護屋へ集結をしていた諸将の部隊は陣をはらい、それぞれの領国へ帰って行った。

これは、秀吉の死後、豊臣内閣の長老である前田利家や徳川家康などが相談し、朝鮮出兵を中止に決めたからである。

「当然のことじゃ」

名護屋に駐屯していた真田昌幸は、はじめから、

「殿下（秀吉）にも似合わぬことをなさる」

と、朝鮮出兵の失敗を直感していただけに真田部隊が終始、内地の本陣に詰めていて、戦場での犠牲を強いられなかったことを、よろこんでいた。

「こうなると、兵力を損わなかったことが大きい」

昌幸は、共に名護屋へ来ていた信幸にいった。このときは幸村が上田に残っていたのだ。

「太閤殿下亡きのちの天下は、またぞろ大変じゃぞよ。早く国もとへ帰り、われらもいざというときの準備をととのえねばなるまい」

という父・昌幸のことばに、信幸もうなずいた。父のことばは、おそらく本当のものになる……と、信幸も直感していたからである。

昌幸がひきいる真田部隊は、九州から大坂へ、さらに伏見へもどり、ここで隊伍をととの

えて信州と沼田へ引きあげて行ったが、

「父上。それがしは、いましばらく京へとどまり、天下の形勢を見とどけてからもどりたいと存じます」

と、信幸がいった。

「よせと申しても、きくおぬしではない。好きにいたせ」

そこで信幸は、京都・室町にある真田屋敷へ、四十名ほどの家来と共に滞在することにした。

以前、豊臣秀吉が京都に〔聚楽第〕という豪壮な居館をいとなんだとき、諸将も京の地へ、それぞれの屋敷をかまえた。だが〔聚楽第〕は三年前に取りこわされてしまい、大名たちの中には屋敷を廃絶したものが多かった。

真田家が京都屋敷をいまだに廃止しないのは、朝臣・今出川（菊亭ともよばれる）大納言が親類にあたることもあり、公家との間にいろいろと交際もあったからだ。

真田家は、もともと清和天皇の皇子・貞元親王から出たといわれているほどで、真田昌幸は、今出川晴季のむすめを妻に迎えた。

これが信幸・幸村兄弟の母である〔山手どの〕なのである。

京都のほかに、伏見にも真田屋敷があった。

伏見は、いま政局の中心になっている。

秀吉亡きのち、徳川家康の威望がにわかに擡頭し、重病中の長老で加賀の大守でもある前

田利家をしのぐ勢力の伸張をしめし、家康自身も、
(こうなれば、わしが天下人に……)
の決意を意識してかたちにあらわしはじめていた。

真田信幸は、京都屋敷へ入ってから隔日に外出をした。家来二名のみをつれ、編笠に顔をかくし、京の町のみか、伏見へ、さらに泊りがけで大坂へも出かけて行った。大名や武士たちの、というよりは、民衆のうごきやうわさばなしを見聞きするのである。

徳川家康と豊臣派勢力との間が決裂し、天下争奪の戦争が起きるといううわさで、京も大坂も持ちきりであった。

その日。

信幸は、京都市中を見まわった。

晩秋の、よく晴れたさわやかな午後で、東山のすそにある八坂の塔に近い竹藪の小道をたどっていた信幸が、ふっと足をとめ、

「ゆだんすな」

家来ふたりに低く声を投げた。

右手は古びた寺の土塀。左がわはいちめんの竹藪。その間の小道はまがりくねって西へ下っている。

二人の家来は、小道に立つ信幸の前後をまもるようなかたちとなり、

「殿……」

「叱っ」

信幸が手で制した。

寺院の木立で、しきりに鶸が鳴いている。

森閑とした、あたりの気配の底ふかいどこかで、何か異様な物音がした。これが弓に矢をつがえて引きしぼったものと感じたとき、

「刀をぬけ。走れ!!」

信幸が叫び、編笠をかぶったまま小道を駈け下りはじめた。

家来たちがこれにつづいた。

数条の矢が竹藪の中から疾って来、家来の一人が絶叫をあげて転倒した。くびすじに矢が突き立っている。

このとき、信幸は道の突当りの小さな草原を横切ろうとしていた。

前面の木立から、槍をかまえた牢人ふうの武士が四名、猛獣のような喚声をあげ、信幸に殺到して来た。

背後で、残った家来の一人が、

「殿。うしろを……」

「何……」

ふりむくと、竹藪の中から躍り出た五名の武士が、抜刀して駈け寄って来る。

刺客以外の何者でもない。

あっ……という間に、信幸の家来へ背後の五人が包みこむようにして白刃をふるった。

家来の悲鳴がおこった。

そして、九名の牢人が真田信幸を包囲した。

中の一人が堂々たる体軀をゆさぶるようにして二、三歩すすみ、

「猪股能登守が弟、瀬兵衛元宣」

と、名のった。

これで、すべてがわかった。

〔名胡桃〕も沼田城も、真田の手にうばい返された北条家生きのこりの猪股瀬兵衛と、北条や旧沼田衆のものたちが、信幸の京都滞在を知り、つけねらっていたものと見える。

信幸は笠をかなぐり捨てるや、

「曳!!」

みずから猛然と切って出た。

竹藪の小道へあらわれた、これも牢人らしい武士が一人、血刀をかざし、猛然と草原の撃闘の渦の中へ駈けこんで来たのは、このときであった。

「殿!!」

わめきざま、この牢人が縦横にふるう太刀さばきの下に、刺客三名が血飛沫をあげて声もなく殪れている。恐るべき剣技ではある。

刃と刃の嚙み合うすさまじい音響が草原の南端から木立の中へ吸いこまれた。

真田信幸は、助勢の牢人のことを意識しているひまがなかった。

猪股瀬兵衛の息をつく間もない槍の攻撃をかわしつつ、刺客二名を斬倒すのが精いっぱいのところで、木立の中へ逃げこみ、襲いかかる瀬兵衛の槍に突きまくられたかたちだ。

「殿!!」

呼ばわりながら、助勢の牢人が信幸の後から木立へ飛びこみ、振り向きざま、また一人を斬った。

すぐに別の刺客の槍の柄が切り飛ばされ、新しい悲鳴がおこった。

椎の大木の、その幹を右へ左へまわりこみつつ、牢人の太刀が風を巻いてするどい叫びをあげた。

小袖の裾を端折り、素足にわらじばきという姿なのだが、牢人の身うごきは神速をきわめている。

猪股瀬兵衛は、信幸を突きまくり、木立の奥へ追いこみながら、ふと、背後に虚脱を感じた。味方の声も太刀の音も絶えたのに気づいたからである。

（や……？）

おもわず、ふりむいた。

信幸の逆襲には充分そなえたかまえのままで、ふり向いたのであったが……。

山猿のような一個の影が、地を這うようなかたちで瀬兵衛の眼前へ音もなく肉迫して来た。

「ああっ……」
信ぜられぬというように、瀬兵衛が目をみはった。
これが、猪股瀬兵衛の最期であった。
槍をかまえ直す間もなかった。
地を這い、駈けて来た山猿がすっくと立ち、瀬兵衛の眼前を左へ飛びぬけたとき、山猿の薙ぎはらってきた剛刀は、瀬兵衛の胸肉をななめに切り割っていた。
よろめいてのめりこむ瀬兵衛のあたまへ、山猿の二の太刀が打ちこまれた。音をたてて血が噴出し、瀬兵衛はうつ伏せに倒れたまま、もううごかない。
「殿。おひさしゅうござりました」
山猿……助勢の牢人がいった。
「あ……う、右近」
「はい」
まさに、鈴木右近であった。
むさ苦しい牢人姿の彼の顔をまじまじとながめやって、真田信幸は嘆息をもらした。
「こ、これが、右近か……」
なのである。
〔白毫子〕のおもかげは、いま、ここに立っている鈴木右近のどこからもさがし出すことができぬ。

背丈のみは相変らず低いが、その小柄な体軀にはみっしりと鍛錬された肉がつき、くびすじから両肩にかけての筋肉のすばらしさは、瞠目に価するものであった。
顔も腕も、たくましく陽灼けしており、鼻もふとく、唇も厚く、ひげだらけの右近の、その顔貌の変化に信幸は、しばらく声も出なかった。それでいて、まぎれもなく、これは鈴木右近の顔なのだ。
「どこにいたのだ、いままで……?」
やっと、信幸がいった。
「は……」
右近は自分の刀をおさめ、信幸の手の太刀にぬぐいをかけ、
「しばらくでござりました。おなつかしゅう存ずる」
野ぶとい声であった。
「町で、猪股瀬兵衛たちを見かけました。その行手に、殿が歩んでおわしましたので、後をつけてまいりました。途中、猪股たちを見うしないましたなれど……もしや、と存じまして、殿のおん後から……」
「む。よう助けてくれた」
「竹藪の中に、弓矢を持ったる牢人一人、斬って伏せておきました」
「そうか」
「猪股瀬兵衛は豪勇の士でござりましたな」

「いうな。わしが弱いのじゃ」
「とてもとても……」
「家来ふたり、死なせてしもうた」
「はい」
「それにしても右近」
「は」
「おぬし、よほどにきたえぬいたな」
「七年になりまする」
「だれに剣法をまなんだ？」
「柳生五郎右衛門が剣法の師でござる」
「ほほう……」
信幸は感嘆の声を発した。
柳生五郎右衛門宗章は、柳生新陰流の祖、柳生石舟斎宗厳の四男にあたる。早くから柳生を出て諸国を経歴していることは、信幸も耳にしていた。
「右近。屋敷へもどり、はなしをきこう」
「はあ……」
「まだ、わしがもとへもどる気にはなれぬか」
「さよう……もどったほうがよろしいか、どうか……いや、おゆるしあれば帰参つかまつり

ましょう。天下の雲行きもあやしくなりましたなれば」
「そうしてくれい」
「わが妻、わが家来は？」
「七年前のままよ。沼田の屋敷におぬしを待っておる」
「かたじけのうござる」
「於順が病いがちでな」
「は……」
妻が病気がちときいても、右近はおどろかなかった。
このとき、鈴木右近は二十五歳。
真田信幸は三十二歳になっている。

七

鈴木右近忠重は、後年、だれに問われても、漂泊の七年間のことをくわしく物語ることがなかったといわれる。
「柳生五郎右衛門殿にめぐり会うてからは、共に山めぐりよ。山から山へ、けだもののように移り住みつつ、……というよりは、けだものと化して発奮しただけのことよ」
右近は、にやにやと、
「けだものになるとな、眼も耳も、手も足も、人間以上のはたらきをするようになる。これ

はその、まことにたのしいものでな。馴(な)れぬまでは苦しいが、馴れつくすと人間の世界を突きぬけてしまう。空のな、月と星と一緒じゃ。裸で冬がすごせるし、水と木の実だけで冬ごもりしたこともある。山の奥ふかい洞穴(ほらあな)の中でな……」

真田(さなだ)の家来たちは、こうした右近のことばをきくたびに苦笑し（またはじまったか……）というような表情になる。だれも本当にしなかった。

京で、主人を救った彼のはたらきについても、

「殿が、右近どのを救われたのじゃ」

と、いうことになってしまった。

なぜなら、これから後の鈴木右近は衆目の中で、一度も剣をふるうことがなかったからである。

しかし、真田昌幸(まさゆき)は、信幸(のぶゆき)と共に故国へ帰って来た右近のあいさつを受けたとき、

「こやつ、白うさぎをやめて、黒熊(くろくま)になったか……」

と一言。あとは破顔して、

「亡き主水(もんど)の血が、お前を、どのような男にするかと、たのしみにしていたが……ふむ、ふむ。このような面(つら)がまえになったとはなあ」

うれしげに右近へ盃(さかずき)をやり、この夜は幸村(ゆきむら)をまじえ、夜明けまで酒をのみつづけた。

右近の帰参が、五十をこえた昌幸にとっては、よほどにうれしかったのであろう。

こうして、鈴木右近は七年ぶりに、沼田のわが屋敷へ帰った。

屋敷内は、七年前と少しも変っていない。

小者、下女を合せて十五名ほどの奉公人もそのままいたし、〔名胡桃(なくるみ)〕時代から右近につきそっていた家来・桜木孫九郎という老熟の武士がいっさいを指揮し、主人の長年にわたる失踪(しっそう)の影響はいささかも見られぬ。

家来たちの落ちつきぶりにも右近は感心をしたが、それは口に出さず、真田信幸の自分へ対する親情があればこそ、家来も妻も安心のうちに七年の歳月をすごすことを得たのだとおもった。

「人間の年齢(とし)というものは、ふしぎなものよ」

と、右近は桜木孫九郎にいった。

「七年前の、まだ二十に満たぬおれの眼から見た殿と、いまのおれが見る殿とは全く別の御(お)方(かた)だ。それはな、殿がお変りになったのではあるまい。おれの眼の光り方がちがっていたのだ」

「それは、私めがあなたさまを見るにつけても……」

「ふ、ふふ。おれも変ったか」

「はい」

「ま、おれは殿とちがう。前のおれは人の歯も立たぬ堅くて青い木の実よ」

ところで於順は、どうしたろうか。

むろん、右近の帰邸をよろこびはしたが、それは新婚早々、夫に去られた妻のうらみとよ

ろこびとがふくめられたものではなかったようである。
於順の病気は、相当におもかった。
右近が、彼女の病間へ入り、臥床へちからなく横たわった妻へ、
「おい、どうした」
やさしく声をかけると、於順もまた右近の変貌へ目をみはりつつ、
「お帰りなされませ」
「いかぬな、病いは……」
「こまりました」
「早う元気に……」
「もはや、元へはもどりますまい」
仲のよい兄妹の雰囲気が、そこにかもし出されている。
それでなくとも細く小さい於順の肉体は、青白く萎みつくし、無惨をきわめていた。彼女について記し残されている書きものを読んでも、どのような病気であったのか明確ではない。おそらく肺患であったものかと考えられる。
右近が帰って間もなく、於順は息を引きとった。
息絶える直前に、於順は右近の手をちから弱くにぎりしめ、
「あのとき、婚礼の夜……ふたりきりの寝間で、血を吐きましてより、夫婦の語らいもかなわぬまま、身まかりまするのが……女としてくやしゅう存じまする」

と、ささやいた。
「おれも、残念だぞ」
と、右近がこたえた。
本心をいうと、於順とのちぎりをかわさなかったことについては、別に残念でもない。それは、父の旧臣のむすめへのあわれみと、わが妹ともおもえる愛情と別のものであったといってよい。
生まれつき、もろく弱い肉体をもって二十四歳の生涯を終えた薄幸な於順への同情のみが、右近の胸底にゆらめいていた。
けれども、於順の女体とまじわりをもたなかったことを、
「残念であった」
と、いってやることによって、死にのぞむ於順の女心は、女としての誇りとまんぞくを得ることができたらしい。
於順は、かすかな笑みをうかべ、うれしげにうなずいて息絶えた。
右近は、これだけの男になって帰国したのであった。
「まことに気の毒。ことばのかけようもない」
真田信幸も沈痛な面もちで、右近へくやみをのべた。右近は真顔で主人に問うた。
「殿は、於順がことを、まことに……？」
信幸の哀しげな苦笑が、右近へのこたえであった。

しばらくして、

「笑うな、右近。わしは、まじめに想うていた……」

「おそれいりたてまつる」

「いうな。片おもいよ」

「は……」

あのときの主人が於順へかけていた恋情が、これほどまでのものとは、このときまで考えてもみなかった鈴木右近なのである。

すぐには信幸の、その恋情の烈しさがのみこめなかった。それほどの女の魅力をたたえた於順だとは、どうしてもおもえない。

（ああ……）

自邸へもどり、右近はためいきを何度も洩らしたものだ。

（あれほどにおもいつめられていたのなら、なにも、おれが邪魔だてすることもなかったに……）

小松夫人は、夫・信幸へ、非のうちどころのない妻としての奉仕をしている。大勢の家臣・侍女を心服せしめ、おもいやりがふかく、その上、女とはおもえぬ、ひろい度量のもちぬしだし、二十六歳という女ざかりの美しさは、すでに二男二女を生んで尚、おとろえを見せていない。

だが……。

信幸が、他の大名と同じように側妾をつくることだけは、厳として眼を光らせている。

これは女の嫉妬から出たもの、というよりは、正夫人以外の女の腹から男子が生まれることを警戒したものであった。

小松独自の考え方である。

大名の家、武家の内部の騒乱は、正腹と妾腹の子へ、それぞれ家臣団の勢力が別れて争うのが常例であって、小松は何よりもこのことを忌みきらった。

「そのかわりには、立派な男子をかならず生みもうけまする」

と、小松は信幸に誓った通り、長男・仙千代（信吉）、次男・百助（信政）を生み、この翌年には三男・越後（信重）を生んでいる。

それもこれも、真田の家のためをおもってのことであるから、信幸も文句がいえない。

七年前にくらべると、

（おどろき入ったものだ）

鈴木右近が感嘆したように、小松は、家来たちや侍女たちのほとんどを手なずけてしまい、たとえ信幸が他の女に手をつけようとしても、たちまちにこれが小松の耳へとどいてしまう。

一国一城の主である信幸が、只ひとり、ふらりとどこかへ出かけて町や村の女と情をかわすことなど、絶対に出来得ることではないのである。

また、いまの信幸は、小松ひとりをまもるだけで充分にまんぞくをしているらしい。

右近が帰参してはじめて、小松夫人へあいさつに出たとき、

「於順の病いはいかがじゃ?」
小松は、まるでこの七年間、毎日、右近の顔を見てきたような口調で問うた。
それにつられて右近も、出奔のわびもいわず、
「よろしくはござりませぬ」
「それは、いけませぬな」
「おこころにかけられまして、かたじけのうござる」
「看病を、な。ようつくしてやって下され」
「はっ」
そばにいた重臣の小山田壱岐守が、呆気にとられていた。
さ、そこでだ。
せっかく、このように真田家へもどって来たのに、である。
鈴木右近は二年後の晩夏に、ふたたび真田信幸を捨てて、出奔してしまうことになる。
そのときは彼ひとりでない。彼の家来たちも真田家を捨てた。

八

豊臣秀吉の強大な独裁政治によっておさめられた天下は、秀吉亡きのち、複雑な陰謀の反復の中で急速に混乱の度を増していった。
そして徳川家康は、かつての豊臣内閣の長老という地位と、朝鮮出兵にも消耗しなかった

兵力と経済力を基盤に、日ごとに威望を加え、
「われのほかに、天下をととのえるものなし」
との自信にみちあふれてきていた。
奥州・会津(福島県)の太守で、五大老の一人である上杉景勝は、英雄・謙信の後をついだ大名だけに、徳川家康へ対して、
「徳川ごときが何か」
という肚があった。
この点、真田昌幸と同じである。
会津の領国へ帰った上杉景勝へ、徳川家康が、
「上洛せよ」
何度も命を発した。小田原の北条家に、かつて秀吉も同様な命令をしたものだが、上杉も北条と同じに、家康のいうことをきこうともせず、かえって戦備をかため、牢人たちを召し抱え、家康を挑発した。
家康は、この挑発を待っていた。
上杉が挑発するように、かげへまわって仕向けていたといえよう。
「いうことをきかぬなら、討つ!!」
理由をたてて、家康は断乎として伏見を発し、江戸の本城へ帰り、上杉討伐の軍をおこしたのである。

諸大名の多くが、家康に屈し、その旗の下へ馳せ参じた。
真田家も上杉討伐軍へ参加をした。
上田の大殿・昌幸はいやいやながらの出陣であったが、ことわる理由もない。長男・信幸が家康の養女を妻にしているのだ。つまり親類の家康のいうことをきかぬわけにもゆくまい。
上杉討伐軍が、関東の野を奥州へ向けて進みはじめた。
このすきに、豊臣家・五奉行の一人石田三成を主軸とする豊臣派の〔西軍〕が戦旗をかかげ、大坂、伏見、京都という、当時の政治の中心地を手中におさめ、徳川家康の〔東軍〕へ決戦をいどんだ。
かねてから、石田三成は上杉景勝と通じ、家康をおびき出して、はさみ討つ計画であったのだが、これを家康は完璧な間諜網によってあますところなく知りつくしてい、それを承知で網へかかったのである。
このさい、自分に刃向う豊臣の勢力をいっきょに破砕して、天下をつかむ決意をかためていたのだ。
石田三成の〔西軍〕が挙兵したとの知らせが真田父子の耳へとどいたのは、慶長五年七月二十一日の夜である。
このとき、真田父子は〔東軍〕の先鋒として、下野（栃木県）の天明（現佐野市）というところへ到着し、陣所をかまえていた。
ここへ石田三成の密使が、ひそかに三成の手紙をとどけたのであった。

石田三成は真田昌幸に、こういってきている。
「……急なことで、さぞ、おどろかれようが、このたび、徳川家康は太閤殿下在世中の誓いを忘れ、遺子秀頼さまを見捨てて、勝手に上杉討伐へ出かけた。このような家康の暴挙はゆるしておけぬので、みなみなと相談の上、家康を討つことになった。昌幸殿も太閤さまの御恩を忘れぬなら、どうか西軍に忠節をつくしていただきたい」
このことを事前に知らされていなかっただけに、はじめは昌幸も怒ったが、いざとなれば家康が大きらいで、故秀吉が大好きな真田昌幸なのである。好きな秀吉の遺子で、わずかに八歳の幼児である秀頼のためにおこす軍ならば、
「よし、味方してくれよう」
信州の鬼とよばれた武将の熱血がふっとうしてきはじめた。
天明に近い犬伏の陣所へ入った真田信幸が父・昌幸に呼びつけられた。
ここで昌幸は、長男信幸と次男・幸村に向い、真田家の去就を決するための密議をおこなった。
昌幸の陣所は天明の宿外れにある庄屋・喜右衛門方の別棟にあった。
この陣所のまわりは十余名の忍びの者によって警備され、さらに三十余名がこれをかこみ、密談の席へは蟻一匹も這いこめぬほどのきびしさであった。
信幸の供をして来た鈴木右近も、陣所の外で密議のすむのを待った。
密議は一刻（二時間）で終った。

陣所から出て来たときの真田父子の様子には格別かわったこともない。
それを見て、
「沼田様（信幸）も、いよいよとなれば、御本家と共に徳川と戦う御決心になられたか」
と、つぶやいた家来もいたほどである。
「では……」
父に一礼し、弟・幸村とうなずき合った信幸が馬へまたがり、右近たち侍臣をしたがえ、犬伏の陣所へ帰って行くのを昌幸と幸村は微笑をたたえ、何気もない態で見送った。
見送って、昌幸が幸村へささやいた。
「信幸は、冷ややかなる男じゃ」
「兄上には、兄上の立場もありますことで……」
「そりゃ、わかっておるわえ」
「これで親子兄弟、敵味方ということになりましたな」
「そのことよ」
「もしも、われら（西軍）が勝利を得たときには、兄者は敗者の罪を負うことになります」
「そのことよ。おもしろいな、おもしろいな。ふ、ふふ……」
「そうなれば、兄上をわれらの手にもどし、新しき世に、兄上のちからをふるっていただきましょうな」
幸村は、兄の卓抜した政治力をよくわきまえていたらしい。

「ふむ」
苦笑しつつ、うなずいた昌幸が、
「信幸の、いのち乞いならわけもないことじゃよ」
「なれど……」
幸村が、にやりと、
「われらが負けたるときは、兄上が徳川殿に、われらのいのち乞いをすることになりましょう」
昌幸は、このことばにはこたえず「ふふん……」と鼻で笑い、
「戦争は勝つべきものじゃよ」
と、いいはなった。
そして、すぐさま全軍に出発を命じたのである。
「ひそかに、ゆっくりと仕度せよ」
翌早朝。
全軍、天明を発して上田城へ向った。
こうして、真田本家は、徳川軍（東軍）から離脱して行った。
この日。徳川家康の本陣は武蔵の岩槻まで進んで来て、息・徳川秀忠の先鋒は宇都宮へ進出している。
真田信幸は、家康が小山へ到着するや、すぐさま駈けつけて、

「自分は父と弟に別れ、どこまでも東軍へ組してはたらきます」
と、二心なきことを誓った。
徳川家康は大いによろこび、
「うれしくおもう」
と、信幸の手をにぎりしめた。
真田信幸はただ単に、小松の方が徳川家から迎えた妻であるということで家康に味方する決心をしたのではない。
家康こそ、これからの日本を統一すべき唯一（ゆいいつ）の実力者であると思いきわめていたからである。
家康が、どのような人物か……。
家康を中心とした徳川家の結束がどのように強く、堅固なものであるか。
その他、徳川家への理解をふかめさせるため、小松が夫の信幸へ十年間も丹念に語りふくめてきたことが、実をむすんだというべきであろう。
その一方では、真田信幸という大名のすぐれた稟性（ひんせい）を、小松は絶えず徳川家康の耳へつたえ送った。
小松は、信幸夫人であると共に、沼田の真田家と徳川家をむすぶ優れた外交官であったといえる。
天明の密議では、むしろ信幸が、

「私と共に東軍へ……」
父と弟を説きふせにかかった。
むろん、このことは昌幸が一笑に附してしまったのである。
昌幸は、上田へ帰る途中、沼田へ立ち寄った。
沼田へも東西手切れの知らせが入ったと見え、城門は堅く閉ざされ、信幸の留守をまもる家来たちが鉄砲・槍（やり）をかまえて警固をかためている。
「おい、わしは孫どもの顔を見に来ただけじゃ。門をあけぬか」
部隊を城下外水の寺へとめておいた昌幸が、わずか十名の家来たちをしたがえたのみで大手門の外へ立ち、声をかけると、小松の方が女具足に身をかため、鉢巻（はちまき）をしめ、薙刀（なぎなた）をかいこみ、これも武装した侍女たちをひきつれて門の傍（そば）の櫓（やぐら）へあらわれ、
「上田の父君でござりましたか」
「孫の顔を見たい」
「信幸よりの使者、先刻到着。これよりは父君と敵味方に別れることとなったそうにござりますな」
「おう、その通りじゃ」
「かくなりました上は、敵方の父君を城内へ入れること、かないませぬ」
「よいではないか。わし一人を入れてくれればよいのじゃ」
「なりませぬ!!」

「ほ……こりゃ、きびしいのう」
これまでは、会うたびにやさしくつかえてくれた嫁の凜然(りんぜん)たる態度に、さすがの昌幸も二の句が継げない。
「お帰り下されませ」
「おい、これ……」
「ふつつかながら小松は、夫にかわって沼田城をまもる身にござります」
「わかっておるわえ、それは……」
「おもどり下さいませぬと、鉄砲、弓を打ちかけまする」
いうや、小松が、
「それ!!」
下知すると、城門から櫓、石垣(いしがき)の上の狭間(はざま)に鉄砲隊・弓隊がずらりとならんだ。
昌幸は笑い出して、
「おい、お前たち」
と、分家の家来どもへ、
「わしの面(つら)を見忘れたのか。いやどうも、よくよく嫁御に手なずけられてしもうたものじゃが……ま、よいわ」
あっさりと身を返しつつ、小松へ、
「孫たちによろしゅうな」

「はい」
小松が一礼した。
上田へ向う軍列の中で、真田昌幸が幸村に、
「信幸の嫁は、いままで、わしがおもうていたよりも、層倍に大きい女よ」
と、いった。
そのころ。
鈴木右近は、十二名の家来を引きつれ、信幸の陣所を脱走していた。
右近は、信幸が本家と行動を共にしなかったのが不満であったのだ。
(あまりにも殿は、小松の方さまへあたまが上らなさすぎる)
と、おもいこんだのである。
昌幸を父のように慕う右近は、むろん、徳川家康をきらっている。西軍の仕かけて来るのを百も承知で、わざと乗りかかった老獪(ろうかい)なやりくちも気に入らない。
放浪中、右近は右近なりに徳川家康の人物像をつくりあげていた。
それは、真田昌幸のいう、
「徳川の狸(たぬき)」
そのままの印象なのである。
「おれは、上田の御本家の味方する!!」
敢然と、信幸には無断で脱出した。

信幸は、このことを知るや、
「追うな」
といい、
「右近の好きにさせよ」
笑ったが、その笑いはさびしげであった。
昌幸の軍列から三日おくれて、鈴木右近は上田へ到着した。
右近は分家の家来だから、平常は親しい本家の家来たちも、みだりに城内へ通すわけにはゆかない。
城門外で、右近は家来たちと共に待たされた。
真田昌幸は、おどろいて、
「なに、右近が味方しにまいったと……」
「右近め、それほどにわたしを慕うていてくれたのか」
うれしげにつぶやき、平服のまま、大手口城門へ出て行った。

九

しかし、城門外へ出て来たときの真田昌幸の顔貌は人がちがったように峻酷なものであった。
「大殿……」

駈けよろうとする鈴木右近へ、
「ばかものめが!!」
怒鳴りつけた。
「は……」
「帰れ」
「お、大殿。私めは……」
「だまれ。おのれ。だれの家来じゃ。沼田の真田信幸こそ、おのれが主人ではないか。主人にそむき、勝手気ままなふるまいをするおのれなど、味方にほしいともおもわぬ」
刃で斬りつけてくるようなすさまじい気迫が、昌幸の声にこもっている。
右近は、威圧されて沈黙した。
「帰れ、ばかもの!!」
「お、大殿。せ、せめて……」
「おのれ、七年もの間、世間をうろついて、何を見て来たのじゃ。大馬鹿者めが」
「は……」
「帰れ、さっさと帰れ……」
昌幸を呑んだ城門が、ぴたりと閉ざされた。
手も足も出ない。
信州の晩夏の夜であった。

篝火のつらなる上田城の大手口に立ちつくした鈴木右近を見守っている本家の武士たちは、気の毒そうな視線を右近にあつめてはいるが、主人・昌幸の命にそむいて、右近をいたわることもできぬ。

桜木孫九郎が右近の袖をひいて、

「立ち去りましょうず」

ささやいてきた。

「うむ……」

「さ、早う」

「かというて、沼田へはもどれぬぞ」

「いうまでもないこと」

「どうする?」

「孫九郎めにおまかせ下されい」

「どこへ行く?」

「ま、おまかせを……」

「どちらへ味方するつもりじゃ。天下分目の大戦だぞ」

「いかにも」

「われらのみで伏見へ馳せのぼり、石田三成殿の陣へ加わろうか」

「なにを申される」

「なぜだ?」

「われらは石田に味方するつもりではござらぬ。大殿へ味方するつもりにて、ここまでまいりましたのでござる」

「うむ……」

「他の者に味方すれば、沼田の殿へ恥をぬるのみか、われらも天下の笑い者になりましょう」

「むぅ……」

「どちらにも味方はいたしませぬ」

「十名の家来をかかえて、これからどうするつもり……」

「さ、立ち去りましょうず」

「だから、どうする」

いい争いつつ、右近主従は上田城門外からどこかへ立ち去って行った。

「右近め、去ったとな……」

城内の居室で真田昌幸が幸村を相手に碁をかこみながら、

「愛いやつめ」

しんみりという。

「沼田へ帰りましょうかな?」

と、幸村。

「帰るまい」

「やはり、な」
すると昌幸(まさゆき)が、突如、碁石を投げ捨て、
「ああ……」
ふといためいきを吐いて、
「右近(あやつ)には、これまで、気の毒なおもいばかりさせてきたわい」
「え……？」
幸村(ゆきむら)が父の大仰な嘆きのありさまに、ちょっとおどろいていると、
「おぬしも、信幸も知らぬことよ。むろん、右近も知らぬことじゃ」
「何が、でござる？」
「うう……」
しばらく、うめき声をあげていた真田(さなだ)昌幸は、はげしくかぶりをふって、
「いや、申すまい」
「この幸村にも……」
「いわぬ」
「いったい、何があったので？」
「むかしのことよ」
「なれば、どのようなことが？」
「うるさい!!」

昌幸が叫んだ。
めずらしいことではある。
「いわぬ。きくな!!」
碁をかこむこともやめ、昌幸は席を立って寝所へ入りつつ、
「たれかある。酒をもってこい!!」
と、わめいた。
幸村は、いつまでも碁盤の前にいて考えにふけっていた。
「わからぬ……」
つぶやいて、やがて幸村も父の居館を出て、同じ本丸内の自分の居館へ帰った。
供をして、幸村の後にしたがう家来が一人。屈強の中年の武士であった。
この武士の顔を、もしも鈴木右近が見たら、どのようにおどろくことであろうか……。
この幸村の侍臣は、十二年前のあのとき、〔名胡桃(なくるみ)〕城内の締所(しまりしょ)で、右近が母と共に自決しようとしたとき、
「お待ちなされ」
と、声をかけた北条(ほうじょう)方の番兵なのである。
その後も右近母子(おやこ)をはげましつづけ、いつの間にか姿を消してしまった敵の番兵だった男が、いま、幸村の家来になっている。
「幸村は、この男を、

「弥五兵衛」と、よんだ。
幸村と弥五兵衛とは、昨日今日の主従ではないことが、二人の会話によってわかる。
その会話をきいたら、尚更に右近はおどろくにちがいない。
その男……奥村弥五兵衛は、〔名胡桃〕落城よりはるか以前、すでに真田幸村の家来であったことがわかったろう、からである。
奥村弥五兵衛は、鈴木右近が上田から追いはらわれた翌夜に、只ひとり、いずこともなく上田から消えて行った。

十

上田へ帰った真田父子は籠城の準備にかかった。
徳川家康の本軍は、いったん江戸へ引き返し、東海道を上ることになったが、嗣子・秀忠が支軍として三万の兵をひきい、これは中山道をすすみ西上する。たとえば、真田昌幸のように西軍へ組する武将たちを掃討しつつ、信州から美濃へ出て、父・家康の本軍と合し、西軍との決戦にのぞもうというのだ。
秀忠軍は、まっすぐに上田城を目ざし、軽井沢へ到着するや、
「すみやかに開城せよ」
上田へ使者を出した。この使者が真田信幸と本多忠政である。本多忠政は小松の実兄であるから、信幸の義兄ということになる。

「ほう、信幸が使者か。皮肉なことじゃな」
と、昌幸は上田城外の国分寺へ、二人の使者を迎えた。
「信幸。せっかくにおぬしが使いに立ったのじゃから、よろしい、城をあけわたそう。ただし、三日ほど猶予してもらいたい。城の内外をきれいに清めておきたいゆえ、な」
大よろこびしたのは本多忠政で、
「まことでござるか」
「まことじゃ」
信幸は苦笑している。父の肝の中が手にとるようにわかったからである。
(父上は、出来得るかぎり、秀忠公の軍勢を上田へ引きつけ、決戦場へ到着するのを遅れさせようとしているのだ)
だからといって、忠政のいる前で、
「父上の申されることは、うそでござる」
ともいえない。
昌幸は、三日後に城をあけわたすといっているのだ。
秀忠もこれをきいて、うれしげに、
「よし、よし。開城いたすなら真田父子の今後についても、悪しゅうはからわぬ」
と、いった。
ゆらい、徳川軍は真田父子に強い劣等感を抱いている。

それは十八年前。北条家と同盟していた徳川家康が一万余の軍をさしむけて上田城を攻撃したことがあり、真田昌幸は三千そこそこの軍勢でこれを迎え撃ち、徹底的に打ちやぶった。このときの惨敗が、いまも徳川軍へ強烈に印象されていて、秀忠も、

(なるべくは真田と戦いたくない)

のである。

三日を経た。

昌幸は開城するどころか、幸村が武装の手勢をひきいて偵察にあらわれ、しきりに秀忠軍を挑発するのだ。

秀忠は激怒した。

秀忠軍は九月五日から上田攻撃を開始したが、真田軍はびくともするものではない。

徳川の重臣・本多正信は、数日後、秀忠に向い、

「ここでぐずぐずしていることは、見す見す真田の謀略にさそいこまれるばかりでござる」

進言をした。秀忠はくやしいけれども仕方なく、小諸へ軍を引きあげさせたが、このとき、家康の本軍が江戸を出発したことを知り、

「父上に、おくれてはならぬ」

すぐさま、中山道を進軍しはじめた。

だが秀忠軍は、ついに関ヶ原の決戦に参加することができなかった。

真田父子は二千五百の兵をもって、三万の大軍を引きとめ、これを東軍の戦列から外すことに成功をした。

ところが西軍は、関ヶ原において決定的な敗北をこうむってしまったのである。

「ばかどもめが……」

真田昌幸は舌うちを鳴らし、

「石田三成も、他の西軍の諸将も、戦場で居ねむりをしていたのか……」

あきれはてて、くやし泪も出なかったという。

秀忠軍が到着しなかったので、家康は七万の兵力をもって八万の西軍と戦わねばならなかった。西軍のほうが兵力では上まわっていたのだ。それなのに負けた。これは結局、総指揮官・石田三成に西軍を統括するだけの威望も器量もなかったということになるのだが、それにしても、百戦錬磨の真田昌幸から見れば、あまりにもばかばかしい惨敗の仕方ではある。

とにかく西軍は敗れ、ここに徳川家康が名実ともに天下の覇権をつかみとったことになる。

敗軍の将は、それぞれに処刑された。

上田の真田父子については、

「腹を切らせよ」

というのが、徳川家康の決意であった。

真田信幸は必死に、父と弟の助命を家康に嘆願したが、家康もこれだけはゆずろうとしない。昌幸と幸村が生きてあるかぎり「自分はかたときも安堵できぬ」とまでいった。いかに家康が真田父子の謀略と戦力をおそれていたかが知れる。

このとき、小松の実父で、信幸には岳父にあたる本多平八郎忠勝が、
「信幸殿の徳川への忠誠は無二のものでござる。その忠節にめんじて、真田父子の一命を助けてやっていただきたい」
熱心に、ことばをそえてくれた。
家康はかぶりをふった。
と……本多忠勝が断固として、
「それがしを敵にまわしてもでござるか!!」
家康へ喰ってかかったものだ。
忠勝は、家康股肱の臣の典型ともいうべき武将で「徳川にすぎたるもの」と、天下にうたわれた人物である。家康としても無下にしりぞけるわけにゆかない。忠勝がそこまで聟の信幸の味方をしようとはおもっても見なかっただけに、家康は瞠目し、本多忠勝の顔をながめて、しばらくは声もなかったといわれる。
ついに、家康が屈した。真田昌幸と幸村は、わずかに家来十六名をしたがえたのみで、徳川部隊三百に護送され、上田を出て紀州・高野山へ押しこめられた。
のち、真田父子は高野山のふもとの九度山村へ居をかまえ、徳川のきびしい監視をうけながら、さびしい蟄居の生活をつづけてゆくことになる。
この間、鈴木右近とその家来たちはどうしていたろうか。
右近は、江戸に落ちついていた。

そのころの江戸は、徳川家康の城下町であったけれども、まだ町づくりの最中といってもよく、後年の宏大な大都会ではない。
右近の住居は、小石川村・指谷にあった。現・文京区・白山の東部がそれで、指谷の古地名をしのぶ〔指ヶ谷〕の町名は、わずかに都電停名としてのこされている。
その名のように、鈴木右近が住んでいたところの指谷は、町なみもほとんどなく、鬱蒼たる木立の繁茂した谷間であった。その谷と台地に百姓家が点在し、寺院もある。
右近は、このあたりの名主で同姓の鈴木右衛門の土地を借りうけ、十名の家来と共に暮していた。畑をたがやし、米、野菜をつくり、自給自足のかたちだが、生活に困るようなことはない。
いざとなってみて、右近がおどろいたのは、自分が相当の財産をもっているということであった。
それまでは少しも知らなかったのだが、家来の桜木孫九郎が保管していた金銀は、右近と家来たちを二十年ほどもやしない得るだけのものがあったのである。
「こ、こんな金があったのか……」
右近がいうや、孫九郎は莞爾として、
「亡き御父君より、わたくしめがひそかにおあずかりいたし、名胡桃落城のころは、御城に近い正覚寺へ隠してござった」
「そ、そうか……」

「武夫(もののふ)というものは……ことに家来を抱えいる将ともなれば、いざ牢人(ろうにん)の身になったるとき、それ相応の財産がなくては、おのれのみか大切なる家来たちまで貧(ひん)乏に苦しむことになると、亡き大殿は、つねづね申されておわした」

「ふぅむ……」

右近は、このときほど亡き父・鈴木主水を愛(いと)しくおもったことはない。

武士のこころがけとはいいながら、これだけの用意ができる男は、なかなかにいないものだし、それを受けつぎ、後つぎの若い主人のため、ひそかに保管しつづけてきた桜木孫九郎も立派であった。

こうした鈴木右近主従の生活ぶりは、徳川家康の耳へも入り、

「わが旗下(はたもと)へ加えてもよい」

と、使者をつかわしたが、右近はことわった。

他の大名……加藤清正、井伊(いい)直政(なおまさ)、福島正則(まさのり)なども、あらそって右近を召し抱えようとしたし、あの本多平八郎忠勝も、

「見事なる牢人ぶりじゃ。沼田へはもどりにくいのであろう。よし、わしが召し抱え、のちに機を見て信幸殿へ引きわたそう」

と考え、そのむねを右近へ申し送ったが、右近は承知をしなかった。

歳月が、夢のようにながれた。

徳川家康が征夷(せいい)大将軍になったのは慶長八年で、ここに江戸幕府が成立した。

慶長十年。家康は将軍位を息・秀忠にゆずり、徳川幕府の基盤をかためると共に、大坂城にいる秀吉(ひでよし)の遺子・豊臣秀頼(とよとみひでより)を徳川傘下(さんか)へ屈服せしめんと種々はかった。家康は、孫女(まごむすめ)の千姫を秀頼夫人にさせ、政治的なはたらきかけによって、豊臣の残存勢力を屈従させようとしている。

さらに、歳月が経過した。

慶長十六年。すなわち、関ヶ原決戦あってより十一年後の六月四日。

九度山の配所で、真田昌幸が病死した。ときに六十五歳である。

その六月の下旬に、江戸・小石川指谷の鈴木右近の牢宅をおとずれた牢人ふうの武士がある。

「九度山の昌幸公よりの使いの者でござる」

と名のり、編笠(あみがさ)をぬいだこの牢人を見て、右近は、

「あっ……」

と、声を発した。

「おぬしは、あのときの……」

まさに、名胡桃城のときの番兵の顔を右近は見たのである。

「しばらくぶりにございますな」

「おぬしが、あの……」

「むかしから、真田の大殿と幸村さまにおつかえしてまいった奥村弥五兵衛と申す者でござ

る」

「それがなぜ、あのとき、名胡桃をうばい取った北条方へ組していたのだ」

「それよりも先ず、大殿よりの御書状をごらん下され。これはお亡くなりになる三日前にあなたさまへあててしたためられましたものにござる」

「なんと……大殿が亡くなられた……？」

「はい」

「う……」

右近は青くなり、絶句した。

十一

真田昌幸は、鈴木右近へあてた遺書でこういっている。

「ずいぶんと会わぬが、江戸での様子はよく知っておるぞ。この手紙を持たせてやる奥村弥五兵衛は、武田信玄公在世のころよりわが真田家へつかえたる伊那の忍びの者のうちの一人である。と申せば、弥五兵衛が北条家へ潜入し、諜者の役目をつとめしこと、お前にもよくわかったこととおもう。

さて……わしも、いよいよ死ぬるぞよ。

いま少し生きて見たいとおもうなれど、寿命をさとったなれば、如何ともしがたい。

ゆえに、これまで我子の信幸・幸村にもうちあけなんだ秘密を、右近よ、お前にだけうち

あけて死にたい。と申すは、お前にわしはわびねばならぬことゆえ……。

お前の父・鈴木主水を見殺しにしたは、この昌幸である。

先ず、きけい。

わが真田家は信濃・小県の真田ノ庄から出て、戦乱の世を生きぬいて来た。わしの父の代から、山間の真田ノ庄をまもり、さらにちからをたくわえ、なにともして大きな武将の家と成り、戦乱に押しつぶされまいと戦いに戦いつづけた。お前も承知のごとく、われらが真田ノ庄から上田へ城をきずくまでに四十年もかかっているのじゃ。たった四里の道をすすむのに四十年もじゃ。上田へ押し出すためには、村上義清をはじめ近辺の強敵と悪戦苦闘の連続であったのじゃよ。

さて、ようやくに上田へ城をかまえた。

上田は信州の国を制するところだ。

なれど、上田と信州をまもるには、となりの国をかためねばならぬ。ゆえにこそ、上州・沼田の城を、われらはどうしても、我物にせねばならなかったのじゃ。

関東の北条軍の来攻をふせぐためには、どうしても沼田がほしかった。沼田あればこその上田であり、真田家であったといえるのじゃ。

わしは多くの家来をうしない、金銀をつかい果たし、長い時をかけ、ついに沼田城を取った。そのときのうれしさは、ことばにはいいつくせなんだものよ。ところが、沼田を北条家へ返すことになったいきさつは、お前もよく知っていよう。亡き太閤殿下に仲へ入られては、

わしもことわりきれなかった。

なれど、せめて〔名胡桃の城〕だけは、わしのものにしておきたかった。太閤殿下もそれを承知して下されたので、わしは、わしのもっとも信頼するお前の父・鈴木主水へすべてをまかせたのじゃ。

ところが、あのさわぎになった。

わしのにせ手紙をつかい、猪股能登守がお前の父をおびき出し、その留守に城をうばい取った。お前の父が岩櫃の矢沢頼綱のところへ立ち寄り、わしの手紙がにせものだと知って名胡桃へ引き返したことは、お前もきいていよう。

主水は、お前の父は、わしが上田から助けに来てくれることを、まる一日も待った。わしも矢沢からの急使によって、すぐにあの事件を知った。駈けつければじゅうぶんに間に合ったし、お前の父が腹を切ることもなく、名胡桃をうばい返せたであろう。

じゃが、わしはうごかなかった。わざとうごかず、お前の父に救いの手をさしのべなかったのじゃ」

それは何故か……。

北条軍が〔名胡桃〕を武力でうばい取ったことを知れば、豊臣秀吉は北条征討の理由を得、大威張りで北条家を討ちほろぼすことができる、と、真田昌幸はおもった。

そして、昌幸の直感した通りになったわけである。

(北条がほろびてしまえば、秀吉公は必ず沼田をわしに返してくれる)

この昌幸の信念も適中した。だからこそ、昌幸はわざと〔名胡桃〕を敵の手にゆだねたのである。自分がうばい返すより天下人の秀吉にうばい返してもらおう、沼田も名胡桃もである。そして北条家との争いを根絶やしにしてもらおう。

秀吉が、なんとかして北条家を戦争に引きずりこみたいと思っている胸のうちを、昌幸は充分にわきまえていた。

「……すべては、わしのおもい通りにはこんだ。なれど、わしは、鈴木主水という大切な武士をうしなってしもうた。

ゆるせ、右近よ。

お前の父は、わしが見殺しにしたのじゃ。

この期におよび、この秘密を打ちあけたのは、真田家にとって、沼田という城がどのように大切なものか、そして、お前は、お前の父がなくした沼田を故国として生まれた男じゃということを、いまここに、あらためておもい起してもらいたいからじゃ。信州・上田はほろび、わしと幸村は天下分目の決戦に賭けて破れた。だが、信幸は依然、沼田の城主である。

たのむ。

沼田へもどり、信幸をたすけ、真田家のためにはたらいてくれい。

死にのぞむ昌幸が最後のたのみじゃ。

ゆるせ。たのむ。

右近よ。お前の故国へ帰って生きよ。さらばじゃ。いつまでも達者でおれよ」

およそ、このようなことを昌幸は書状にしたためてある。いや、奥村弥五兵衛に口述したものである。
署名と花押(かおう)は、まさに真田昌幸の自筆であった。
読み終って、鈴木右近は慟哭(どうこく)した。
それは、昌幸の死を哀(かな)しむ、というような単純な感動だけではない。
昌幸の謀略へのうらみでもない。
これまでの彼の人生のすべてが、昌幸の遺書によって、取りまとめられてしまったかのような……それは取りも直さず、今後の右近の人生が決定づけられてしまったという、そのぬきさしならぬ拠点をつかみきった感動とでもいったらよいのか。

翌朝。

右近は家来たちを引きつれ、江戸の住居を去り、上州・沼田へ向った。
奥村弥五兵衛(やごべえ)は紀州・九度山にいる真田幸村のもとへ去った。
栗毛(くりげ)の愛馬にまたがった鈴木右近の風采(ふうさい)は堂々たるもので、桜木孫九郎以下の家来たちも立派に身なりをととのえ、駿馬(しゅんめ)四頭へ武具・武器の箱を積み、隊伍(たいご)整然として沼田城下へ入った。
右近は先ず、老臣・出浦対馬守(いずうらつしまのかみ)屋敷へおもむき、
「只今(ただいま)、もどりました」
簡単にあいさつをした。

出浦は、だまって笑い、すぐに沼田城内へ入ることをゆるしてくれ、信幸(のぶゆき)にこれを通じた。
信幸は、夫人・小松と共に右近を迎えた。
右近は、昌幸の遺書のことなどに全くふれず、平伏して、「只今、帰参つかまつりまいた」
といったのである。
すると信幸は、この十余年の歳月がどこをながれていたのかと思うほどの何気なさで、
「うむ」
大きくうなずき、他には何事にもふれぬ。
小松のほうも、にんまりとして、
「右近どの屋敷の銀杏(いちょう)の樹(き)も、大きゅう育ちましたぞ」
といったのだが、めっきりと貫禄(かんろく)のついた〔奥方さま〕のほうに、右近はむしろ威圧を感じた。
右近の屋敷にはだれも入っていず、留守中は城の足軽(あしがる)が来て、よく掃除をしていたとかで、残しておいた道具類もむかしのままに並べられていた。
すべて、信幸夫妻の配慮によるものであろう。
今度、泣き出したのは桜木孫九郎であった。
「これほどの主人は、どこの国にもござるまい。これよりのち、あなたさまがわがままなふるまいをあそばし、この沼田を出て行こうとなされるようなことあれば、それがし、腹掻(か)き切って殿（信幸）におわびつかまつる。このことをよくよくおぼえておいて下され」

ずけずけと、主人の右近へいったものである。

「おう。よっくおぼえておこう」

右近は、さからわなかった。

このとき鈴木右近は三十八歳。もはや往年の〔白うさぎ〕のおもかげはどこにも見られず、むしろ、容貌魁偉の表現がふさわしく、

「人の生顔というものが、あれほどに変るとは、な……」

信幸が後で、小松に洩らしたそうだ。

この年。

故太閤秀吉のころからの、豊臣家の柱石ともいうべき大名たちが、相次いで死去している。

すなわち、加藤清正。

さらに、浅野長政、堀尾吉晴。

大坂城の若い秀頼をまもり、徳川幕府との間をうまく取りもちし、豊臣の社稷をたもちつづけてゆくために、無くてはならぬ人びとであった。

十二

それから三年後に……。

戦乱のしめくくりともいうべき大坂戦争がはじまった。

七十をこえた徳川家康は、わが眼の光りが消えぬうちに、大坂の豊臣秀頼の始末をなんと

してもつけておきたかった。家康は当初から戦を仕かけたのではない。何度も手をつくし、豊臣の残存勢力が自分に屈従してくれることをねがった。家康自身が、信長・秀吉の二人にどこまでも従い、天下統一の邪魔をしなかった忍耐をおもえば、いまの秀頼が自分のふところへ温和しく入り、忠誠を誓ってくれることが当然であるとおもった。

しかし、若い秀頼と、秀頼の実母である淀の方を中心にした大坂方の、徳川家康へ対する外交政策は拙劣をきわめた。

亡き太閤の時代、その〔死滅した過去の栄光〕にこだわる淀の方と、これを取巻く豊臣の家臣たちの言動は、ついに家康をして、

(大坂を討たねばならぬ!!)

と、決意せしめたのである。

そうなると、家康一流の老獪をきわめた挑発に、大坂方はむざむざと乗せられてしまうことになる。

たとえば、その一例として……。秀頼と淀の方が家康にすすめられて、京都の方広寺へ再建した大仏の鐘銘の文字〔国家安康・君臣豊楽〕というのが、

「無礼きわまる。これは徳川家をないがしろにする不吉きわまるものだ」

と、家康が怒った。

つまり家康の二字を〔安〕の字で断ち切った上に〔君臣豊楽〕の意味は、ふたたび豊臣の天下をのぞむことに通ずるというのであった。むろん、これは家康の〔こじつけ〕である。

〔いやがらせ〕である。

家康は、かなり、いらだってい、遮二無二豊臣との開戦に持ちこもうとしている。自分の行手に、もういくばくも年月が残されていないことを、家康はよくわきまえていた。徳川家の永続のために、あらゆる禍根を絶ってから世を去りたい。

大坂方も戦備をととのえはじめた。

これを待ちかねていた家康は、すぐさま〔豊臣討伐〕の勅令をたまわりたいと朝廷へねがい出た。

このあたり、むりなく、巧妙に開戦へ持ちこんだ〔関ヶ原戦争〕のときとは段ちがいに家康のあせりが見える。いや、それだけの無理押しがきくだけの自信を抱いていたのかも知れない。

ときの後水尾天皇は、この家康の圧力を不快におもわれ、なかなか勅令を下さぬ。

すると家康は、

「もしも天皇が承知なさらぬときは、隠岐の島へお流し申すまでじゃ」

とまで、いいはなったという説もある。

その説が〔なるほど……〕と、うなずけるほどに、このときの家康の決意はすさまじいものだったといえよう。

慶長十九年十一月。

家康は、日本全国の大名たちを動員し、二十余万〔三十万ともいわれる〕の大軍をひきいて、大坂城を包囲した。

これに対し、大坂城へ馳せ参じた豊臣恩顧の武将や寄せあつめの牢人軍を合せて〔西軍〕は約十万。

この中に、九度山を脱出した真田幸村も加わっている。

真田伊豆守信幸は、またも弟と敵味方に別れて戦うことになったのだが、

「豆州は京の二条城をまもるよう」

特別に、家康がはからってくれた。

で、信幸も侍臣の鈴木右近も、大坂の戦場には出なかったが、信幸の長男・信吉〔十九歳〕が父の名代として〔東軍〕に参加した。

いわゆる〔冬の陣〕の火ぶたが切られた。

大坂城のスケールの大きさと、その堅固な構築とは、二十余万の東軍がつけ入る隙がない。

ことに、大坂方では真田幸村を中心にした精鋭部隊が、後藤又兵衛、長曾我部盛親、毛利勝永など、かつては勇名をうたわれた武将たちと共に活躍をつづけ、東軍はさんざんに苦い目にあわされたものである。

徳川家康は、むだな流血を避けることにした。

家康一流の謀略をもって、いったんは停戦条約をむすび、その後、条約を無視するかたちで、迅速に大坂城の惣構えから、二の丸・三の丸の濠まで埋めつくし、大坂城を裸にして、さっさと江戸へ引きあげてしまった。

大坂方の怒りは当然である。
いくら抗議しても、徳川方ではのらりくらりといいぬけて、応じようともせぬ。
その怒りと不安が、またも大坂方の戦備を急がせることになる。
「幸村ほどの男を死なせるには惜しい。信幸と会わせて、こなたへ引き入れるようにはからえ」
休戦中に、家康が真田隠岐守信尹（さなだおきのかみのぶただ）をよび、そういった。
真田信尹は、信幸・幸村の叔父にあたり、家康について〔東軍〕へ加わっている。
幸村が惜しい、というよりも、戦争がいざ再開されたときの彼の鬼神のような戦闘ぶりと底の知れぬ謀略を、徳川家康は恐怖していた。
大坂方は、淀の方を中心とする一派をはじめ、よせあつめの武士たちが、それぞれに〔派〕をつくり、統一がとれていないのはさいわいだが、もし、これらが幸村の総指揮の下に団結したら、
（手におえぬことになろう）
家康は不安であった。
現に、冬の陣では幸村の奇襲をうけて、家康自身、かなり危険な目に会っているのだ。
幸村を敵にまわすよりも、手なずけて味方にしようというのだ。
真田信尹に、家康は一つの策をさずけ、江戸へ引きあげて行った。
休戦中とはいえ、再戦の気配濃厚であったから、京都にのこっている信幸と、大坂城にいる幸村を会わせる手段がなかなかにむずかしいのである。

信尹老人は、甥（おい）の兄弟をひそかに会見させるため、
「最後の別れに、兄と会わぬか？」
と、持ちかけて見た。
今度の戦争がはじまる前に、この伯父が何度も家康の命をうけて「徳川へ従え」とすすめてきたけれども、幸村は、そのたびに、きっぱりとはねつけていた。
だが、兄・信幸と会うのは、うれしい。なつかしい兄を、もう十五年も見ていない。関ヶ原開戦前に、野州・天明の父の陣所で別れて以来のことなのである。
「よろしゅうござる」
幸村は叔父のさそいをうけた。
すでに年があけ、元和（げんな）元年の二月末になっている。
敵にも味方にもさとられぬように、信尹老人は、ひそかに単身で大坂城をぬけ出して来た幸村を、わが手勢の中に入れ、淀川を舟で京都へはこぶことにした。
一方、真田信幸にも、このことが知らされた。
信幸は、ぜひにも弟を説得するつもりであった。このことを、信幸は鈴木右近へのみ、うちあけている。
「おぬしと二人きりで、左衛門佐（さえもんのすけ）（幸村）に会いに行くのじゃ」
と、信幸がいった。

「いずこにて会われます?」
「ほれ……いつぞや、おぬしがわしの危急を救うてくれた、八坂の塔のあたりじゃそうな」
「ほほう……」
「小野のお通どのの屋敷じゃそうな」

十三

小野のお通という女性は……。
当時、その才色を世にうたわれた第一級の女流文化人とでもいったらよかろう。
以前には宮中につかえ、女ながら金子二百両、百人扶持をたまわったこともあるとかで今でも天皇にまねかれ、よく参内をするらしい。諸礼式、礼法に通じ、かつては豊臣秀吉の顧問格の役目をしたこともあるし、いまは徳川家康の庇護をうけ、千姫が豊臣秀頼へ嫁した折には、その介添えをつとめ、大坂城に暮したこともある。
絵画の筆もとるし、文学にもくわしく、笹島検校が作曲し、名曲と評判の浄瑠璃節〔十二段草紙〕は、小野のお通の筆になるものだという。
徳川家康が、このお通の屋敷を真田兄弟会見の場所にえらんだことは、まことに適切といわねばなるまい。
その日。
真田信幸は、鈴木右近のみを供に、編笠に顔をかくし、室町の屋敷を出て、わざとまわり道をし、小野のお通の屋敷へ向った。

そこは、十七年前に、信幸が猪股瀬兵衛たちの襲撃をうけた場所からもう少し下った、八坂の塔のまうしろにあたるところで、竹林にかこまれた農家風の館であった。
庭がひろい。
その庭の木立にうもれた一角に別棟の茶室があり、そこへ、信幸と右近が通された。幸村も信尹老人もまだ到着していず、信幸は、小野のお通の点前で茶をもてなされた。
さ、そこにおいてである。
このとき五十歳の真田信幸が、ひと目で、小野のお通に恋をしてしまったのだ。
お通は、このとき何歳であったものか、よくわかっていない。彼女の経歴からいえば三十をこえていたろう。とにかく、それは信幸にとっても、鈴木右近にとっても、かつて見たことがない型の美女だったといえる。
男に負けぬほどの背丈があり、胸の張った腰まわりの堂々とした、乳房も衣服を通して見ておどろくばかりの豊満さで、こうした立派な肉体に片身替りの派手やかな小袖をまとい、化粧の気もない肌にあざやかな血色をみなぎらせた美女……。
あの於順とはまったく正反対の、女の精気にみちみちた迫力があって、
（これは……）
鈴木右近も、どぎまぎしてしまったほどだ。
信幸は年甲斐もなく顔を上気させ、お通のもてなしを受けつつ何かいっているのだが、そ

の声が、かすかにふるえているのである。
「わたくしに出来ますることなら、どのようなことでも、お申しつけ下さいますよう」
とお通が信幸にいった。
もてなしは親情がこもっていて、信幸はすっかり感激の態であった。
あたりが暗くなってから、真田幸村が信尹叔父とあらわれた。
ときに幸村は四十八歳。
兄弟ともなつかしくうれしく、手を取り合って語り合ったというが、いざ、かんじんのはなしになると、幸村はうなずこうともせぬ。
お通のはからいで、茶室の炉に酒があたためられ、右近や信尹老人も別室へ遠去け、兄弟は二刻（四時間）にわたって会談をした。
真田信幸は、すでに戦国の武将から平和時の政治家へ転向してしまっている。これは〔関ヶ原〕の折に父と弟に別れ、徳川家康のもとへ参じたときからの、彼の信念であった。
「われら大名は、もはや戦乱をのぞむべきにあらず。日本全土に平穏がもたらされ、長い戦火に荒れ果てた国々を、人びとを、やしなわねばならぬ」
と、いうのである。
だが弟の幸村は、そうでない。いや、世に平和を招来することに反対ではないが、それよりも強烈な戦国武将としての血しおの高鳴りが押え切れぬ。ことに、今度の戦争の口火を切った徳川家康の強引な圧力を、

「汚らわしき仕様でござる」
きっぱりといった。
濠を埋めたてられ、籠城の価値がなくなった大坂城を背負い、幸村は大御所（家康）の、
「首を討つ!!」
つもりなのである。
こうした弟の性情を、信幸はよくわきまえてい、それが依然としてむかしのままなのを知るや、
「もはや、これまでじゃな」
と、あきらめざるを得なかった。
「兄上に御心配をおかけ申したること、左衛門佐、おわびの仕様もござらぬ」
「なんの……それはかまわぬ」
「それがしが、またも西軍へ加わり、徳川に刃向えば、徳川の旗下にある兄上への風当りもなみなみではござるまい。それのみが心苦しゅうて……」
「よいわ……」
「おそれいります」
それからは、九度山で歿した父・昌幸のおもい出ばなしになったようである。
幸村は、信尹叔父と共に大坂へ帰って行った。信尹も落胆したし、鈴木右近も、がっかりしてしまった。

幸村が玄関口を出て行くとき、信幸が「源二郎」と、幸村の幼名をよび、
「たとえ大御所の御首を討ちとったところで徳川の屋台は崩れぬ。よいな」
念を入れたとき、幸村は双眸に燐のような光をきらめかせ、
「崩れるか崩れぬか……そこに、それがしは亡き父上と共に、いま一度の夢を見とうござる」
不敵な笑いをうかべて、こたえたのである。

十四

真田信幸は、間もなく沼田の居城へもどったが、鈴木右近は引きつづき京の屋敷へとどまった。切迫した時局であるから、上方の動勢には絶えず気をつけていなくてはならず、信幸としては、右近のようにこころきいた家臣からの報告でなくては、安心ができなかったのであろう。
信幸は、京を去るにあたり、先日の礼として小野のお通への贈物をみずからえらんだ。
右近を相手に「どのような品がよかろうか……あれでもなし、これでもなし」と、三日もかかり夜もねむらずに考えつづけている主人を見て、右近は、
(これは、只事でない)
と、おもった。
信幸は、完全に小野のお通の魅力のとりこになっている。

右近も、お通の濃艶さにはこころひかれていたが、実は右近、去年の春に後妻をもらった。同じ真田の家来で馬塚喜右衛門という者のむすめ・珠がそれである。
珠は十八で右近の妻になった。四十男の右近だけに、この可愛い新妻を溺愛し、長く京都勤務になるようなら呼びよせようと考えているほどだから、小野のお通には(いまどき、めずらしきかたちの美女だな)と、おもうまでのことであった。
五月になると、いよいよまた開戦となった。大坂夏の陣である。
今度は、濠を埋めたてられた城へたてこもっても仕方がないので、西軍も城外へ出て、東軍を迎え撃つことになった。
これより先、真田幸村が軍師として、
「こうなった上は、東軍が西上する前に伏見の城を襲い、ここへ秀頼公をお迎えし、もはや籠城のかなわぬ大坂を捨てたほうがよろしい。伏見をうばって京を手におさめて戦う。家康はおどろきましょうし、西軍も勇気百倍いたしましょう」
幸村らしい大胆不敵(真田家の戦法としては当然のことなのだ)な作戦計画をもち出したが、淀の方も、重臣・大野治長もこれをきいて「大坂城を捨てるなどとは、もってのほかのこと」とでもいいたげな態度で、一言のもとに幸村の進言をしりぞけてしまった。
夏の陣は、数日で終った。
京都へ集結をした徳川軍は、五月五日に大坂へ進撃し、泉南・樫井の戦闘の後、二手に別れてすすむ。これを大坂城から出た後藤、毛利、真田、薄田、木村、長曾我部などの部隊が

出撃して戦ったが、押し切られ、五月六日に、東軍は大坂平野へなだれこんだ。
翌七日が決戦となる。
真田信幸は、この〔夏の陣〕に出陣していない。家康から江戸城の留守居を命じられたからだ。
戦争が終り、やがて信幸の耳へも、弟幸村の戦死の報がとどけられた。この最後の決戦における真田幸村の戦陣の鬼と化した奮戦ぶりについては、現代にのこる諸史料が口をそろえてほめたたえているから、うそではあるまい。徳川家康の本陣へ突入した真田部隊に追いまくられ、家康自身、
「これが最後とおもいきわめた」
そうで、辛うじて手輿にしがみつき、戦場を離脱したのちに、疲れ果てた真田部隊は全滅した。
「もういかぬ。わしの首を打て」
と、一時は家康が侍臣に命じ、腹を切ろうとした、ともいわれるほどの凄壮苛烈をきわめた真田幸村の突撃であった。家康が、あれほどまでに幸村を恐れていたわけが、ここに立証されたといってよい。
かくて、豊臣家はほろびた。
戦後、間もなく、
「豆州は、やはり上田へもどったほうがよい。なんと申しても真田の本国であるゆえ」

と家康は、それまで幕府があずかっていた信州・上田城を信幸へ返してくれた。沼田はそのまま分家として、長男・信吉にあずけ、これを小松が後見することになった。
母が息子の後見というのも妙なものだが、
「信吉がいま少し長ずるまでは、眼をはなしとうございませぬ」
と、小松が信幸にたのんだのだ。
「ふむ。上田と沼田、遠くはなれるわけでもないが……」
「わたくしの方より、時折、上田へまいります」
「うむ」
信幸は夫人と別れ、上田六万石の領主に返り咲いた。上田領民のよろこびは非常なものであった。
こうなると、信幸が、小野のお通へかける情熱は尚もはげしく燃えあがり、
「……小松もおらぬ上田ゆえ、お通どのを不幸にすることはよもあるまい。どうにかして、わしのこころをつたえ、信濃へ来てくれるよう、うまくはからってくれ」
まだ京都屋敷にいる鈴木右近へ、信幸が密使をよこした。
右近が返事をすると、
「それがしも、上田へまいりとうござる」
「来てはならぬ。お通どのとの間を取りもつのはおぬしの役目じゃ」
「奥方のお目をぬすみ、そのようなことは出来かねまする」

「だから、おぬしにたのんでいる。事前に小松が知ったら、この信幸の恋、とうていかなわぬ。お通を上田へ迎えてから、わしが小松へはなす」
「困ります、困りまする」
「たのむ。右近ひとりがたよりなのじゃ」
と、これをいちいち手紙でやりとりするのだから、上田と京都を往復する密使もいそがしい。しかし密使たちは、まさかに主人の恋のため……とは考えても見ず、大切な政治向きの大事とおもい、沼田の小松にさとられぬよう、苦心をかさねて役目をつとめている。
ついに、信幸がたまりかねて、こういってよこした。
「……むかし、わしは於順をおぬしにゆずった。そのことをおもい起し、このたびは、わしのためにはたらいてくれ」
右近は、ここで、
（なるほど……）
と、おもった。
あのときの信幸の、いささかも主人風を吹かさなかったいさぎよい態度を、右近は忘れていない。以後、鈴木右近はたびたび小野のお通邸へ出かけ、信幸の意をつたえたが、
「ま、そのような……」
お通は謎めいた微笑をうかべるのみで、いつもはっきりとした返事をよこさぬ。信幸は信州からいろいろな贈物をお通にとどけた。お通もまた、みずから糸を染め、ぬいあげた小袖を、返礼として信幸へ贈ったりする。

これらを取次ぐのは右近の役目であった。
右近は、げんなりしながらも、なんとか信幸の恋をかなえてやりたいとおもった。
元和二年四月。
徳川家康が、七十五歳で病歿した。
家康が死ぬと、徳川幕府の真田信幸へ対する目が、にわかにきびしく光りはじめた。
現将軍秀忠は大の真田ぎらいであるし、真田家が敵味方に別れて戦った関ヶ原以来、
「真田は、どちらが勝っても負けてもよいように父子兄弟が別れたのだ」
という世評を、かたく信じている。
翌元和三年になると、
「わたくしも、おそばにおつかえ出来ませず、さぞ御不自由のことと存じますゆえ……」
こういって、沼田の小松が侍女のお千賀を上田へよこした。つまり、信幸の側妾にと、夫人公認のもとに美女がとどけられたのである。
これは、ことわれない。ことわれば小松の好意にそむくことになるし、却ってお通とのことを怪しまれることにもなろう。
信幸は、お千賀を側室にした。
ところが、このお千賀は、あくまでも小松夫人にいいふくめられ、夫人の意を体して信幸のもとへ来たのであるから、信幸もうっかりと気をゆるせないのだ。

一年が経過した。
信幸は、幕府に、
「父や弟の墓に詣でたいので、一度、紀州高野山と九度山へ出かけたい」
と許可を願い出た。
幕府は、これをゆるさなかった。
紀州へ出た帰りに京都へ寄り、なんとしても小野のお通に会いたいという信幸ののぞみは絶たれた。

十五

徳川幕府は戦後処理の一つとして、諸大名の国替えをしばしばおこなうようになった。
幕府は譜代大名（代々徳川に臣属してきた大名）の勢力をかため、新しく臣属した外様大名のちからを殺ぐべく、峻烈な統治をはじめ出した。江戸城で、将軍と幕府閣僚の間にまとめられる政令の一つ一つに、大名たちが神経をとがらせるようになった。
豊臣家譜代の大名であった福島正則が領国から追われて、信州の高井村へ押しこめられたのも、このころである。
沼田の小松が、風邪をこじらせて寝込んだのは、この年の十二月だが、翌元和六年になると、病患が重くなり、二月十日の夜に亡くなった。
知らせをうけた信幸は数名の供を従えたのみで上田を発し、雪の街道に馬を飛ばせ、小松の臨終に間に合うことを得た。

「わざわざとおはこびをねがい、ありがたく存じまする」
あえぎつつ、小松はうれしげに眼を細めた。
「こころ丈夫にいたせ」
「ありがとうございますが、もはやこれまで。寿命にござりますゆえ……」
「何を申す……」
「長い間、いろいろと、おこころづくしをたまわりましたな」
「わしこそじゃ。そなたの助力によって、わしは真田家をようやくにここまで……」
「もはや、戦はございますまい」
「いかにも」
「なれど、大御所さま亡きのち、これからはいろいろとむずかしゅうなりましょう」
「わかっておる」
「くれぐれも、お忍び下さいますよう」
「心得てある」
小松は、うなずき、両眼を閉じかけたがふっと笑い、
「鈴木右近どのも、上田へおもどしなさいますよう」
いたずらっぽく、ささやいたものだ。
「なんと……!?」

「あれほどの家臣を、京の婦人との文使いになさるとは、殿らしゅうもないこと」
信幸愕然、声もなかった。
小松の眼は、真田家中の隅々まで行きわたるらしい。京都屋敷の鈴木右近の行動もすべて何者かによってつきとめられ、小松の耳へ入っているにちがいない、と、信幸は直感した。
眼を閉じた小松は、もう二度と、その眼をひらかなかった。
真田信幸が、鈴木右近を上田へもどしたのは、小松の歿後、間もなくのことであった。
「お通どののことを、おあきらめなさいましたか!?」
上田へ来た右近が、旅装も解かぬまま信幸の前へ出て問うや、
「いかぬわ」
信幸は、哀しげに笑って、
「釘を打ちこまれたのじゃ」
「え……!?」
「小松が亡くなる前に、わしの胸へ釘を打ちこんでしもうたのじゃ」
「ははあ……!?」
「もはや、お通どのに手が出なくなってしもうた」
小松が死んだとき、
「わが家の燈火消ゆ」
といった信幸にして見れば、妻の遺言にそむきかねたのである。右近を上田へもどせとい

った小松のことばの裏には、お通をあきらめよという意味がふくめられている。
元和八年八月。
真田伊豆守信幸（このころより信之とあらためた）に、幕府が国替えを命じた。
上田より、同じ信州の松代へ移れ、というものであった。
表向きは加恩という名目で、六万石から十三万石に増えた国へ移すというわけだが、実りゆたかな上田にくらべれば、荒地の多い松代の実収は、はるかに少くなること、明確である。
家臣たちは徳川幕府のやりくちに怒ったが、信幸はこれを押え、あくまでもおだやかに松代へ移って行った。
真田の善政をよろこんでいた領民たちが信幸の転封を悲しみ、上田を去る信幸の行列を取り巻いて泣声をあげてはなれなかった、というのはこのときであった。
幕府は、松代へ移った真田家へ、またも難題を吹きかけて来た。
これは、前年、真田の家来であった馬場某が、上田を脱走し、幕府に次のようなことを訴え出たからである。

一、大坂合戦の折、信幸の密命によって、真田勢の一部が大坂方の幸村を助けた事実がある。
一、信幸は幸村と通じ、真田一族の存続をはかる相談が、ひそかに、京の小野お通邸においておこなわれた。

その他、根も葉もない訴えを幕府が作りあげ、真田屋敷につめている家老の木村土佐守が江戸城内へよびつけられ、訊問(じんもん)をうけた。
馬場某は、幕府が真田家へ潜入させておいた隠密(おんみつ)であるといわれている。
幕府の意図は、はっきりとしている。
この訴えをもとにして、真田家を取りつぶしてしまおうというものだ。
これは――現代の国際関係で、大国が小国を強引な圧力をもって制しようとするのと同じことで、いくらこちらに言分があっても、ふみつぶされてしまうばかりだ。
真田家は、苦境におち入った。
京都屋敷にいる馬塚喜右衛門が、自分より年長の聟(むこ)である鈴木右近のもとへ昼夜兼行に馬を飛ばせて馳(は)せつけたのは、このときである。
喜右衛門がもたらした密書は、小野お通からのものであった。
お通は右近に当てて、
「……わたくしは、大坂合戦のころより、徳川のためにはたらく間者の役目をいたしておりました。ゆえにこそ、わたくしが真田侯のおこころにそむきつづけ、上田へまいれませぬわけが、おわかりでございましょう。さて、御家一大事のこと、京にて聞きおよびました。いろいろとおもい悩みましたなれど、おもいきって、別封の書状をお送りいたします」
と、いって来ている。

別封の書状は二通あった。一通は、真田信幸(のぶゆき)に当てたもの。一通は、なんと徳川家康が小野お通へあてたものなのである。
この家康の手紙は、すぐさま、江戸へとどけられた。
江戸家老の木村土佐守は、幕府の訊問を必死にかわしつづけていたところだが、この家康の書状を受け取るや、勇気百倍した。幕府の訊問のほとんどは内容捏造(ねつぞう)のものだから、木村家老は堂々と弁明していたが、最後に、小野お通邸において真田兄弟が密談したというのは、まさに事実であったため、いいのがれようがなかったのである。
木村土佐守が、松代からとどいた徳川家康の手紙を、幕府老中の前へ差し出した。
家康は、小野お通へ、次のように書きあたえている。
「……信幸の忠節にはつくづくと感じ入っている。なればこそ尚更(なおさら)に、幸村のいのちをたすけてやりたい。そこもとからも、よろしゅう助力をねがいたい」
と、いうものであった。
まさに大御所・家康の筆になるものであったから、これには取調べに当った老中・土井利勝(としかつ)も顔色を変え、
「うたがい、はれた」
と、いうより仕方もなかった。
あと一通、お通が信幸にあてた書状には、次の一首が書かれてあるのみであった。

大空は恋しき人の形見かは
物思うごとにながめらるらむ

これは〔古今集〕のうちの一首である。

お通が真田信幸を慕うこころは、この一首に歴然としている。

信幸も今度は、片おもいではなかった。

なかったが、お通の肌身を抱きしめることはならなかった。

鈴木右近は、徳川家康のため、隠密の役目をしていたお通のことを、信幸には打ちあけなかったようである。

真田信幸は、万治元年十月十七日の夜半、九十三歳の長寿をたもち、松代城外の隠居所に病歿した。

その翌々日。

鈴木右近忠重は、木村渡右衛門を立会人とし、羽田六右衛門を介錯にたのみ、自邸において切腹し、信幸の後を追った。ときに八十五歳である。

そのとき、切腹の場所にした自邸の居間で、右近は、晴れわたった晩秋の朝空を、しばらく見入っていたが、

「大殿。いま、まいる!!」

叫ぶと共に短刀を腹へ突き立て、おどろくべきちからできりきりと引きまわし、

「六右衛門。仕損ずなよ」

と、介錯の羽田へ大声をかけたという。

単なる殉死として、彼の切腹を片づけてしまうわけにはゆくまい。信幸と彼との七十年にわたる人生のつながり、その結着として、ごく自然のものであったろう。

右近の妻は、その十年ほど前に病歿してい、後つぎの男子はなかったようである。

（「別冊サンデー毎日」昭和四十三年十一月）

解説

八尋舜右

『雨の首ふり坂』は、観るまえから胸がどきどきした。久しぶりに池波正太郎さんの股旅もののの舞台が観られるという、こころの高ぶりもあったが、なによりも、その題名が魅力的だった。まず「首ふり坂」という、いかにも人生のなにやらを感じさせる坂の名がいい。その上に雨のイメージが重ねられたことで、いやがうえにもわたくしのイマジネーションはかきたてられ、興奮は高まったのだった。

　舞台は期待にたがわず、すばらしかった。一生をばくちと喧嘩の腕貸しで過ごしてきた島田正吾扮する老博徒・白須賀の源七が、命の恩人の孫娘を守って饂飩屋の親爺になりきろうとしているところに、二年まえに親分を切られた竹原一家の子分たちに呼び出しをかけられ、果たし合いを挑まれた。源七はこれに応じて一人でかれらに立ち向かい、最後は竹原一家の助っ人、橋場の万次郎に切られる。じつは、この万次郎こそ、二十五年まえ、武州・千住の宿外れの髪結い女に源七が生ませた息子なのだが、たがいにそれとは知らぬまま、いさぎよく切り結び、結果、父親の源七が討たれて果てるのである。この酷い、業ともいうべき運命の親子対決シーンが終幕で繰り広げられるのだが、その舞台となるのが信州・小諸の宿から

二里ばかりのところにある、あかるい狐雨の降る首ふり坂、なのであった。人の世の裏街道に生きた男たちの悲哀を詩情豊かに描く一方、随所におおらかな笑いも巧みに織り込んであり、股旅ものの芝居の持つ魅力をたっぷり味わうことのできる舞台だった。この戯曲の初演からすでに十数年の歳月がたった。池波さんが劇作家、演出家として腕を振るい、島田正吾らがかずかずの名舞台を観せてくれた新国劇もいまはない。

　ところで、ちかごろは予備知識なしにいきなり池波正太郎さんの作品から入って、時代小説のすばらしさを発見する若者が多いらしい。そのこと自体は結構であり、うれしくもあるが、はて、このような読者には、股旅ものといっても、すぐにはわからないのではないか、と心配にもなってくる。

　そこで、簡単に解説を加えると――股旅ものとは、諸国を流れあるきながら、ばくちや喧嘩の助っ人を生業として生きる博徒を主人公にした作品である。主人公は、たいていは不幸な星のもとに生まれた男たちで、尋常の世界からドロップアウトした連中であり、この世によりどころとすべきなにものも持っていない。神仏も、お上も信じられず、ましてや家族の温かさなぞ知るべくもないのである。そこで、旅先でたまたま世話になった博徒の親分に義理立てすることを唯一の約束ごととして生きる。一宿一飯の恩義を忘れないのが、かれらのモラルであり、義理人情に命を捨てるのが美学であった。この精神の一部はいまもヤクザの世界に、たてまえとしてうけつがれている。

　義理人情などというものは、古い日本の封建思想のしっぽだとして一蹴する向きもあるが、

ことはそれほど簡単ではないようにおもわれる。お上（政治権力）への忠実な服従を強いられ続けた近世から近代にかけての日本の民衆にとって、それらの権威に束縛されることなく、たとえば、一日の食事、一夜の宿泊を与えてくれた者にたいする恩返しのように、自分が実際にかかわったことだけに価値基準を置いて生きそして死んだ、これらアウトローのありようは、あるときには、現世のあらゆるしがらみから解き放たれ、自由に生きたいと願うかれら一般大衆の夢ともなり、また、大なるカタルシスともなったのである。だからこそ、任侠もの、股旅ものは、大衆小説、戯曲、浪曲などに繰りかえしとりあげられ、喝采されつづけたといってよいだろう。

股旅ものというとき、懐しくおもいだされるのが長谷川伸の名前である。『瞼の母』『一本刀土俵入』『関の弥太ッペ』『雪の渡り鳥』……。現在もしばしば上演される長谷川伸作股旅ものの傑作のかずかず。そもそも、博徒、渡世人をテーマにした作品に股旅ものという呼称をつけたのが、この人であった。長谷川伸自身がこう書いている。「股旅物という名は、私の戯曲『股旅草鞋』から出たものである。私は明治期の人などが口にしていた、『旅から旅を股にかける』というのからとって〝股旅〟としたのである。私の知っている限りでは、股旅芸者というい方が明治の中期過ぎまであった。旅芸者とか山ネコとかいうのと、一つことであった。が、私のつかった股旅はそれと違って男で、非生産的で、多くは無学で、孤独で、いばらを背負っていることを知っているものたちである」（『股旅もの』）。

ちなみに、『股旅草鞋』という戯曲は、昭和四年（一九二九）五月に本郷座、浪花座で競

演され好評を博した。その前年十二月、沢田正次郎（昭和四年の春急逝）によって帝国劇場で上演された『沓掛時次郎』とともに、劇作家長谷川伸の名を揺るぎないものにした名作である。

池波正太郎さんは、昭和二十四年ころから十年ほど、この長谷川伸に師事した。昭和二十四年といえば、池波正太郎二十六歳のときで、戯曲の習作時代である。師の長谷川伸は六十五歳、生死の境をさまよった大病をなんとか克服し、大作『日本捕虜史』にとりかかっていたころだ。

長谷川伸は戯曲だけでなく、小説、ノンフィクションなど幅広い作品活動をみせた作家で、かれのもとには小説家や劇作家をめざす多くの士が集い、いくつもの月例勉強会がもたれた。たとえば、昭和八年に始まった「二十六日会」の熱気に満ちた勉強会の様子は、ほぼ以下のようなものだった。「初め二十六日会は小説と戯曲と人つくりと、この三つを目ざして勉強したので、昼間の勤務をすませて夕方、小早く集まり夜を徹して勉強し、早ければ朝の七時か八時に散会する、遅いときは雨戸は閉めっぱなし、電灯はつけっぱなしにして続け、散会したら午後になっていた、という程度のことはザラであった」（『勉強会』）。

現在、文学の世界に、このような勉強会や、濃密な師弟関係はほとんど見受けられなくなった。人間関係はかぎりなく希薄となり、文学は修行とは無縁のものとなった。

若き池波正太郎は、この長谷川部屋に入った。書きたいテーマはたくさんあった。戯曲だけでなく、師・長谷川伸の助言もあって、やがて小説にも手を染めるようになった。書いて

は、勉強会で師匠や先輩仲間の批評を仰ぐ。
「長谷川先生がねえ……」池波さんが師を語るとき、じつに、なんともいえぬいい表情になる。いつかは、この、大作家池波正太郎の誕生に大きな影響をもたらした師・長谷川伸について、池波さんにまとまった形で書いていただきたいものだとおもっているが、長谷川伸という作家は、おそらく師父という名にぴったりの人だったにちがいない。
もとめられれば、書庫の文献資料の貸与はむろんのこと、自分の体験、自分の書こうとしている作品のモチーフまで、なんでも惜しみなく話してきかせる。そして、長谷川伸の表現を借りれば「批評よりも助成」、弟子の質問にたいしては、相手の身になって、この原稿はどこをどうすればどうよくなるか、売れる作品はどのようにしたら書けるか……親身になって助成するのである。このような師だったから、長谷川部屋からは力量ある作家、劇作家が輩出し、池波正太郎という作家もまた、ここから巣立った。
長谷川部屋の出身だから、池波さんにはさぞかし多くの股旅ものの作品が……と、ついおもいたくなる。ところが、じっさいには意外に少ないのだ。かぞえるほどしかない。習作時代の未発表の作品があるのではないか、と池波さんに直接お尋ねしたこともあるが、そうでもないということたえで、「他に書きたいものがたくさんあったからねえ……」ただ微笑するだけだった。
ここに収められた『さいころ蟲』を初めとする三篇は、その数少ない池波正太郎の股旅ものの精華である。いずれも昭和三十五年から三十七年にかけて大衆読物雑誌の「小説倶楽

部」に発表されたもので、『白い密使』をのぞく『さいころ蟲』『あばれ狼』『盗賊の宿』の三篇は、手越の平八を主人公にした連作になっている。
手越の平八は兇状持ちだが、根っからの悪ではない。「若い身空で、絶えず〈死ぬこと〉に向かい合って」おり、若い欲望に負けて、山の湯で衝動的に生娘を犯してしまうが、そのあとで、「こういうときには決まって死ぬことが考えられる。〈無宿もんは、みんな俺みてえな奴なんだろうか……〉」と「自分の何も彼も厭になる」ような男なのだ。そして最後は、たった一度かかわりをもっただけの娘のために命を捨ててかかろうとする（『さいころ蟲』）。読者は、すでにこの手越の平八という若い渡世人のなかに、池波文学のライトモチーフの萌芽があることを見てとることができるはずだ。
『あばれ狼』では、「博徒も、一生不住の旅人と、縄張りを持って勢力を張る親分乾分とでは、おのずから違う。どっちみち博徒の群に落ちるものは、金もなく肉親にも縁が薄く、暮しの元手になる職も手につかず、世の中に対して何の助けも得ることが出来ない、ひとりぼっちの男どもが多いのである。それだけに絶えず世の中に負け目を感じ、堅気の人びとの世界には顔をそむけ、一歩も二歩も、へり下って生きていくという性格が、いつの間にか身についてくる。これが本物の博徒だ」といったふうに、表街道から自ら身をひき、厳しく一線を画して生きた、ほんものの博徒像を描いてみせる。さらに、もう一人の主人公・鳴滝の半蔵の身状にふれながら、「家もあり、帰る故郷もあり、親や女房や子供もあり、そして一日一日を将来に向かって積み重ねて行く堅気の世界と違い、半蔵には、その中の一つもないの

だった。博奕と喧嘩と、宿場宿場で買う女と酒。あとに何があると云うのだ。博徒の、ことに旅人は絶えず死を考え、深い厭世観を胸に抱いている。堅気にならなくてはいけないと思いつつ、いつの間にか渡世の泥沼にはまり込み、足がぬけなくなる。もっとも足を抜こうにも何にも、通常の人間としての背景や環境が爪の垢ほども用意されてはいないのだから深みへはまるばかりなのだ。字も読めず、従って、もちろん信仰などというものも持てない。博徒には、半蔵のような不幸な生い立ちのものが、だから多いということになる。こういう人間というものは『死』を怖れない」と、孤独な渡世人の死生観のよってきたるところを写しとってみせる。

なお、参考までに記しておくと、この連作の主人公・手越の平八は、後に『手越の平八——あばれ狼』として劇化され、華々しく舞台に登場している。

『白い密使』では、河内と大和の国境にある暗峠に近いある小さな草原の、ある一日の短い時間のなかに、大坂夏の陣をまえに跳梁した盗賊団の一つ、伊丹十兵衛を首領とする六人の男たちを登場させ、徳川方の女密偵の懐中していた一通の、歴史を塗り変えるかもしれない重要な密書をめぐって、かれらが噴出させた荒々しい欲望と、切ないばかりの骨肉の情を鮮やかに描いてみせた。この作品に見られるドラマの凝縮度の高さは、人生を描く達人、希有のストーリーテラーと呼ばれるようになった池波正太郎という作家が、若くしてすでに、人のこころを惹きつける小説作法の要諦を、みごとに会得していたことを証明している。

『角兵衛狂乱図』『幻影の城』『男の城』は、いずれも真田一族を主題にした作品である。真

田一族の興亡のドラマは、池波正太郎さんがデビュー時から異常なばかりの熱意を見せて取り組んできたライフテーマともいうべきもので、その十二分に血肉化された作品を読んでいると、さながらテーマの方から作家にすり寄っているかにおもえてくるほどだ。直木賞受賞作『錯乱』を含めた、これら一連の作品が発展して、後年の大作『真田太平記』に壮大なスケールで結晶する。

「池波真田もの」の最大の魅力は、真田昌幸の長男・信之にたいする、この作家の理解の奥深さにあるようにおもわれる。物語のヒーローを際立たせるために、対立する人物をあるときは、ことさらに悪く仕立て上げ、あるいはトーンダウンして描くのが、大衆小説によく見受けられる手法だが、池波さんは、昌幸、幸村親子の華やかな活躍を魅力いっぱいに描きながら、他方、この父、弟と袂を分かって敵役の徳川方についた信之の生き方、かんがえ方をもじっくりと考察、分析して、俗受けする昌幸、幸村の人生とはまたちがった、地味ではあるが歴史上に確固たる役回りを演じて大往生したこの男の、したたかにして、底光りのするキャラクターをあくことなく丹念に描出してみせた。

池波正太郎さんが、かずかずの真田ものを書いたことによって、真田一族の歴史は新しい視点から見直され、その物語にはきわめて現代的な魅力がつけ加えられることになった、といってよい。

（一九八九年一月、作家）

「さいころ蟲」は東方社刊『竜尾の剣』（昭和三十五年九月）に収められ、その後立風書房刊『夜狐』（昭和五十三年五月）に収められた。「白い密使」は立風書房刊『運の矢』（昭和五十三年十一月）に収められた。その他の作品は、本書初収録である。

文字づかいについて

新潮文庫の日本文学の文字表記については、原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは新仮名づかいに改める。

二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。

三、常用漢字表、人名用漢字別表に掲げられている漢字は、原則として新字体を使用する。

四、年少の読者をも考慮し、難読と思われる漢字や固有名詞・専門語等にはなるべく振仮名をつける。

新潮文庫最新刊

江國滋著　旅ゆけば俳句

俳句も旅も、そもそもは無用の用、だからたのしく、しかし、真面目にこれを行うべし。あそびごころあふれる俳句ツアーへのご招待。

西川勢津子著　花も実もある話 —おばあさんのミニ農園—

カルミア、ブルーベリー、クリスマス・ローズ。様々な花と果実の栽培体験記から、思い出話まで、香り高く滋味あふれるエッセイ。

西澤潤一著　独創は闘いにあり

半導体素子や光通信の分野で数多くの世界的発明を成し遂げた著者が、独創技術開発の核心と発想の原点を、情熱を込めて語り尽くす。

辻ホテルスクール編　テーブルマナー・ブック

西洋料理の食べ方、ナイフとフォークの正しい使い方、食事の終り方など、食卓のマナーを文章と写真で紹介するオリジナル文庫。

R・クレイス　田村義進訳　モンキーズ・レインコート

映画と太陽とコカインの街ロサンジェルスを舞台に粋な探偵エルヴィス・コールの生き様を描く、ハードボイルドシリーズ第一弾。

D・ウィルツ　高見浩訳　結婚式の客

死んだはずの兄から電話が——？　帰国したピーターを迎えたのは、彼を狙う銃口だった。凄絶な復讐戦を繰り広げる男たちの死闘。

新潮文庫最新刊

D・グリーンバーグ　佐々田雅子訳　ナニー

乳飲み児を抱えた若夫婦が雇ったナニーは、優秀ではあったが、どこか不気味さが漂った。戦慄の長編サスペンス・スリラー。

クリスティ　蕗沢忠枝訳　謎のエヴァンズ殺人事件

牧師の四男坊ボビイに謎の一言を遺して男は死んだ。親友の伯爵令嬢フランキーとともに、彼は事件を解明すべく動き出した……。

森村誠一著　新・新幹線殺人事件

博多発ひかり116号の座席に男の刺殺体が！　"走る密室"での殺人はいかにして可能だったか。トレイン・ミステリーの最高傑作パートII。

佐野洋著　巡査失踪

警官が失踪、やがて発見された彼の変死体。北海道垂内署の刑事たちを主人公に著者が初めて挑む、本格的警察推理小説6編収録。

G・シーモア　東江一紀訳　一弾で倒せ！

テロの巻き添えで恋人を失った青年は英国情報部の報復工作に加わりテロリストの拠点へ赴いた。撃てる弾丸はただ一発のみ！

M・H・クラーク　深町眞理子訳　暗夜に過去がよみがえる

"あの家に来るな"——脅迫にめげず、かつて両親と共に惨劇に見舞われた"あの家"に戻った彼女を迎えたのは、新たな脅迫状だった。

あばれ狼（おおかみ）

新潮文庫　い - 16 - 51

平成元年二月十五日　印刷
平成元年二月二十五日　発行

著者　池波正太郎（いけなみしょうたろう）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社 新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六―五一一一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替　東京四―八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所

ISBN4-10-115651-4 C0193